

1159

秘

昭和十年三月

左傾學生生徒の手記

第三輯

文部省思想局

本輯は思想問題に關し學生生徒の
指導監督の任にある者其の他教育
關係者の執務上の參考に資する目
的を以て編纂したるものなり

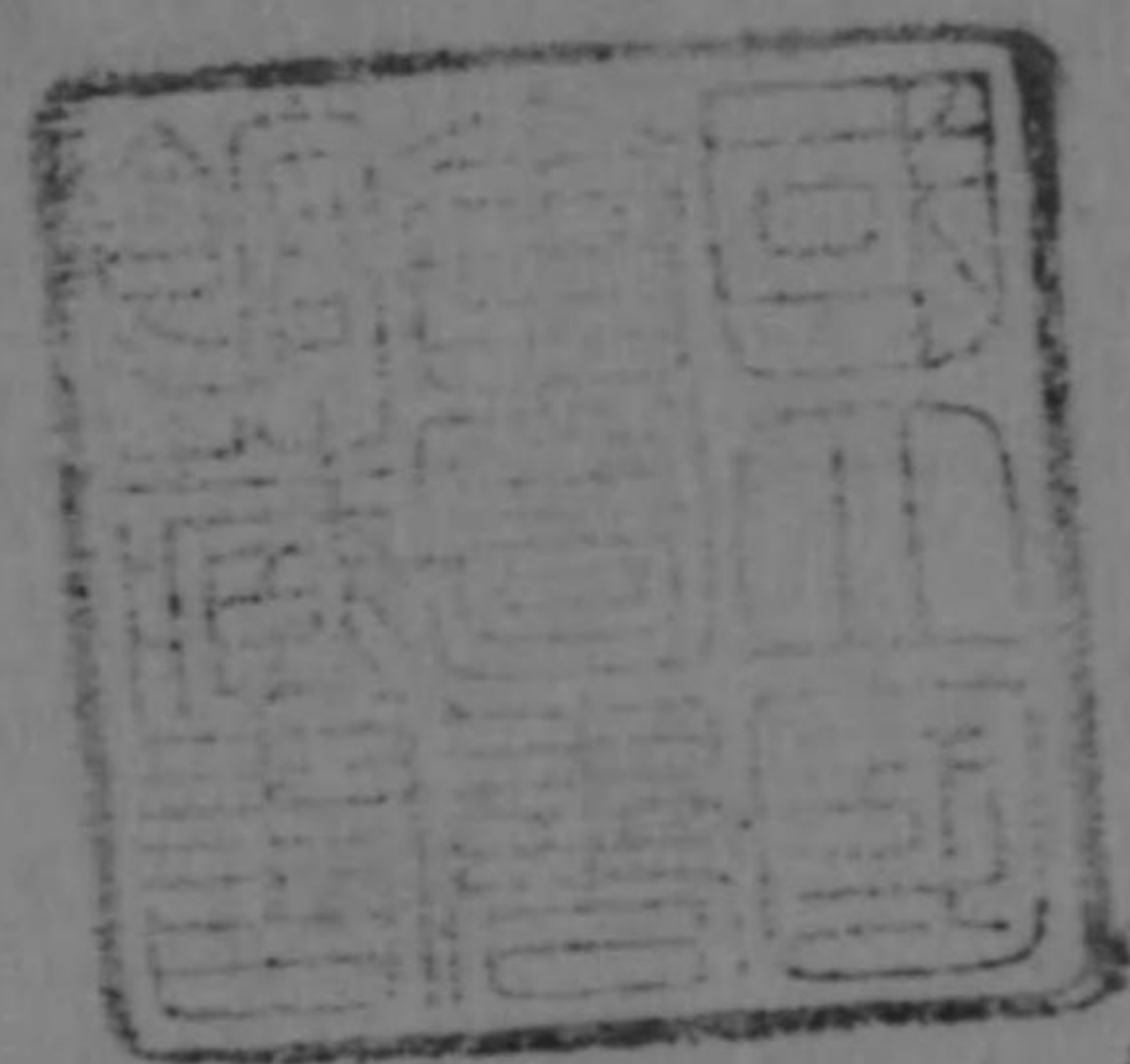
左傾學生生徒の手記

第三輯

377.911/530

凡例

- 一、本篇は曩に刊行せる「左傾學生生徒の手記」第一輯・第二輯の續輯にして治安維持法違反事件及び學校内左傾思想事件に關係したる學生生徒及び少數の卒業生、退學生等の手記を輯録せるものなり。
- 二、手記者の數は九十二人にして、其の手記中十七篇（三、四、一二、一三、二三、二七、二八、五五、七六、七八、七九、八四、八五、八九—九二）は東京地方裁判所検事局思想部の好意に依りて得たるもの、他は學校より報告せしめたるものなり。又右の十七篇及び少數の手記を除きて、他の大部分は昭和八・九年に於て執筆せられたるものなり。
- 三、手記は大体に於て原文の儘を採録したるも、都合により編者に於て抄録せるものあり。又家庭の狀況其の他の項につきては出来る限り學校の調査により附記せり。



295818

一、本誌の編輯方針
 二、本誌の編輯方針
 三、本誌の編輯方針
 四、本誌の編輯方針
 五、本誌の編輯方針
 六、本誌の編輯方針
 七、本誌の編輯方針
 八、本誌の編輯方針
 九、本誌の編輯方針
 十、本誌の編輯方針
 十一、本誌の編輯方針
 十二、本誌の編輯方針
 十三、本誌の編輯方針
 十四、本誌の編輯方針
 十五、本誌の編輯方針
 十六、本誌の編輯方針
 十七、本誌の編輯方針
 十八、本誌の編輯方針
 十九、本誌の編輯方針
 二十、本誌の編輯方針
 二十一、本誌の編輯方針
 二十二、本誌の編輯方針
 二十三、本誌の編輯方針
 二十四、本誌の編輯方針
 二十五、本誌の編輯方針
 二十六、本誌の編輯方針
 二十七、本誌の編輯方針
 二十八、本誌の編輯方針
 二十九、本誌の編輯方針
 三十、本誌の編輯方針
 三十一、本誌の編輯方針
 三十二、本誌の編輯方針
 三十三、本誌の編輯方針
 三十四、本誌の編輯方針
 三十五、本誌の編輯方針
 三十六、本誌の編輯方針
 三十七、本誌の編輯方針
 三十八、本誌の編輯方針
 三十九、本誌の編輯方針
 四十、本誌の編輯方針
 四十一、本誌の編輯方針
 四十二、本誌の編輯方針
 四十三、本誌の編輯方針
 四十四、本誌の編輯方針
 四十五、本誌の編輯方針
 四十六、本誌の編輯方針
 四十七、本誌の編輯方針
 四十八、本誌の編輯方針
 四十九、本誌の編輯方針
 五十、本誌の編輯方針

目次

一、大學學生の手記(一——二八)……………一
 二、高等學校生徒の手記(二九——五三)……………一五五
 三、専門學校生徒の手記(五四——九一)……………二六七
 附、中等學校生徒の手記(九二)……………四四九

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

大學學生の手記



某帝大法學部

I・S・(當二十三年)

關係せる事件の種類……黨、同盟、學内細胞、後に黨××
企業細胞として活動す

處分の種類、程度……昭和×年十月無期停學に處せられ昭
和×年六月右解除せらる

家庭状況……實家、父母一兄一妹あり××草履製造業を營
み、生活程度、資産、共に中流。養家、父母、

一弟一妹ありて父は株式會社事務取締役、共に
家庭圓滿にして本人は主として實家に起居す

學資の出所、金額……××縣育英會より月額四十圓、家庭
より十圓

健康状態……良好

性質才幹……眞面目

備考 本手記者は小學校中學校を通じて常に首席を占め高等學
校に於ても上位の成績をあげ、二十一歳にして本學に入
學し其の間何等の蹉跌なく、父母の深き愛情と教育上の

注意の下に何不足なく成長した健康體の青年である。そ
して現在(昭和×年十二月)では頗る眞摯に修養と勉學
とにいそしみ親思ひの情に溢れて明春の卒業を楽しみに
してゐる。

一、社會科學研究の動機、過程及びそれによる思想の變化

一、中學時代には學校の教科書以外は父の注意と監督のため別に讀
書に手を染める事なく、たゞ修身書を受讀し殊に論語を讀、人格
修養に専一でした。

二、×高時代 最初一般青年の陥る如く人生問題に關し種々思索にふ
けり、佛教、キリスト教等一般宗教書を受讀、自ら教會に通ひしも
容易に問題解決に至らず、後轉じて人生否定の懐疑的思想に陥り、
處世哲學、婦人論、意志と表象としての世界——共にシヨールペン
ハウエル著

生活者——倉田百三主幹雜誌

等を受讀し、その他ニーチエを讀み、ワグネル、シュニベルト、ベ
ートゲン等の音楽を研究し、センチイメンタルな生活を追ふ中、
哲學に興味を抱き、カントの研究からフッサールの研究に入り、轉

じてヘーゲルの辯證法を讀む中、次第に哲學としてのマルキシズムを研究せしも、大學入學の試験勉強のため中絶。

三、大學入學以來

a、昭和×年四月より八月まで

法律學の新分野に多大の興味を抱いて、始めの中は判例を中心に條文解釋に没頭せしも、次第に解釋法學の餘りに三段論法的な文字解釋に傾き、法律の根柢に横はる規範關係の研究をおろそかにせるに飽き足らず、遂に法律哲學を涉獵、

ケルゼン 國家論、法律哲學

等を研究中、法も社會現象の一つなること、その上層關係として社會經濟機構をその根柢に有する事、法の歴史的變遷の社會經濟組織の歴史的變遷に依存する事を知り、法律學の研究には經濟學の研究の必要なることを感じ、

ラビドス「マルクス主義經濟學」を學消にて購入、夏期休暇中これを研究。

b、研究會時代

昭和×年九月より第二學期に入り

友人○○○○○(當時法科一年)

同 ○○○○(同)

同 ○○○○(同)

等と相計り判例研究會を開くことに決定。

第一回判例研究會

九月二十五日頃、××區××町○○○○の下宿

此の會合に於て、テキストとして、大正十四年法學協會雜誌の判例研究欄を選び、次の會合より各一科擔當講義説明することに決定、第四回目より判例研究をなすには結局に於て法律研究の方法論を研究し、基礎確立の要ありとし、テキストとして

パシユカーニス 法の一般的理論とマルキシズム

を學消にて購入、此の研究會は昭和×年十一月私の××病院入院と共に解散せしも、上の研究により法律はケルゼン一派の稱へる如く社會關係經濟關係より超絶せる絶對的規範の價値表現ではなくして、法は社會生活の主體間の關係を規定せるものにして、此の主體間の關係は商品交換者としての現代市民社會の經濟關係の觀念的反映に他ならず、従つて法律學の研究はその必然的要素として、社會經濟組織の研究を前提とすべきこと、而もその研究は根柢に社會組織の上層、下層關係の分析を要する事を認知し、其の後漸次マルキシズムの研究に没入。

マルクス著資本論第一卷、エンゲルス著住宅問題、空想より科學へ、家族私有財產國家の起源、辯證法的唯物論教程、自然辯證法等を涉獵、社會の階級關係の歴史的變遷は必然的に現代資本主義社會體制

の成立を招來し、而も資本主義體制は今や世界經濟恐慌の結果として必然的に崩壊すべきこと、その歴史的必然の過程は人類の主觀的運動によりて進捗するものにして、この運動の主體こそが國際共產黨であることを教へられ、左翼運動に参加し、日本に於ける運動は日本共產黨の指導下に進捗しなくてはならぬ事、その指導の中心的組織者として政治新聞「赤旗」を自學の部代となつた昭和×年四月下旬當時×高○○○(當時法科一年)より購入、其の後×大細胞に加入。

c、昭和×年四月より七月まで

自治學生會部代、同盟加入、細胞入黨、實際運動に参加中は殆んど思想上の變化なく、たゞ上部機關の命令と左翼記念日カンパ準備の焦燥の中に日を送りしも、

d、昭和×年七月より○○○署に檢束拘留さるゝに及び自己の今までの行動の餘りに輕薄なりしを悟り爾後決して實際運動に参加せざることに決心して、

e、同九月より昭和×年二月まで神戸市○○區○○町一八一○○方に寄寓、神戸圖書館に通ひ民法刑法、商法、憲法の研究に専念、

f、昭和×年二月より××直後、昭和×年七月同盟行動隊にて×××方面にピラ貼りをなせし時、知り合ひになつた労働者(?)○さんに遭ひ、

××大學前喫茶店○○○○○にて茶談、私は今後實際運動から

手を引く決心で××したと言ふのは、學生は革命運動にはどこまでも中立的立場を保つべきで、實際運動参加はやがて吾々の家族破壊を來すことを説明せしに○さんより學生中立の道は決して運動から手を引くと言ふ事ではなく前衛的活動を好意的に援助するにあり、且つ今、危険性なき仕事で火急を要するものがあるから、やつて呉れと懇望され、止むなく×電の「全線」のカッターをやりしに今回又々檢束拘留され全く自己の思想がたゞ讀書と狹隘なる社會の表面的觀察によつて生れた浮動的一面的なものにして深い人間生活の多くの方面を看過してゐること、マルキシズムの暴力革命論は辯證法的歴史觀の立場からは必然的に歸結されるもそれは結局理論的歸結に過ぎずして、それは決して實際的具體性の下に承認さるべきものではない事を私は此の八十餘日の拘留が私の母親を廢人同様にした事によつて知りました。

二、日本共產黨の將來に對する見識

何れの國何れの時代に於ても、時の天下に反抗する由井正雪式の陰謀團體の成立するは歴史上の必然的現象とも見らるべく、殊に現今の社會の逼迫による不況は多數の不平者不滿者を造るものにして、共產黨はかかる不平不滿を有する青年を煽動組織する秘密結社に他ならず、此の結社がその成立以後十一箇年も生存した事はその主義政策の妥當なる點よりも、その運動が極度の非合法下に於て秘密冒險なる點が一般青年の

一種の興味を起した點にあると思ひます。殊に共産黨がその成立當時の労働者の組織運動から次第に離脱し、學生一般インテリ層を包容し現在に於ては主として學生によつて支持されるものに變化して行つた點は共産黨の行衛を豫見せしむる一現象と思はれます。何となれば黨はその政策として労働者の經濟闘争を基本的なものとしてゐるに拘はらず、この經濟闘争は過去の經驗によつて勞資双方共倒れの悲劇をもたらす他何物をも招来せず、徒らに焦慮と昂奮を獲得した他何物をも残さなかつた事は、一般労働者とその政策から離反せしめた一大原因とも見らるべく、將來は益々労働者の信頼を失つた存在となると思ひます。更に現在、黨がその存在を保つに絶対に必要として居る學生層、インテリ層に對する影響力たる共産主義の理解に於ても、その二者闘争の辯證法の誤謬は次第に明瞭となり殊にその暴力革命論は愛憎と盲目とを國民性としたロシア民族の一經驗を一般化し、これのみが社會革命の正道と見る點に於て、その理論の偏狹性は日本民族固有の家族制度と衝突する點に於て、次第に日本國民の憎惡と反感の的と化しつゝあります。

又その主義とする所の職争反對論の誤謬は、現下の日本の情勢に於て明瞭に認めらるべきものであります。何となれば若し吾々が昨今の滿洲の討匪討伐を否定するならば、對英米政策に於ける吾國の孤立經濟政策遂行は不可能なるべく、これがため日本の對外政策は不利となり、日本民族の生存問題を惹起するであらう。殊に國際聯盟問題紛糾し、東亞聯

盟成立の聲高き折柄、黄色人種のモンロー主義遂行は當然にして、これこそ共産主義のインターナショナルの一大打撃と言ふべきでせう。以上列記した事實こそは共産主義理論がその論理的歸結として妥當なるにも拘はらず、尙その偏狹性と一面性のために實地に適應せざる空論なる事を證明して餘りあるべく、これこそ理論としての共産主義が次第に學生から見離される原因と思はれます。さて、過去數年間是非常時に雖も未だ世論急ならず、國民的輿論も以上の如き焦慮盲目の秘密結社の存在に對して寛大なりしも、滿洲問題、國際問題は益々急を告げ、國の内外をあげて多事多端となるに従ひ、日本國民獨特の國家精神の強固化は國民の輿論を益々統一させ、民族精神煥起の運動は次第に反民族的、反家族的、暴力政策の城塞に對する排撃を急化し、反共産主義運動は國民の共産黨への憎惡と日本に於て理想的に發達してゐる警察網の追迫と相應じて、共産黨は益々衰滅に近づくことと思ひます。

三、自己批判

私が過去に於て左翼運動に關係した動機は、たとへ私が其の當時確たる信念を有してゐると考へてゐたにせよ、それは事の全般に對する認識不足に基く知識の一面性と思想の偏狹性現代青年固有の英雄主義的焦慮と淺薄なる友情による義理にひかされたものと言ふべきものにして、黨關係に入つて以來と言ふものは、私の氣持は全く一面の猪突的となり、家族のこと等は全然忘却し、認識の範圍は全く狹隘なる事務的範圍

内に限られ、上部からの集金の強制的要求と同僚間の極左的勇氣鼓舞によつて、言はゞ狂氣的氣分にまで煽られ、明日にでも革命が到来する様な氣にまでなつてゐました。是は私の過去の活動が非合法的であつたためと不自然な秘密を事とするためと、上部機關に極度に利用されたために仕事と氣分に耐へ切れなくなつたため、昭和×年七月頃には極度に心身疲勞し、「どうにでもなれ」と言つた捨鉢的な投げ遣り氣分になつてゐました。かくて〇〇デモに捨鉢的氣分で参加し、〇〇署に檢擧されてからは突然心氣一變し、丁度孤獨さが正氣にかへつた様に今までの氣持は何處へ行つたか分らないけろりとした氣持にかへり、父母の事自分の將來の事のみ氣にしました。所が當時尙友人關係を顧慮して組織の事を隱蔽して一日も早く放免されんとし、放免後は昔の焦慮から全然離れて靜かに法律の勉強に専念せしめ、思想としては尙左翼的色彩を有し、學生は革命の先頭には立てなくとも、尙革命的中立は吾々の正しき立場と考へてゐました。此の思想が××後私をして×電に關係せしめたものです。かくて私は今回の檢擧以前に於て尙左翼思想の殘滓を有してゐましたが、此の八十幾日の留置場の自己靜觀により、私の思想に大きな變化を來しました。今まで私が關係した運動に對する批判については前記の如くであります、其他の問題としては、第一人間と言ふものは決して孤立して一人の生活をなすものではなくて、私自身の現在までの生活に於ても、親兄弟の關係を始め親戚から知人まで私の血と肉と知識とに

深い影響を與へたもので、私の生活はこれ等の關係を無視して存在し得ないものであります。この私がかゝる關係を離れて單なる一片の理窟に操られた事は、私の過去に於ける思慮の淺薄さを證明する以外の何物でもありません。第二、吾々學生は未だ親兄弟を離れて自らの生活をいとむることすら不可能にして、吾々の生活はたゞ讀書に限られ、社會とか労働なる言葉もたゞ文字の表象によつて知覺してゐるのみで、自ら肉體によりて得る體驗を通じた社會、労働の何物たるかに就いては全然無智と言つてよく、この吾々が社會を云々することは兎に等しいと言ふべきである。第三に、殊に吾々日本人は他國人に比し強固なる家族制度による血肉の紐帶の影響を深く受け、これを無視して吾々の生活は零落に歸するも同然である。此點私は共産主義理論の暴力革命論を否認するに至つた所以にして、私の母が私の今回の拘留によつて精神錯亂まで起した事實が私の理論に變革を與へました。第四、私は過去に於て全く薄弱なる意志の所有者であつた。人におだてられてはこれに乗り、人に言はれた事を卒直に信じ、私一個人の強固なる信念と定見を缺いて徒らに行動した。眞實に人として恥ずべき淺薄漢であつたと思ひます。これを要するに、私は永年の學校生活によつて事物の表面的解釋、換言すれば社會的事象の表面化的な觀察より來る一般的抽象的表象の理論的結合技術に就いては相當熟練せしめ、これは要するに所謂一片の理論に過ぎず、かゝる理論は吾々の生活の實踐の方面を看却し幾多の現象を粗漏してゐ

る點に於て、決して生活の指導原理たり得ないものであります。例へば私が左翼運動當時描いてゐた社會と、今考へる社會とは全然別物にして此の例によつて見るも、私の思想は決して一定不變の確固たるものにあらずして、常に環境によつて支配されたものであつて、これでは私の生涯はショーペンハウエルが指摘した如く、常に他人の頭を借りて踊る傀儡の生涯に終るべく、常に人に偏てられて、ふら／＼と動く憐れむべき人形で終るでせう。是に對しては讀書の上の修養にては決して満足な人間となり得ないものにして、古賢の訓へし如く肉體的克己を絶対に必要とすべく、何時如何なる事が私の周圍に起つても常に自己を失はず、羅針盤の如き一徹不動の魂膽と冷徹なる理論を養ふべく努力しなければ又々今回の如き事を惹き起すでありませう。今までの事に對しての責任上の處罰に就いては深く是れを享け、其の後は以上の自己批判によつて私自身の克己修養に邁進し、四人の親と幾多の肉身の美しき相互扶助の精神の中にお互ひの幸福の爲努力する覺悟を定めました。

二

某帝大工學部船舶學科 K、H(當二十四年)

關係せる事件の種類……黨、同盟學内細胞(後細胞長となる)として活動す

處分の種類、程度……昭和×年二月二十一日附録旨退學

僕は校長の二枚舌に憤慨し、それと同時に犠牲者に對する同情心を起し左翼に好感を持ち始めました。

昭和×年の春、僕の高校から九名來て、僕一人×大に入學した丈で他の失敗した八名の級友に同情をよせると共に、自分自身優越感を感じ嬉しかったと同時に、××の都會氣分にすっかり酔ひつづれて一學期を送つた。

二學期になつてから段々都會氣分の醉から覺め始め、又學校の方も格別忙しく無いので、生活に退屈と云ふか、變な不安な氣持ちが深り、生活は益々ルーズになり始めた。僕は平々凡々の砂を噛む様な灰色の生活から脱せんともがき始めました。其頃レーニン「社會主義の發展」なる小冊子にその活路を見出しました。勿論ストライキ以來持ち始めた左翼に對する漠然たる好感と新思想マルキシズムに對する常識養成の氣持ちが手傳つてゐたので、此の左翼本を讀み始めたのです。

二學期中頃○○○○(當時農科一年)に「社會主義の發展」を讀んでゐるが面白くないことを訴へた時、時間つぶしに小説の方が面白く讀めると言ふことを聞かされ同君よりコンタイの「赤い戀」、同「グレート・ラブ」の本を借り非常に興味を以て讀みました。

多休みを終へて××にやつて來ると間もなく、○○君がやつて來て「一緒に本を讀まう」と誘はれ、次の様な讀書會を持つた。(××高校出身者のみ)○テキスト、第三期とは何ぞや、○メンバー、五名、××、××、

(但し昭和×年六月再入學を許可し、同年九月二十七日學士試験に合格せり)

家庭の状況……實父は中學教師(教頭)にして、その生計は右俸給を以て維持せり。家族は實父母共、七人にして、子女の教養に努む、家庭圓滿なり

學資の出所、金額……實父より月約五拾

圓健康状態……良好

性質才幹……熱情的にして統御の才あり

一、思想の推移過程

高校入學後はスポーツ、酒と極樂の様な生活が二年間も續いた。それに試験前には落第しそうな級友を集めて、講義してやる等随分人の爲めに骨身を惜しまなかつた爲、クラスの人望を一身に集め、クラスの代表をしてゐました。二年の三學期頃から生徒のみよりなる代表會設立運動にクラス代表として参加し自由主義的思想の影響を多分に受く。

その代表會が出来るや三年の三學期末に全校的ストライキが勃發した。代表會がストライキの委員會となつた爲、僕はクラス代表として活躍しました。

(1) 代表會は其儘存続すること

(2) 犠牲者は出さざること

の二條件を校長が先聲に言明したので、ストライキを打ち切りました。然るに代表會のみか新聞部をも認めず、犠牲者が二十名ばかり出たので

××の三名が二月中旬に檢學されて此讀書會がつづれて了つたので自分一人で「第三期とは何ぞや」を讀み終つた。

此頃からマルクシズム、レーニズムが理論的に正しいと言ふ概念を抱く様になりました。それが故に僕も思想的に惱み始め、學年末の試験勉強が板につきませんでした。

昭和×年四月新學期を迎へて僕達兄弟が兄の友人××××の下宿××町×××九番地××方に同宿する様になり○○君所有の麻雀遊びに耽り始め思想的煩悶も何所へやら飛んで了つた。それも五月一杯で飽きて、その次には酒とビールで××、××を飲み荒したものです。

此様な譯で昭和×年の一學期は全く朗らかな生活を送り、思想的煩悶を解決したかの如く思はれましたが、遂に下宿代の高いのと借金の増大するので、やり切れなくなり昭和×年九月から兄と二人で××區××町二十九番地×××方に下宿を移りました。

九月十月の二箇月間の此下宿での生活は平々凡々そのものでありましたが十一月頃より暇にまかせて、メーリング「唯物辯證法」、ローザ、

「經濟學入門」の本を自分一人で讀み始めました。昭和×年一月中旬頃○○○○(當時工、船舶二年、同級生)なる同級生が或日教室を出る時僕に次の如く言つた。君は前に××高校の人達と一所に本を讀んで居たそうだが、工學部にも讀書會があるから君も出席しないか?と、僕は大學の左翼のグループに入ることが、何となく、恐

しい氣がして、一應断つたがP、Y、A、M、の文書だけは、〇〇君から貰ふ事にしました。教室で封筒に入れた文書を〇〇君から手渡され一箇月分一圓七、八十錢を拂つたことを記憶してゐます。

二月の終りになつてからは非讀書會に入れと誘はれ或日××の×高前の下宿に連れて行かれた。その時居合せた人数は六、七人で僕が皆に照會されました。その時の話は多休野策で、田舎へ歸る人、歸る人は家に文書を送つても良いか悪いかを聞いただけで僕は田舎へ歸るし、文書を送つて貰つては困ると言つて其儘、僕はその下宿を引き上げました。その内試験が始まつて會合しなかつた爲、その時のメンバーの名も、顔も覚えていません。此會合はR、S兼自學の班會であつたと僕は想像する。以上が大體僕が、×大の左翼組織に加盟する迄の過程であります。その組織が如何なるものか、皆目知らず五里霧中でした。

二、自己批判

此處に、一年足らずの左翼運動、と云ふよりも九月以來二箇月間の共產主義の運動の一切を清算しました。將來、研究、行動を共にやめる事を誓ふものであります。僕は未だ唯物論、唯物辯證法の哲學的方面の研究もせず、又マルクスの資本論をも掻いた譯ではありません。唯マルクス、レーニン主義を眞理として盲信して實際運動に携つて来たのです。

唯物論と唯心論との論争は寧ろ哲學の冒瀆とも云ふべく、水掛論に終るでせう。マルクス主義經濟學は唯物史觀の上に立つて理論整然たる經

濟學ではありませうが社會の經濟状態が、その理論通り行くものであるか、否かが大なる問題であらう。

僕には理論的科學的に、マルクス・レーニン主義を批判する事は出来ませんが、理論は兎も角として、共產主義社會が建設されるや、否や、殊に日本に於て、又共產主義社會が實現するとしても、世界の總ての人間が幸福になり得るや否や、之が重大問題である。

人間には個性と云ふものがあり、飽くなき慾望がある以上、唯働いて生活すると云ふ事で満足出来るであらうか、否決してそうでは無い。そして、又、民族と民族、國家と國家との闘争が無くなる時代が来るであらうか、否決して來ない。まして三千年來の榮えある歴史を有する日本に於いて、完全且つ強力なる警察を有する日本に於て、極東の王者たらんとしてゐる日本に於て、共產主義運動の前途は暗々たるものである。

そして、又社會主義社會建設に進んでゐるも、ロシア帝政ロシア時代以上の壓を以てすら、農民は非常に苦しんで暴動を起し、食料品を強奪したと聞く。唯單に文書によつてのみ「ロシアのすばらしき社會主義社會建設」を知るのみで、實際に我々は見た事は無いのである。

靜かに、過去を顧るに、現代資本主義制度の、多くの矛盾を、唯漠然と感じ、少しばかりの左翼本を讀み、而も、理工學部と云ふ七、八名の代表として、他の大きな學部の代表と一所に會議を持つので短期間の間に上部指導機關に働く様になり、實際運動によつて教育されて来たので

す。他の左翼運動をしてゐる人達も恐らくさうだらうが少くとも、僕はマルクス・レーニン主義を正しいものと盲信して來ました。此點に於て宗教を頭から排斥する、マルクス・レーニン主義も結局は一つの宗教であると云ひ得る。だから觀念論を排撃して來た僕は、又觀念の遊戲をしてゐたに過ぎない事、即ち單なる自己満足に過ぎない事を知りました。

マルクス・レーニン主義を頭から正しいものと冷靜なる思想も批判もなく盲信して來たこと、此事が一番根本的な、而も大きな誤謬でした。マルクス・レーニン主義が正しいものと假定するも、現在の日本の如く、完全に非合法の下に追ひ詰められた共產主義運動をすることは、自分ばかりでなく両親、兄弟姉妹、親類を犠牲にすること、此犠牲が非常に大きくて、僕には到底耐へ難いことを今度はつきりと認識しました。

マルクス・レーニン主義を正しいものと盲信して、今迄運動を續けて來ましたが、勿論此の間父母、兄弟の事を考へない譯ではありませんでしたが、僕が檢舉されて、父が遙々××から上京して來て、涙に咽び乍ら僕を抱きしめた時、あの時始めて、父の愛が僕の想像以上に、非常に強く、且つ大きい事をはつきりと知りました。

僕を一番可愛がつて、僕が一番成功するだらうと楽しみにして居た父が、僕が共產運動をやる様では生き甲斐が無いぞよと氣狂ひのやうになり、父の言ふ言葉の亂れて居るのを聞いた時の僕の氣持ちは胸がはりさける様でした。その時僕は心に深く誓ひました。決して今後共產主義運

動、否、あらゆる社會運動には参加せず、唯々、父母に、此不孝の萬分の一でも補ふために、僕の一生を捧げることを。

僕の家庭は僕達兄弟三人を帝大を卒業すために、借金こそしてゐても、附近の人々から、羨望の的となつてゐた程圓滿だったので。此の求めても求められない家庭の温い空氣を破壊したのが僕自身であることを知つた僕は、此破壊された圓滿さを回復することが僕に課せられた重大責任であることを痛感しました。母と妹は毎日、南の國、××の空で毎日泣いてゐるそうです。姉、兄の心配も一方ではありません。僕が此運動を若しも續けるならば、父母は氣狂となり、兄は職から見離され、姉は離縁されるでせう。考へても恐ろしいことです。

僕は今後絶対にあらゆる社會運動から縁を切り滿洲國獨立以來經濟状態は回復し、我々エンヂニヤの活躍する舞臺が、いくらでも待つてゐることを知りました。インフレーションの波に乗つて僕のすべての能力を捧げて造船工場に活躍すべき時が來たのです。

此苦い經驗を幾分でも有益に活かすことが出来れば幸ですし、悪夢から覺めた僕は朗らかな第一歩を社會に踏み出し、両親に出来るだけの孝行をすることが唯一の楽しみです。

關係せる事件の種類……外戚團體、同盟に加入

處分の種類、程度……停學

家庭の状況……父、母、兄。有價證券買入業。生活程度中

以上

學資の出所、金額……家庭より。金額不明

一、家庭の状況

私は私の家庭の状況に於て殆んど何の不足も不平も見出し得ない。資産状態は普通以上であつたし、平和なる點は他人も羨む如くであつた。學資も私の要求次第であり、父は極めて私を信用して呉れてゐた。言はゞ私ら子等に對しては父母とも自由主義的立場をとり、一定の權威を認め、又無條件的に信頼して呉れて居た。然し、唯々強ひて言へば、私の家が地方に往々見受けられる大家族制度的血族ゾーンの中にあり、その爲の結婚範圍の局限、親族間の儀禮の煩はしさ等、又父の財産の故にのみなされる別荘の生活、御馳走、他人の私等に對する態度等に就いては一種の反逆を感じてゐた。然も其の事の爲に最近に於ては意識的に自ら家を離れて自分の完全な獨立を成さんと努めてゐた。

二、社會科學研究の動機過程及其に依る思想の變遷

社會科學研究の動機は私の中學初年時代から始つてゐると思ふ。當時私は、自然科學殊に動植物學に非常な興味をもち、それに関する書籍雜誌の類を涉獵してゐた。所がその興味の深まるにつれて、かねて宣告さ

れて居た私の生來的生理缺陷——紅綠色盲を考へ悩む様になり、將來進んで行かんとした方面をも斷念するに至つた。方向を失つた私は可成り焦慮して新しく道を求めた譯であり、又社會科學への興味を覺ゆるに至つたものである。それには當時昭和元年頃（中學校第四學年頃）××高商に在學して居た兄の影響も幾分あつたと思ふ。

改造、中央公論

も當時から時々讀む様になつた。次いで幼稚な簡単な經濟學の書籍を主として、求め讀む様にもなつた。これも以前興味を持つてゐた自然科學と最も縁の深い學に魅力を感じたものと思はれる。然もそれによつて得た淺い僅かな智識が周圍の友人達に對して次第に自己満足的な優越感を抱かせ、更にその方向に馳せさせた。それは××高等學校入學後にも續いた。但し高校入學後一箇年位は普通誰れもがする様な英雄的陶酔的な生活をして呑氣に過した。然し、やがてそれにも飽き足らなくなると共に一時喪へた社會科學に對する興味は再び湧き出して來た。兄等の影響で何か新しい力強いものとして、それとなく聞いて居たマルクシズムに對して未知の世界を開拓する様な魅惑的な氣持も起きた。

高田保馬 經濟學講義 全三卷

を二箇月位かゝつて讀む一方、改造、中央公論を毎號讀み、殊にマルクシズムに関する論文・大衆講座は丁寧に讀んだ。昭和×年春頃かと思ふ無産者政治教程第一輯

を讀んだ。然も可なりの興味をもつて熟讀した。言々句々當時の私には新鮮な、感動的な刺戟を與へた。更に、それから同じ

無産者政治教程第二輯

を讀んだ。しかし第二輯は第一輯に比較して、伏字が矢鱈に多く、それ程感動的な氣持で熟讀しなかつたと思ふ。第三輯以下は發熱だつたと思ふが××では手に入らなかつた。

昭和×年八月頃から秋にかけて

マルクス 賃労働と資本 (岩波文庫)

マルクス 價值、價格及び利潤 (岩波文庫)

ニンゲルス 社會主義の發展 (改造文庫)

を熟讀した。この頃からマルクシズムに對して深い信念を抱くに至つた。然し當時は全く獨りで讀み、獨りで満足する程度であつた。昭和×年の末から昭和×年三月迄は大學入學試験準備の爲め纏つたものは讀まなかつた。

つた。

第二無産者新聞

昭和×年四月××大文學部に入學した。入學試験準備時代に考へてゐた「大學へ入つたらマルクシズムの理論を繰り勉強しよう」——は入學後二箇月位、生活が落付かなかつた爲めに出来なかつた。併し初めて経験する自分獨りの自由な生活——下宿生活——と地方と異つて書籍・文書の豊富な事は、私のかねての希望を實現するに難くないと思つた。

×大の左翼運動に就いては高校時代から色々な噂・×大新聞等で知つ

てゐた。入學試験の時のピラ撒きではその實際を見た。併しこれは好奇心的なもの以外何の刺戟も受けなかつた。入學後當時讀しかつた所謂××問題に関する左翼團體の色々な活動を實見し、實際運動に對しても幾分の恐怖心(?)と同時に、或る種の魅惑を感じるに至つた。それには相變らず一種の陶酔的英雄感が伴つてゐた事を否めない。又當時以外にも高校時代同級であつたJ・Nに講堂前芝生で他の高校時代の同級生と共に××××を見せられ、自治學生會の事を聞いて一層その感を深うした。

次いで六月上旬×學部學友會に就いての××學科一年生クラス會に自ら學友會の階級性を述べ、その打倒を主張した爲、かねて企てのあつたK・Rから直接「一緒に本を讀まう」と誘はれた。併し、それに對する即答はしなかつた。その後も度々誘はれ、夏休み直前一回出席した。夏休暇後から連續的にその會合に出席する様になり、席上

無産青年

も初めてG・Nに貰つて讀んだ。初めは何か恐ろしいものを持つてゐる様で、一通りも讀まない内に燒き棄てた。唯當時新聞紙上を賑はした共產黨公判に就いて、その被告陳述が無新の號外として出たがそれには可成り興味を惹かれアチられた。この讀書會に就いては詳細を第五項に於て記するが、これより私は×大の左翼運動に加はつた事になる。而して

それも「本讀み」から次第に實踐運動に進み、生來の病弱による一時的
休止、又運動に於て避けられない意識の循環の高低はあつたにしろ、加
速度的にその深みに陥り、昭和×年九月十三日×××××署に檢舉さる
ゝ迄續けて來たものである。

思想の變遷

マルクシズムは大別二つの項に分けられると思ふ。一は史的辯證法的
唯物論であり、他は剩餘價值論である。前者はヘーゲルの唯心論的辯證
法からホイエルバツハを経て唯物論的に改められたもので、一種の歴史
觀であるとも見られる。

マルクスに依れば人間の歴史の變遷は總て人間生活の下部構造をなす
生産力・生産方法の辯證法的進展によるもので、それに伴ふ社會意識
宗教言語・文化等の進歩變遷は總てその下部構造に對する上部構造のそ
れに過ぎない。それは現在に至る歴史過程を分析する事に依つて又明ら
かにされ得る。然も同時にそれを將來に當てはめ又現在に即して見るこ
とも可能であるとする。

次に價值論であるが、これは一種の經濟學とも見られる。マルクスは
その基礎をなす生産過程に剩餘價值を設け從來の判然としなかつた或は
餘りに複雑を極めた價值論に光を與へた。

以上のマルクシズムの二大綱を中心として、所謂マルクシズム國家論、
プロレタリア獨裁論、帝國主義論等の理論が生れ、マルクシズムの大系

にしても、マルクシズム或はレーニズムに基礎を置いたものゝみであり、
殊に頻發的に發行される非合法文書——然も簡單なパンフレット、リーフ
レット類によつて宣傳煽動され運動に猪突した事は實に一面的であつた
と思ふ。マルクシズムの書籍文書以外を頭から、見ず讀まずして否定し
た事は決定的に誤りであつた。

社會の色々な現象を見る場合にしても常に一面的であり、全體として
見る事の殆んどなかつた事は自ら判然と言へる。私はもつと色々な方向
から批判し比較しつゝ眺めねばならなかつた。今迄の運動の中心に捲き
込まれてゐた私には、その簡単な事すら氣付かず、又氣付く可き心の餘
裕さへ與へられなかつた。

今に至つて初めてその運動の渦中から出され、緩り自省する事によつ
て、この誤謬に氣付いた次第です。併し、判然と言へば、未だマルクシ
ズムに代る可き系統的な理論を把握する機會を持たない。唯漠然とした
何ものかは捉へた積りであるが未だ組織的な系統的なものとなつて居な
い。私は今後再びマルクス主義レーニン主義を見返すと共に、他の非マ
ルクス主義的理論をも批判し併せ研究する積りである。

三、自己批判及び誓約

私は昭和×年九月中旬より昭和×年九月中旬に至る約一箇年間、殊に
その後半、共產主義運動の實踐的行動に、殆んど全生活を終始して來た
ものであるが、今に至つて自ら省みる時轉々感慨無量と言はざるを得な

をなすものである。而してそのマルクシズムの理論を實踐に選し、それ
をマルクス死後に延長した——即ちマルクシズムに肉をつけたものがレ
ーニズムであると言へる。

以上のマルクス・レーニン主義が現在の共產主義の基礎をなして居り
共產主義運動者の信奉する法則となつて居る。それに依れば現在ソヴェ
ート同盟を除く他の世界各國に於ける資本主義は、その發展の頂點に於
て歴史の必然性を持つて崩壊する。然もそれは勞農大衆の内に萌芽する
革命的意氣の高揚によつて一の革命となり、遂に打倒されるものである。
即ち現在のブルジョアジーに對するプロレタリアートの勝利を以て資本
主義は終末を告げるものであるとする。勿論この場合資本主義は、その
自己崩壊を食ひ止める爲めに凡ゆる形態を持つた支柱によつて武装さ
れ、それに對するプロレタリアートの苦闘も止むを得ないとする。而し
て、崩壊した資本主義社會に代るものは勝利したプロレタリアートの獨
裁の半國家的社會でありそれを經てのみ建設される共產主義社會であ
る。而してそれは不合理な搾取なき、生活苦のない理想的社會であると
説く。これが現在の共產主義運動の目標となつてゐると思ふ。

それに對する私の信念

私は勿論最近に至る迄信奉してゐた。それは、寧ろ盲目的であつたと
言へるかも知れない。殊に運動の深みに陥つて以來は殆んど理論も考ふ
る事なく全く猪突的に進んで來たのみに過ぎなかつた。偶々書籍を讀む
い。私が檢舉されて以來、今日迄約五十日間の監房生活に於て、考へ、
聞き、見た事、一として處觀的ならざるものなく、今迄固く確信して居
た共產主義運動の理論及びその將來の見透しに就いてさへ私は痛切なる
再認識の必要を感じるに至つたのである。

勿論、その理論に就いては、未だ淺學なる私にその正否の科學的批判
はなし能はざる所であるが、唯その理想實現、少く共日本に於けるそ
れの可能性に就いては、判然と自らの誤認を認める事が出来る。それは
滿洲事變、上海事件を契機として、忽然と擡頭し、瞬く間に全日本の空
を風靡した現在の所謂ファッショ的風潮と、それによる益々猛烈さを加
へた國家權力の彈壓追求に、愈々非合法的地下存在に追ひ込まれて行く
共產主義運動の影響・勢力を比較することに依つても自ら、判然たりと
言はねばならぬ。數十年に亙る苦闘の歴史をもちつゝ尙微々たる共產主
義運動が深く國民の胸裡に根ざした國家觀念に附合するや忽ちに火の燃
ゆるが如く擴大して行つたファッショ運動に、果して對抗し得ると言へ
るであらうか。私は今迄自分の側の勢力のみを知つて、それ以上に大な
る敵の勢力を知らなかつたのである。

共產主義運動の根幹をなす共產黨は、自らプロレタリアートの前衛な
りと稱する。果して然るか、又斯くなり得る可能性を有するか。私は僅
少なりとは言へ、共產黨の一員として、その運動に参加し、且つ今その
經驗を客觀的に顧みる機會をもつたものであるが、それによる解答は決

定的に否定である。第一は當然非合法的存在とならざるを得ない事であり、而してその爲に、大衆がそれに加擔することの斷じてない事である。彼等は一應現在の救ふ可からざる資本主義の矛盾を認め、或は共產主義の理想を讚美し、且つその漠然とした實現の可能性は考へるかも知れない。併し、現在それに對して果して肉身妻子を見て、自らの生命をさへ賭するが如き犠牲的努力を拂ふであらうか。この事は日本共產黨の現状を見ることに依つても明白である。その血塗られた歴史にも拘はらずそれは殆んど全く、プロレタリア大衆から浮び上つた存在であるとか言へない。

又それが如何に、インテリ・小市民等の薄弱な中間層にのみ依存してゐるか。而してその事自體、共產黨のもつ將來に就いて明白なる豫言を與ふるものと言ふべきである。斯る共產黨、それがよし存続するとも、果してその理想實現を期待し得るであらうか。私は今日迄運動の渦中にあつて、自らは勿論その渦をさへ省みる事なく、總ての見解に於て、一面的であり、従つて認識不足であつた事を恥じる。殊にその爲に、運動による極度の過勞の爲に、私は肺患の悪化する肉體的犠牲をも拂つた。これは私の弱い、インテリの性格と共に、實質的に、運動を再び續ける事の不可能を知らしむるものである。

成る程これ迄私としては最も精力的な努力を共產主義運動に獻けて來た。併し、それさへ私の費しい感激的熱情によると言ふよりも以上に、

私の弱い性格によるものであつたと考へざるを得ない。人から依頼されて拒絶する事の出来ない、又その承諾後は飽く迄遂行しなければ濟まされない、言はず餘りにも良心的であつた爲に、私は益々その深みに惹き込まれて行つたのである。然も皮肉にも、この性格こそ、今日當然遣はねばならぬ彈壓に對して所謂共產黨の鐵の規律を守るには、餘りにも無力であつたこと、同時に、それが我々インテリ層の通性でありその共產主義運動に加擔し、殊に指導的地位に立つことの不適當なるを自ら痛感せしむるものであつた。

四

某帝大文學部

L.Y (當二十四年)

關係せる事件の種類……外圍團體、同盟加入

處分の種類、程度……停學

家庭の狀況……父、母、兄、開業醫。生活程度、中以上

學費の出所、金額……家庭より(小遣月十五圓位)

一、家庭の狀況

私は家の資産状態を詳にしてみませんが、 $\times\times\times$ に山地二ヶ分、宅地若干、 $\times\times\times$ に宅地若干、その時價總額五千圓(?)、家屋約二千圓、家財一萬圓位、證券一萬圓位(?)
 $\times\times$ 後信用銀行の破産で幾許かの損失があり又 $\times\times\times$ の山地宅地は全

く用を爲さず、その上賃金の回収殆んど不能、更に最近の不況は例外なく月收の減少を來してゐる。

従つて私の小使も毎月十五圓程度となつてゐる。

私の家庭は至つて平和で小人數のため、むしろ淋しい位です。父は庭いじり、小鳥餌、俳句、古書等の古典的趣味を持ち平生は至つて温和ですが、時として嚴格な處を示す事があります。母は強い性格である丈夫事一切を一手にきりまはし私達不肖の子にも行届いた良き母でありませう。私は十四歳の春迄 $\times\times\times$ の寒村で父母の膝下に成育し全く世間見ずの子供でした。十四歳から十七歳迄親類の家から通學しましたが、この間漸く世間を経験する事が出来ました。十八歳のとき一家が $\times\times$ に移住し家庭から通學する様になりましたが、家庭が私の性格、思想に與へた影響は、學校あるひは教會等の家庭外の生活が與へたものに比し遙かに平穩なものであつたと言ふ事が出来ません。強ひて言ふならば家庭内で私の趣味や新思想を共に談ずる機会を得なかつた爲私の生活の重心が常に家庭外に出る様になり、引いては私をして社會問題の研究に向はしめたと言ふ事が出来るでせう。

私の生活状態、生活必需品は家庭に於て支給されるので、小使は純然たる小使で、學校での晝食、茶代その他家庭で承諾されない書籍費になります。私はカフェー遊び等も心得ませんでしたから月十五圓の小使で別に不自由を感じませんでした。

二、社會科學研究の動機及過程それに依る思想の變遷

私は高等學校時代基督教徒として人道主義に立脚した社會改良の必要を感じて居ました。社會惡の研究の爲、一夏、三河島の千軒長屋に基督教主義によるかくれたる社會事業家鈴木益平氏を慕つて行き貧民生活を體驗して鈴木氏の努力に甚だ激勵された事がありました。そして高校三年間は、日曜學校を開き或は基督教青年會を作り、毎夏楽しみ少い近所の貧しい兒童を集めて夏季學校を開く等の仕事を續けて來ました。然し私の貧弱な努力とは正反對の方向に、貧民兒童の精神及生活が向つて行き、更に深刻な世相に無慈悲に壓倒されてゆく事が觀察されました。一方基督教會の存在が果して時代に如何なる效果あるものであるかに疑問が生じ出しました。

三年間の體驗から私の人道主義は破産するに至りました。昭和 \times 年の末頃から私は基督教的人道主義の清算を始めたのでした。

エンゲルス著「古代基督教の歴史的研究」

フォイエルバツハ著「基督教の本質」

この間、フォイエルバツハの明快な理論によつて私の信仰が完全に逆轉せしめられたかの觀がありました。本書の序文によりてマルクスがこの唯物論哲學を更に發展せしめたことを知り、マルキシズム研究の意途が明瞭に方向づけられました。

Spargo: Social Democracy Explained. (友人Kから借りる)

これは平易に書かれて居り社会主義のアウトラインを大體之によつて捕える事が出来ました。

エンゲルス著 石川榮十郎譯 「マルキシズムの根柢」

Engels:—Landmarks of Scientific Socialism. (丸善)

によつて更にマルクス主義的世界観を知る事が出来ました。

「社会科学辞典」 杉森孝次郎編輯

によつて社会主義者文献、現勢等を調べ研究の資としました。

太田黒譯 リヤザノフ註 「共産黨宣言」

を昭和×年の最後の一夜耽讀して感激し、人道主義から社会主義へ變化しつゝあつた自分を最も喜ばせた。

然しこの頃の私は未だ明確な政治的意見を持つてゐなかつた。この頃總選挙に當つて大山郁夫に同情を持つ程度であつたことによつて考へられる。

左翼文藝書多数

エンゲルス著 「社会主義の發展」

スターリン著 「レーニン主義の基礎」

レーニン著 「帝國主義論」

タールハイマー著 「唯物辯證法入門」

ブハーリン著 「唯物史観」

ルツポール著 「レーニンと哲學」

従業員班が全部二ヶ月足らずで連絡を切つて了つたこと××新聞社に三十五部の文書が入つてゐながら、あの誠意に對して何の効果的闘争も出来なかつたこと等は私を少なからず失望せしめた。又地區大會を開いて労働者によつて多数の地區委員を出し、地區指導部を強固なものとするば、もつと組織がしつかりし、闘争も活潑になるであらうと考へて、多くの無理と危険を冒して開いた二回目の大會にすらたつた三人の労働者が集つたのみであつた。

更に滿洲事變上海事變が相繼いで起り日本帝國主義の侵略戦争、中國革命壓殺、同盟干涉、戦争の口火が開かれたことを意識し乍らも、メンバー五百を算える地區内に於て何等積極的闘争は起こされないう様である。勿論之は地區指導部の無能にも原因し、又反帝同盟の闘争が未だ充分大衆に理解されてゐないことは事實であるが、いやしくも五百のメンバーが、この最も活潑に闘争すべき時機に於て何等の反應を示さないと云ふ事は、未だ大衆の意識が充分啓蒙されず組織メンバーすらも眞に能動的革命意識を有しないことの證明である。

一方、一般大衆の意識を考へる時客觀的情勢の左翼的評價に比して革命的勢力の微弱さを痛感する。例へば私に代る有能な闘争が之を指導したとしても果して、その努力が如何に報いられるか又その將來の發展の見透しは頗る悲觀的ならざるを得ない。私は無能であるとは云へ相當忠實に五ヶ月間は全く休む暇なく東奔西走した。そして形骸的組織メンバー

■資本論 (改造社普及版)

その他

×大に入つてからはプロ科学、「職族」「産勞」「インタ」等を書店から購入して讀む様になつた。そして社会主義研究熱は漸次政治的運動への興味を呼び起して來たとみる事が出来る。

三、自己批判及誓約

(イ) 過去の闘争に對する自己批判

私が闘争に参加してから現在に至る迄の経過を今省みてみると、最初學内の刷新運動実行委員に擧げられて以來、地區反帝同盟書記局に關係する迄、只他から引き上げられ之に對して私の熱情的性格が應じて不自然な、而も夢の様な道程を辿つて來たとしか感ずる事が出来ない。

學生運動は兎も角として、學生が左翼諸團體の指導的地位につくことは、プロレタリア革命運動の性質上重大な誤謬のものであると云ふ事は從來屢々批判された所であり、而も私の場合に於て再びその苦杯を經驗しなければならなかつたのである。私の如きものが地區書記局の指導者となつたことと共に反帝同盟のメンバーが殆んど大半學生、インテリであるといふ事實は左翼組織(少く共反帝運動に於て)の不健全を露呈したものと云へる。更に又私の頼りとしてゐた労働者に於ても、職場の大衆の極少部分に革命的労働組合が作られてゐるに過ぎず、これとても充分根強い闘争は決してやつてゐない。即ち私の一時連絡をつけた新聞社

五百を得た。そして私自身が過勞の爲の肺患にかゝつたことは、組織を無力ならしめたといふ階級的失敗と等しい私的失敗であつたと思ふ。要するに私は意識程度に於ても理論的水準に於ても闘争エネルギーに於ても、之以上左翼運動に参加する事は、却つて階級的に見て荷厄介な同伴者以外の何ものともならぬであらうし、強い彈壓下にあつて非合法的運動は私の場合最早参加する意志が起きない。即ちこゝに潔く過去の清算する所以である。

(ロ) マルクス・レーニン主義に對する考へ

私は現在マルクス・レーニン主義に對し、その根柢とする唯物論哲學體系に於てまげることの出来ぬ明確さを認めてゐる。更に資本主義の明快なる解剖は理論的に之を否定することは出来ない。従つて之を根據とする社会革命の理論は正しいと思ふ。只之が實踐に於ては、我國に於ける力關係が未だ全く不適當な状態に在ることは私の經驗上判然と認めらる。この原因は充分研究の必要があると思ふ。私はマルクス・レーニン主義をもう一度理論的に検討して見る一方、吾國の社会情勢を批判的に社會學的に吟味して見たいと思ふ。

(ハ) 私の感想

私のイデオロギーの經濟的根據は専らブチ・ブルのそれであつた。只所謂青年の燃ゆるが如き正義感とそれによる社會の諸矛盾に對する疑問から出發したマルクス主義研究は、英雄主義的熱情をして私をこゝ迄驅

り立て、来たのである。従つて奔馬の如き進撃、この間反省して止る機会を失つたとは云へ、時に過勞から健康を害して尙組織の進展遅々たるを見ては徒らに犠牲多くして效無きを思ひ身を退かうとしたこともあつた。今や奔馬は雙脚を打たれ囚はれて三旬、房中三十九度の熱苦を味つて初めて考へるところあり、即ち

- 一、健康に對する自信を完全に失つたこと
- 二、客觀的社會情勢再吟味の必要を感じた事

- 三、理論の研究が不充分である事
- 四、性格的に階級闘争に不適當なこと

以上の理由から再び實際運動には参加しないことを決心せざるを得ない。

尙私が入房中特に感激した事は、丁度私の誕生日に當つて母が兄に赤飯を持たせて差入れて呉れた事であつた。生れてこゝに二十三日目の誕生日を始めて房中で迎えた私、二十三年間變らぬ愛情を以つて育こんで呉れた母、その母の純情がこの赤飯に煮き込められてゐることを感じて私は言ひ知れぬ感動を覺えた。

この母の赤飯は幾度か私の左翼運動によつて捕えられることを恐れたその愛と同じだ。又黙つてこそ居れ父の心中はそれ丈察つせられて身を切る思ひがする。この両親に對して私の報ゆる途は只両親が今いたずら

に願つてゐる平和な家庭の團聚に私が歸つてゆく事であればならぬ。

五

某帝大經濟學部 S.H (當二十五年)

處分の種類、程度 停學(自昭和×年五月十三日至昭和×年三月三十一日)

家庭の狀況……父母健在、運送業を營み地主にして中流以上の生活をなす

學費の出所……家庭より月額四十五圓内外を受く

健康……健全

性質……温順らしきも執拗なるところあり

私の現在の心境

私は現在の私の心境を述べる前に、何故私が學生の本分を無視し遂に停學處分を受けるに至つたか、その誤謬ある行動の理論的本質は何であつたか——誤れる行動の基礎となつた誤つた理論——を現在の心境から反省して見たいと思ひます。何故なら過去の私の行動を基礎付けて居た理論に對する反省と批判が將來の私の行動を決定するのでありますから。併し此處には私の過去の行動の理論の客觀的條件に付いては述べないことにします。私は過去に於いても、亦現在に於いても同様であります。

すが、否現在に於てはより旺盛となつて來ましたが、學問に對する大なる興味と熱愛とを有つてゐたと確信してゐます。併しながら殘念な事には、私は過去に於て種々の性格を有する種々の學問體系に直面した時、私は夫々の性格を有する學問體系の内容の優劣、眞理性、虚偽性について困難なる比較研究を行ふことなしに、直ちにマルキシズムの正當性を主觀的に、甚だ獨斷的な仕方決定し、一度びマルキシズムの正當性を信じた以上は、あらゆる社會現象を此の觀點から理解せんとしたのであります。従つて私の過去の學問的研究の内容は、(一)マルキシズムの觀點に立つて、他の性格を有する學問體系を、それが單に偽物的であり誤謬であることを論證せんと努めたこと、(二)社會現象の種々なる形態の内容をマルキシズムの觀點から理解せんと努力した事、此の三つに盡きると思はれます。かくして私は學問の研究をせんと心ざしながら、學問の研究の名に値する様なことは一つも爲さなかつたのであります。第一種々の性格を有する學問體系に直面した時、私は私が學問の研究の仕方根本的方法であると考へます「比較研究」をいともあつさりと放棄してしまつて、その内の一體系を亦甚だ手輕に撰擇してしまつたんです。この出發點に於て私は根本的な誤謬を犯したのであります。私は私の「立場」の確立に於て獨斷の上に立つてゐたのであります。(一)種々の性格を有する學問體系の比較研究、(二)夫々の學問體系を生み出した歴史的基礎へまでさかのぼること、(三)その社會的、歴史的基礎との聯關に於

てそれ等の各々の學問體系の系態と内容を理解し批判し、その學問體系の有する相對的歴史的價值を確立し、それ等各々が有する生命的なるもの、その存する現在の意義をそれから把み出し、より高度の認識の契機たらしめ現在の認識をより具體的に亦より豊富になさしめる爲めに古きもの及び一切の存在せるあらゆる形態の精神的産物を利用し盡すこと、かくして亦「立場」はより具體的に確立し得る事と考へられます。そして亦此處から「立場の確立」が非常に困難な仕事であること、研究の過程に於て、除々に確立し行くものであることが理解されます。——もつとも如何なるもの、認識に於ても、客觀に對する主觀の或る身構へ、立場が必然的に存在するのであります。これは此處では問題から除く事にします。要約すれば私は總ての學問體系に直面した時、以上述べた様な態度で研究して行きたいと考へます。如何なる學問體系と雖も完全に隔り去り遂に生命的なるものに轉じ得ない様なものは恐らく存在し得ないに違ひない、私は過去の狭い心を捨て、大地があらゆる不用なるもの、腐敗せるものを、廣い胸をあげはたいてそれを消化し生命的なるものに轉化させて行くあの立派な仕方を學びたい。認識された總てのものが眞理と誤謬の統一物に違ひない。さもなければ如何にして認識の發展があり得ようか。以上に於て私は私の過去に於ける學問的研究の出發點に於て存在した所の誤謬を批判し得たと考へます。

第二の點は、私が學問的研究に熱意を有してゐると想像しながら、そ

これは只想像に過ぎなかつたと言ふ點であります。何故か？ 私の過去の態度を一貫して洗れてゐたものは、客観的なものを最大限にひがめず、認識し度いと言ふ氣持が驚く程缺乏してゐたと言ふ事であり、客観的なものに沈着し込み、それにダニの如くしつかりと食ひ付く事に依つて、それをあくなく認識せんとする精神が缺けてゐる所では、凡そその研究成果が何であるかは、想像が付きません。私のこの客観的なものに對しての不眞面目な態度は亦立場の確立、撰擇に際しての誤謬と聯關してゐます。

私は過去に於て一つの命題、公式に従つて客観的なものを評價しようとする努力はしましたが、反對に、客観的なものに深く食ひ付くことに依つて、その困難な研究を通じて一つの法則、命題等を確立せんと努力したことは殆んど無いのであります。一般的なものから特殊なものへ下りて行かうとはしたが、特殊なものから一般的なものへ上つて行かうとする態度が根本的に缺けてゐました。この爲めに抽象的な科學には非常に興味を有しながら、具體的科學に對する興味は薄かつたのであります。哲學は具體的科學から引き離されて、哲學をして生命的ならしめる不可缺な環を失つてしまつたのであります。現實的なものと最も良く結び付いてゐる個々の科學の研究の怠情、これは私の過去に於て非常に特徴的でありました。従つて經濟學のうちでも、經濟哲學、經濟原論、學說史等に興味をもつてゐたことのうちにも表現されてゐます。

處分の種類、程度……停學（自昭和×年五月十三日至同×年三月三十一日）

家庭の狀況……父母死亡、牧畜業、遺産あり

一身上の事は叔父の援助を受く

學資の出所……月額四十圓程度

健康……健全

性質……善良温和なるも表裏ある傾あり

序

私は昭和×年五月十五日に、一ヶ年間の停學に處せられてより約一ヶ年間、或は叔父の宅にて、或は木曾山中にて、専ら讀書中心の生活を送り、過去に犯せし自己の反動的行動について靜に反省しつゞけました。始めは何となく心も落ち付かず、萬事に氣が進みませんでした。氣分の落ち付きと共に、次第に讀書慾も出、反省する所がありましたので、此處に大體その反省せし所を記して、過去の自己の行動を批判し、學生の自分にとり、多大の御迷惑をおかけせし大學當局の人々に御詫ひ致します。

一、過去の誤謬、反省

私は昭和七年三月第×高等學校を卒業すると、同四月には××帝國大學文學部に入學を許可せられました。當時私を最も悩ました問題は精神か、物質かの問題でした。それ迄は私は比較的倉田百三氏の諸著書の

以上において大體私の現在の心境からして、過去の私の誤つてゐた行動を基礎付けてゐた理論的態度を反省し批判した積りであり、將來の方針は従つて、以上の反省と批判の決論が要求してゐる所のものに外ならないのであります。

忠實な、困難な批判的研究によつて、具體的な立場を確立したい。種々の學問體系を先づ同じ水平線の上に並べなければならぬ。マルキシズムを高原から水平線に引き下さなければならぬ。種々の學問體系の比較研究と批判的研究に依つて、それ等が内蔵せる生命的な血潮を吸収し盡し、私自身の立場の確立に努力したい。

公式をかつぐ事ではなくして、公式の根據にまでさかのぼり、その眞理性、誤謬性を批判することに努力すると共に、種々の統計的資料の忠實なる批判的研究に依つて、具體的な經濟事實の忠實な研究に依つて客観的な法則の發見に努力したい。

學問の忠實な研究即ち種々の學問體系の比較研究、事物をひがめず色めがねを通してではなく、あるがまゝに把握する爲めの努力をする事に依つて、眞實に忠實な學生の自分を全うし、過去の三年間の誤れる行動の償ひをこの一年間に於て果したいと考へます。

六

某帝國大學部哲學科

I. H (當二十六年)

影響を受け、自らは自由主義者と信じ「祈り」の生活を一生の中心指導方針とせんとし思ひ精神中心生活者だつたのです。かゝる卑んで居た「物質」なるものは哲學的概念としては決して日常的に言ふ、「卑しむべき」「物質」ではない事を知ると共に、それでは「精神と物質」とは如何なるものか、如何なる關係にあるものか、私の中心問題となつて來たのであります。しかし未だ初期の間は精神第一主義をとり、物質はその派生物、第二次的のものとして居りました。がマルクス主義的哲學書、特にレーニンの「唯物論と經驗批判論」を讀むに及んで、「存在が意識を規定する」事を盲信する様になりました。

それともう一つ、此れまでは全然「祈り」中心主義者であつたために、「實踐の意義を考へた事はありませんでしたが、マルクス主義的影響を受けると共に、「實踐」を重視し、従来の「祈り」は單なる遊戯だと思ひ、「理論よりも實踐だ」、實踐の中からのみ正しい理論は把握せられるのだと、一氣に信ずる様になりました。

以上二つの考へを比較的何の反省もなく、受け入れると共に私は自治會に入り、自治會中心の政治的運動に没入し始めました。

さて今日以上の過程を経て政治的運動に没入した自己を反省してみると、種々の誤謬もありますが、その中でも最も大なる誤謬が二つあると思ひます。それは

一は、物質か、精神かの問題

二は、實踐の意義
に關するものであります。

イ、物質と精神

上述の如く、私は高等學校時代は精神第一主義者であり、同時代末期より大學一回生時代は物質第一主義者でありました。しかし過去一ヶ年間の讀書中心の反省時代を経て來ると共に、時に田邊元博士著「哲學通論」を精くと共に、此の物質第一の考へも三度、根底より動搖して來ました。

私は單なる「精神」は單なる抽象物だ、それだけでは結局精神、精神と呼ぶ丈で、少しも具體性はないではないかと考へて、「物質」「客觀的存在」に走りました。だが今日考へてみるに、單なる「物質」も亦單なる抽象物ではないか、精神と結合せられて居ない物質の單なる抽象物に過ぎない事は、單なる精神の抽象なると同様であると云ふ考へに到達致しました。世界には切り離された單なる精神もなければ、單なる物質もない。何日何處に於ても精神には自然的物質的存在が契機として入込み、亦自然的物質的存在にも同様に精神が入込んで居る。精神と物質、思惟と存在とは常に全般的なる對立の統一をなすものであるとの考へ方になりました。

この考へを得て始めて私は從來信奉してゐた唯物論の桎梏を脱し得た様な氣がし、今日では「唯物論的」と云ふ事それ自身が大なる制限せられた理論の把握を目しながら、徒らに實踐のみを高尙視してそれに没頭し、一向に理論の把握を志さず、あくまで實踐の爲めの實踐で終り、自己に益する所のなかつた事。この二つが大なる誤謬でありました。

思ふに大學時代は研究に全精力を注ぐべき過程です。それで研究の確たる結論を得て始めてそれを以て社會に出、社會的に盡す事こそ、學生の本分であります。しかるにそれを忘れ、否、研究さへもせずして、頭からマルクス主義を盲信し、自己の行動を以て既に理論的にも正しいと信じて居た事は實に慚愧の至りに絶えません。理論を忘れた實踐、それは實踐を忘れた理論と一般です。だに私は完全に理論的研究を放棄して居ました。次に、私は「實踐」と云ふ時、常にそれを單に「政治的」意味にとつて居ました。一體マルクス主義的實踐には個人が自己の自發性に依り善惡の價值判斷に従つて善のみを實行せんとする意味の道德的實踐は含まれて居ない。其處では歴史の變革は善惡の問題ではないと説かれて居る。

かく其處では道德的實踐は否定せられて了つて居る。此處に於て私は「それでは目的の爲めには手段を撰ばぬのか？」と反問する様になりました。かくて今日では漸く自己の誤謬は「實踐」の意義を單なる政治的實踐と取り、道德的實踐を忘れて居た所にある事を悟りました。そして正しい實踐は正しい理論を根底とし、而も道德的でなければならぬ事を自覺するに至り、過去の自己の誤謬は一切清算し、道德的人間として更生

れた局部的な考へだと信じて居ります。

ロ、實踐の意義

既述の如く、私はかつて倉田百三氏に影響せられて居た。氏は「祈り」の生活を説く。即ち氏は人類愛、隣人愛に燃え、人間相愛により世界の惡は亡び、人類はより良き社會生活を受樂しうるであらう。だが近隣、同家庭内等々の少數の人々には愛の手をほどし得るも、全人類に對してはそれは不可能事である。こゝに於て全人類に對しては、倉田氏は「凡ての人々が幸福であります様に」と合掌して祈る。こゝに「祈り」の生活があり、この「祈り」が全人類に對する私の愛の實踐の表現であると説く。

私は此の倉田氏の影響を受け、比較的長期間「祈り」生活者でありました。だが次第に「祈り」實踐はあまりに無力であると感じだし、マルクス主義的影響を受けると共に「祈り」は結局少市民的な自己慰安であり、獨りよがりであり、遊戯であると斷じ、漸次實踐は常にその最大威力を政治的實踐に於て表現せられると考へて來ました。これには勿論「理想よりもまず實踐だ」「實踐を通じて理論を把握せよ」が根底となつて居りました。だが過去一ヶ年間、自己の行動を反省してみる時、何處に正しさがあつたでせうか。

まづ第一の誤謬は「實踐」と云ふ時、それは單に「政治的實踐」と云ふ局部的なものに限定せられて了つて居た事、第二には「實踐を通じて」と云ふと覺悟するに至りました。マルクス主義的實踐に没頭する事は「目的の爲めに手段を選ばぬ」と云ふが如き不道德に陥り、而も強力者が弱者を單に消滅せしめるのみで、それは自然的物理的力學的働きのみであり、個人の意志の尊重、道德の重視と其働きの完全には放棄せられて居ると云ふ事を反省してつくづく過去の自己が恐ろしくなりました。一匹の虫ケラにも生命がある。虫にはその生命を最も樂しましめよ。これが物理的力學的關係だと云つて、その虫ケラを下駄で押しつぶしてつぶすな。虫ケラに生命を樂しましめる所にこそ個人の尊重と共に、道德の眞義がある事が、今悉く私には自覺されて來ました。

二、今後の方針

上述の事柄を以て、私の誤謬は大體清算されたと思ひます。それでは今後の方針如何か。

私は從來引續き子供が好きであり、今も子供の世界を愛し續けて居ます。この氣分が中心となつて、大學でも教育學を自己の専攻としたのであります。そして停學中、ルソーの「エミール」を讀んで、この氣持ちは益々養はれて來ました。今後は私は一切を忘れてもいゝ、兒童の世界に生きやう、それであのアンリー、ファアブルの如く、自然の生きた姿そのものを愛し續けて、兒童と生活を共にしようと思ひます。この世界に入つて始めて、私の大なる誤謬は眞の意味に於て清算されると思ひます。

即ち自然の中で最も自然に近い児童と生活する時、そこには完全な精神と物質との對立の統一があり、同時に児童と共に自然を愛し、フアーブルの如く一匹のスカラベサクレにも大なる愛と幸福とをほどこす事となり、道徳中心の生活に入り得ると私は信じて居ます。

以上が私の今後の生活方針であり、従つて必然的に過去の如く、他の人々に自己の意志を左右される事を離れ、眞實と道徳とを追ひ求める世界に入り得ると思ひます。

結尾ながら、今回の小生の行動により多大の御迷惑と御面倒をおかけした大學當局の方々に心から御詫びし、今後は誓つて學生の本分に悖らず、學業に精進する事を以て御詫びの證しとする次第で御座います。

七

某帝大文學部哲學科 S.M.(當二十二年)

處分の種類、程度……停學(自昭和×年十一月二十四日至

昭和×年三月三十一日)

家庭の狀況……父亡、母あり、兄戸主、自作農、中流

學資の出处……×高時代より兄の知人より月三十圓宛支給

健康……健全

性質……意志強固

一、加盟の動機

私が日本共産青年同盟に加盟致しました動機は甚だ漠然たるものではありませんが、次の諸點はその最大なるものであると思ひます。

イ、讀書 私は×高時代、健康と享樂のためスポーツに専念し(殆んど凡ての野外運動に手を出しました)讀書の機會少く、社會科學に關する知識は殆どありませんでした。殊にその研究は假令個人的にもせよ學校當局の禁ずる所でありましたから、強いて研究しようとは思ひませんでした。只中央公論や改造の創作論文を読んで知識慾を満足させ、常識的に左翼運動を進歩的なりと考へ、之に好意を寄せて居る程度にすぎませんでした。

私は性來文學に興味を持ち、哲學政治經濟に關する理論的書籍は不得意でしたので「蟹工船」や「眞理の春」を読んで、人並に「良く出来て居る」と感激共鳴する事はありませんでしたが、「唯物史觀」とか「唯物辯證法」又は「搾取」「恐慌」等といふ事は少しも學問的に理解して居ませんでした。讀んだとすれば土田杏村の「マルキシズム批判」位のものでした。併し一方マルキシズムを知りたいといふ慾望は相當強烈で、良きにつけ悪しきにつけ讀んだ上でないと批判出来ないといふ考へから、今年の春休に岩波文庫でエンゲルス「家族國家及び私有財産の起源」フオイエルバツハ「キリスト教の本質」の二冊を讀み今迄漠然として居た社會意識を理論付けられた様に感じ、力強く思ひました。

×大入學後は愈々マルキシズムを三年計畫で根柢から系統的に研究しようと思ひ、プランを立てましたが、××問題勃發し、賣本論を一頁も讀まぬ中に高代運動に没頭する事となりました。但しその間に「プロレタリア文學」「プロレタリア文化」「産業労働時報」「インタナショナル」等の左翼雜誌を讀んで相當強い刺激を受けました。殊に「インタナショナル」三、四月合併號の「同志クレーシンの報告」といふ國際共産黨の現狀に關する論文を讀み、知識慾の満足するまゝに、日本も或は「最近の中に革命的情勢の下に立つかも知れぬ」と思ひ、一段と階級意識の昂揚を感じました。

この外讀書ではありませんが、××に居た時「吼えろ支那」「暴力團記」「生ける人形」等のプロレタリア演劇を見た事も、少からず私の感情を緊張させました。要するに私は讀書關係では理論は何も解つて居ないのに、小説、演劇、映畫等により盲目的に左翼運動に好意を寄せ、その影響下に働くことを一つの「名譽」の如く考へて居りました。

廣い意味での讀書の一部分かと思ひますが、日々の新聞記事に現はれる左翼闘士の不死身の活躍も亦私を英雄的崇拜に導きました。殊に本年二月下旬の小林多喜二の「怪死」は當局に對する強い憎しみを植付けました。

ロ、交友 私は×高時代殆ど寮生活をしましたので、友人と特に親しくなり、友達から受けた感化も少くありません。殊に實踐運動へ入つたの

は直接友人の勧誘に依るものですから、讀書關係以上に重大な動機だつたと思ひます。併し友達の中でも、私は一番本を讀まぬので、友達か「唯物論」とか「辯證法」とか議論して居る時はいつも後れを感じました。この感じが大學へ入つてから私を焦せさせたと思ひます。

×高三年の三學期に、記念祭を前にして私のクラスの一、二、三番が一週間檢束された事がありました。三番は何れも無實の罪と判明して歸つて來ましたが、この時は警察の不當檢束に對して心から憤慨しました。その時の一人が今度私の文學部代表として××した際、共青×大オルグK××委員を紹介した、×大經一、H×××であるのを思ひ併せれば感概無量です。H××は××中の私を捕へて、××問題を全國的に指導して行くものは共青である、共青なくして××問題の勝利はありえないと、言葉をつくして勧誘したので、遂に斷り切れず、K××に紹介される事になりました。

此の點を今迄係官の言はるゝまゝに、法一、I××と申して隠立て致しましたのは、全くH××に對する私情によるものでありまして、學校當局に對しても、亦I××君に對しても、少からぬ御迷惑をかけた事と思ひ、警察で訂正致しました通り、關係を明らかにして心から不誠實をお詫び申上げます。

H××は私の同級の秀才で、一年の時には一處に組選のポートを漕ぎ、二年の時には又一處に寮の委員をした事があり、頭が良いので常々尊敬

して居りましたが、今度××して見ると、左翼組織と連絡して××問題に活躍して居るらしいので一層尊敬を高め、遂にその力強い迫力に押されて加盟するに至りました。

ハ、××問題 私は××問題には×高代表として活動致しました。始め×高同窓會の意向に基き、文學部教授團と提携して法學部を支持し、文部省に當るのが最も適策なりとして「授業休止要求」の議案に對しては殆んど満場一致で通過せんとしたのを保留させた位でした。併し××後幾百幾千のメッセーヂ、決議文聲明書を以てしても埒が明かぬので、××問題の對策に付見透しを失つて居た處、×大文學部の高代達よりポイコットのより文部省の急所を衝かねばならぬとの意見を聞き、從來の態度を一變して、文學部教授團に對しポイコットの宣言する事に努力しました。

この××問題を通じての高代活動が異常に私の闘争心を高め、遂に前後の辨へなく合法運動の垣を越えて非合法運動に突入する重要な原因となりました。事實、入學の始めは全々實踐運動を離れた科學的なマルクス主義の研究を以て×大三年の目的の一つとし、思想界に貢献せんとして居たのでありますが、××問題が起るや、闘争の波に乗せられて遂に騎虎の勢から共青と關係を結ぶに至つたものであります。

即ち合法的な××問題の運動方針に行詰りを感じ、夏休も迫り、早急にその打開策を求めて焦つて居た所へ、交友關係から共青の組織と連絡し、之に加盟してオルグと共に×大の組織の擴大強化を計り、幾多の前

そして自分自身に英雄的昂奮を誘ふ事が出来ませんでした。「共青の旗の下に」全×大生を指導して「××問題」を勝たせよう——この気分は××問題を通じて文學部の高代會議に活動して居る中に醸されたものでした。この非合法組織に對する幻想が、私を共青活動に驅り立てた有力な動機である事も否む事は出来ません。

大體以上が加盟の動機であると思ひます。即ち讀書と境遇から左翼組織に對して抱て居た幻想的崇拜が、××問題に刺戟せられて交友の絆断ち難く、遂に私を驅つて盲目的に日本共産青年同盟といふ非合法的政治結社に加盟せしめたものであります。従つて私には理論的信念といふものはありませんでした。

二、現在の反省

陸熱の九十七日間を留置場に檢束され、去る九月二十五日檢事局の御寛大な處分により「處分留保」の身として釋放されました。その間私の心境も亦變化に變化を重ねました。その變化の波は一つの方向——實踐からの離脱の方向に向つて居たとは言へ、警察に居た時は醜い片意地や、輕薄な昂奮に浮かれて時々動搖さへ致しました。時には警察當局の御好意に甘えて不遜の振舞をなし、又は御調べに對し虚偽の申立てをして一時を糊塗せんとさへ致しました。勿論、組織の根を養う等といふ大それた考からではなく、單に友人に迷惑を及ぼすを恐れての所爲でありましたけれども、今から顧みれば確に警察御當局を愚弄する行爲でありました。

途ある友達をさへ勸誘して取返しをつかぬ結果に立至らしめたものであります。

ニ、環境(境遇) 私の家は自作農でありまして、村では中位の生活をしております。

好景氣時代に父の勤儉により數千圓の財産を作つたさうですが、××銀行といふ地方銀業の破産に會ひ、その拂込未了の株券を持つて居ました爲め預金の大半を失ひました。それで私の學費も高等學校入學と共に兄の知人××縣××町Y氏の仲介で、××縣××郡××村R氏より月三十圓宛賣つて居ました。そうした關係から、頭はあつても金がなければ學問出來ぬ社會の矛盾を痛感し、この矛盾を除くのは決局プロレタリア革命であると考へる様になりました。併しそれも明確な理論の基礎を持つたものでなくて、漠然たる社會に對する反感でした。この不滿の同情者を、彈壓をくぐつて決死的に闘争する共産黨に見出して、一團にそれに向つて救ひの手を求めることになりました。

ホ、幻想 私は共産黨並にその指導下の左翼組織に對して崇拜的尊敬を持つて居ました。彈壓を物ともせず、非合法活動を續ける闘士に英雄的幻想を感じて居りました。「赤旗」が活版で出て居る(一)——そう聞いた丈で頭がポットして、今にも日本共産黨が赤旗を押し立て、革命の火蓋を切るかの如くに考へて居ました。そして大××の眞中の喫茶店で、白蓮公然と共青の人と話す事に無上の誇りと喜びを感じました。

そして自分自身も無意識的にもせよ、未だ清算し終つて居ない證據でありました。事實心底では清算しようと思つて居ても「友人に濟まぬ」等考へて、チレンマに陥るのは私の態度がはつきりして居ないからでした。

殊に一時的昂奮から警察に對して反感を抱き「同志をかばふ」が如き舉に出たのは明に改悛の情なきものであります。それにも不拘「處分留保」の御寛大な處分を與へ、記事解禁に當つても寫眞も出ず、假名さへお使ひ下さいました事は、如何に御當局が私並に私の一家をお思ひ下されたかを證するものでありまして、私も兄も母も一同感泣して居ります。

二十六日歸省致しましたが、汽車が××の地を離れるにつれて、車窓から實のり豊かな秋の田の上に落ちかゝる大太陽を眺めて居ますと、警察に居た時の昂奮も醒め、片意地も解け、心はいつしか秋の天空の如く澄み渡り、本當に誰にも強制される事なく、心の底から自分の今迄して來た事が一夜の悪夢にすぎなかつた事を悟る事が出来ました。故郷に入るに及んでは、全く自分の輕率盲動が恥しくなり、夕暮の田圃路をこそ／＼と人目を避けて歸りました——××に居る時は兩手錠で檢束されても少しも恥ぢなかつた私でしたのに。

そして氣も狂はん許りに心配して私の歸りを待つて居た母の姿を見ては、私も眞心こめて「色々御心配をかけて濟みませんでした」とより外

の身となる事が出来ました。全く身に餘る幸福であります。此の上はひたすら故郷に謹慎して、未決に居る氣持で一切の舊友關係を清算し、新しく大地に蘇り度いと念願して居ります。健康の許す範圍に於て農事を手傳ひつゝ、浮薄なる學生々活より来る不健全なる思想を、健實な大地に根ざしたものにしたいと思ひます。

三、將來の方針

將來と申しましても、唯今は「處分留保」の身でありますから、當分は田舎にあつて謹慎の生活を続け度いと思ひます。若し幸ひに「處分留保」が解け「起訴猶豫」の身となる事が出来ましたならば、再び學生々活に入り度いと思ひます。それは今から急に實業に向ひましても全々見當違ひで旨く出来ないと思ふからです。高等學校迄やつて貰ひましたから「後三年眞面目に勉強して最高學府で學を修めて置いた方が、將來何かにつけて便利だらう、又それがお前の本來の方針であらう」と兄も言つてくれますから、學費の方は家から苦しい中を出して貰つても學生々活を完成したいと思ひます。今迄學費を出して頂いた方には、事件の概要を申上げて深くお詫びし、此際責任上御辭退申上げるべきだと考へて居ります。

苦しい中を家から出して貰つた方が、私にしましても緊張した生活が出来ぬ様に思ひますから。

さう申し乍らも、私の今回の行爲が私に再度の學生々活を許すか否か

なる學園を汚すことになりました。

幸にも火は大事に至らずして消し止められました。惡の劫火に身を燒かんとした薪は、司法當局、竝に學校當局の温情の雨に潤ひつゝ、新たな使命につかんとして居ります。亂燥した神經は昂奮し易い。併し何が出来ませう？ 潤ひある神經——それを私の故郷は與へてくれました。私が少しでも「人間らしさ」を取返したとするならばそれは全く故郷のたまものであります。

以下歸省生活中に尊い體驗より得た感想の二三を述べさせて頂きます。そしてこれこそ現在の私を捕へて居る主要なる思想であります。(一)肉親愛に就いて 人の愛といふも兎角皮相な物質欲から出る事が多い。然るに母と子、兄と弟との愛情は一點の不純の動機をも含まぬ純一無難の愛である。時に口論するも、それは融合への口論であつて分裂へのそれではない。

離れんとすればする程益々近づく。私は大不孝をして歸つた時、何の口言も言はず「今歸つたかや。」と心からなる愛撫の言葉を以て迎へてくれた母の愛を思ふ。

養蠶期の忙中を冒して面會に来てくれた兄の親切を思ふ。一切の過去を許して傷れた我が身を慈愛の羽根に包み守つてくれた肉親の愛こそ、我が更生の最大の原動力であつた。

「親の愛は盲目的だ」等と大言壯語して居た昔を恥しく思ふ。今や私は

は私自身も疑つて居ります。若し幸ひに許された曉には決して今回の如き輕率盲動する事なく、専心學業に精進して自分の將來を開拓し、母や兄の期待にも沿ひ、御當局の御好意にも答へる覺悟であります。

學科は文學を休めて法學部に轉じ度いと思ひます。

何卒御寛大なる御處置にあづかります様伏して御願ひ申し上げます。

誓約書

歸省以來既に半歳餘を経ました。此の六ヶ月間、私は母や兄の慈愛の光に恵まれつゝ、故郷の田園に活に幾多の尊い體驗を得ました。×高入學のため××以來、實に九三年振りの故郷の生活は、都會の雜音に混亂させられた私の神經をどんなに温め緩げ正しくしてくれた事でせう！

私は始めて大地に——母なる大地に歸る事が出来ました。私の過去の理論が實踐が浮薄なる學生々活より出た一時的昂奮にすぎぬ事をはつきりと認識させられました。「自分の生活は地について居なかつた！——それは何と淋しき反省であり、嬉しき發見でありませう。

私の轉向を傳へ聞いた一友人が喜びの手紙を寄せて、

「君は×高入學以來、都會で育つた中學生には見られぬ、まろい、云はゞ純眞さを持つて居た。僕は常に君の中に農村の純朴を感じて引つけられた。友よ、純情の昔に返れ。」と言つて居ました。さうです！ 故郷を離れて三年の××生活をする中に、私の心はいつしか都會の惡濁に蝕まれてしまつたのです。それが遂に××事件の煽りを受けて發火し、神聖

親を——特に、我が老母を考へず一切の行動をする事は出来ない。昨年の大不幸も、結局は親を疎んじ親に遠ざかつて居たが爲であつた。

先短い不安に脅かされて居る老母を心配さす程の大不孝があらうか。

思へ、親一人さへ安心さす事が出来ないで數千數萬の大家がどうして「救へ」ようか。

此の春母と姉とを伴つて伊勢參宮した事は、私の更生の報告であり自誓であり第一歩であつた。

私をして今日あらしめてくれた母の恩、苦しい家計から大學に進めてくれる兄の恩、それを忘れては如何なる理論も實踐も虚偽であり、偽善であり、欺瞞でさへあるのだ。

この事と關連して、私は此の美はしい肉親愛の源泉たる家族制度を讚美する。理屈づくめで作つた共同生活、托事所——其處から生れるのは理論の私生子であつて、決して人間である筈がない。

理屈抜き愛——そこに肉親愛の美はしさがあり、それこそが人生の泉である。肉親愛なき人生、それは沙漠である。沙漠に緑の木が生へる筈はない。

(二)勞働の歡喜 私は歸省以來、健康の許す限り家事の手傳ひをしました。一つは三ヶ月間の留置生活に損はれた健康を回復し、一つは兄の自作農としての激勞を少しでも減じて、不面目な寄生々活の申譯とせんが爲である。

先づ稻刈、十月の大地の心地良い觸覺を踵に感じつゝ、ざく／＼といふ水々しい鎌の音に聞入つた。慣れぬ労働故相當つらい——腰が痛む、肩が抜ける様で、鹽から汗が頬から口に流れる。だが刈取つた後の田圃を顧る時の嬉しさ！ 金では買はれぬ此のすが／＼しさ、自家は勿論親類の田に迄遠征して、私は收穫の喜びに浸つた。

それから稻コキ。(ビュン／＼と十月の空に響く稻拔機の輕快なりズム。)又土引き——黄金の稲が雪の様に白くなつて出て来る美しさ。晩秋の麥播きを一日終へ、へと／＼になつて夕方家路につくと、何處かで子供が歌つて居る——

今日も朝からせい出す親子、明日も天気か夕日が赤い(小學校の讀本の「麥播き」の歌)

冬の間は土間の手細工位で割合暇だつたが、最近春先になつて又畑へ出かけた。桑園の除草に、麥畑の手入れに、適當な労働が私を待つて居る。

此の労働の歡喜！ それを巷間の「革命家」達は知つて居るであらうか？ 自然に親しむ者の此の喜びの理解なくして、何處に農村救済があらうか！ 労働を體驗せずして労働を語る勿れ。此の尊い體驗は私の皮相な労働説を顛覆させた。本當の農民は決して机上の空論で救はれるものではない。

(三) 性格に就いて 此の度の事件は私に性格といふものに就いて深い反

私は弱い乍らも先づ自我を立て守るべきである。他我との妥協、協定、共同はその自我確立の基礎工作の上にこそ打立てらるべきである。

自我を確立せよ！ これが本年の私のモットーである。換言すれば、自分の地位と力とに應じて生活せよ！ 自我の忘却こそ無批判的な輕率盲動の本である。これに附隨して、私は自分の性格が政治運動には全く不適任——荷が重すぎる事を知つた。今度×大再學を断念して×大史學科に轉したのは、全くこの反省の實踐への第一歩である。私は文化人として先人の跡を辿り、さゝやかなりとも、人類文化の殿堂に一本の釘でも打込みたいと念願して居る。これこそが他ならぬ私自身の人生であり、同時に全人類の生活であると確信するから。

(四) 左翼理論の研究 私が左翼運動に入つたのは決して左翼理論の確信からではなかつた。唯物辯證法、恐慌、戦争、唯物史觀等に關する何等の知識なく、只常識的に左翼運動に同情共鳴したにすぎなかつた。左翼の文献としてはプロレタリア小説を文學愛から耽讀した位のものである。檢事の取調べを受けた時、つく／＼自分の理論の淺薄さを痛感した。その時は復校は絶望的なりと思ひ、且つ累を學園に及ぼした責任を明にする爲め、断然學業を放棄して實業に就かんと考へて居た故、一切、左翼運動は勿論、左翼理論からも絶縁する事を誓つたが、學校當局の御寛大なる處分、學費出資者の温情あるおすゝめにより、復校可能となつた今日は、學徒として研究上の必要から左翼理論の知識を要求する時は飽

省を與へた。弱い性格は強い性格の發するエネルギーに壓倒されてしまふ。これは悲劇だ。何故ならば、其處には大きな破綻が約束されて居るから。

私が實踐運動に投じたのも、決局は強い性格に威壓されたからであつた。斷り切れなかつたからであつた。かくしてず／＼と引張り込まれて、いつしか自分自ら「強い性格」となつてより弱い性格を倒して居た。何たる虚偽！

加盟を「承諾」する時、既に私の心には反對の考へが強く働いて居た。併し反對意見は強い性格の爲めに口を緘せられてしまつた。だが決して消滅した譯ではない。鬭争意識の昂揚と共に、益々不安は募つて行つた。張込中の刑事に呼止められた時、逮捕を歓迎する心持がなかつたと誰が言へよう。「これでやつと覺がついた」——さうした一種安堵の氣持が、外見上の不自然さにも不拘、私が手錠をかけられた時の眞情であつた。留置生活中は刑事への意地張りや「同志」への體面上、空意張もして見た。然し一切の齟齬を絶つて靜かな歸省生活に落付くや、私は全く本然の性に歸り、ハッキリと自分の性格を洞察する事が出來た。私は弱い性格の男である。善意に解すれば良心的である。だから時々「弱さ故の強がり」を示したりする。然しそれは本當の私ではない。偽の私である。他我に屈した卑屈の我である。

だが自我を離れて何處に我の存在理由ありや！

迄社會學の一つとして研究する決心である。併しそれは自我確立の基業の上にてあつて、決して無批判的な盲信であつてはならない。盲信程、非學徒的な態度があらうか！ 併し、今の處研究上の必要がない時にさへ、左翼理論を知らうといふ興味はない。教授の御指導の下に學科中心に勉強したいと思つて居る。

以上申述べました如く、私は全く前非を悔ひ、更生の念願に燃へて居ります。幸ひ停學解除の曉には本然の昔に立返り、眞摯なる學徒として浮薄なる享樂にも陥らず、安價なる英雄的誘惑をも排する覺悟であります。

右眞摯なる學徒の名に於いて固く御誓ひ申上ます。

昭和九年三月十五日早春の××平野に於て S. K

八

某帝大法文學部 K.K (當二十五年)

關係せる事件の種類……共青支持

家庭の情況……父(農)母、兄(蠶業技師)兄(小學校教員)姉一人、妹四人

學費の出所……父より

健康状態……強健

性質才幹……剛毅、沈著、多少態度不遜、統制上の才あり

冷たかつたとか其他家庭的にめくまれなかつたとか言ふ事は少しもないのであります。機動となつた點は親達の血の出る様な勞働に對して社會的の報酬が餘りに少なかつた事で、是れが何故斯様になるかを理解する爲めにマルクス主義を學び、更にかゝる人達が再び出現せぬ様にする爲めに共産主義運動に關係する様になつたのであります。

右の様な次第で休暇に歸省する事は私のマルクス主義の勉強に採つて益々強い刺戟を與へて居たのです。

三、思想推移の過程

是の點に就ては詳細に書て行く事にします。

家庭との關係に於て述べた様に、家庭（勿論その經濟的狀態について、あります）と言ふものに對して批判的に、對象的に見る様になつたのは中學に入學してからであります。それは友人の家庭との關係に於ては常でありましたが、一つの原因が遂に地主に對する反感を私に抱かしめたのです。其の原因とは中學校から町に行く途中に大地主の家が一軒あります。そこを通る度毎に其の家の立派さに驚き、主人らしき人は常に白足袋羽織で、家の中は常に私の家の取こみ時の様に繁で、其の上小作米は寮所に山積されて居るのを見るのでした。そして自分の親父も百姓だのに何と其の生活の上に差異ある事かと考へ、私は其の時必ず「勞働は神聖なり」と言ふ事を思ひ出して父に敬意を表し、地主を笑つて居たのです。是の事が地主資本家に對する反感の始めであります。

是の友人を通して、又改造や中央公論によりマルクスやレーニンをも知り、マルクス主義に關する論文も讀み、議論もする様になつたのです。然し是の友人は極めて消極的な社會民主主義者であり、革命を否定して居たので、私も社會民主主義的な考へを持つて居ました。

是の當時私はトルストイを好んで讀み、その影響の爲めに社會民主主義と云ふよりも無抵抗主義であつたのです。従て個人主義的になり、自己満足の思想でした。私が高校二年の時ストライキがありました。私は其の私に與へた影響は反つて左翼の人から遠ざかつた事でありました。私は理論的に赤い人を嫌つたのではなく、人格的に嫌つて居たのです。其の爲めに遂に赤い人は私に近づいて來なかつたのです。高校三年の時法制經濟の講義で初めて明瞭にマルクス學說の大體を知り、資本論の内容の大體及び是れに關する論争を聞かされたのです。

大學に來てから私は高校時代の矛盾を益々深刻に味つたのです。こゝには全く青年學生のくずが集つて居る様に見え、打算的で利己主義者で親切などと言ふものは一つも見られぬ状態でした。

私は其の爲めに法律の勉強に専心して居つたのですが、遂に法律が非常に概念的で現實から遊離して居る事を感じてからは、一向に興味がなくなつて來ました。と同時に私には家庭の狀態が益々苦しく見え、自分の學費の事又將來の事などが心配になり、農業問題を中心にした現實の問題について勉強しようかと考へ、マルクス主義を研究し始めたのです。

然し當時私は未だマルクスの名も共産主義の何たるかも知りませんでした。只私は正義のみが勝つと信じ、或る時はストライキを獨力で喰止めた事もあり。反對に寄宿舎生を全部動員して舎監をこらしめた事もあります。

私は思想的には可成早熟だつたと思ひます。中學二年の時會田百三の著「愛と認識との出發」を讀み非常に感心し、四年の時思想全集を取つて居ました。初めてマルクス學說の本を讀んだのは五年の時で岩波文庫で「賃労働及利潤」だつたと思ひます。然し當時は何の事か全くわかりませんでした。従つて本から得た影響は全くなかつたわけです。

高等學校に入つてからは、前記の如く私の尊敬す可き先生は見當らず學生は我まゝで利己的で、「正義は常に勝つ」と言ふ私の信條も疑はれて來たのです。其上私の生活程度は多くの友人に比して極めて悪く、家庭の狀態は著しく相違して居る爲め、本當に友人として交際する範圍が自然と限定され、自分と同等のものを選ぶ様になりました。

かくして私は富者と貧者の區別を自ら學生生活を通じて體驗したわけです。私はかゝる友人とのギャップを運動する事によりて補つて來ました。然し運動に對しても多くの友人は責任がなく氣まゝだつたので、私は終始不愉快な學生生活を送つて居たのです。

右の如き環境の中に友人と遊ぶよりも一人で改造や中央公論など讀む事に興味を感じて來ました。又私と同じ様な友人も一人出來ました。私

私は學費の事について學生課の世話で奨學資金を貰ふと考へ、書類を提出した時、××前部長から「學生課の人と親しくして居なければ駄目だ」と云ふ事を話され、又學生課の人の不親切な取扱ひに對して可成不愉快に感じて居ました。

一年の二期期私は友人の母に依頼され友人が共産主義運動に参加して居るから引止めてくれと云はれ、私は社會民主主義の理論の正しき事を説明し、互に議論した事があります。是の時理論的に私は勝つたけれども、實際の共産主義の運動について知る所がありました。そして其の時以來共産主義の理論は正しいが、自分には實踐運動に入る丈の熱がどうしてもないと考へ、暗に是の友人の熱を感じて居たのです。

次に私の讀んだ書物について記述して行きます。

私がマルクス主義の理論に多少の理解を持つたのは、前記の如く高校三年の法制の講義に於てであります。是の時教授は諸種の論争や文献を引用紹介し、私の興味をそゝつたのです。労働價值學說に關する高田、河上兩博士の論争を知つたのも是の時であります。

三年の夏休みに改造の論文に高田博士の「労働價值學說は支持せらるゝや」と云ふ論文を讀み、續いて榎田民藏氏の反對論を讀み、是の論争に非常に興味をもつたのです。是の論争について高田博士の理論は論理的で尤もな所もあるが、それは極めて稀な社會現象には妥當とするが、社會百般の事象を説明する價值法則としては妥當とせぬ様に思はれたに

反して、楠田氏の論即ちマルクス學説は社會の諸現象を説明するに極めて妥當にして、且つ問題を現代の社會の上に提起して居る點に現實味があり、高田博士の理論に勝れて居ると思ひました。そして是の論争は遂に地代論へと移行し、私には理解し得なかつたのです。次いで河上博士の第二貧乏物語を読み、更に労働價值學説を理解し、是の學説が正しい様と思ひました。

是より以前トルストイを好んで讀んだ時レーニン「マルクス主義者の見たトルストイ」を読み、同じく社會の矛盾を見ながら唯神論者たるトルストイは無抵抗主義になり、唯物論者は發展的な共產主義となる、即ちトルストイはマルクス主義者のよき鏡であると言て居るのを知り、唯物論の何たるかを知りたいと考へて居ました。私は資本論については高島氏の解説を讀んだにすぎません。其の中最も興味があつたのはやはり労働價值學説で、他の事は理解出来ませんでした。大學に来てからは先第一にブハーリンの「唯物史觀」を読み、唯物辯證法なるもの、不思議な位社會現象を説明するに適當な事に非常に興味を有し、是の理論と刑法理論とを結びつけて考へ、法律全般に適用して考へて見ました。而かも大學の諸教授が多く是の基礎の上に立論せらるゝのを知り唯物辯證法の正しきを信ずるに至りました。

次に私に感銘の深かつたのは「プロレタリア科學」に出た公判闘争記中の佐野學の陳述であります。是に於て佐野は共產黨は天皇制の打倒を

直接の目的とするものではないと明言して居る事です。社民的思想であつた私は是れによつて共產黨に大いに好意を有する様になつた事は事實であります。

次にマルクスの國家理論については××教授の國家原論の講義に於て大いに啓蒙されたのであります。教授の論は主にカウツキーに依りマルクス、レーニンを反駁して居るのですが、多くは其の字義の説明に終り、私の望む所は少しも充分説明しなかつたのです。是れは丁度高田博士の場合と同様でした。そこで私は教授により教へられたレーニンの「國家と革命」を読み、レーニンが非常に鮮明にカウツキーを反批判して居るのを知り、それに對して教授が一言もふれて居なかつたのは實に不満であり、私は結局レーニンの説に従つたのです。然し私はレーニンが國家を論ずるに當りては決して將來の國家を説明したのでなく、現在及び過去に存在した國家を問題にしたのであり、是の限りに於てレーニンの國家論は諸家の論に勝れて居るものと思ひました。同書中に革命の理論が説明されておりましたが、レーニンは決して革命を理論的に科學的に説明はして居ないのです。レーニンは過去の歴史中の經驗より割り出して革命が不可避であると説明して居るに過ぎぬのであります。是れはレーニンの言はゞ獨斷であり、何等科學的の基礎がない様と思ひました。以上の様な書物を読みつゝ「インターナショナル」を讀む様になり「産勞」を見るに至つて時事問題に非常に興味を持つて來ました。

右の如く私の環境によりかもされた生活の空虚、不満がかゝる書物により補はれて、常に思想的に動搖しつゝ大學二年まで來たのです。

大學の二年の六月同宿人K・M君に誘はれて自學の會合に出る事になつて以來、殆んど無自覺的に共產主義の理論を是認する様になつたのです。是れは自學に居た人達は已に全部共產主義の理論に従つた人達で、社民的な議論など出来なかつた爲め、不本意ながら行動を共にして居る中に自分も共產主義の理論を是認する様になつたのだと思ひます。

以上が私が左傾した動機に思想推移の過程であります。

四、日本共產黨に對する關係

共產黨の存在は書物で左翼運動に入つてから知りました。そして黨員に會つたのは昭和七年十月K君に會つたのが最初であります。最もK君が黨員であつた事は後になつて知つたのですが。

私は昭和八年九月二十三日Sの下宿で入黨を勧誘されました。Sは履歴書を出す様にと言つて居ましたが、十月十四日に渡しました。是の内客は本籍、生年月日、姓名、家庭の事情、闘争經歷であります。姓名は書かずに渡しました。私は是の履歴書を出した時に入黨の勧誘に應じたものだと思ひました。

以上の様な次第で入黨勧誘後履歴書提出まで黨員たる事の申渡しも受けず、又黨員として赤旗の配布も受けず、又黨費も出して居りません。只入黨を承諾すれば次の事を嚴守す可きであると言はれ、勧誘から履歴

書提出までの間に繰り返し次の事を説明されたのです。

- 一、黨員は決してお互のアヂトを訪問せぬ事
- 二、黨員の連絡の際には必ず相手の後方に注意する事
- 三、黨員は必ず赤旗の讀者たる可き事
- 四、黨員は必ず黨費を納める事
- 五、黨員は徹底するまで議論する事
- 六、上部からの命令には絶対服従す可き事等でありました。

日本共產黨の目的、スローガン等に就いて正黨員から説明された事はありませんが、赤旗によつて知る所を述べますと、性質及目的は日本共產黨はコミンテルン日本支部であります。従つて目的は資本主義を打倒し、プロレタリア獨裁を樹立し、共產主義社會を建設せんとするものであります。我國に於ては日本共產黨のスローガンは

- 一、對ソ干渉戦争反對
- 一、一切の帝國主義戦争反對
- 一、米と土地と自由の爲めの人民革命萬歳
- 一、軍事的警察的天皇制打倒
- 一、勞農ソヴィエットの樹立

等であると思ひます。

其他黨員として連絡會合等に關係した事は一度もありません。

以上が共産黨に對する關係であります。

五、現在の思想及將來の決意

私は以上述べた様に共産主義の運動に關係して來たのでありますが、如何なる氣持で今日まで至つたかを記述して行きます。

私は先にも述べた様に、私が運動に入つた動機は何と言つても自分の家庭殊に親に對する者であります。即ち一日として休む事なく毎日孜孜として働き、然かも現在見る如き状態で血の様な金で私を大學に送つても、さて一方には毎日呑み遊びして毎日巨萬の富を作つて行く人、のらくら學生で學校を出れば必ず職につく人間とを對比して見た時は、私は個人的の努力が如何に頼りなきものかを痛切に感じ、社會制度の改革が是非必要と考へたのであります。かゝる考から私は先づニヒリストから社會民主主義へと進み、遂に共産主義の運動へと入つたのであります。是の動機こそ私が共産主義運動に入つて來た氣持であります。従つて實の所を言ふと唯物辯證法の正しさよりも、労働價值説の正しさを信するよりも、共産主義こそ眞に自分の親を解放し、又是れと同様な状態にある多くの農民を解放するものだと思つて來たのであります。是こそが私の偽らざる氣持であります。是に私の共産主義運動に對する態度が出て來るのであります。

即ち私の態度とは

イ、可成りの程度まで黨や同盟の目的やスローガンに盲目的であつ

息を斷つことには斷乎反對して來ました。其の爲に九月父親が來×せられた時も是の愛情と運動との板挟みになり、二日三日、夜親父と共に泣き、遂に親父と喧嘩別れせずにすんだのであります。

(ニ)については共産主義が餘りに労働者の事に熱心で、農民に對しては無關心の様に考へ不服に思つて居たのであります。

労働者の獨才と言ひ、運動上のプロレタリアートのヘゲモニーと言ひ、農民解放が第二義的に考へられて居る事に對して常に不可解で居たのであります。是れが私をしてロシアの農民政策に對して非常な興味をもたして居るのであります。

以上の如くでありますので私の過去の運動には充分批判される可き點があると思ふのであります。先づ檢事後私が第一に考へた事は私の親や妻を始め多くの友人に非常に迷惑をかけた事であり、私は前記の如く正しいからやつたといふよりは私の親を、又農民を、労働者を少しでも樂にしようとしたからやつた事なのであります。勿論私は利益と損害を度外視する様な事は一時も考へて居なかつたのであります。是れはあらゆる運動に於てさうだと信じてゐます。

然るに私が過去を考へて見るにあれ丈の努力と損害を及したに不拘親に對しては利益どころか非常な心配をかけ、其他農民や労働者に對しても一厘でも生活を樂にしてやつたとは思はれぬのであります。是の見方は餘りに近視眼的に見えますが、是こそ動かす可からざる現實だと信じ

た事

ロ、私の指導者に對して絶對に信頼して來た事

ハ、親子の愛情は如何なる場合と雖も斷絶せぬ様に努力した事

ニ、労働者と農民との關係を常に考へた事

等であります。

(イ)の態度は吾々學生の場合は稀の現象であると思ひます。是れは丁度宗教によくあることで労働者や農民が『君達の爲になるのだ』と言はれて運動に關係するのと似て居るのであります。そしてこゝにこそ共産主義に對する批判の必要があると同時に、その極めて大きな餘地があるのであります。

(ロ)は私の從來の生活が然らしめたのであつて實に是の點からして高校の時は運動に入らなかつたものと思つてゐます。信頼の置けぬ指導者なら如何に理論が正しくとも私は絶對に運動に参加しなかつたと思ひます。私に採つては理論の正しさが私を動かしたのではなく、人に對する信頼がさうさせたのだと信じてゐます。

(ハ)に就いては私の常からの主張であります。そして親を思へばこそ是の運動に入つて來た様なものだつたのです。

人を相手とする社會改革の運動が如何にして親に捨てられる様な非人間に出來るでせう。私は親を絶對に信頼して來ました。そして是の事が人を信頼する事を教へたのです。私は如何に闘争が激化しようとして親と消滅します。

私は是の點に於てだけでもしばらく共産主義の運動から手を引く可きだと思ひます。全くかくては百害あるも一利なきものとなるわけです。然し私達は單なる現象形態にのみとらはれる事はやがては自滅する事になるのであります。各人が能力に應じた理論的な解決は是非必要だと思ひます。従つて私は以下の如き批判を試み、是の批判の上に將來の私の生活の第一歩を踏み出さうとするのであります。

私は平直にマルクス學説を認めます。唯如何様に認めるかと言ふ事があります。私はマルクス學説を絶對的眞理だとは決して信じません。若し絶對であると思へる人があると思へば、その人は最早唯物辯證法を否定して居る事になるのであります。私はそれ故にマルクス學説を資本主義社會に於ける諸事象を最も明瞭に吾々に理解し易く説明出來る理論として認めて居るのであります。是の意味に於て凡百の事象凡てがマルクスの理論により説明せられるとするのは誤りであり、人間の社會には愛情の問題と言ひ其他のものについて直接的體驗のみにより理解出來る事が多々あるのであります。マルクスと雖も決して是を否定したのではないのであります。マルクスが如何に愛情の問題を重要視したかは彼の生活や著書に於て見られる事であり、つまりマルクスは是の直接的體驗を客觀的に理解しようとして唯物史觀と言ふ立場を天才的に立てたのであると思ひます。右の如く唯物史觀が正しいとすればそれから必

然るに發生する、又は是れを正しく發展させる爲の共產主義運動は果して正しいか否かと言ふ事が問題にされねばならぬと思ひます。

私は正しい事を実現する爲の黨としては共產黨を認めるものでありますが、果して現在の共產黨が唯物史觀を、否マルクスを正しく理解し、實踐して居るのでせうか。是の點大に疑問とするのであります。

私は今マルクス學説を批判することは到底出来ません。又是の事は學者が爲すべき事であると思ふのであります。そこで私は共產黨そのものに就て批判して見ようと思ひます。私はその組織等については實際について知らぬので批判出来ませんが、其行動綱領について述べて見たいと思ひます。前記の如き行動綱領を有する日本共產黨は何故農民労働者の支持がないか、是の點から批判する可きであると思ひます。是れについて或は公式主義、官僚主義だからと言ひ、或はセクト主義だと言はれて居りますが、何故公式主義になりセクト主義になるかが問題であります。私は是の點について天皇制打倒なるスローガンに決定的な誤謬があると思ひます。是れに就ては誰もが同感である程明瞭な誤謬であります。私は私の父に共產黨のスローガンを話して天皇制打倒と言ふた時に、父親は眞向から反對したのでした。恐らく是は日本國民萬人が一様に有する事であると思ひます。私は以前佐野學の公判闘争の陳述を見た時に共產黨の直接の目的は資本主義制度の打倒であつて天皇制の打倒ではないと言ふて居るのを讀み非常に共產黨に好意を持つたのであります。

主義時代へと西歐諸國と何等變らぬと思ひます。然るに何れの時代を通して天皇制は其の上に嚴然としてあり、是等の諸制度の發展を決して阻止するものでなく、反對に制度の行き詰る時は常に人類、大和民族の爲めに新しき發展へと努力し、新制度を開いたのであります。其の最も顯著なるものは大化の新政と明治維新であります。マルクスの言を利用すれば、是の二大變革に於て我國の天皇制は行き詰れる階級闘争を歴史的必然に従つて解決したものであります。

私はかゝる偉大なる事實を體驗した時に天皇制なるものこそヘーゲルの言ふ所の唯一の絶對者であると信じます。それは最高の美であり、最高の善であり、眞であるのです。是の故に我天皇制が今まで國家發展を（人類社會の意味）阻害した事はないのであります。

私は以上の如く天皇制を考へた時に我國の歴史上二度天皇制の危機があつた様に思ひます。この一つは古く支那との交通盛んな時支那思想である禪讓なる思想が影響した時であります。是の爲に道鏡の如き人間が出現したのであります。其の後しばしば皇居がすたれた事などがあつたが、決して是は絶對者そのものに對する侵害ではなかつたのであります。然るに現今に至つて第二の天皇制の危機が到来して居るのであります。これは何の爲かといふに日本が封建時代を破り、資本主義時代に入るに及び西歐の君主制なる思想が同時に輸入されたのであります。この爲めに一般國民は絶對者たる天皇制を一つの制度にまで引き下げ、従つて一

そもく我國の天皇制とは如何なるものであるかと考へて見るに、これこそ日本國民にして日本の天皇制の下に生活した人でなければ解らぬのであります。即ちこれこそ直接的經驗によつてのみ體得出来るものであります。従つて如何に巧妙に唯物史觀を適用しても完全な理解などなし得ぬ制度なのであります。

この天皇制を體驗せず、マルクス學説により理解して右の如きスローガンを決定した所に、共產黨の決定的な誤謬があると思ふのであります。更にその上に共產黨は天皇制を誤り理解して居る。其の最も代表的な見解は佐野等に對する反批判として居る『プロレタリア科學』上の論文であります。これでは社會科學を分析説明するに自然科學的説明で満足してゐるのであります。是れでは折角マルクスが自然辯證法と唯物辯證法とを區別したにも不拘兩者を混同したものであります。更に又マルクスが最も嫌つた素朴的唯物論になつてしまふのであります。

私は私の體驗から天皇制に對して次の如き理論的根據をもとめてゐるのであります。天皇制の理論づけにあつて自然科學は全く無用であります。何故なら天皇が自然人たる事は萬人疑はぬ所だからであります。要は天皇が我國の元首として三千年間變らず君臨され、一瞬として君民の關係が亂れた事がないと言ふ事ができないと言ふ事に眼を注ぐ可きであります。是は正に社會科學の奇蹟といふ可きであります。我國と雖もこの天皇制を除いた他の歴史に於ては民族制度を經、封建時代を通り、資本

階級の力としようとした事であります。一つの階級としての天皇制、即ち前時代に存在せる天皇制即ち君主制であるなら、共產主義の主張は理解出来るのであります。我國の天皇制は單に一時代に出現した制度でなくして超時代的な唯一の絶對者であるのであります。是の唯一の絶對者を制度にまで引き下げんとした資本主義は、今日に至り天皇制打倒なるスローガンを有する共產黨を生ぜしめたのであります。是の意味に於て確に我國の天皇制が或る一つの危機にあると思はれるのであります。

私は以上の如く我國の天皇制を考へてゐるものであります。そして是は我國國民が凡て直接的經驗により體得して居るのであつて、是は一つの信仰とでも言ふ可きものだと思います。かゝる絶對者に對して、又是の絶對者に對する信仰的な國民的民族感情を無視した共產黨のスローガンは我國に於て全く大衆性がないのであります。大衆的政黨を以て自認する共產黨がセクト的であり、その正しい部分のスローガンさへ共產黨のスローガンであるが爲に大衆性がないのは、全く是の民族的感情、民族信仰的に反するからであります。かつてレーニンはロシアのキリスト教に對してすら宗教は私事であるといひ、宗教に妥協的であつた事を考へて見ても、如何に天皇制打倒が誤つたものであるかと理解されると思ひます。

かく批判して來ると共產黨が天皇制の打倒を主張して居る限り、我國國民の支持は絶對になく、國民大衆の支持なき理論は自滅する未來を有するものであります。かゝる共產黨によつて農民の解放から親達に對する

私の感情を満足さす事に至るまで凡てが不可能となるのであります。是の意味に於て私は天皇制打倒を目的とする共産黨の運動から絶對に退く決心であります。

次に私は愛情の問題について述べて見たいと思ひます。私は常に科學的と言ふ事と直接的經驗と言ふ事を並行して考へて來たのであります。吾々人間の世界は直接的經驗の支配する範圍が極めて廣いのであり、又決定的であるのであります。人事は理窟通りには進まぬといふ事は即ち是れであります。愛情の問題を取り去つたらそれこそ物賀そのものであり、やがてそれは最悪の機械論となり、素朴的唯物論となる事と信じます。マルクスも是の點を充分説明して居る事はマルクスの『共産黨宣言』の婦人に對する説明にも明かであります。京大教授和辻氏によりマルクスの人間觀としてよく説明されてゐるのであります。然るに現在の共産主義運動は果して是の問題を理解して居るか否かを考へて見るときに、私の經驗からして凡てが政策的であり、機械的であると思ふのであります。實の所私が妻と同棲するに至つて右の如き矛盾を考へつゝ尚ほ運動に参加して來たといふ事は、私は私の夫婦生活の擁護の爲には全力を以て何人に對しても勇敢に闘ひ、私の意見に従はしめたからであります。若し私の意見が承服せられなかつたならば早くからは是の運動から手を切つて居る事と思ひます。親に對しても亦さうです。私は全ての努力を拂つて消息することに努めたのであります。以上の如く愛情の問題を考

へて居りますので、現在妻に對して決して怒つて居ると言ふやうな事はなく、むしろ愛情の問題を拒否して居る共産主義運動に不満を持ち、親や妻に對して誠にすまぬと思つてゐるのであります。かくの如く如何なる運動と雖も愛情の問題を否定するものには私には絶對に参加出来ません。是の事は現在身を以て痛切に體驗して居る事實であります。

最後に私は親を如何にして幸福にするかといふ事から出發して遂に農民の解放を志すに至つたのであります。是の方法として共産主義にのみ専念した事は確に一面的でありました。是の點も亦充分批判される可きであります。我國と言はず、全世界に共産主義以外の農民解放の手段方法が研究されて居ります。殊に我國に於てその特殊状態に應じて諸家の説が立てられて居る次第です。のみならず、同じくマルクスに出發して或は社會民主主義あり、或は國家社會主義があるのであります。是等諸説を考へて見るに私は是等については何等の知識の一片の理解もないのであります。是の事は全く無批判的に共産主義に共鳴した事を證明すると同時に、私は將來是れ等の諸説を研究し、最も合理的なるそして可能なる方法をとる可き廣大な餘地がある事を知ると同時に、是の爲に努力す可き事を私の義務として感ずるのであります。

以上私は過去の私の行動についてその顯著なるものにつき批判し來り、將來かゝる誤謬の改めざる限り斷然共産主義運動に参加しない決意を有してゐるのであります。

然しながら私は以上の如き誤謬あるを知らず、國法に觸れ、親を初め妻及友人に多大の損害を及ぼした事については、其の責任は全く私自身にあると思ひ、それに對する國家否日本國民からの適當なる處断は當然の事と思つて居ります。

唯私としては日本國民が私の眞意を理解されて、私の所信に従つて右の如き批判を更に深め、眞に農民解放の爲めの正しき方法を研究する機會を與へられると同時に、不完全にして解決されて居らぬ私と妻との關係を完全ならしめる爲めに適當な方法を講じていただき、一日も早く明るい再生の第一歩を踏み出す様にして下されば幸甚であります。

(以下略)

九

某帝大法文學部 T.S.S (當二十七年)

處分の種類、程度……退學
家庭關係……父、母、兄、兄ノ嫁、兄、父の職業、某銀行重役なるも同銀行解散により最近殆んど無職、兄、××郵便局長、次兄、局長代理
家庭關係が後述すべき運動の動機となりし點として擧げうるものはなきも小學校卒業後家庭にある期間少く孤獨たりしことが或は其の間接的動機ならんと考へる

健康状態……強壯

性質……疎急にして動もすれば矯逸

學校成績……小學校は常に首席、中學校は百人中三、四番

高等學校は第一年を除き四十人中三九番乃至四

〇番の不成績、大學は中位かと思ふ

學校教育に對する感想も殊更になく又學校教育

が後述すべき運動の動機となりし點ありとも考

へず

一、思想推移の過程

× 高二年一學期頃よりクラス會が頻繁に開かれ、その席上社會問題が盛に論議され、自分も此の方面の問題を考へんと考へるに至りたる矢先、同級生K某等の勧誘により×高社會科學研究會に入會、史的唯物論(フーリン)を手に入れこれを耽讀し、歴史の所謂辯證法的把握を學び、従つて共産主義に興味をもつに至りたるも、當時は理論的分野に於ては哲學的研究が隆盛であつたため、主としてフーリンを中心として哲學を研究せり。史的一元論、フオイエルバフハ論、根本問題等を讀みたり。その結果社會進化の法則としてマルキシズムを信するに至りたり。要するに×高時代は理論特に哲學的方面を研究し政治的方面は全く無智なりしなり。×高三年當時研究會事件により處罰されて以來全く理論的研究を遠ざかり、當時の理論的指導者某(級友)の轉向により益々没落の

一路を滑り来りたり。

此の情態にて法文學部に入学、約一箇年間は同様の生活をつづけ居るも、二年一月×文時報編輯長となるに及び新聞部内左翼——k、h等より自分の日和見的態度を攻撃され、内心憤慨の氣持が自分をして積極的態度を持せしむる動機となり、昭和七年一月頃h君の紹介にてT君と知り合ひ、爾後T君の指令をうけ×文時報内左翼フタクションとして時報掲載の論文は彼の指揮を仰ぎたり。然るに昨昭和七年二月モツブルのアドを頼まれしことにより××署に檢舉されて以來は殆んど左翼的職團的意識を失ひつゝありたるも、T等との談話に於ては勉めて左翼的職團的態度を持せる如く粧ひたり。之れ自分の性質上の缺點なるも、又學問的良心——即ちマルキシズムの「理論と實踐との辯證法的統一」てふ命題に拘束され居りたる結果とも考へらる。

昨年五月以降は卒業論文作製のため登校する日少く、六月初旬歸宅せり。然るにT君が自分の下宿を訪ね来り、「今度自分は外の仕事をやる様になるかも知れぬから、今までやつてきた新聞部の方を誰かに譲つて引きついでもらいたい」旨を述べた。彼の仕事とは法文學部内に自學を作り、而して又同盟を造ることであると云ふ。自分は同盟と云はれたので非常に恐怖したが、彼は現在の同盟は非常に大衆化してゐるから大したことはないと言つた。又自分は職業的にこの運動をやつてゆく氣がない旨を述べるや、「それは十一月頃二年の人を責任者にするまでやつてゐる

少いが大衆行動は醫學部より起きて居る、現在は理論よりも實踐であり行動することが左翼の規模であると思ふと述べて、高代會議の結成をその例として述べた。次に醫學部の情勢をH君が述べた。H君の報告は不得要領でよくわからなかつたが、クラス單位に活動してゐること、影響下のメンバーが三〇人位居ること、T等と意見が合はなかつたこと等を述べたるも、詳しくは記憶せず。

次にスシの御馳走があり、終つて「偉い人」から次の如き話があつた。先づ國際情勢を述べ、獨佛の對立、支那に於ける日米の對立、英國の印度進出、日本の滿洲進出等は帝國主義戰爭の對立の激化を物語るものにして、日本の滿洲進出はソヴェート攻撃上重要な意義あるものであるが故に、特に日本に於ては戰爭に反對しなければならぬと述べ、滿洲の「匪賊」は中國共產黨の指導下にあるのだと云つて國內情勢に移り、戰爭反對と公判闘争とがアデプロの主なる目標とならねばならぬことを述べた。そのためには學校内に同盟の組織を作ることだと云つて、同盟とは何かを説明した。即ち同盟とは優秀なる黨員を養成すべき準備學校であるが、大衆團體である——之の時H君は同盟は大衆團體ではないと思ふ、其れは黨と同一だが、唯青年をその對象とする違ひがあるだけではないか——と質問した。すると——そんなことを云つて居るから大衆化しないのだ、どん／＼同盟員をしてその中で活動的な人を獲得して行つたらよいだらうと云はれた。

てくれ」とのことに自分も之を引きうけることになつた。かくて××會委員會内責任者t君、高代會議内責任者M、k、新聞部M、共濟部内責任者hなりしも歸×せざりき。又當時少しく没落の氣配ありとのTよりの話により、前記t、M、kと自分とTの五人にて第一回の會合を××六番教室にて持ち、××内情勢を次の如く規定したり。

××學部に於てはクラスなく、單位としては法科、文科、經濟科なるも、是等も人員一定せざれば、單位としては將來勢力を植えてゆくものは××會委員會、文藝聯盟、新聞部及高代會議委員會なりとして改めて新聞部、文藝聯盟はM、××會はt（急速にもう一人見つけること）高代會議はk、及自分、共濟部は自分が物色することとし、定期的に會合して××學部内に自學を作ることと今學期の主たる闘争目標としたり。

然るに十月中旬Tと學校にて會ひし際、彼は「偉い人が法文の諸君に會ひたい、そして色々話したいと言つておるが法文では君（自分のこと）を除いては意識も理論も低いから法文委員會の連中とは合はせたくないから君だけ来てくれ」とのことその翌日十一時を期して指圖の場所醫學部の××舎の附近と記憶す）に至るに既に、醫學部より二人m、kが居り間もなくHとTと「偉い人」が來た。當時の會合の様子は次の如し。

法文學部には組織の單位とすべきものなく、恰も失業者をそしきする様に困難であつた。自分は（T）合法團體内に左翼責任者を置き、大衆行動をおこしつゝ、その中に組織を確立しつつある、だからメンバーこそ

次に新テーゼについて次の様な話があつた。

君たちは大體に於て新テーゼを讀んで居るのかと云はれたとき、TとHが讀んでゐるのみで自分とk君は全然讀んで居ないと云つたので、「偉い人」は苦笑した。M君は讀みかけて居るが、何だかピンと來ないと云つた。

先づ新テーゼは前のテーゼと本質的には變りがない、唯戰爭の危機が民主主義革命「土地を農民への要求」を前面に押し出し、この要求の政治的なスローガンが民主主義革命であるのだ、併しそのためには戰爭反對を強力に捲きおこすこと、又公判闘争をおこすこと、之れに結び付かねば新テーゼは生命がないこと、新テーゼの理解の鍵はこれだけだ、その他の細かい點は、例へば中農と小作人とか、金融資本の質的な構成とかどうのと云ふことは本質的な問題ではないと云つて、新テーゼの簡単な説明が終つた。それから何か質問がないかと云つて質問をうけることにした。

そこでTが文化團體とかモツブルとかの團體とはどう組織上關聯するかとの質問に對し、同盟は自學との關係に於て自己の政策を具體化してゆくので、そうゆう團體との組織的な關係をここでは問題にしない方がよからう、責任者は自分の所屬部署さへ知つてゐればよいし、又それ以外のことは知る必要がないからと云はれ、Tは頭をかいた。次にH君は全協支持會のことを質問し、全協支持會について二つの意見がある。その

一つは全協支持會と云ふものが全然誤つてゐる組織であること、學内にあんな組織はあつてはならないとするのと、他は益々統一的にやつてゆく意見とで、一方間違ひとする方はTの意見で、他はH君の意見であつた。

これに對して、「偉い人」は、全協が學生からなど支持を仰いでゐるから駄目なのだ、全協は自分の力で労働者の中に支持を得てゆくべきなのだ、古い時代には學生が全協の仕事を手傳つたり、ビラ撒きに動員せられたりしたのだが、それこそ全く組織の混亂だ、今はそんなことでは駄目だ、直ちに解消すべきであると云はれ——Tはだから俺は作らない方がよいと云つただらうと得意の樣だつた——でH君は考へ込んだ。

「偉い人」は組織をこんらんさせないために色々な組織を持ち込んでほならないと云つた。次に「偉い人」は同盟として各學部に何名位が可能かと質問された。どうもその規程がはつきりしないのでと云ふと(TとMとが答へる)君達と一緒に仕事のできる様な人は何名位かと云はれ。H君とM君とが小聲で話をする。Tは私のそばに来て、k、y、の兩氏はまだだめだがMはどうかと云ふ。私は彼もまだ感情的なところがあつて同盟の名を云つたら断るだらうと云つたら、Tはそんなこと云つて、之の旨「偉い人」に云ふ。又H君は醫學部では六人位だと云ふ。

そこで「偉い人」は、急速に大衆化する必要があるが何も「同盟に入れ」などと云ふ必要はない、活動的な人をアジプロして出版物を讀ませる様にしてゆけばよいと云つた。次に「偉い人」は、今後赤旗を配布し

二、自分は次の如き過程を経て同盟に關係した

前述せる如く、自分は昨年××時報編輯長に推薦されるに及び、前述せる如き動機により新聞部内左翼責任者としてT君の指令をうけ、左翼的新聞の發行にたづさはりたり。然るに昨年十月休暇を終へて歸××せるや、T君より新聞部責任者を止めて××學部内に自學を作つてゆくための自學準備會責任者になつてくれとのことにより之を引き受け、前述せる如く學内に於て第一回の會合を持ちたる直後、Tの話により彼と共に「偉い人」との會合に出席せる直後、同盟に關係せるに至りたり。

三、自學結成運動と細胞との關係

前略述せる如く法文學部には當時「自學」なるものなく、昨年十月T某出席のもとに合法團體内左翼責任者會議——××時報、文藝聯盟、T、M、××會委員會、某、高校表代者會議、共濟部及運動部は當分見當らざるためなし——で六番教室に於て持ち、席上Tは所謂自學なるもの新なる概念を次の如く規定した。

從來の自學なるものは××大のその如く、全く非合法的そしきであり、左翼學生のみの自己満足の存在であり、その時折なす行爲行動は寧ろ學生大衆の日常利益と結合して居らぬ全く極左的存在であつた。その發行するニュースなども全く學生大衆の生活利益と關係ない、アジプロのた

たいが、大體何部位かと云はれたとき、Tが醫學部と法文とで大體十部位かと云つたのに對し、H君等醫學部の人達は全部で十五部位にと云ふと、「偉い人」は、それでは第一回は十五部位にして、二回目までには倍位にしておき給へと云はれた。それから各自ペンネームを作るべきであると云はれ、私はTと相談し、阿部とすることにした。

それから「偉い人」は各自の決意をききたるに、Tは學校を抛棄してやると述べ、HとMの兩君ははつきり考へたことがないと云ひ、私とM君は笑つて學校を出たいと答へる。

潜ぐる氣のない人で、而かも檢査されてにらまれる奴は、急速に顔の知られてゐない人に席を譲つてゆく様にする方が運動を圓滑にするに云はれ、M君は異議なしだなどと云つた。

「偉い人」は時間の都合があると云つて、Tと打合せ會合を終つた。私は翌日午後Tと私の下宿で會ふこととして退出した。翌日Tが訪ねてきて、次の話があつた。

先づ私が同盟員として活動するために急速に下宿を移つてしまふこと、との話であつたが、自分は「最初君との約束で二年生の後繼者を十一月頃までに見つけることなのだから、そんなことは出来ない旨を答へた。次にH君と連絡して「赤旗」をもらつてもらいたい、法文には大體三位位の豫定だ、斯くて私は大體以上述べし如き過程を終つて、昨年十月中旬より同盟に關係し、法文學部内に自治學生會なる大衆團體を組織す

めの機關として役立つて居らぬ。自學とは此の如き極左的存在ではなく、現在恐慌下の情勢に於ては、學生の貧困化より發する一切の經濟的要求を細大漏さずとり上げ、かゝる要求を大衆的に解決してゆくための組織でなければならぬ。かゝる運動に於てこそ大衆は啓蒙されるのである。

だから自學は自己の使命を行動的に大衆的に果してゆくのが理想で、ニュースなどによつてアジプロして居るのは古いと言ひ、醫學部の「自由」と云ふ醫學部自學の發行して居る機關紙を完膚なきまでに批判し、結成されんとするものとならぬと、自學の新しい概念を規定し、二月頃までにはどうしても斯る自學を作るために、之の委員會は自學準備會として本年中の活動の主たる目標をそこに置き、勉めて極左的な又は左翼的な行爲行動の一切を誣む様とのことであつた。そのため今後はT某を除き、前記四人にて毎週月曜、六番教室で委員會をもち、××會問題を協議した。一方T某の話により急速に同盟員を獲得して同盟の會議をもつて、そこで協議されたものを委員會に反映させよとのことであつた。

そのためMと自分とそれから當時病氣全快にて登校したばかりのO君が××會代表で高代會議にて居たので、彼に交渉取急ぎ三人にて全然誰にも知らしめぬ様に會議をもち、その協議事項を準備委員會に反映させてゐた。私は前記の二つの會合に出席するほか、一方H君と連絡せる際(旗の關係で)情勢を報告し、又Tが一週に一度つづつ夜八時頃私の下宿に

來るとのこと、その時詳しく彼の指圖を仰ぐことになりました。

その後Tの話で醫學部の人と會つてくれ(會ふ目的はつきり言はれなかつたが、學校委員會をつくることだと思つた。何故なれば彼はその時H君等にあとを頼んで、別の方の仕事でもする様な口振だつた)とのことに、前述せる様にM君と會つたが、話が具體化されぬうち連絡がきれてしまひ、それ以後はX×法文會解散問題については上の指導なく、最初はMとOと自分で二三回會合して、その協議を準備會に反映させてきたが、解散問題の情勢が大へん切迫しておるし、又吾々の協議事項が無條件に準備會に反映されるので、自分とMとO君との會合は重複するきらいがあると云ふことになつて、その後は準備會に直接出席することにした。

以上は大體組織上の關係を述べたのであるが、X×會解散運動より所謂新たな規定に従つた自學としての法文自治會設立にいたる経過詳細は次の如くである。

先づX×會委員會を頻繁に開き、その席上で會則は古い時代のまゝの會則で現在は最早役に立たぬ、例へば總會に於て決議された事項は即時效力を發生せざるのみか、會長の自由意志によつて左右されて居ること、會費が尨大に高いこと、委員會は各高校會から選舉されて居らぬから學生大衆の意志が反映されてゐないこと等を問題にし、會則變更の議を起し、具體案を製する様にするこゝし、此のため新聞にて書きたる學校側と會見することは今後の運動上よくない、即學校側の手段に乗せられ、學校側に對策の餘裕を與へるものであるとの理由からであつた。事こゝに至つたので、最初X×會委員會と統一職權をはる豫定であつた高代會議をして、次の如くX×會委員會を非難せしめる方策に出でしむることとした。即ちX×會委員會は學校側に立つて、日和見的な改革案をだそうとして懇談會をもたうとしてゐる、而かも之のことを發表してゐない、高代會議はかゝる理由から懇談會に出席して傍聴しようとするふことを會議に於てアデプロすることになり、そのため翌日の高代會議には私も新聞部記者として出席、その旨を述べた。翌日の高代會議に於ては以上のことが決定され、此の旨が發表された。

翌日の我々の委員會(左翼責任者會議)に於ては、高代會議をしてかゝる態度にいでしむるに至つたことは、此の運動(X×會々則變更問題)を左翼視される虞れあるものとして非常に憂へ、甚だ遺憾としてゐる矢先、醫學部自學の機關紙「X×」が法文内に撒かれてあつたので、M、O等を始め責任者會議の連中が非常に憤慨して、私をして醫學部に抗議をしてくれとのであつたので、私は連絡の際、此の旨H君に傳へ、應援の意味だらうが法文では當分左翼的な行爲一切を禁じられてゐるのだからよしてもらいたいと言つた。H君も『あゝそうか』などと云つて白はくれてゐた(前に書く機會がなかつたが、自分は前にもH君から「X×」を旗の連絡の際七部もらつたことがあつた。それを前記の四人に配

てる一方委員には個人的に働きかけることとした。X×會委員會内に於てはも君が主となつてやることになつてゐるが、彼は辯説が拙いため非常にその成り行きを心配してゐたが、委員會は豫期以上に進歩的で、案外改則の議は委員會の關心をひき、毎週二回三回づゝ自發的に改則の具體案を練ることになつた。

一方高代會議にては、從來代議員の集りが悪かつたが、X×會委員會内部から改則の議がおきて以來急速に活潑になり、それ以來高代會議の代議員連中は自分達にはX×會改革の先鋒であるかの如く意氣まいたので、情勢は非常に好轉して居つた。

以上の情勢下に於て、我々はX×會委員會と高代會議との團體して當局に當れば改則案は大體通過するとの見透をもち、新聞(X×時報)紙上に於てはその方向にアデプロすること、高代會議はその決議事項や會議の内容をニュースにて學生に傳へることとした。

然るにX×會委員會は具體案をつくる前に先づ學校當局と懇談する必要があるとの論がでてゐるとの報告により、我々委員會は次の理由によりX×會委員會と學校側との懇談に反對し、その旨H君に傳へ、その議を取り消す様に努めさせることとした。然るにH君一人にては到底X×會委員會内部を牛耳ることができず、遂に懇談會をもつことになつてしまつた。吾々が反對した理由とは、もしX×會委員會の改則具體案ががちり出来あがつておらぬうちに、又委員の態度輿論が統一せぬうちに

布したことがあります)かくて高代會議代議員をしてX×會委員に傍聴を許させる様に交渉させることとした。X×會委員會も此を許可した。懇談會の前日高代會議代議員の態度を決定するため責任者會議を開いた。その結果は高代會議は自主的な立場に立つて學校側のアゲ足をとること、X×會委員は學生を中心とする座談會をもつて、先づ學校側よりも學生大衆のX×會に對する輿論をきくべきだと云ふこと、それから高代會議をして懇談會には出来るだけ多くの學生を出席せしむる様にニュース、ポスターによつて宣傳すること、懇談會には學校から左翼と思はれてゐる様な人は出席しないこと等が決定され、その決定が高代會議にもちこまれて再決定された。學校側との懇談會は教授の都合上土曜日に開かれた。

場所は會議室であつた。出席者はN部長、I、A、Tの諸教授であつた。X×會側からはT君、Y君等を始め委員殆ど全部高代會議側及學生側では總數三、四十名出席したとのことです。私は出席しなかつたのでその會の様子は具體的には書けませんが、意外にもX×會委員がかなり強硬な態度をとつたので學校も非常に狼狽したこと、要するに懇談會は豫期以上の成績であつたことが翌日報告された。

こゝで又X×會と高代會議との統一職權が可能となつたので、細胞會議では改則具體案に關して高代會議とX×會委員との會合をさせ、そこで統一的な案の骨子を製させることに決定し、此ことがX×會責任者

及高代會議責任者に傳へられて、(十一月下旬)××集會所に於て會合をもつことになつた。その席上に於て統一戦線が可能視せられてゐたが、決議機關の條項で××會側と高代會議側の意見が對立した。××會では總會が最高決議機關だが學校側では此をみとめぬから條項のために學校から強制的に解散させられては遺憾だと主張し、高代會議側では飽まで自主的にそして學生總會を最高決議機關とする、此の爲には解散も亦止むを得ないと主張した。

以上の如く情勢が變化したので、細胞會議でもこれを如何に解決してゆくかについては非常に困亂した。即ち高代會議を進めると強制的解散が来る、すると新しい團體を作るのには三十人位の高代會議が孤立して左翼視されるし、××會案では本質的改則ではなくなる。此で問題になるのは、果して學校側が強制的に解散するかどうかの問題であつた。此のため會議では先づ私が新聞部記者として、學校側の腹をさぐるためにI、N教授を訪ねることになつた、その結果學校側では強制的解散をさせらうとすることが略々明になつたので、先手を打つて高代會議の方を解散を要求したらよいだらうと云ふことになつた。併し此の爲には高代會議は學生の支持をえなければならぬ、その爲にニュース等による宣傳が強調された。細胞會議では以上の様に態度を決定して、此の決定を高代會議に移した。

而るに××會委員會の方では愈々具體案を作製して、愈々最後の學生の決定を高代會議にうつし、吾々は全體以上の決定に従つて學生大會に出席することになつたが、學生大衆の關心が餘りないので非常に心配してゐたのでありました。その爲には大會前日はポスターを貼りだし、又開かるべき學生大會の意義(大體前述の如き意義)をニュースにして學生大衆に配布することとした。大會の日取りははつきり記憶して居りませんが、十二月初旬であつたと思ひます。學生大會當日の様子は次の通りであります。

當時N部長は病氣のため出席不能であつたので、代理として顧問のI教授が出席せられた。××會委員は委員會をもつて全員出席、高代會議關係と思はれるもの約三百人位、一般學生として意外にも百人位が出席して非常に盛況であつた。

先づ××會委員から具體案の説明があり、次でI教授から本日の大會はN部長出席不能の爲、自分としては唯諸君の意見を聞いてゆくに止まらざるを得ない旨を述べ、次に高代會議よりR君が拙かつたが熱のある態度で高代會議案を説明した。するとI教授は高代會議案としてはない個人の意見として聞いておくと高飛車に出たので、學生の反對をかひ一時騒然となつた。大體大會の気分は高代會議案の自主的なものに賛成するもの多く、中には即時解散せよ!と叫ぶもの多數あつた。之を如何ともなしたいと言ふと、決を探れ!の聲があり、異議なしの聲により、高代會議案の賛成否の決をとると、満場一致で賛成、××會

大會を開き決定する運びとなり、大會開催を學校側に要求してゐることであつたので、高代會議をして高代會議案支持のための宣傳を有効的に急速にさせることになり、一方ニュースによる宣傳の外、各高校代議員をして各高校會を開かせることにした。高代會議責任者の報告によれば、その結果は思はしからぬ情勢であつたので、大會を來三學期に延期しようと思ふことになつたが(細胞會議で)來三學期は試験切迫の爲學生が動かぬから少し冒険ではあるが今學期中にしようと思ふことにした。

此のため解散後如何にするかが問題となり、細胞會議では大體次の如く決定した。

即ち吾々は決して親陸團體を否定して居るのではない、より良き組織即自主的なそしてどんな小さい問題でもとり上げゆき得る様な眞に大衆の親陸團體を欲してゐるが故に、古くさい××會を改革しやうとしてゐる、吾々は親陸團體の解散には反對であつて、よりよき組織の團體を欲してゐるのである、だから學校側が解散をしようとして居るのは吾々の親陸團體をも認めまいとする意圖である、かゝる意圖には絶対に反對して、吾々ももし具體案が通過しなければ、吾々は吾々の親陸團體を作らうと思ふことにした。

そのため具體案が通過せぬ時は、高代會議が中心となつて新團體を結成することこの團體こそ新しい規定による自學であるとした。此

委員の半数も個人として高代會議案に賛成することとなつた。I教授はよく諸教授と相談の上お答へすると云つて退出、次回の大會は××會委員が發表することとなり、非常な有利な情勢のもとに第一回大會を終つた。

情勢好轉——約二百人は吾等に完全に賛成——の見通しがついたので、直ちに細胞會議は次の如く協議を遂げました。

即ち次回の大會では××會の即時解散は可能である、高代會議案を中心に親陸團體(自學)を結成し、直ちに高校別に委員を選出させること新團體の規約を作製するために當分高代會議員は委員會を作ること、高代會議は解消すること等とし、次回大會はもつと學生を動員する様にする、それから他學特に醫學部へは上の方で連絡がないから、高代會議の各一部で極めて合法的に次回大會には是非傍聴として新團體の結成を應援してくれとのニュースを醫學部食堂に撒布することとし、此のことを高代會議に反映させることとした。

次回大會の當日は折悪しく、私とMとは恐らくH時報の最後の版となるであらう新聞の編輯の爲出席せられなかつたので、萬事合法團體責任者に委せました。

當日の様子をきくに、當日は最初から解散の気分濃厚で、I教授の説明は彌次り倒され、又はI教授の法理論と今の説明は矛盾してゐるとか云はれたそうです。此の時解散について決をとつてくれとの叫びに、×

×委員長Y君は最早學校には誠意を認めることは出来ない、途は解散あるのみであるが、新團體を結成するかどうかは又別問題であると云ふか、高代會議のK君は新團體を結成する必要があるから解散する必要はあるのだなどと、吾々とは矛盾したことを云つてしまひ、その例として米川正夫氏に強迫状を送る様な奴に對して、大學生の名譽に於て抗議する時にも新團體も必要だなどと、とんちんかんの事を言つてしまつた事です。愈々決をとる時になると、勿論満場一致で可決されました。當日の出席者は前回に増し約四〇〇人位、それに通學部方面から三、四十人來てゐたのであります。解散が可決されるや、高代會議より新團體結成の爲急速に代表者を選出することが提案可決されて、當日の大會は閉ぢられました。

茲に愈々新しい自學が結成される運びとなつたので、吾々は組織上の關係を次の様に定めました。即ち從來の左翼責任者をそのまま自學係りにして、別に私とMとOと、それ等の人々と會合する様になりました。

自治會は高校別に代表者がでゐる。二十五人に付一人の割合で、現在に殆んど凡ての高校が之に代表者を送つてゐます。組織と庶務部、文化部、新聞部、運動部、事業部に分れ、毎週委員會をもつことになつて、新聞部の部屋が委員室になつて居ります。

會議は代議員による民主的なもので、細胞の力が強まるので吾々三人は直接委員に選ばれて此の會議に出席しなければならぬ破目になり、こ

のため私とOとは×高會で運動して見ましたが、×高會ではなるべく左翼の人を入れては對學校の關係上よくならうと云つて、私等は代議員に選ばれて居りません。

併し當分は止むをえまいと云つてそのままになつて居ります。自治會に對する政策としては、新聞を發行して手ぎわよくアチプロすること、ノート制を廢してプリントを發行せしむること、共濟部をして食堂を經營せしめ、延いて全學的な共濟部設立に進むこと及び便所、暖かけ等の不備改善を學校に要求すること、又時間割を作製する際には自治會委員をも參加させること、殊に經濟科目の充實には努力すること等として、その間有力分子を獲得してゆくこととしてゐました。法文の學生は一見進歩的に見え、自由主義的運動にはよく動きますが、而かもそれ以上に出でることは非常に要心深い感があります。法文自治會は結成されたと思ふものゝ、その中へ左翼勢力を植えつけることは非常に困難かと思はれます。以上の新しい規定に従つた所謂自學——法文自治會が結成されるに至つた經過を細胞との關係に於て述べましたが、自治會が斯くも見事に結成されたのは吾々の力と云ふよりも、むしろ法文學生の自由主義的氣分によるものと思つてゐます。

四、日本共産黨の將來に對する見遣又は感想

一方に資本家が、一方に勞働者階級が存在する以上、勞資の對立は否定されぬと思ひます。マルキシズムは社會進化の法則を社會經濟關係の

中に求め、此の關係の物的(人的)表現を資本家對勞働者となし、資本の運動は必然に一方の極(資本家)に於ける資本の蓄積は他方の極(勞働者)に於ける貧困墮落の蓄積を來たし、資本の蓄積は再生産に使用され、延いて市場の行きづまりと利潤の低下を伴ひ、貧困墮落の蓄積は階級意識の増大を伴ひ、從つて少數化しゆく資本家は、増大しゆく勞働者階級によつて覆へられるとしてゐるが故に、そしてかゝる理論ばかりではなく、此の爲に積極的行動實踐を含めての理論體系として存在してゐる以上、黨に參加してゆく連中があることは否定できない。されば黨は將來も存在することは明であるが、此れに對して國家權力も亦増大的に對立してゆくことも事實である。國家權力によつて黨が一步前進を二歩退却させられるか、二歩前進を一步退却されるかは全く將來の經濟的客觀狀勢の如何と、かかる情勢に適應せる黨の政策の如何にかかつてゐると思ひます。併し黨の存在を肯定すること、その爲に實際運動に入つてゆくことは又別問題であり、理論を信することは必しも直ちに運動をしなければならぬとは思ひます。

茲には個人的特質が多分に入り込んでくるからだと思ひます。

五、現在の思想に對する將來の決意

私は左翼運動にたえ兼ねて自首した意氣地な事です。峻烈な制裁を加へられるであらう莫切者になり下つてしまいました。過去はともあれ、現在の心境は全く左翼運動から足を洗つてしまはうとまでなつておりま

す。私は自首する以前、老人の父、病氣の母が、私が當局の追求をうけてゐることを知つて、今迄にこんな迄自分を思つてくれてゐることがなかつたのに涙を流して心配し、殊に母は自分の綿入襦袢を脱いで、自首するにしろ留置場は寒からうと云つて與へてくれたのは、もう全く左翼もマルキシズムも私の前にはありませんでした。老人の父が多忙をさいてわざ／＼私と一緒に××に來てくれ、留置場の前に立つて、それでは體を大切に、あの頑固「おやぢ」に云はれた時には如何してよいか、全く心境は筆記出来ません。

過去は成程、家庭的な或は個人的な關係を考慮することなく、一路眞理の探求に進み、自分の世界觀を造り上げること熱心な學生であつた積りでありました。どうやら理論が出来たかと思ふと、今度は足であるかぬ程頭がつかちになりきつて居る自分を知らしめられました。病弱の母、私一人の將來を無精に心配して居られる老人の父(頑固と多忙の爲そんな様子も口ふんも今迄現はれたことがなかつた)の前に立たせられた時、私はこの親と子の封建的なイデオロギーを克服する意識をもち合はせてゐなかつたのであります。生活過程が意識を決定すると云つてゐるが、私は從來我儘を通して來た程「不幸」と云ふものを知りませんでした。未だ曾つて自分の父と母と、即ち自分の行動行爲を家庭的に考へたことはありませんでした。今自分の行動が一家の生計上に重大な關係あることを知つて、始めて自分のこのインテリの行動がウルトラに過ぎ

験に應じたいと言ふ考で一杯であります。(以下略)

一〇

某帝大醫學部 W・M (當二十五年)

關係せる事件の種類……共青關係

處分の種類、程度……無期停學

家庭の狀況……實父母、中流、某市課長

學費の出所……父より

健康狀態……強健

性質才幹……温和にして眞摯 多少執拗

何もかも過去のすべての私の行狀を洗ひざらひ曝け出してしまはずには居れません。法を欺き、親を師を伴つて、最早や過去の罪業の破片の一片をでもさへ、私の心中にしまひ込んでおく事は出来ません。今に至つて此舉に出た事は眞實おそすぎたと思ひます。

檢事殿のおとり調べの際當然すべてを告白すべきであつたし、又どんなにすべてを曝け出してしまひたかつたか知れませんが、御取調の際轉向を誓つたあの氣持、それから今日まで「もう決して二度とやるまい」と益、強く思ひ込んである氣持は少しの伴もなかつたし又今でも無いのであります。先日もH主任殿へ心境を申し上げた様に、私が色々とマルクス主義を克服するために書物を讀んだのは、要するに此氣持を益々固め

たことを知り、嘲笑罵倒を覺悟の上で、キレイサツパリとこのウルトラ行爲から足を洗はらうと決意し、去る二月五日××署に自首したのであります。現在の心境は同時に將來の決意を決定しております。轉向の理由は、理論的にマルキシズムが誤つておるとか云ふ様な正々堂々たるものではありませんが、此の理論と實踐とを結びつける爲には、如何しても私達インテリには克服しがたいであらう處の種々の諸關係が介在し、その諸關係を克服して行けぬ所に私の轉向せざるべからざる理由があるかと考へます。從來も私はかゝる克服し難い、インテリ、イデオロギーに就て考へたこともありましたが、そしてそれを克服しようとして随分考へて見ましたが、それは机上でしか克服されず、抽象的な觀念的な「克服」であつたことを、此度こそ現實的にハッキリ見せつけられ、現實的には到底克服することの不可能であつたことを知つたのであります。要するに過去に於ては多少とも所持しておつた所謂「學問的良心」なるものは現實的には——家庭的に、個人的に、その特質性の上に立つて考へるときは、一個の抽象的命題であることをムザムザ見せつけられざるを得ませんでした。それは私の無氣力であつたであらうけれども、現在の私には——そして將來は猶更——それを克服する何物も持つて居らなかつたことを知り轉向の二字の前に、「勇敢に」全く勇敢に自首した次第でありました。

現在私はもしそれが可能であるならば、一日も早く釋放され、卒業試

る意欲からの、補強工事の様なものであります。(長谷川さんはどう解釋されたかは知りませんが實は私は此事を申し上げたのでした。)

では何故御取調べの時から今までの罪業を曝け出してしまひたいと衷心希望しつゝ、而も今日まで延ばして來たか、御不審でありませうから此心狀を申し上げます。

一、私が檢擧中轉向の決意をして以來完全に自白する事を敢へてしなかつたのは、その眞底の氣持は組織を守ると云ふためではなしに、私と一緒に運動し、殊に私が直接間接に運動に引き込んだ人達、こんなおぞましい言ひ方が許されるならば「私の配下」となつた人達を到底私の口から曝露して、檢擧をされる様に忍びなかつたからであります。出来る事なら本人達が自身誤謬を清算して、直接自首して貰ひたかつたのであります。

二、又一方昔の同志或は其の他の友達から「××と云ふ男は自分が助かり度いために友情までも味そ養に蹴とばすを顧みない卑劣漢だ」と思はれ度くない心から、又實際に自分の口からその人達のやつた事を曝け出してしまふ事は友情に對して不實だと云ふ風に考へてゐたのでした。それで組織を守ると云ふ氣持は眞底になかつたのに拘はらず、結果的に見て意識的に包みかくしたり、違つた事を申し上げたり、或は當時受けた精神的衝激からの諸事實の混同、忘却等のため、間接的に組織を守る結果を表したかも知れません。私の轉向の氣持を充分御存じ無

かつた方々に對して、その様な事から誤解を或は與へたかも知れぬとしたり當然の事でせう。

又私は一度喋つた事を後になつて訂正し直すとして「××はこんな嘘を言つてゐた不届な奴だ」と云ふので再檢束などと云ふ風な事になり、両親に更に心配させ、私自身耐へられぬ事を來しはしまいかと云ふ風な姑息な考へから、警察の取調とは違ふ事實を檢事殿から指摘された時のみ素直に承認したのであります。ついでに申しますが、一番始轉向の決意をした時の私の氣持は「生命を賭しても組織を守りえない自分が階級闘争に相應はしからぬ人間である事を自覺し、之以上両親に不孝をしたくない氣持、一方前記(一)に述べた所の私と關係ある人達について自白する事に對して友情的に忍び得ないと云ふ氣持から來る苦痛、又(二)で述べた様な利己的な氣持を自分ももつて居ると云ふ事の自覺から來る苦痛をくり返す事が到底耐へられない」と云ふ事が動機でありました。

私は其の後一年間の苦勞の結果、本能的に強い親の情愛に文句なしに飛び込んでゆきたいと考へてゐます。人間の子として親にそむく事は到底出來ないのであります。一方理論的にマルクス主義の正しい點と共に、より以上重大な缺陷を認識し、又現在の日本國情に對して多くの不滿を感じて居りますすれ共、日本國體はそのあるべき相に於てはそれこそ眞實に世界無比な、最高な理想國家である事を心から惜り、有難い 天皇陛下に對し奉つて到底日本民族の子として忍びえない事でありませう。

本民族は先づ現實の此國に理想社會を實現する努力をなすのが、義務であり權利であると思ひます。此の様なわけで私は法律に背く事は上陸下に對し率つて反逆する事であつて、之は到底私の耐えられぬ事です。私は之から過去の一切を懺悔して忠孝の道徳を實行しようと思ひます。

なほ今まで前に申し上げた氣持で多く話さずにはゐた所の友人K、I等の諸君に對しては、私の轉向が認められた節にその時まで本人達が誤謬を認めて轉向してゐなかつたならば、私と同様な愚かな轍を踏ませたくないために、極力改心をさす事に努めようと之までも藕かに思つてゐたのですが、何よりも先づ法に對していつはる事が出来ないのです。すべてを打ち開けて然る後私の轉向をお認め下さつて貰つてから後、最も賢明な方法で同人等を正道に引き戻さうと思つて居ります。之こそが眞實の友情を生かす道だと思ひます。今私としては完全の轉向を示して、両親及私の轉向のために努力して下さつた人方に報いる事が何よりの先決問題であります。微力な私について今後助力をして戴ければ幸甚と思ふ次第であります。

一、私が學内左翼運動に關係する以前の學生運動に關して見聞する所は殆んどありません。

四・一六事件前本縣共產黨事件指導者T某宅に於て、之まで讀書會として學内のみ閉ち籠つてゐた學生が學外運動に進出するために最初の會合を開いたと云ふ事を後でT Sから聞きました。四・一六事件後共青

のK某等の指導に依り、學内讀書會があり、又同人等に依つて工場農村への働きかけがあつた事を聞いて居ります。昭和五年私が受験準備時代中學同級だつたI某から文書の保管を頼まれ、後それを焼却する時見たら共青の秘密出版物でありました。彼から「無新」を二部ばかり見せられました。當時私は尙共產黨と合法政黨を混同し、又マルクス主義をも知らず、漠然と貧富問題に就て人道主義的な義憤をもつてゐました。そして讀書會をつくつて社會問題を研究するのが左翼學生だと聞いて讀書會に魅力と憧れを感じてゐました。

二、昭和六年四月から夏休みまで

昭和六年四月本學へ入つて先費Kと交友するに至り讀書會が存する事を知り、一年生にも私の外に讀書會をもちたいと思つてゐる學生がある事を知り、六月頃、H某、T某の二君に紹介され、一年の讀書會をそれ以後つゞけました。一年責任者としてHが上級生との連絡に當りました。此頃高等學校からの友人Sの當時下宿先なる北××丁S某(漬物行商)妻は當時女人藝術の讀者で左翼ファンでして、私に本を借して呉れと言ふので「共產主義入門」「空想から科學へ」等を貸しました。此時分から思想的に父母に心配をさせ始めたのでした。

三、昭和六年九月から十二月まで

同年初でした。私はHからビラ貼りに誘はれて、何しろ始てではあり面白いと思つて、當時四年のUの下宿にKにつれられて行きました。U

が「俺は君の顔を見ないから、君も絶対に俺の顔を見るな」と言つて、ビケの仕方を教へた時非常な恐怖に襲はれた事を覚えて居ります。私が深夜ビラ貼りに出た事を知つた父は、父だけの手で私の思想を匡正する事が出来ないと思つたのでせう、一週間頃後私が検束され三十五時間位警察に留められて、ビラ貼りに關して餘り聞かれませんでしたので自由せず釋放されました。今にして思へば眞實に父の愛は廣大であつたのですが、當時此ために反つて反感を抱く程私は愚かでありました。その頃漸くマルクス主義の輪廓が了解でき、始めて階級運動に生きる事が生甲斐ある生活であるとひたむきに思ひ出しました。

その後Hから私達二人は教授會と言つて階級運動の犠牲者を救済する會員になつてはどうかと言ふので、賛成して金五十銭の會費を出しました。そしてTを救済會の一年責任者に推薦しました。之は第二學期終頃の様な氣がします。

三、昭和七年一月から三月まで

時間割改正問題を契機として自學が出来たのは二學期の終りか第三學期に入つてからか記憶ありません。之までの讀書會は學生の經濟的、政治的運動を行ふのは不便であると言ふので、東大の例に倣つて自治學生會を作つてはどうかと言ふ讀書會の委員會からの提議を×學部自治學生會設立準備委員會署名入りの綱領草案と一緒にHがもつて來ました。それには「メート制廢止」「授業料を八十圓に下げる」「××會の自主化」

「入局の自由」「教授會に學生の意志を反映せしめよ」「學生自治會の支持」「反動學生―反動教授の撲滅」「全學的自學の結成」「凶作地出身學生の授業料免除」「大學新聞の發行」「軍教反對」「共產青年同盟の旗の下に」等二十數箇條がありました。一年班も自學をつくるのは賛成だと云ふので會員になりましたが、自學綱領として學校權力に對して不満をもつ者なら政治的意識の有無に拘はらず會員となりうるものでなくてはならぬと言ふので、政治的意識をもつた綱領を削除しました。當時Hが讀書會及自學の一年責任者となりました。そして二、三回の班會の後私が自學一年代表となりました。

私は自學の一年代表として自學委員會に出席して、四年T、三年S、二年Kと知りました。竹内は卒業間際であつたためか委員會には殆んど出席せず、他の三人が會合して居りました。當時の自學委員會の構成は

- 組織統制部――K
- 宣傳教育部――S
- 財政部――W

であつたと思ひます。Kが主動的に活動してゐました。自學當時の闘争題目は學生自治會の支持、××會自主化問題、凶作地出身者への授業料免除、舊學友會基金問題、時間割改正等が主なものでした。自學はニュースを發行してアジする一方「××」への投書、座談會等で一般學生に學内問題に對する關心を植えつけ、自學を擴大する様に努力しました。

一年クラスでは屢、座談會に出席し、學内問題に關心をもつ人達をして定期的に座談會をもち、その座談會の出席者の中から最も自由主義的と思はれるS以下數名を三學期末頃當時Tの下宿に會合せしめ、私が自學を紹介しましたが、之等の中の二、三人は非合法的な自學に入る事に承諾せず、座談會にも出席しなくなりました。

×××會が何時如何にして出来たのか知りませんが、昭和七年二月末頃私はHの紹介でTに會ひ、學内左翼組織を指導するために×××會があるが君を會員に推薦すると云ふので承諾して或夜學生會館で×××會の會合に出席しました。そこではP・S・自學・モツブル・プロ・エス等の責任者があつてその運動の報告批判をやつてゐました。そしてケルン會の責任者がTでありました。Tは學校協議會と云つて法文・×高と連絡して市内學校の左翼運動の指導を協議してゐた様子に聞きました。ケルン會員としてT、Y、U、S、M（以上四年）M、K（三年）K（二年）H、W（一年）でした。此席上、學校新聞について論議してゐましたが私には解らなかつたので傍聴しただけでした。學校新聞「××」がそれから發刊されたのですが、それが三學期中に出たか新學期に入つてからだつたか覚えていません。

此頃私は學内プロ・エスにK（四年）の紹介で加盟しました。プロ・エス會員としては、K、M、H等を感じてゐます。學内エスベラド會の内部でプロ・エス會員の獲得に努めて居りましたけれども、その活動は至なつて組織が潰滅してゐたのですが、K、Aが、中心となつてゐましたが、その後いつの間にか私達はP、E、U××支部から遠離つてしまいました。×學部のT、Iはずつと後までもP、E、Uに入つてゐた様でした。

愈々春休になり、自學グループは各自讀書する事にして別れました。自學委員として休中の連絡を私は醫省中のS、Kとつてゐました。

四、昭和七年四月から九月まで

新學年に入り各學年自學班會がもたれ、休中の生活を話し合ひました。先學期頃からグループを離れたT君は私達が努力しましたけれ共、遂に自學、モツブルから完全に足を洗つてしまいました。一方自學委員會では法文學部の學生に對して自學結成をアツピールして、二、三回位×學部自學會員と××學生との懇談會をしました。兩學部間に意見の對立があつた様に思ひます。××自學の結成が何時頃だつたか覚えて居りません。

黨員Sの指導の下にS宅に×××の首腦部が會合して、メーデー闘争の協議をしました。Sは學生デモを主張し、學生側は不可能を主張しましたが、結局可能な限りデモをする様にする事、デモができなく共同等かの形で闘争をする様にした様覚えてゐます。此會合の出席者は××ではTの外に、名前は知りませんが二、三名、×學部ではM、K、K、T、H、Wだつたと思ひます。その後M、K、K、Hと一、二回會合し

つて貧弱なものでした。私はT、I、Tをプロ・エスに獲得しました。自學の活動は何と言つても時間割改正問題を中心として動いて居りました。各大學への學生派遣もその一つの現れでありました。自治會規約、××會規約改正も自學政策の實現であります。此當時自學メンバーは約三十名、一年では、H、W、T、S、I、Iが第二學年の始頃までに會員になりました。此頃からTが次第に運動から遠ざかり始めましたのでHと私は彼を引き戻すために相談しました。

三月始頃だつたかと思ひますが、ケルン會員が集つて學生會館で黨員Sと會つて、左翼學生運動の意義や東北地方飢饉状況について話を聞きました。こゝで私は學生運動が「革命に際してインテリ學生層をして黨のよき身方として好意的中立に立たしめるためには」共青の指導下に立ち、進歩的學生は共青フラクとして學生層内部に於て活動せねばならぬと云ふ理論を覚ええました。ケルン會の卒業生送別會をTの下宿で開いた様にも思ひます。

一年自學グループは春休みになる直前に分散會と云ふ意味でMで會合して、四年Yから運動経験を聞きました。又Tの離×前Hの下宿でモツブル主催の「T・Sを圍む會」に出席して、醫學部プロ・エスのメツセージを私が草案して夫を讀みました。法文、醫學部、二高の學生が多數出席しました。やはり三月中だつたと思ひますが、私はKの紹介でPEU××支部の再建の協議に出席しました。P、E、UはK、Fが居なく

たと思ひます。

丁度五月五日が新入生宣誓式だと云ふので、メーデー闘争を此日やる事に決し、舊學友會殘金處分、凶作地學生の授業料免除、大學新聞の發行等の學内問題を取り上げ、之をアツピールする事になり、下からの意見として之を自學の決議としようと思ひ、Mで×學部自學大會を開き、結局アジビラの配布、演説をなし學生課へのデモに新入生を卷込む事となり、「合法的な學生自治會、××會、××會、××會をして主催せしめる事になりました。五月二日自治會共済部委員だつた私も會場に行き、ピラを配布しましたけれ共、それからKと共に××川畔まで散布に行つて、デモの時間間に合ひませんでした。此事件の前夜（どちらだつたか覚えていません）頃××、×學部の首腦者が市内、某料亭に會しました。Hの知らせで彼と一緒に私も會しました。×學部ではM、K、I、K、H、Wで法文からはTの外二、三人出席したと思ひます。

本學期始頃私はHからガリ刷の「赤旗」を見せられ、それをSの宅に集つてゐた自學會員の數名に持つて行つて讀ませました。その後でそれをHに返還しました。やはり新學期始頃と思ひますが、私はM、K、K、Hなど×××會で會し、學生全協支持團の設立を協議しました。そして×學部に團を設立する事に決定して、K・M（四年）、K・T（二年）、私（二年）が各學年の責任者となつて委員を構成しました。二年では私とHが團員となりました。委員會は月二回會合して、團費（五十錢）を徴收

し、労働新聞、全協パンフレットの配布、團員獲得、他学校への組織確立等を協議しました。學生全協支持團中央部との連絡は始めK・M後にK・Tがやりました。

五月十五日Hに呼ばれてS宅にゆき、モツブル××支部確立準備会の結成に参加しました。當時の出席者はH、W、U、O、Mでありました。Sは傍聴人としてその席に居りました。當時演説状態にあつた赤色救援会を再建するために赤色救援会××市準備委員会と稱し、私が責任者に推挙せられ、私は能力以上だと思ひましたが熱心にすゝめるので之を引きうけました。準備委員会の組織は

組織部—W
財政部—U
救援部—O(?)

でありました。組織部の中で學生部責任者に私がなり、労働者部責任者にはMがなりました。その席上、赤救××市準備委員会を結成し、市準備委員会のメンバーがそのまゝ班委員会を構成しました。班委員会責任者には私がなり、後になつてUが代りました。

私は自學二年班責任者、學生全協支持團(學全)二年班責任者、モツブル市準備委員として忙はしくなつたので、此頃、Hと相談して自學二年班代表をSに代つて貰ひました。當時自學委員會はS(四年)、T(三年)、W(二年)の三人でやつてゐました。共青準備委員に私がなつたの

は此頃からだと思ひますが、共青準備会のできた経過は覚えて居ません。Hと私とは「學校新聞」××を自學會員及その他の二、三名に配布しました。Hの手傳をして一、二回は「××」の印刷をしました。

一學期末頃までに自學會員としてH、W、S、I、T、K、I、K、I、T、Sがゐた様でした。そして二年自學會員を二つ或は三つのグループに別けて會合して居ました。全學二年班代表として勞新、支持戰士をH、S、I、K、Tに配布し、夏季休暇までに之等の諸君を團員として五〇錢以下の團費と勞新紙代を徴収しました。赤救二年班代表として私はTが檢舉されたときに自學會員から救援金を集める事に努め、それ以後赤救會員を獲得し、夏季休暇までにH、W、S、K、I、T、Kがメンバーであつたと思ひます。全學××市準備委員としてK、Kと會合してゐましたが、××市準備委員としての意見の對立(中央部の主張は全協中央部の支持のみを主張したに對し、××市準備委員としては支持活動を××縣地方の全協或は全農にもせよと云ふのでした)を來し、夏休後まで中央部との連絡がルーズとなり、又各學年毎に學全独自の班會を持ち、學内闘争(自學でやる様な)の先頭に立て、中央部の指令に對し「學内闘争の大家組織なる自學のある本學に於て全協支持等と云ふ政治的色彩ある學全を以て自學に代らしめる事は、地方状態に暗き極左的偏向ではないか、又學内闘争を指導せよと言ふ以上學全中央部はどんな組織の指導下にあるのか」等中央部に對して不信を表明しました。それに對して中央

部からは此責的に「學全は直接黨中央部の全協對策部員がフラクションとして學全を指導して居る。共青の現在の状態ではこゝまで手を伸ばす餘力がないが、共青が強力となれば之を共青の指導に移すべきものと思ふ」旨の回答があつたと思ひます。そして全協全國大會基金カンパ、勞新防衛カンパ、學全代議員會基金カンパ等連續的に指令されたが指令通り實行し得ず、一時之等の指令を留保して、夏休を利用して東京で開かれた學全全國代議員會議に學全××市準備委員としてK、Hを出席せしめました。一方學全支持班を在××學校に設立するために××市準備委員は××高、××市準備委員と座談會を開く事として、K、Kが之に努力しました。そして夏休後頃學生全協全農支持團と云ふ様な名稱のものが××、××高に出來たと思ひますが、はつきり覚えてゐません。

赤救××市準備委員として結成後間もなくMと共に××市準備委員室員S氏宅に至り、そこでT・Sと會ひそれから毎月一回宛救援金五圓乃至十五圓を同人許へ届けました。六月中旬赤救主催で××八幡宮裏にて××市準備委員の「T・Sを圍む會」を開きましたが、私は丁度祖母死去のため後事を四年代表Kとか云ふ人に託して歸郷しまして出席しませんでした。その時四年代表OがKとか云ふ人と代つたのでした。E出所の折歡迎會を開きましたが、私は成るべく夜間外出をつゝしんで居りましたから出席しませんでした。六月初頃かと思ひますがHの紹介で北××町電車通で××高生と會ひ舊××兵××跡原にゆき、彼に赤救××高班の確立を相

談しました。それから二回宛彼と會つて居りました。六月下旬頃と思ひますがやはりHの紹介で東××町××で法文のTと會ひ、××赤救班の確立を依頼し、以後彼とも連絡をとり、赤救××市準備委員をT、U、私の三人でやる様になりました。又七月中旬××高代表の紹介で××高工生とT女學園附近で會つて、彼に高工赤救班の確立を依頼し、そのまゝ、休暇後の會合を約して別れました。一方七月中旬頃だと思ひますが、Mの紹介で××市準備委員と労働者風の男と會ひ、工場方面の赤救確立につき意見の交換をなしましたが、結局その問題を次の會合まで留保して別れましたが、それきりで連絡がきれてしまいました。

暑中休暇の活動について申し上げます。自學在××メンバーは時々會合して主に讀書をしました。赤救方面では××高の殘留委員と連絡だけとつてゐましたが、間もなく切れてしまいました。××のTとは七月始め頃から八月初頃まで會はなかつた様でしたが、その後連絡をとつてゐました。一方Tの下宿で七月中旬頃(?)知り合ひになつたりに街頭分子の赤救班をつくる様依頼しましたが、明確な組織の出來ない間に解消しました。Oの紹介で七月下旬(?)頃全協T・Zと××町電車停留所で會ひ、同人と赤救労働者班確立の相談をし、又一方同人から全協方面への運動資金の補助を申し込まれて、八月に一回二圓位出しました。そこでTの下宿でT、T・Zと會合して、赤救××市準備委員の組織の構成について相談しましたが、現在は全協組織の整備で忙はしく、労働者代表を委

が夫々地域内の學校、工場等へ赤教班の確立に對して責任をもつ事に決定したのであります。西北部地域委員會は×高のY、Y、×學部のUを以つて構成しました。中央部では××、高工が委員會を構成してゐました。東南部は停車場以東の地域で街頭分子としてのMのみで、之から私と協力して赤教独自の立場で會員の獲得をしようと相談し合つてゐる間に檢舉されたのであります。

Mの指導を受ける直前だと思ひますが、私はKから「或る人が私に會ひたい」と云ふ事を聞いて指定された××通りに行きますとTでありました。彼は私に將來赤教内共青フラクとして活動する様に話しましたが、それきり檢舉まで會ひませんでした。檢舉直前赤教會員は大凡××二十五名、×學部二十五名、×高二十五名、高工十名位でありました。學×との連絡はされてゐたと聞きました。×學部代表はU、二年代表はKに檢舉直前に代つてもらひました。

××キネマストライキのためにデモをする云ふ事及二年生の部署をSからIの下宿で聞き、デモに参加した翌朝私は檢舉されたのであります。

一一

某帝大工學部

N・S (當二十七年)

關係せる事件の種類……外院團體加入

での行動を深く反省しました結果、それを確信することが出来ました。併しながら其れは未だ未だ不充分でありました。其れは何等はずきりとした根底を持つて居ない、只表面的なものに過ぎませんでした。だが私が自分の短かい體驗から、かうしたことを漠然とながら感得し得たことは、次ぎのより高き階階への一つの階梯となりました。

最近に至つて私は牧師や教會の人々や先輩のお話を傾聴致しました結果、唯物論が絶対に誤謬であり、それによつては世界の如何なる問題をも解決することの不可能なることを悟ることが出来ました。我々が凡ての人類に共通なる死の問題を考へ、更に無限小より無限大へ擴る空間と時間と、そして其れに比較して全く取るに足らない有限であるところの人間の生命とを考へるときに、更に微妙なる自然界の構成、運動に注視する時に、我々は永遠なるもの、絶對的なもの、即ち神を發見し得ざるを感じ、其處に永遠なるもの、絶對なるもの、即ち神を發見し得ざるを得ません。神を信すること、其れは我々人間の必然の要求であり、本能であります。人間たる以上其れは絶對的であります。

更に私は物質的な充足は決して人間生活にとつて究極的なものでもなく、又それは我々を眞の幸福になし得るものでないことを知ることが出来ました。物質的な満足は只ほんの一次的なものであつて、永遠的な絶對的なものでは決してありません。精神上的満足によつて始めて我々は本當の意味に於ける幸福を獲得することが可能になるのだと信じま

處分の種類程度……訓誡

六六

家庭の狀況……實父母、醫師、富裕

健康狀態……中等

性質、才幹……寡黙、單純、感激性、勤勉

私儀 治安維持法違反被告事件に付き昨年四月以來保釋出所中のところ、昨年五月頃より自分の從來の思想行動を深く反省しました結果其の決定的な變更を決意するに至りました。併しながら最近に於ける種々な經驗に依つて、其の轉向は著しく不徹底であり、表面的なるものであつたことを意識することが出来ました。

即ち從來までの私の考へは何等深い根柢を有せず、單に漠然と我が國の現状を見、そして自分の短かい經驗から我が國體及び皇室に對する觀念は日本國民の腦裡に斷乎として抜くべからざる根柢を築いて居ると言ふことを痛感し、そして我が日本帝國に於ては絶對に皇室中心主義でなければならぬ、共產主義は絶對に誤謬であることを堅く信するに至りました。かうした問題に對する疑問は私が未だ獄中に生活して居りました時より、否運動に従事して居りました時に於てさへも、根強い疑問として頭の奥に残つて居たもので、當時は其れを盲目的に頭から否認し續けて居たのであります。そして保釋出所後、家庭に歸るに及んで、今ま

す。今まで私はこの世界に於ける人間の凡ての罪惡は、物質的なものに歸因して居るのだと考へて居りました。併しながら今は物質的なのみ完全なる社會からは此の如き罪惡は決して除き得ないことを知ることが出来ました。又私は從來までは此の社會を只單に物質的なものゝみによつて改革し得ると信じて居りました。此れは非常なる誤りであることを痛感致します。物質的なものゝみによつて社會を改造しやうとすれば、其れは絶對に不可能であり、假令一時的には成功した様に見えても其れは決して永續的なものでなく、當然瓦解の運命にあるものと思はれます。勿論物質的な方面も人間生活にとつて重要であります。併しながら其れは第二次的意義に於てであつて、根本的には社會に於けるあらゆる運動は人間の心の働き、精神活動をその基調として居るのだと信じます。假令社會の凡てのものは經濟運動によつて規定せられるものだとしても、其の經濟運動を動かすところのものは人間の心であります。現今の世界は經濟上に於ても、政治上に於ても、又道徳上に於ても全く行き詰り、頽廢の極に達して居ると云ふことは何人も否定し得ない事實だと思ひます。之の現状を救ふためには物質を主とする運動に依つてではなく人間精神運動を基礎とするところの社會改革に依らなければならぬと信じます。

一般に世界に於ける凡ての事象は血によつて結合され、分離される。大は人類全體より小は一家族に至るまで、より濃き血へと結合されると

云ふことは一つの具體的な事實だと思ひます。國家は精神的に結合された人類の最高團體であり、同じ血に依つて結び付けられたところの民族的統一體であります。國家生活は人類の必然の要求であつて、國家を離れての人類の生活は到底想像し得られません。我々は國民として存在して居るのであつて、國民たることは我々の生活の全部であります。國家は永遠的であります。我が日本帝國は同じ大和民族と云ふ濃い血によつて團結されるところの強固なる一大國家であります。そればかりでなく更に我が大和民族は世界に於ける衆多の民族に發見し得ざる、比類なき優秀なる特質を具有して居ります。此の我が大和民族、従つて日本帝國の有する勝れたる優越性は、何人も絶対に否定し得ないところの現實の具體的な歴史的事實であります。日本民族が古代より現代に至るまでの間に、一度も外敵の侵略を受けず、又他民族の奴隷となつた經驗を有せず、常に獨立的存在を續け、人類社會の各發展段階を順調に經過して來たことは、即ち此の我が民族の非常に強固な民族的統一に歸因して居るのだと思ひます。昨年二月聯盟脫退を敢行して、光榮ある國際的獨立を守り、更に一九三五・六年の危機を目前に控えた此の未曾有の所謂非常時に際會して、眞に上下心を一つにして、此の重大なる國難に處せんとして居ることは、世界に冠たる此の特質を遺憾なく發揮して居るものと思ひます。

更に我々日本國民の最も誇とするところは、我々が長くも萬世一系のとして當然の特權であり誇りであります。

總ての國家は其の大小の優劣はあれ、皆夫々の特質、個性を有して居ります。國家は夫々の個性を充分に生かし、正しく發展せしむることによつて世界人類に貢獻することが可能だと思ひます。我が日本帝國は以上の如き特性を有して居ります。此の特性を充分に、正當に發揚せしめることは、とりもなほさず世界人類の發展に偉大なる貢獻をなし得る所以であります。我が日本帝國の發展は即ち人類の發展であります。我々は世界人類の前進幸福のために、其の第一段階として我が日本帝國の發展を顧はざるを得ません。我が日本帝國は斯くの如くして、皇室中心主義の下に現今に於ける諸種の政治的、經濟的困難を漸次克服して、そして國家發展の道を漸進しなければならず、又なし得るものと確信します。

私は現在に於ては共產主義は既に破綻の道を歩みつゝあるものと思ひます。例へばシベリアに於ては農民の生活は非常に困難となり、各地に暴動が勃發し、無数の農民は滿洲國に遁入しつゝあります。故にソヴェト政府は遂に農民の一部に私有財産の所有を承認せざるを得なくなりました。此のことは政府の單なる政策の變更に非ずして、私有財産を否認せる共產主義理論の破綻を暴露せるものと思ひます。更に近時に至つては、ソヴェト政府は共產主義の名に隠れて著々と帝國主義的政策を遂行しつゝあります。私は現在の社會に於ける諸種の經濟的、政治的困

皇室を戴いて居ると云ふことであります。長くも我が日本國民は皇室と同じ血によつて結ばれて居ります。即ち 天皇陛下は日本帝國と云ふ一大家族の親であらせられ、我々國民は 陛下の赤子であります。昨年十二月二十三日畏くも皇太子殿下御降臨遊ばされるや日本國民は老若男女を問はず津々浦々に至るまで、心からなる御祝を申し上げました。この麗はしき事實は以上のことを如實に語るものだと思ひます。我が皇室が二千六百年の間連綿として御存續遊ばして居られると云ふことは、世界に類例なき所の日本民族の現今に至るまでの輝かしき獨立と順當なる發展の一つの表徴であつて、日本民族の確固たる民族的統一は實に此の萬世一系の皇室を其の中心として戴いて居ることによつて成就し得て來たのであります。故に我々日本國民は、以上の如き我が日本民族の有する輝かしき歴史及びその具有せる世界に稀な優秀なる特質を現實の事實としてはつきり認識し、把握しそしてあらゆる複雑な問題を凡て皇室中心主義の下に統一して行かなければならないと思ひます。私は他の何人にも劣らず我が日本を愛して居ります。自分と同じ血を分つて居るところの民族によつて結合されて居る日本帝國を愛すると云ふことは、我々が小さい家庭を愛すると云ふことと同様に其れは自然の道であり、人間としての本能であります。我々の血管に日本民族の血液が流れて居る限り、我々は我が日本帝國を愛せずには居られません。日本皇室の御繁榮を祈り、日本帝國を愛し、その發展の爲に盡すと云ふことは、我々日本民族

難を解決し得るものは決して共產主義に非ずして、他に何ものかがあることを確信します。既に其の新たな傾向は其の曙光を現はしつゝあります。

保釋出所以來、殊に最近に於ける程、私は父母の愛、肉親の愛を痛烈に感じたことは未だ曾てありません。獄中に於ける荒んだ生活より暖い家庭に歸つた時に父母そして兄弟達は私を暖い心で迎へて呉れました。其れ以來兩親を始め兄弟達は私のことを非常に心配して呉れました。父母は瞬時たりとも私のことを忘れず、眠れぬ幾夜を過したでせう。私は年老いた兩親の日々に衰へ消衰した様を見ては、全く頭を擡げることさへ出来ません。殊に母は私を再び信仰へ蘇らせるために、わざわざ新しく聖書と讚美歌を買つて呉れました。そして長い間中止せられて居た家庭禮拜を私のために始めました。現在では父母の命は、そして又數多くの兄弟達の將來は一つに私自身の心懸けの上にかゝつて居るのであります。私の行動の如何に依つては一家は四散の悲運に際會せざるを得なくなるかも知りません。N家の浮沈は實に私のこの双肩にかゝつて居るのであります。此の如く考へて來ると私は自分の犯した罪の深さに、今更の様に驚かざるを得ません。全く身の置き所がありません。私も人の子です。誰が何と云つても轉向せざるを得ません。深い罪を犯した私自身は如何うなつてもかまいません。唯私の兩親のために多くの兄弟のために、そして我が日本帝國のために、私は自分の思想的轉向を更に深める

ことを決意しました。牧師や先輩を屢々訪問し、教會とその宗教的會合に出席し、聖書、宗教書を耽讀致して居ります。斯くして現在では尙色々な未解決な問題を有しながらも、其の根本に於ては一切の過去の思想を擯り去り新しき世界へ、力強き第一歩を踏み込んで居ります。私の心の底には幼ない時に植え付けられた信仰の根がより強き姿となつてひしひしと蘇りつゝあります。父母は近頃の私を見て非常に喜んで居ります。私は近頃親に孝行する喜びをしみじみと味合はされて居ります。私が此の如き邪道に踏み迷つたことは、私にとつて一つの幸福であつたと思ひます。それは神の恩寵でありました。何となれば、さうした道を辿らなかつた場合よりも、又さうした過程を経なかつた人々よりも、恐らくより深き家庭愛に目覺めることが出来、より強き信仰に生きることが出来、又我が日本帝國の眞實をより強固に把握することが出来たからであります。

最後に、今後は政治運動には絶対に参加せず、深い信仰生活に入り、そして、私の専門である電氣工學の研究に没頭し、それによつて、多少とも自分の罪を贖ひ、我が日本帝國のため微力を盡し度い決心であります。

昭和×年一月十七日

××控訴院長殿

N . S

某大學法文學部卒 C.N (當二十六年)
 家庭の状況……父、母、兄一、妹三。父の恩給による生活
 生活程度……中位

一、家庭の状況

私の家は父は岩手縣、母は大分縣の産にして父は體業に關係して九州に來りて結婚せるものなり。資産と言ひては別になく、父の××製鐵所勤務の給料により生活し來る。その給料は百圓位より二百圓位にまで年を追ひて増加せる故生活状態は中流家庭としては先づ良き方と思はる。家庭生活は両親、親子の間至極圓滿、唯、父病身なる故に母の苦しみありしならんも何等小供達に暗き影響を及ぼせしことなしと思はる。父は漢學と宗教に結び合はされた嚴格なる日本國民としての精神と道徳とを有し、母は又母の父(祖父)より傳へられたる佛敎的の道徳を持ち、後、天理敎の敎へを受けて神に對する強き崇拜心を有す。かゝる両親の許にありて、幾分冷い感をも思はせる道徳的、精神的な家庭に生育されて來た。

私の學業は小學校中學校は自宅より通學し、高等學校に入學すると共に寄宿舎に入り月々三十圓を學費として實家より受け、大學(××大學法文學部)に入學すると共に五十圓の學費を支給さる。その學生生活は

何等不足なく、將來文筆業者たらんとして日本及び外國(英、獨)の書籍を(主として小説)亂讀す。

現在の私の生活は××堂、××堂等の翻譯、筆稿、著作によりて月收四五十圓にしてその額に達せざるときには實家より送金を受く、依つて妻の給料と共に經濟上生活に何等不足なし。

私の家庭には繼母、養父母などの複雑なる事情なく思想性格の上に影響を及ぼせるものありとすれば、私の第二人の死にして二人の弟は共に四歳の年に死し、その死は私に甚だ強い打撃を與へ、人間性のモロサを強く痛感せしめられた。此の事實は私の思想上に幾分の虛無を感じしめたのではないかと思はれる。

二、社會科學研究の動機及それによる思想の變遷

私の中學時代は思想的には全くの無色彩でありまして、寧ろ思想的に種々の色分けのある事も全然知らず、全く子供の狀態で過して來たのでありまして、父の職業が××製鐵所に勤務して工科の方面でありますし、又私自身數學が得意であるといふ様な至極單純な漠然とした理由から××高等學校理科に入學したのであります。高等學校も初めの一年間は全く中學時代の延長と言ふ様な何事も意識しない子供の狀態を脱れないまゝでありました。高等學校二年の頃より寄宿生活によつてボツ／＼世間を知り始め、種々雜誌等を読み始めると共に(それまでは雜誌なども家庭内で見せなかつた關係上、手にした事はありませんでした。文學方

面に趣味を覺へ、種々文學方面の書を漁り讀みましたが未だ思想方面には全く無知識で當時流行してゐた心境小説を耽讀し、又自らもそれに類した短篇小説などを書いて得意になつてゐたのでした。

その頃高校内には社會科學研究會なるものがあつてその署名のピラを校内控室にて散見したこともありましたが、私が理科に居ましたのでその意味目的なども知る由もなく、文學方面とも凡そ遠いものゝ様に思つて無意識のうちに見過して居りました左様な會に就きましたは全然興味もたず、關心も置いて居りませずその會の性質を知り度いとも思ひませんでした。

その後私の二年の終り頃、即ち大正十五年二月頃だつたと思ひますが社會科學研究會に關係してゐた人々が退學を命ぜられ學内にストライキが起りかけたことがありました。この時に初めて社會科學研究會なるものが社會主義を研究してゐる會であることを知り、校友會乘取りや、總務選舉に手を出したり、種々陰謀をくわだてゝゐたことを耳にし、いたく驚き社會主義なるものが恐る可きものであることを感じました。この事は私の日記にも一筆してゐたことゝ憶えて居ります。

この事件がありましてより社會主義なるものも一通り知つて置き度いと思ひまして、たしか大正十五年三月頃だつたと思ひますが、××市天神町附近の古本やよりその書名、著者名ははつきり憶えて居りませんが、社會主義解説の書を買ひ求め、之によつて社會主義にも色々の區別のあ

ることその主張も一様でないことを知りました。然しそれはたゞ社會主義の種々の色分けを知つて私の知識を増したといふ程度にすぎず、どの主張が最も正しいか、どの主張が最も信すべきものであるかを判断するには至りませんでした。

私の高校時代の社會主義に對する知識はこの程度を越えないもので又この程度以上に研究する必要を感じませんでした。

然し大學に入學して後昭和三年頃よりプロレタリア文學がデアナーリズムを賑し初めました時、改造、中央公論、新潮等の諸雜誌及び諸新聞の文藝欄などにより、その文學理論、作品を読み、在來の文藝と對立した文藝としてプロレタリア文學なるものゝ嚴然として存在することを知り、又その勢力の強さに強く驚かされ、一通りこれを知らなくてはならないと思ひました。然しこの文學が如何して在來の文學と對立しなければならぬか、又社會問題と文藝とが何故結合されなければならないか等の問題に對しては私の思考し得ない問題が多々残されて居りました。この後私はこの疑問の點を解決したいと思ひ、また私自身文藝家として立つ以上これ等の疑問に解決を與へることは必須なる事と思ひ、又これ等の疑問に解決を與へる爲には單にプロレタリア文學理論のみを研究するばかりでは不足であつて、マルクシズム全體に對する理解をも必要とするものである事を感じまして左の諸本を昭和三年より五年頃までに讀みました。然しこれらの諸本は私の漁つた本の中の極く一部分に止まる

ものであつて何時、何處で購入したかをはつきりと記憶して居りません。

デイーツゲン

マルクシズム認識論

同

哲學の果實

ブハーリン

唯物一元論

其他「戦旗」を二、三號買つて、主として文藝を中心としてマルクス主義を理解せんために、全く他に指導者のある筈もなく、私自身の判断に従つてプロレタリア文學理論を知り度い理解したい事の爲に、それに關係ある單行本文は諸雜誌の記事を読みました。然しそれはたゞ行きあたりばつたり其の時々に入れ得たものを読んだに過ぎず、現在離の書いたものを何時頃見たかをはつきり明言することが出来ないのは残念ですが、かゝる讀書を通じて得ました私のプロレタリア文學に對する見解はプロレタリア文學なる在來の文學と對立的な立場に立つて現はれた文學も、要するにロマンチズム文學の後にそれと對立して自然主義文學が現はれたと同様に時代の變遷に應じて現はれたものであつてプロレタリア文學が現はれたが故に在來の文學が全部否定し去られるものではなく、プロレタリア文學も要するに文學の一つの形態であつて在來の文學が否定せられてプロレタリア文學のみが存在し得るものでなく、ただ在來の文學の中にプロレタリア文學と云ふプロレタリアの生活を描く新しい一面が生れ出たに過ぎないといふ事でした。例へて申しますればプロレタリアの生活を描いた小林多喜次の「カニ工船」が文學であると

同様に、トルストイの「復活」もシエクスピアの「ハムレット」も文學であつて、プロレタリアの生活を描いた「カニ工船」のみが文學であると主張することは出来ないといふ事でありまして、其の作品の良否はたゞその文學としての藝術としての完成の程度に依つてのみ決定せらるべき可きものであると思ひ、又現在でも左様に考へて居ります。それに私のプロレタリア文學作品を讀んだ範圍も僅かでありまして

小林多喜二

カニ工船

同

工場細胞(？)

藤森成吉

何が彼女をそうさせたか

位を記憶するに過ぎませんが私の讀んだ範圍内に於てのみ申上れば、その作品は在來の文豪の諸作品(例へばシエクスピア、トルストイ、ドストエフスキの諸作品)と比較して甚だ粗雑なもので私は到底それを在來の作品と並び稱し得るものではないと信じて居りましたし、又現在左様に信じて居るものです。

これが私の昭和五年頃までのプロレタリア文學に對する見解でありまして、マルクシズム全般に對しましては別に申上げる程のはつきりした見解はもつて居らず、社會主義のうちでも、社會民主主義と共產主義とに如何なる主義の上の根本的な相違があるかも知りませんでしたし、又知りたいと思ひませんでした。

其の後昭和六年頃よりは寧ろ社會主義的な思想の研究を離れて、マツ

クス・シエラー等を中心とする人間學的思想に敬服を感じ、その廣汎なマルクス主義をも抱括して人間なるものを再認識せんとする思想の研究に

理想社發行の人間學

マックス・シエラーの諸譯書

等を読みました。私の從來の文學に對する考へ方より致しますれば、この人間學的な社會人としての人間を中心とした思想が最もピッタリと私の考へに當てはまる様に考へられました。

其の後昭和七年四月上京致しまして、×大時代の友人T・Tと合ひまして共產主義なるものゝ勢力が甚だ大なること、その思想を一通り知つておかなければ話も出来ない様子であることを感じました。これは殊に私が田舎より急に出て來て東京の刺戟的な空氣に觸れ、私自身の力に不安を感じたよりなさを感じたことから、殊に共產主義なるものを知つておかなければならないと思つたのでした。然しその爲にどんな書物を読めば良いのかどんな研究方法を取れば良いのかは知らないまゝに今から考へれば無意識の中にアチられてゐたと思ひます。

此頃讀んだ本はTと交つてゐる中にその名を聞いて知つたフリーチエの諸本でした。

フリーチエ

藝術社會學の諸任務

カ

ヨーロッパ文學史

然し未だ共産主義なるものを具體的に述べた本を読んだ事なく文學的にプロレタリア文學を知らんとしても、その根本をなすとも思はれる共産主義の理論を知らない爲に眞の理解が行きかねるのであると思ひました。

その後Tに紹介されてから共産主義を知る爲にはレーニンの書を読めを言はれ

レーニン 組織論(改造文庫)

何をなすべきか(岩波文庫)

等を手當り次第に七月頃買ひ入れましたが、共産主義の原理に對して研究不十分である爲と、ロシアの革命運動に對する知識がまるつきり無い爲と、レーニンの著がその時代の個々の事實に應じて書かれてゐるのにその事實に對する知識が全く無い爲に、初めの數頁を読んだ後はそれ等を読む事を止めてしまひました。

其後八月初めNに紹介されて現在最も共産主義に主要な問題は反戦の問題である、これを最もよく理解する爲には

レーニン 流れに抗して(戦争と社會主義)

を讀めと言はれ八月初旬神田の古本屋から同書を買ひ入れました。然しやはり前にあげました様な理由からはつきりその内容を理解することが出来ませんでした。それに前にありました様なレーニンの書は私の専門

である文學とは凡そかけはなれた書であります爲と、私の生活上の仕事及び私の専門研究方面であるアメリカ文學研究の爲に多數の時間を費はれて、専門外である共産主義に對する研究はウヤムヤの中に放棄せられて居りました。

其後八月下旬以後は共産主義を研究しなくても立派に文學は成立し得ること、又共産主義の運動に参加しても決して共産主義の研究の役に立たないことをはつきり知りまして、私の今までの行動の誤つてゐたことを知ると共に、専心私の専門であるアメリカ文學の研究とそれによる私の生活上の經濟上の保證を得るためにその頃より引受けて居りました××堂より發行する筈の翻譯書の完成に力を致しました。勿論その間にもアメリカ文學運動を知る爲にアメリカプロレタリア文藝雜誌、ニューマツセズは××堂より八月號九月號等を買つて讀みましたが、これはたゞ私の商賣上研究上仕事の上から買つたもので其の他の意のないものでした。

又八月初めNを知つてより、彼が私宅に來ました時、二三度「赤旗」を渡されました。そして彼の説明するまでもなくT、O、Tの諸氏より共産黨の機關紙として「赤旗」のあることを聞いて居りました。其の後秋山に紹介されましたよりも、「赤旗」の白木屋の包紙に包んだものを九月初めから十月中旬頃迄に五・六回渡されました。然し私は前にも申しました様に共産黨といふものに對する理解が十分で無い爲にその新聞に私は共産主義なる思想を研究せんとしてその方向、目的を誤り、思想研究の域を越えて實際の運動に多少なりとも加はつたことは私の大なる誤りでありました。このことを私は將來の私の態度の一端としてこゝに記して置きます。尙このことは後により詳細に申述べたいと思ひます。

三、將來の態度

私はこれまでも述べて參りました様に、私の實際運動に多少なりとも参加致しました事を甚だ社會的にも個人的にも輕率な、考への足らない誤つた行動であつたとさつて居ります。今から考ふれば一種の熱病にかゝつたのかとも思はれる位に輕率なる行動をもさまで輕率なりとは思はず、社會的に罪であることも深く罪であると自覺して思ひ止まることを爲さなかつたのは、私の重大なる誤りであつたと考へて居ります。私の兩親も私の斯様な輕率な行動を取つたことは未だ知らないかとも存じますが、兩親の心配を考へましては私は現在堪へ難い良心の呵責に打たれてゐる譯でございます。

私は今後あくまで社會の道徳を遵奉致しまして私自身の輕率なる考に對しましてはそれを行動にうつす前に明かなる自己批判を與へ、それが日本國民としての行動に恥ぢず、又社會道徳上誤りでないことを明かに致しまして後に、私の行動を取るやう十分慎重なる態度を取り度いと思つて居ります。私は私の犯しました罪に對しましては此處に總ての誤つた行動を申述べましたと共にその誤つた行動の總てを社會に對しておわ

書いてあることは徒らに煽動的で普通一般の新聞の様な報導の機關としてよりも寧ろアヂテイションの書の様な氣がして、勿論その内容を信じやうと思ふ氣持などになり得ず、今まで私の讀んで居ました様な研究書とも異なつて内容的にも甚だ淺薄なものである様に感じ、こんなアヂには乗りたくないと思ふ様な反感さへも感じました。眞面目な研究書にのみ没頭して居りました私に取つては、共産黨なるものも、もつと眞面目にその新聞によつても、その主義の研究が出来るものと思つてゐましたのにそれを裏切られ、甚だ失望を感じた譯であります。かゝる事實より私は將來の方針としても甚だ誤つた方法であつたと知りました。

斯様に私の共産黨と幾分でも關係したことは、私の文學研究の上で共産主義なるものに對する知識の足らないことを知つて、それを知り度い爲に、早計にも實際運動に加はればそれを知る事が出来るだらうと思つたことに原因してゐたのでありまして、今年八月下旬より九月にかけて私のそうして實際運動に加つたことの非なること、誤つてゐた事を意識して來ますと同時に強く悔悟の念に打たれ、その後は實際運動とも縁を切りたいと思ひまして、その頃私の宅にしばしば泊りに來てゐましたAにも暗々裡に、私の本職の方の仕事のいそがしい事を理由として相手にならない様にしてゐました程ですし、「赤旗」も渡されるまゝに見出しの文字を見る位でほとんど内容に目を通すこともなく燒きすてしまつてゐました。

び致す次第であります。

一三

某官立大學英文科 W・G (當二十三年)

關係せる事件の種類……R・S加入、同盟加入

家庭の状況……父死亡。母は行方不明。兄弟なし。伯父の

家に生活す。生活程度、中位

學費の出所、金額……伯父より(月三十圓)、家庭教師によ

り(月二十五圓)

一、家庭の状況

母に付いては戸籍簿本面にて名前を知つてゐる丈である。父の生前何回となく尋ねて見たが何故か答へて呉れなかつた。兄弟なし。現在の養父は實父の直兄で、私は幼時より伯父の家に引き取られて生活してゐた。それは伯父の實子が或る事情の爲め廢嫡されてゐたからである。

伯父の家では盲目の祖母が殊の外愛してゐて呉れたが、大正六年祖母が死去し、其後伯父が妻狂ひを始めた爲めに、夫婦争ひが絶えず實父の許に歸り度くて堪らなくなつた。大正八年九月當時九歳の時、單獨大阪より無賃乗車をして奈良の家へ走つた。それから大正十一年正月父が病死する迄の三年間時に弱をすゝる様な苦しい暮しをした。だがこの緊張した生活が學校の勉強に勵みをつけ、今迄中以下であつた成績も×××

なんて「セクト的」な組合は組合として存立の意義を有しない。

昭和六年二月實際上の經營困難と、右に云つた理論的行きづまりから組合が解散されると共に、この頃から社會問題に對する態度が空想的、理想主義的なそれから、科學的、具體的分析のそれに轉換しつゝあつたと云へよう。マルクス主義レーニズムの研究の直接の動機となつたのは昭和六年三月の×××××左翼學生三十餘名の處分であつた。一度に三十數名の學生を失業地獄のどん底に抛り出す事は、實に苛酷な仕打だと思つた。就中處分されたH・S(當時三年)は高師入學當初から無二の親友であつた。彼を失ふ事は私にとつて非常な衝動であつた。彼が郷里へ歸國すると云ふ當夜上野不忍池の周圍をひいてH・Sと同級)とH・S私の三人で歩き廻り、深更迄話し合ひ、二人からアヂられ、遂にどこかの讀書會に入つて勉強する決心をした。C・Tが誰かに紹介して呉れる約束で其夜は別れた。

四月上旬から池袋の喫茶店「銀すだれ」でC・TよりT・A(昭和六年四月退學)に紹介されN・Kと三人で讀書會を持つ手筈を相談した。この讀書會は六月末迄続いた。テキストとしては

「第三期とは何か」 プロ科出版

其他一・二冊を用ひたが書名は今一寸失念した。慥か支那革命に關したものであつた。讀書會の方法はテキストに就いて三人が交替で出来る限りの資料を蒐集し、纏めて来て發表し、それに對し質問をし意見を述べ

××附屬小學校の五年を終へる時には首席となつた。實父の死亡と共に再び大阪の伯父の家に引取られ現在に及んでゐる。養子として入籍したのは今年四月の事だつたと思ふ。

伯父は元、手傳職をし、傍ら荒物店を開いてゐたが、大戦中及その直後の好景氣時代に相當蓄め込み、私が引取られた頃には貸家四十戸餘、土地五百餘坪持つてゐた。現在は、他人の負債の連帶責任で大分失ひ、貸家七、八戸、土地百五十坪位に減少し、店も畳み、月額二百餘圓の家賃の上りで生活してゐる。目下私は家から月三十圓の送金を受け、家庭教師をやつて二十五圓の報酬を貰つて學費に充てゝゐる。

二、社會科學研究の経路

昭和三年十一月御殿場に開催された全國基督教學生協議會に高師代表として、出席した事が社會問題に注意を向けた初めであつた。

其後右の會議に出席した帝大、高師、女子英學塾のクリスチャン有志で組合員總數五十名に過ぎない模型組合を設立し、消費組合の研究を始めたが結局「搾取無き共働・互助」の理想社會則ち「神の國」建設こそが、我々現在基督教者の使命である事、その手段として協同組合運動が「我々クリスチャン」にとり「最も平和的」であり、「イエスの精神」にかなつたものである等々のおしやべりを繰返したに過ぎなかつた。

金融資本獨占時代に於ける消費組合、協同組合運動の革命的意義は微の微たるものである。殊に組合員五十名に過ぎず「基督教學生消費組合」

合つた。向T・Aが當時勉強してゐた明治維新史の研究發表をやつて呉れたが、明治革命の辯證法的説明が来るべき革命の正しい見通しを持つ上に絶大の關係を有するものとして熱心に討論し合つた。

この讀書會は初めての私にとつては一寸高度過ぎた様で當初つて行くのに多少困難を感じたが、傍ら

- フインゲルト 史的唯物論教程
- タールハイマー 唯物辯證法入門
- ブハーリン 唯物史觀
- ブハーリン 唯物史觀批判
- 河上肇 第二貧乏物語 改造附録
- レーニン 帝國主義論 岩波文庫
- 無産者政治教程
- エンゲルス 社會主義の發展

等々のマルクス主義入門書を繕き、勉強した結果、帝國主義時代の激化する諸矛盾の對立が判然と認識出來た様に思へた。そしてこれこそ、讀書會こそ「本當の學校」だとさへ感じる様になつた。

同年の夏休みは山中湖畔の××寮で過したが、其間T・Aより雑誌、「新興教育」八月號一部の送付を受けた。山中滞在中八月十五日頃學校から「ボコウキキスダカヘレ」の電報を受けたので直ちに上京、所謂「教育確立、教育尊重」運動に参加した。私はこの運動で實行委員に擧げられ

てゐたが、その關係上自然クラス委員をやつてゐた。

S・H(當時哲學科三年)と知合ひになつた。彼は既に相當運動に關係があつた様で、自然話も合ひ九月から一緒に研究会を始め事を約した。第一學期の開始と同時に、私がN・Kを通して行き、S・HがT・H(當時三年)を連れて來、四人で研究会を持つ事になつた。今にして思へばこれが今回の學内組織の芽となつたのである。

テキストは、

ラビドス マルクス主義經濟學

ビートニツキ 組織論

十二月から「第二無産者新聞」が入る様になり、又時々「赤門戦士」も入つた。

以上の様な研究に依つて私はマルクス主義が、オウエンの空想的社會主義、フランスの機械的唯物論、ヘーゲル辯證法の三源泉に基き、マルクス・エンゲルスの二天才に依つて建設された理論であつて、主として二の部分より構成されてゐる事、則ち觀念論乃至機械的唯物論と正しく對立する史的唯物論の哲學的側面と、社會發展の法則を社會經濟機構に内在する矛盾、それは生産力と生産關係との間の矛盾として顯現されるの發展轉化に求める唯物史觀の社會理論的側面とより成つてゐる事を知つた。又レーニズムが偉大なる革命家レーニンに依りて基礎付けられたマルクス主義の帝國主義時代に於ける、更に發展した様相である事を知

つた。その首尾一貫せる論理的構成は恐しく魅力的であり、當時の私の知識欲を満足するに充分であつた。殊に

マルクス 「フオイエルバッハに關するテーゼ」

中の「哲學者は世界を種々に解釋して來た。變革する事が必要であらうに。」の一句が非常に強く自分を把へた。人間の社會的實踐を強調する點に於てマルクス主義は著しく革命的である。實踐から切離された單なる理論はオシヤベリ以外の何物でもない。この理論的歸結が私をして少なからざる恐怖の念を冒して實踐に移らしめたのである。

三、自己批判

以上が、私の成して來た行動の一切である。事實と相違してゐる所があつても、決して意識的に事を歪曲する意圖に出たのではない事、それは私の記憶の不正確に基く誤謬である事を御諒承下さい。成程、最初の内は同志をかばふ目的で出鱈目の陳述をしてゐた。だが現在の私の心境は、過去の生活を偽らずぶちまけ、すつかり清算して甦生したい氣持ち一杯である。一週に互る留置場生活は、初めての私にとつて非常な苦痛であつたがそれ丈自分の今迄の行動を厳正に批判する機會を與へて呉れた。一言にして言へば私は非常に輕卒だつた——と云ふよりも私の性格の弱さが禍したので。

マルクス主義レーニン主義の科學的優位性を承認した私は次に又理論と實踐との不可分性を承認せざるを得なかつた。しかし乍らこの過程

は何處迄も論理的必然であつて、社會的必然ではなかつた。僕の場合支配階級に對する憎惡はどこ迄も擬性的であつて本物ではない。従つて實踐に對する時、何時も恐怖が逐つて來た。そこには生拔きのアルバイターがマルクシズムを把握した時の様な力強さは到底湧いて來る筈がなかつた。

皆と一緒にやれ連絡だ、やれ會合だ、やれ論争だ、と云ふ風に熱中してゐる時には親身の愛情なんか忘れて仕舞つてゐた。夏休み大阪へ歸へつて養父母の献身的な愛を受けるに及んで、親子の間に斷ち難い絆の存在する事を知つた。果して私の父母はパーヴェルの「母」の様に、あの悲愁に堪へ得、その上に立ち上る事が出来るかどうか、恐らくは出來まい。次に私自身悲しみにくづれた両親の姿を直視するに堪へ得ようか、恐らくは堪へ得まい。かくて敗北主義的な感情が強く心中に湧くのを感じた。だが上京後二回の細胞會議にこの感情を押しかくして出席せねばならなかつた。今度のカタストロフキが案外早く來た事は私にとつては寧ろ幸福であつた。幸ひまあ、深入りしてゐない今の中に過去の一切の組織關係を絶ち切り、甦生し度いと存じます。

一四

某官立大學學部三年 S・S(當二十四年)

關係せる事件の種類……學内共青同盟員

處分の種類、程度……停學(自昭和×年四月十二日至同×年十二月十二日)
家庭の狀況……父亡し母健在兄二人長兄は郷里にて手廣く海產物商を営む中流以上の生活をなす次兄は元××高商教授
學費出所 金額……長兄より受く月額六十圓
健康狀態……普通、強度の近視
性質……溫良、無口、學究的
才幹……有

謹啓

其後、先生におかせられましたは、何の御變りもなく益御健勝の事と拜察し御喜び申し上げます。

降つて小生事、其後無事、只管、謹慎の中に毎日を暮してゐます。乍他事御休心下さい。

留置場の生活から解放されました當座の昂奮も、今は、すつかり鎮まつて、過去の自分の出來事を、あだかも、自分に何の關係もない小説中の出來事を讀む様な、極めて冷靜な、嚴正な氣持で、ふりかへつてゐます。そして 嚴な自己批判を下してゐます。

今度の小生の事件のために、色々な方に御迷惑をかけた事をつくづく、濟まなく思つてゐます。そして、色々な、御指導御鞭撻下さいました方

々に心から感謝してゐる次第で御座います。今日、しづかに、過去の自分を批判して見る時、自分に幾多の間違ひがあつたことを知ります。私
 が知つてゐた社會は、本の上で知つた社會で、私は、現實の社會、所謂
 「世間」と云ふものを知らなかつたこと。自分は何でも出来る、自分
 の能力を過大評價してゐたこと、即ち、思ひあがつてゐたこと。親や兄
 弟の愛が如何に大きいかと云ふこと、そして、それを私が忘れてゐたこ
 と。

私が間違つてゐたのでした。私の認識不足だったので。今は、唯、悔
 悟の心で一杯です。之れを機會に全く更生、皆々様の御恩に報ひたいと
 云ふ決心で一杯です。

毎日××さんの嚴重なる監視の下に、訪問者も、充分な取調の上で面
 會を許すと云ふ程の厳しさで、毎日を送つてゐます。又、××先生の御
 親切な御指導の下に、八月一杯までに卒業論文を書きあげると云ふ意氣
 込みで、毎日、終日家に籠居して勉強してゐます。又、毎日講義を聞
 くことを許されないと云ふ状態にあるがために、それがために、毎日講
 義をきいてゐる人達に遅れをとると云ふことがあつてはならないと一所
 懸命に勉強してゐます。又、時々、××先生の御宅に伺つて、色々、
 親しく御指導をうけてゐます。

××先生の御話では、出来れば毎火曜、先生の御宅にあがつて御話をき
 く様にとのことです。私としても、出来るかぎり、御邪魔して、暖かい

へないものがあつた。冷水摩摑。この一ヶ月で、モリモリと、體が、回
 復した。

〔下宿の〕小母さんに「今日一日、外出は許しません」と云はれる。今
 日はメーデーで、外出させれば、自分が又、どんなことを仕出かすか、
 わからないからだとのこと。自分も、勿論、仕出かしてくれと云はれて
 も、こちらからお断りだ。終日、籠居して勉強することにする。思へば、
 昨年の今日、××××のデモに誘はれて、××ヶ原に行つたつ。往く
 時はかなり元氣だつた。然し、恐ろしさに、デモにも加はらずに、にげ
 てかへつたものだつた。そして、もう、こんな運動から、手を切らうと
 決心して、友人の訪問をさけるために、こつそり、下宿を引越して来た
 のが、この家だ。あの時、完全に、手を切つてゐたら……と、後悔する。
 勿論、十一月から、轉向しかゝつてゐたものゝ、遂に、弱い性格の自分
 だつた……メーデーと聯想して、過去の生々しい記憶が、それからそれ
 へと、つゞく……夕刊には、デカノくと、行列の記事と、寫眞が出て
 ゐた。然しそれを讀んで何の興奮もおぼへなかつた。何の興味もわか
 かつた。丁度火星での出来事の様子、自分には、何の係りもない、否、
 そんな記事を読むことすら、今の自分には、恐ろしいことだ、むしろに
 が／＼しいことだ。何と云ふ變りやうだらう。社會の一切の出来事が、
 正に自分には、*foreign*だ。尼僧の様な、今の自分……つく／＼あはれに
 みなる。自分の身にふりかゝつて来た出来事を「あきらめ」の眼をもつ

雲圍氣の世界にふれて見たいと思ひます。

尙私の最近の動靜を御報告するために、五月一日の日記を再録して、同
 封しておきました。

今後は、一層慎重に身を持ち、眞面目な學生として勉強して行く積りで
 す。

末筆乍ら先生の御健康を祈ります。

五月二日

敬具

五月一日

七時、何時もの様に、起床。然し、體だの節々がいたむ。何しろ、與
 瀨から、小佛峠、高尾山を経て淺川までの山徑を四里も歩いたためだ。而
 かもこんな遠路をあるいたことは初めてなのだ。でも、久振りに、ゼミ
 ナリストンと、話したのは、うれしかつた。××譯で、はじめてみんな
 にあつた時、自分の方で内一寸、ひげ目を感じたが、みんな、こんど
 の事件や處分等には、一向頓著なく、普通通りに、暖かい心で話しかけて
 くれたので、自分のひがみもすぐ消へて、昔の様に愉快に話した。そし
 てすぐに、笑談口など、たゞきあふ様になつた。むしろ、後で知つたこ
 とだが、自分が案外、朗らかな、明るい氣持でゐることにおどろいたさ
 うだ。それにしても、わざ／＼、旅行に誘つて下つた××先生の御親切
 には、涙の出る程有難くなつた。又、ゼミナリストンの同情も感謝にた

て見る様になつた自分、然しこの「あきらめ」の中に、心の平和のある
 ことを、今になつて、はじめて知つた。

Lehrer: Grundsätze d. ökonomischen Theorie を、夕方までに、十二
 頁讀む。獨逸語の力の貧弱さに、つく／＼なげなげなる。然し、他の
 者に負けたくない。昨年一年、つまらないことに浪費した時間をこゝで
 取返して見せるのだ。

庭のチューリップが三つ咲いた。つゞじも、そろ／＼開きかけた。自
 分は今まで、自然の美しさを知らなかつた。否、そんなものに氣がつく
 程の、氣分のゆとりをもつてゐなかつた。否そんなものを否定してかゝ
 つてゐたのだ。然し、今度はじめて落付いた氣持で、自然を觀賞する氣
 持になつた。云はゞ、今はじめて完全な感情をもつた人間になつたのか
 も知れない。そして、こゝに、自分の魂の平和な住家を見つけたのだ。

夕方、下宿の前の田圃を散歩。土堤の上を、××の方へ走りすぎる電
 車を見あげて、一寸、センチになる。

夜 *Lehrer* のつゞき、少し。「ファウスト」を少し。悲劇第一部から
 第二部への移行行きに、可成の飛躍があるやうに思へるけれど、今の自
 分の場合を考へて、萬更、不自然だとも考へられない。時は、はや消え
 失せけり、苦しみも幸ひもなし。豫め感ぜよ。爾は癒へん。新らしき日
 の光を頼め……の一齣に心動かされる。十二時就床。

五月五日

例日の様に。七時起床。冷水摩癢。朝食後、新聞に、一通り目を通して後、軽い散歩。八時半から正午まで、讀書。

Lehrer: Grundsätze d. ökonomischen Theorie を読む。今、自分が切抜けた、ある、この悲しい考へを忘れる一番いゝ方法は、讀書三昧に耽ることより他に、何ももない。何もかも忘れて、本を讀んでゐる間が、一日の中、自分にとっては、一番たのしい時の様に思へる。

夕方、何の豫告もなく、突然、××の兄、×一、上京。二月末、××警察署で、別れて以来の初対面。この三ヶ月の間の、自分のための心配が、はつきりと顔にあらはれてゐた。今までに見たことのない程に面やつれた、この兄の前に、何と云つて、御詫びしていいのか、その言葉も、餘りの感動に、口を突いて出て来ない。兄の話す所に依れば、母は、この事件以来めつきり、白髪がふえたとか、この四月小學校に入つた兄の娘は學校で友達に「共產黨、共產黨」と云はれるので、學校に行かないと云つて、両親を苦しめてゐるとか、又自分が××時代、下宿してゐた××さんは、自分が、警察にひつぱられたときいて心配の餘り、泣きながら、××からわざわざ、××の家に訪ねて來られたとか……等、等、その一言一言が、自分の腸をひきさく様に、自分の心を痛みつける。自

分が間違つてゐたのだ。自分は、自分一人の苦しさしか考へなかつた。自分は、親兄弟、先生、學校、さては、自分が、御世話になつた凡ゆる人々に、如何に大きい悲しみと、苦痛と失望を與へるであらうか、を考へなかつた。自分は、自己犠牲と云ふ崇高な考への下に、行動してゐると自分では思つてゐた。自分は自らを利他主義者だと思つてゐた。然し、實は、自分は、最大のエゴイストではなかつたか。その間自分の得たものは、云はゞ、小兒病的な自己陶醉だけだつた。然し、その結果、自分の四圍の人々に與へたものは何だつたか。之れが、最大の利己主義者でなくて何だらう。自分の輕卒な、無思慮な行爲が、これ程までに、多くの人達に、多くの心配をかけたのか、と思つたら、今は唯、默然として自分の犯した罪の前に、頭をたれるより他になかつた。今となつては、唯この上は、將來、更正の路を辿り、この人達の大きな期待に應へ、そして、鴻恩の萬分の一にも報ゆることを深く心に期するだけだ。今更、自分の任の重きを思ふ。

五月七日

朝早くから、兄と一緒に、明治神宮に參拜する。今や、變つた根をもつて、變つた心をもつて、見、且、感じた。神宮の森の、滴る様な新緑が、自分の心の奥底にある悲しみを、とかしめた。神々しいまでに、たゞよふ雰圍氣に、思はず、襟を正した。神祕にむかつて、懇ろに最敬禮

した。百萬巻の書を繰くとも、なほ、日本精神の眞髓の把握は不可能であらう。明治神宮のこの神々しいまでの神氣に、思はず、襟を正し、帽を脱して頭をたれ得る者のみ、獨り日本精神を感得するの特權を享受し得るであらう。それは、正に理論ではない。生の全身の躍動である。かくして、自分も亦、今、はじめて、日本精神の眞髓にふれたものと云ひ得やう。

更に、足を、外苑、繪畫館に向ける。更に次に、靖國神社へ。皇國の英靈の前に、ぬかづく。

五月九日

兄と共に××警察署、警視廳、検事局へと、順々に、挨拶に行く。検事局で、××検事に、一昨日の明治神宮參拜の時の感想を話した所「それで君は、もう、立派な日本人だ」と云はれた

五月十日

今日は、兄が、東京を立て、××にかへる日。朝早く、二人で、二重橋に行く。朝もやが、お堀一面に立ちこめて、神々しい雰圍氣が胸をうつ。自分の拘留の報をきくや、直ちに上京。さんさんと降る雪の中に土下座して、不忠の弟のために詫びたと云ふこの處に、今、再び、兄弟二人相並んで、最敬禮した。全く無意識の中に、頭は、ひとりで、た

れるのであつた。胸中、正に、無想、正に、無念。

兄と共に途中、伊勢神宮、桃山御陵に參拜して、××にかへる豫定だつた所、急に、東京に、居残つて、勉強することが許される。獨り東京に、ゐることは、大きい危険があるかも知れないと、四圍の人々に、あやぶまれたが、結局は、自分一人の覺悟に依るであると、絶對危険なきことを、自ら保證した。かくして東京で卒業論文をかくことにした。

夜、兄は、東京を發つた。發車間きは、懇々と説教をうけた。その一言一句、正に、血のにぢみ出る様な言葉だつた。自分は今度の事件によつて、はじめて、眞の肉親の愛を知つた。はじめて、人の情を知つた。かつて、社會の暗黒面、人情の冷たさのみしか、感じなかつた自分は、今や、はじめて社會の明るさを、人情の暖かさを知つた。暗黒と、憎しみと、闘ひとにみちみちてゐるとのみ思つてゐた社會は、實は、明るみと愛と、調和との社會であつた。貪婪と憎悪と、相剋とのみだと見てゐた人情は、實は暖かさや和やかさと愛とで、一杯だつた。學生を左傾向から救ひ出すものは理論闘争でない、留置場の苦しい生活でもない、法律でもない、處分でもない、それは實に、人情の暖かさである。人情の暖かさを通じて社會の明るい側面を、従つて又社會の「全側面」を、正しく見せしめることに依つてのみ救ひ出し得るものではなからうか。

五月十三日

毎日、終日、籠居して、しづかに讀書に、日を送る。隠者のその様に、尼僧のその様に、心静かな生活を送る。時折、自分を慰めるために、訪ねてくれる友人の深切さには、涙がこぼれる程に有難い。今日はい君が学校の歸りに立ち寄ってくれた。学校の様子、ゼミナールの報告の様子、ゼミナール對抗の野球試合の話等……。学校の庭園の芝生の美しさ、食堂の友人達の愉快そうに話をしている有様、グラウンドで運動している友人達の姿、さては又、芝生に寝そべって話している友人達の和やかな情景、又新講義を、興味に充ちた眼を以つて、きき入つてゐる教室の景色、等等が、ほうふつとして、眼の前に浮んで来る。こうした生活の一切の喜びに、近づくことが許されず、世捨人の様に、終日一室に、こもつて、シヨンボリと讀書するあはれな自分の今のこの姿に、心暗然たるものがある。

五月十四日

快く澄み渡つた初夏の好天氣を機會に、久振りの氣晴しにと湯河原に行く。小田急で小田原につき、熱海行きを待つ間、小田原城址を見物、お堀の水の美しさ、本丸の青葉の美しさに、心は自づと和こむ。これ程に心平らに、自然の美しさに心うたれたことがあつたらうか。おしづぶされた感情、おしひしがれた情操、自然のしづけさとするはしさに觸れずに送つた過去一年。春の櫻も夏の青葉も、秋の草花の物やさ

しい風情も、何のひびきを興へなかつた、否、それらを受入れなかつた、受入れるためには餘りに氣分にゆとりのなかつた過去一年。今こそ、人間の、感情が全身に躍動するをおぼへた。

谷川の水聲を、右に或は左にききつつ、湯河原温泉へと、山そば道を登る。いで湯から上つて、浴衣にきかへ、青葉を渡る谷川風に涼を入れつゝ、目をとちて心静かに、宿の眞下を流れる水聲に聞き入れれば、一切の重い心は自づと和んで来る。この静けさ心の中には、も早、社會の矛盾に對する關心もなければ歴史の發展に對する、興味もない。今は唯、法悦境に似た、云はゞ安心立命の境に似た、不安のさかひに、身のあることを知つた。今こそ、靜かに、冷やかに、自分の歩いて来た姿を眺めることが出来た。自分にして若し、この様な境にあつてしづかに自己の姿をふりかへる機會と、そして、自制とを、もつてゐたならば、この度の様な輕卒な、無思慮な行動は爲さなかつたであらう。自分にして、若し、もつと、自然に親む程の氣分のゆとりがあつたなら、この様な極端な行動を考へることはなかつたであらう。

日が經つて、昇齋がさめるにつれて、自分の過去の姿が、自分の誤謬が、益々はつきりと、わかつて来る。それにつれて、自分の間違ひに對する後悔の心が益々強く自分を壓倒する様になつて来る。

久振りに大自然にふれた。そして自分の貧弱さ、みぢめさの感を益々深くした。

五月十六日

夜、××先生の御宅を訪問。そこで、偶然××君にあつた。この一月以來、はじめての對面。彼は、氣の毒な程、元氣がなかつた。學校を追はれることが、あれ程迄に、重い痛手と興へるものかと思つたら、自分に寛大なる處分を與へて下さつた諸先生の御同情に對して、感謝の念がわいて来た。自分も亦、學校を追はれてゐたら……考へて見るだけでも恐ろしいことだ。今、×××××の帽子をかぶつて歩けることよろびが、又自分が××大生であることの誇りが、心の奥底から湧いて来るのをおぼへた。思ひ出す。四月十一日、學校を追はれずに済んだ、との報を手にした時の喜びを。それは、生死の境を彷徨してゐた病人がその一命をとりとめた時の喜び、否、それ以上の喜びと感激であつた。それは××大に合格した時に経験した喜び以上のものであつた。××君は、自分と同様に、すつかり改俊してゐるらしかつた。それは自分にとつて、せめてもよろこびだつた。然し、自分と彼とを比較する時、自分が遙かに、幸せな位置にあることを知つた。何故ならば、何時から學校に出ることを許されるか、はつきりわからないにしても、ともかく再び××にかへつて、勉強出来ること云々望みが、あつたから。然し一友人として、心から、彼の多幸をいのらずにはゐられなかつた。

五月十七日

八四

五月十九日

終日籠居して讀書。五、一五事件の真相發表。號外を手にして、關係被告人の中、二十三四歳前後の青年の多いことにおどろく。又、彼らの懺悔録を讀んで心打たれた。同じ氣持の下にある自分。何時の時代にしても、不完全な人間の集りである社會に、亦、何らかの缺陷のあることは、まぬかれ得ないことであらう。地上に天國をきづくにしても、それは一朝一夕で成るものではない。それは、一步一步の、幾十年幾百年の改良の集積によつてのみ、よく爲し遂げられ得るものであらう。社會の變革が一朝一夕に依つて爲され得るものだと思つてゐた自分が間違つてゐたのだ。更に又、この社會改良の運動に参加する者にも、自づとその限界がなければならぬ。自分は、學生と云ふ身分である。この身分も忘れ、自己本來の業務を忘れて、かゝる運動に、關係してゐたことは、之亦、自分の重大な誤りであつた。

國家を憂ひ、社會を憂ふるこの關係被告人に對しては、心からの同情を捧げたい。乍然その手段にして、國法を犯した以上それに對して處分をうけることは、當然であらう。唯彼らが、他日、この手段によらず、國家のためにつくされんことを心ひそかにいひのると同時に、かゝる人達こそ、眞に、日本のために今後必ずや、偉大なる業績を爲すであらうことを期待するものである。

八五

午後、元××廳警保局長××氏を訪問。今度の自分の行爲について、悪々と訓される。「君達こそ、日本の next generation を背負つて立たなければ、ならない身だ。充分自重して、しっかりと勉強し給へ」と云はれて、大いに感激して歸る。

夜、〇〇××講堂に、××學會學術講演會に行く。學校の講義をきくことが許されてゐないので、せめて、校外講演會で、先生の講義に接しやうとしたわけだつた。久振りに先生方の講演をきいて、わずかに慰められて、かへる。

五月二十日

十日目毎に警視廳、××警部に顔を見せる様にとの約束で、今日丁度その當日に當るため、朝早くから起きて警視廳に行く。途中、明治神宮に參拜。はき淨められた玉砂利の上を、身も心も淨まつて、心しづかに歩く。人かげは見へない。ほのほのと明けそめた神宮の森の神氣に清淨な精神になつた。

×××で××警部に、面會。停學がとけるのも遠くはあるまいと、慰められて辭去。更に宮城を拜して歸宅。

五月二十一日

終日、籠居して讀書。夕方、××先生宅訪問。

衣を纏つた自分の姓名を發見したのでした。

掲示板に自分の名を見た時、私は今更ながら、罪業の怖ろしさを痛感致しました。自責と後悔の念が去來して、私は言ひ知れぬ苦惱に襲はれました。私は絶望の淵に臨んでゐるやうな氣が致しました。將來のことを考へると、頭の中が波茶々々になりさうでありました。

私は、此の日、今一度主事補殿にお伺ひすることがあつて參つたので、時間の来る迄、圖書館に籠つて黙想致しました。人に姿を見られるのが怖ろしいやうな氣がして、私は隅つこで小さく伏して居ました。つくづく肩身の狭い自分を發見したのでした。

十時頃、學生主事室を訪れ、主事補殿から、懇切な御説諭を戴きました。

誠に手前勝手なお話ですが、私は今回の處分が、過重だと思つたのでした。けれど、主事補殿は、私の納得出来るやうに、いろいろ御説明して下さいましたので、私も、當然の處分と悟り、深くこれに服する決心を致しました。そして、今後の注意やら何やら、種々承つて辭去致しました。やさしくお話しなされる主事補殿の御言葉聴いて、重い私の胸も幾分軽くなりました。併し流石に重い足取りで、家へ歸つたのでありません。

家へ著くと、父は已に、學校へ参ります爲に出かけた後でありました。私は部屋に籠つて、父母に對する不孝の罪を、とつおいつ考へて、

一五

某官立大學第二學年 I・N (當二十三年)

關係せる事件の種類……學内共青同盟支持者にして學外共青同盟員とも連絡をとる

處分の種類、程度……停學(自昭和×年三月七日至同年十月十四日)

家庭の狀況……父母健在にして姉二人妹二人第二人父の職業は象牙彫刻家計豊かなならず

學資の出所、金額……篤志家より月額三十圓補助さる

健康狀態……普通
性質……溫良、柔和
才幹……佛文學に興味を有す

三月八日

朝起きてみると、外は一面の銀世界で、其の上、粉雪が罪々として降り積りかけてゐるので、がっかりして了ひました。此の日は、私の最後の登校日なのに、天は無情でありました。私は心の中に、譬へ様の無い寂寥を感じながら、恰も厩所へ曳かれる小羊のやうな氣持で白雪を踏んで登校致しました。

複雑な氣持で掲示板のところへ来てみると、あゝ、私は其處に、罪の

人知れず涙をこぼしました。あゝ濟まないことをした、悪いことをして了つた、さういふ氣持で一杯でした。私は、はふり落ちる涙をそのまま、今後の父母への孝養、學業の精勵を自分に誓ひました。

父は、歸つて来て『お前があんなことをした以上、學校當局で、處分するのは當り前だ』と申しましたが、私の過去を許して下さいました。私は父に對して、改めて深くお詫言をして、謹慎を誓つたのでございませぬ。

夜、今回の件に就きまして、種々御迷惑をお掛けしましたので、先生宛に、詫狀を認めて、寢に就きました。

三月九日

朝、例の如く、冷水擦癢を致しました。冷水擦癢は數年來私が實行して居ります健康法でございませぬ。私は身軀は瘠せて居りますが、お蔭様で、至つて健康で、豫科入學以來、病氣で缺席したことは唯の一回もございませぬ。寒い頃は、相當辛いことですが、身體の爲には非常によい標でございませぬ。

朝食後の數時間を、讀書と黙想の時間に致しました。これから毎日續けるつもりでございませぬ。落著いて考へること、これは非常に大切な事であると悟りました。私達青年は、兎角沈思黙考といふやうな事から遠ざかり勝ちなものでございませぬ。其の爲、稍もすれば輕はずみなことを

やらかすのであると考へます。私の過去はさうでした。私が、如何に友情にほだされたとは云へ、國法に背くやうなつまらぬことに觸れたこと、それは、正しく私の反省が足りなかつた證據です。もと／＼私は左翼の本も多く読んで居りませんし、理論的に確信も持つて居りませんでした。マルキシズムの中に、自分の解けない誤謬があることも知つて居たのでござります。例を示しますと、民族性の問題が即ちその一つであります。彼の有名なスローガン『萬國のプロレタリア團結せよ』はマルクスの言葉ですが、之は單なる理想としては言ひ得るであらうけれども何等實現性の無い言葉であると思ひます。世界の人類は、民族々々により、各々性格を異にしていますし、風俗習慣も千差萬別であります。

それが單なる經濟的問題で一致團結出来るなんて考へられないことです。國民性、これは常に嚴然たる事實として君臨する大きな力でござります。國民性の特殊性を無視することは到底出来ないと思ひます。茲にマルキシズムに對する大きな、不可解な疑問があるのでござります。然るに、非合法文書などを見ますと、マルキシズムの誤謬なんて云ふものは決して批判せず、たゞ、只管煽動宣傳の文言を列ねて居るばかりでござります。その所謂アジプロが、非常に巧妙でありますので、うつかりすると、それに乗つて了ふのです。そして、無批判的、無反省的に、マルキシズムは正しいと思ひ込んで了ひます。其處へ『誘ふ水』が流れて参りますと、もう完全に盲動するやうになります。自分では些か不安

心乍ら周圍からアジられて、結局輕擧に出るといふやうなことになるのです。

實際過去を顧みると。馬鹿々々しくて仕方ありません。始終ビク／＼しながら……それは非常に陰鬱な生活です。幸ひ、私は深入りせぬ中に、學業の矛盾を強く意識して手を引いて了ひましたので、闇の世界に墮ちることなく済みました。

仍で、私は『行動する前にまづ考へよ』といふ言葉を座右の銘に加へました。

三月十日

陸軍記念日です。

過去の清算をしまして以來といふもの、私は物の考へ方を變へました。今迄、頭から、かうだ、と思ひ込んでゐたことを再考するやうになりました。マルキシズムにかぶれてゐた頃は、ブルジョア新聞はデマばかり飛ばすものと決めて居りました。併し乍ら、色眼鏡を取つて、正しい視力で見れば、何がデマであるか、無いかの識別がつくのであります。一概に資本主義的だとか、軍國主義的だとか言つて居つたものですが、それが如何に淺薄な考へであるかと解りました。冷静に物事の判断がつくやうになつたことは、ひとへに清算のお蔭だと思つて居ります。其の意味に於て、此の陸軍記念日を再認識致しました。そして思案の間を、遠く熱河の境に苦戦を續けつゝある皇軍への感謝の時間と致しました。

した。

夕刻、親しい友達が三人、試験が終了したから見舞に來たと申して、私宅を訪れて呉れました。談笑約半時、『元氣を出せよ』と言つて朗かに歸つて行きました。

檢舉以來、私のやうな者でも、心配して呉れて、友達から色々見舞狀が参りました。私は一々丁寧に感謝の返事を出しました。又、遂ふ友達毎に、心配をかけて済まなかつたと申してお詫びして参りました。全く友情といふものは有難いものでござります。

三月十一日

又、雪です、今冬は随分と雪が多く降ります。

……障子あければ銀世界、嗚や滿洲は寒からう、思へば涙が先に立つ……

唄の文句を思ひ出しました。

戦争といふ行為それ自身は全く世にも怖ろしい慘處であります。併し乍ら、爲さねばならぬ正義の戦ひは、世にも貴いものではないでせうか。新聞紙は張學良の没落を報じて居ります。正義に悖る施政の末路を、まざ／＼と見せつけられたやうな氣が致しました。熱河よ。學良無き後は、速に平和の郷土たれ！ 皇軍の無事を祈りました。

三月十二日

三越(日本橋)へ行つて、陸軍展覽會を観ました。滿蒙に關する資料が集められてあります。聯盟脱退後、假令、經濟封鎖をされても、我に滿蒙の權益ある以上、泰然自若たるものだ、といふことが圖示されてあります。之は誠に心強いことなので、大勢の人が熱心に注目して居りました。私も其の中に加はつて、非常時日本の世界に於ける地位を想ひ、國民としての覺悟を認識致しました。又、兵士を出した家族が、心からなる慰問袋を作つてゐる光景が人形で出来て居りましたが、ちつと観てゐて私は感激して了ひました。陰鬱時代には到底味ひ難かつた感激でありました。

外交史料展覽會といふのが矢張り此處(三越)に開催されてあります。明治以來國威進展の状態を明かにしてあります。松岡全權の聯盟に於ける態度こそ、新しき日本の強い意志を標示するものではないでせうか。

三月十三日

又しても白皚々。春の淡雪がよく降ること。

新聞の切り抜きをスクラップブックに貼製致しました。經濟と文學に關するものを多く主として輯めて居ります。これはなか／＼地味な仕事ですが、私は、帳面に、丁寧に貼つて居ります。自慢するわけではござ

みませんが、友達が皆褒めて呉れます。

佛蘭西語の勉強を致しました。佛蘭西語は私の最も好む仕事です。

三月十四日

午前九時半近く、本所に××助教授をお訪ねして、お詫びを申上げ、旁々ゼミナールの事に關して、いろいろ御伺ひして來ました。××先生は本當に優しく將來の勉強の方針などを大體お示し下さいました。

新聞社(東朝)提供の『皇軍承德入城』の映畫を観ました。山又山、雪又雪の熱河、悪路を征服して、猛進奮撃する皇軍の活躍を興味と感謝を以て眺めました。承德城頭高く掲揚された日章旗を見て、感激せざるを得ませんでした。

一六

某官立大學在學

K.K(當二十五年)

關係せる事件の種類……學内赤旗配布及黨家屋資金局新潟

出張所學生班に關係

處分の種類、程度……無期停學

親子關係……實父母健在、長男

父の職業……齒科醫

貧富の程度……普通

事は考へられなくなる。又よし社會の必然性を認めるにした所で、必然的に來るといふならば何も我々が努力をしないにした所で來るものであるから、我々がマルクス主義のために闘ふ必要を何等認めない。

又マルクスの本營であると云はれてゐる價值説について見るに、現在社會では決してマルクスの云ふ如き價值説の通りに、商品の交換は行はれてゐない。それをマルクスは價值説は定理である。即ち物理学に於ける落下の法則が事實に於て行はれてゐないにもかゝらず定理である如く、價值説は現實の社會に於ては色々の現象に被はれて説通りに現はれてゐないといふ様に説明をなしてゐるが、それにしても人の能力は一樣ではない。かゝる點から見れば、如何にマルクスが平均労働時間からして價值を計算し來つても、有能な人と不能な人とでは甚だ不平等である。機械力の發達によつて人の能力は一定の所へ接近し來るものであるといふかも知れぬが、機械力によつては出來ない仕事がある。例へば智的労働について見れば、之ほど能不能の差のあるものはない。人類にとつて有益な發明の如きはどうかして價值をつけるか？マルクス主義者はかゝる場合は例外であつて屢々はない場合であると云ふかも知れぬが、兎に角人の能力から考へて行くとマルクスの價值説は絶対に正しいとは云ひ得ないし、又階級なき社會は考へ得られぬ。資本主義を打倒しても、その次には當然又階級社會が來るものとし考へ得られぬのである。

九〇

學費の出所金額……家庭より支給、月額金四拾圓

健康状態……健康

性質及才幹……性質温和にして寡黙、才幹普通

マルクス主義に於ては生産力の發展が社會進化の推進力となつてゐる。社會は生産力力の關係から生ずる階級對階級の闘争によつて進んでゆく。人類の歴史は階級闘争の歴史である」と述べてゐる。が現在私は社會の進化は單に生産力の發展のみで行はれてゐるものではないと考へる。マルクス主義では本能とか欲望を如何に説明するか？私は本能は絶對的なものであると思ふ。親の子に對する愛、兄弟愛等は皆絶對的なものであり永久に不變である。私は社會は生産力の發展によつて社會は進化するかも知れぬが、この本能とか欲望も社會の發展にとつて大きな役割をなして來たものではないかと考へる。否生産力の發展も欲望とか本能によつてなされて來たものではないかとすら考へられる。空飛ぶ鳥を見て自分等も空を飛んではといふ考へは飛行機を生んでゐる、

かく考へて來ると、社會はマルクスの説明する如く生産關係によつて發展し來れるものでなく、むしろ本能とか欲望によつて發展し來れるものである。即ち社會は物質的なものによつて發展し來れるものでなく、むしろ精神によつて動かされ來つたものである。かく考へて來ると、マルクス主義で云ふ所謂「社會の必然性」といふ

私有財産について、マルクスは、擄取によつて蓄積したるを私有財産といふと云つてゐるが、では現在の社會にて私有財産と思はれない財産がある。資本にした所で、その全部が決して私有財産とは云ひ得ない。幾多の資本家の財産にした所で決してその全部を私有財産とは云はれない。いづれの資本家の財産にしてもその一部は必ず私有財産でない部分がある。もしそれを沒收するとしたなら、それは不正行爲である。かく考へればロシア革命は必ず正當なる行爲とは思われぬと思ふ。この點から見れば我國皇室の財産は私有財産であるかどうか？皇室の財産は決して明治維新の時に出來たものでなく建國以來のもので、當時は日本國全體が、領土も、民も皇室の財産であつたのであり、その後色々の變化はあつたにしても、兎に角決して私有財産とは云ひ得ないし、又したがつて天皇陛下は資本家地主とは見られない。即ち私有財産の撤廢はほとんど實現出來ない様な事であるし、又打倒天皇制といふスローガンも我國に於ては正しくない。

マルクス主義に於ては經濟關係によつて社會の上部構造は變革すると説明してゐる。では我國は建國以來經濟關係は屢々變つてゐるのかかゝらず、天皇制が一度も變つてゐないのをマルクス主義では如何に説明するか、決して説明出來るものではない。我國に於ては今日まで何時でも皇室中心主義の觀念が正義であつた。即ち天皇は我民族にとつてはイデオロギー的な存在であり、決して我民族の頭中から離れ得ないものである。

九一

ある。

又私はマルクス・レーニズムの云ふ如くプロレタリアの同盟軍としての農民を考へる事は出来ない。労働者と農民は敵である場合すらある。商品価格が上り工場主がより利益をうけ、そのため労働者の資金が上つた時農民は如何であるか、勿論商品の消費者としての彼等はいかゝる時は大きな損害を被るものである、農民は米價の上るのを喜び、労働者はそれをおそれる。利害關係によつて常に農民と労働者は対立してゐる。互ひに相矛盾する二要素の結合することは考へ得られない。更に民族的な偏見は人類の胸の中に長い間宿つてゐた、原始時代に爬虫類によつて人類が迫害されて以来、幾萬年を経た今日我々の胸の中に未だに爬虫類に對する憎惡の念が宿つてゐる如く、我々には民族的な團結力と、反面には他民族に對する敵對心は心の奥深く宿つて來てゐる。であるから、かゝる觀念の短時に消え失せるとは考へられない。であるからもし世界が全部ソヴェト聯邦となつても、それは再び分裂して再び帝國主義時代の如くなるであらう。以上の點で私はマルクス主義には同感しかねるから轉向を誓つてゐるであります。

一七

某公立大學本科第一學年 O・K (當二十二年)

處分の種類……一箇年停學

いて、某と色々話らい、個人的に非常に親しくなりました。そして豫科三年の終り頃より、某より發送の職旗を借りて讀みました。本科一年になつてから、某達が醫大職旗讀書會を作つて居る事を聞いて、左翼の組織に最初に入つたのでした。

二、本科一年になつてからの私の行動

四月某に翼大職旗讀書會のある事を聞かされ、入會することをすゝめられました。職旗は毎月發行續きであつたので、好奇心からも非常に讀みたく、直ちに入會したのでした。四月に一、二度某の下宿で會つたと覺えています。一度の時は某の知人とかで、帝大の某と云ふ人が來て居て色々話して呉れました。

職旗は五月號まで某から貰つて居たのですが、五月からは出なくなつたので、それで職旗讀書會は自然消滅致しました。職旗讀書會で豫科三年の某、々、二年の某、々、々を知るやうになつたのでした。職旗讀書會がなくなつた頃、某、々、々、々と五人が一つのグループを作るやうな形になりました。豫科時代私に對して非常に反對していた某も、よく遊んだ某も私の影響により此頃は左翼養成になつたのでした。某も仲よくしていた關係で、別に彼は何もいはなかつたのですが、皆がまき込んでしまつたのでした。

私と某、々、々が豫科時代最もよく一緒に遊んでいたのですが、私と某とは豫科の終り頃親しくなり、某と某は同窓の關係から、始めから

九二

家庭の狀況……家庭圓滿、父醫師、相當名望家、某縣會議員、某市市會議員たりしことあり、上流の生活をなす

學費の出所……實父

健康狀態……壯健

性質・才幹……溫順

一、マルキシズム研究の動機及豫科時代

中學五年の頃より自然科学の理論に就て色々書を読み、その影響で科學萬能宗教無信心の考より次第に唯物論が好きになり、社會科學にも非常な好奇心を持つやうになりました。丁度本大學豫科に入學した頃、中學の同窓生で一高に四年から入學した友人が家も近所の關係から中學小學共に一緒に學校へ通つて居たのですが、その友人が一高で社會科學を研究し、私に色々資本主義社會の矛盾等話して社會科學研究をすゝめたのでした。非常に好奇心を持つて居た時の事ですから、別に何の考へもなくすぐにマルキシズムの書籍を數冊彼から借りて讀み、××へ來てからもよく書房に行き、マルキシズムレーニズムの書籍及雜誌を買ひ讀しました。豫科二年三年の前半迄は自分でかくして左翼の書籍を讀み、よく一緒に遊んだ某、々と哲學とか社會問題に就て語りあつた事がありました。當時某は私の云ひ分に對して何時も眞向から反對し、某は幾分賛成の方でありました。

豫科三年の終り頃より、某が辯論會等でよく左翼的な事を云ふのを聞

親しかつたのでした。

五月初め頃だと思ひますが、某が某から連絡をつけて貰つて、××帝大の反帝班と連絡をつける事になりました。私も某のすゝめにより反帝班の一會員となりました。其の時は私達のグループ全部反帝班に入つたと思ひます。此頃よりよく前記五人のグループが各人の下宿へより、左翼の話をやりました。一學期は全體通じて豫科附近に住んで居たのは本科五人のものゝ中では僕一人だつたので、特に某、々と親しくなりました。豫科三年の某は、僕が豫科に居た頃から、よく話合つたのでした。最初何で親しくなつたのか分りません。彼も又色々話をして見ると、左翼支持を何時も云ふので、話が合つて親しくして居ました。五月下旬か六月の初旬だと思ひます。某、々、々、私の集つた時に、某から誰れか醫大モップル班を作り、その責任者にならないかとの事でしたが、僕個人としてはあまり實際運動に深入りすると不可なりと思つて居たので、やりたくはなかつたのですが、全體としての意向により、僕が最初醫大モップル班責任者となりました。そして豫科の某に、豫科にもモップル班を作つて呉れと頼んで置いたのでした。モップルの×大との連絡は、最初×之×町より××通り迄の間で行はれました。×大生は警察署で聞いたのですが、某とか云ふ人でした。そしてこの人に僕の下宿を教へて置き、後一度此の人が僕の所へやつて來ました。六月には金は全部で十三圓程集り、最初の時に×大生に渡しました。二度目の時、

九三

某から左翼に出すと云はれた五圓と、自分が五圓と十圓×大生に渡したやうに思ひます。丁度夏休み前に體が悪かつたので、私のモッブル責任者を某にかわつて頂きました。九月に入つてから、某が何か左翼の人に宿を貸したとかで警察へ呼ばれたそうで、それ以來某はグループから離れるやうになりました。

九月下旬に某が再び私に全協支持團と云ふものが出来たから、その責任者にならないかと云つて来たので、それを承知致しました。それから全協支持團との連絡がついて、×大生某と二三日乃至一週間置きに、主に學校裏對岸の河原で一度、×の神社前で二三度、××堂喫茶店で連絡し、全協支持團の機關紙支持戦士労働新聞××支部ニュース等の秘密出版物を二三部乃至八九部貰ひ、それを本科五名(私共)豫科は某、々の兩君を通じ、主に某君に廻しました。會費は月一圓でしたが、本科五名は十月一圓宛一回、豫科よりは九月初めに某君から別に左翼に寄附するとの事で五圓、某君から十月豫科全體として三圓餘、十一月五圓を受取りましたが、帝大生に渡さうと思つた時には、もう連絡が切れて、自分で今迄保管していましたが、本科の人には現在は御返し致しました。追つて豫科の某君に會ひ次第、豫科の各人に返して頂くやう某君に御頼みしようと思つています。十月下旬で全協支持團は×大の連絡が切れたのですが、十月初旬×大生前記某君から無産青年の責任者を醫大から一人出して呉れとの事でしたが、某君を私が頼んで、これになつて頂きました。

した。そして前記河原で某君がつれて来た、帝大の無産青年の人と、某君と會ふやうに致しました。無産青年×大生には十月初旬入りしました。

モッブル及反帝は、某、々の兩君が責任者をしていて、九月、十月共私は入つていました。

十月下旬には×大との連絡はすべて切れてしまつて、全部が休みの状態となつていたのでした。十月にはそれから某君が謄寫版を持つている事を聞き、皆が何か醫大を一まとめにしたニュースを出さうと云つていました。私も賛成して置きました。某がその衝に當られたのでした。そして十月に確か二回ニュースを某君より受取りました。ニュースの記事は各班のメンバーをふやせと云ふことが二度共書いてありましたやうに思ひます。

三、檢束された事

十一月二十八日に、突然學校より××警察署に連行されました。この時から自分は思はぬ中に實際運動に入り阿呆な事をしたと思ひましたが、某、々は氣の毒だと思ひ、自分一人で、引受ける氣で皆の名前を出さずにいたので、翌二十九日は日曜で取調べを受けず、留置場について、月曜の朝取調べを受けました。此の時は私達を取調べて下さつた某警部殿の親切な感じ、すべてを清算すべく某、々、々、私の五人でモッブル反帝全協支持團、無産青年の各責任者を出し、某は九月

たのでした。

に一度警察へ呼ばれて成可く關係したくないと云つていたので、全協支持團だけは入つて他は入つていない、それから豫科は某、々、々の三君は知つていたので、全協支持團に入つて居ると云ひました。某警部殿が非常に學校のことを御心配下さつて、實習だけは出られるやうにと、毎朝詳しい事を尋ねるから来いと事、かはりがはりに××署に出頭する事になりました。そして私は三十日午後の實習に出ました。十二月一日には某、々、私の四人一緒に出頭し、二日には私一人、三日は

査問があつたため取調べをなくして頂き、四日には私と某が署へ行きましたが、警部殿が居られなかつたので、私と某が留置場でとめられました。翌五日某、々が出頭すると同時に、私と某も取調べを受け、私だけが取調べがすんだので釋放され、某、々の三君は月曜日に取調べがすみ釋放されました。

私は五日釋放されると、警部殿も一度家へ歸れと云はれたので、又自分もこの時には、もう自分が如何に愚かつたか、又このため學校、兩親警察當局に如何に御厄介になり又御心配をかけたかを思ひ、翌六日は早速家に行き兩親に御詫びを致してまいりました。

四、現在の感想

私は始めから實際運動には絶対によりつかぬ積りであつたし、又父も母も私が左翼の書籍を読むのを見て、研究はいゝが法にふれるやうな事は絶対にすると云つて居られたので、自分も絶対にしないと云つてい

私の意志の薄弱から、ついにこのやうになつたのは大變残念に思ひます。そして又今度取調べられましてより非法運動にたづさはる學生は眞面目だが、その上に立つ者が皆自暴自棄に陥つた人達か又はルンペンである事をきかされ、運動それ自體が何の役にも立たず、それにをどらされる學生こそ最も愚なる事を知りました。實際はかゝる事で理論についての現在の感想は、

私はあまり左翼の方面からのみ物を見るべくされて来た。眞理は楯の両面と云ふ事を忘れていたと云ふ事が痛感されます。それ故左翼の云分も、右翼の云分も何れも讀まなければ不可ない、そして私達のこれからなす事は、現在の自分の本分と云ふ事を考へて、それをやらなければならぬと云ふ事を考へます。

現在の私達の本分は、私達はもつとしっかり日本の國家と云ふ事を考へなければ不可ない、歴史あるこの日本に就て考へが足らなんだ事を思はなければならぬ、そしてやがてはこの日本の醫術界に立つて多くの人々を救ふ義務のある事を考へなければならぬ、そのためよき醫術家たらんために、現在の自分等に與へられた學課を専心にやらねばならぬ、これが現在の私達の本分であるのだと思ひます。

今までやつて来た事は、この本分を忘れた、學校をよりよくするため日本の國家をより隆盛ならしめるための二つの本分の正反對を行く者で

あつた事を思へば、我ながら非常に自分の輕薄、淺慮、意志の薄弱、無
定見が情なく思へます。

九六
若人等に許されるであらうかと考へました。その結果しきりに文學書を
愛讀しました。

五、今後の決心
現在の感想よりして、今後は第一に國家多難の時に當り、當大學生た
るの自分を絶へず忘れず、左翼支持の行爲は一切なせず、銳意謀せられ
し學課の勉學にいそしみ、且生來餘り強健ならざる體を運動と攝制によ
りきたへ、學校に残したる汚點を美點でもつて埋合すべく専念努力する
決心であります。

一八

某公立大學本科第一學年 F・S (當二十二年)

處分の種類……一箇年停學
家庭の情況……家庭圓滿、實家は相當なる農家なりしも、
農村疲弊の爲田畑を賣却し家運傾きたり
學費の出所……實父
健康狀態……強壯
性質・才幹……伶俐、時に表裏あり、統御の才あり
一、社會科學研究の動機
絶大の希望を抱負を以て入學して以來一年間は學術に専念して居りま
した。二年の終り頃より、何の考ふる所もなく生活している事が現代の

九七
四月頃現在本科一年某、々、々、君などが左翼に興味あることを知
り、それ等と合體して「戦旗讀書會」をつらけた。
同月中頃より反帝同盟との連絡が主要なつたと、當時聯通してゐた戦
旗の人から言はれ、某氏が責任者としてその連絡をつけた。然し當時は
尙貧弱な分子の集合なるために、反帝同盟の運動には何等關係しなかつ
た。
自分は學業の多忙なると、少しく左翼運動の危険性を感じ始めたため
に、戦旗責任者を豫科生某と交代した。それが五月頃であります。然る
に五月頃より「戦旗」は全部××に沒收されて、××に來ることがな
りましたので、唯左翼の事を研究する「讀書會」として、本科、豫科
別に會合してゐました。會合は社會問題の論議や、左翼理論の研究を主
としてゐました。戦旗責任者を止めて居り、且豫科との交渉にあづから
なかつた私は、豫科の方の其後の活動については知りません。
唯豫科二、三年から一名あて、本科一年から一名委員が出て、會の擴
張、その他に關して論議した事を知つて居ます。
然して七月頃辯論部關係で知り合の帝大生某が來て、「君は妹と二人自
炊してゐるさうだが、夏休中、一人僕の友人で左翼の事をやつている人
だが、金がないので困つて居るから留守番に置いてくれぬか」とたのま
れたので、これを話して歸郷した。夏休中農家の手傳をして、夏置の
上族をすまして歸京すると、直ちに×特高課の取調べを受けた。それは

るに及んで、當時豫科二年某々の兩君及び當時一年某、々等がプロレタ
リア文學について自分の下宿に訪れて論ずる事が多くなりました。そし
て「戦旗」を購讀してその感想、批評などをしていました。所が其頃よ
り「戦旗」は發禁となり、入手困難となりました。

十月頃共生團に於て主人と戦旗の恒常的變讀をなす方法はどうかしたら
よいかと話している時、そこにいた某が「俺を連絡すればどんな時でも
讀める」と言つて、會ふ日を約してくれたので、其後通知ある毎に、そ
の人から「戦旗」を受取つて讀み、「戦旗讀者會」なる會を前記四人と共
にもつて、毎月その讀書會をもつ他、その他の左翼運動理論、唯物辯證
法哲學等の研究をなし、時折某が來て教へてくれることもありました。

二、其後の運動

昭和六年小生の下宿に於て、時折會合をなして自分等の意見を交換し
て居た。然るに三月の試験休みに於て、某、々の兩君は家庭に於て「戦
旗」を見つけれ、親の忠告、叱責により左翼の研究をなす事を斷念し、
休暇あけに於て戦旗讀書會を脱退した。然して某君は其後カフェー遊び
に走り、左翼の問題に對して全然頭を働かせなくなつたので、残つた二
人はこの方面に興味をもつ者をつめて會をつゞける事を決心しまし
た。それは當時かゝる戦旗の會が程に大きな危険性をもつものでもな
く當然他の文化機關「××會」「映畫研究會」等と同様に公然なるもの
と思つていたので、前記の三者の脱退を笑つた位でした。

留守」と稱して居た人が、左翼の注意人物であつたためであつた。だからその紹介関係などつぶさに取調べられ、前記有體を陳述して「今後かゝる事のない様に、今の事なれば大した事はないから許してやる」とて放免された。故に上京せる前記四名に話して「自分もをそろしいし、且君等に危険をあたるから自分は會を脱退する」とせいで明して脱退した。其後専心學業にいそしんで居た。

然るに九月終り頃、××署より出頭を命ぜられ、「君は戦旗の責任者をやつてゐたそうで、五月から止めてゐると某なる帝大生が云つてゐるが、當時入手した部数及び其後誰と交代したかを言へ」と言はれましたから「部数は五部で資料某、々、々、々及び自分で五月以後某君と交代した」と答へて歸つた。

其後某君が「止めて居るが、今度全協支持團と言ふ團體が出来たが、これは何も活動せず經濟的援助さへすればよいのだから、君も一つやつてくれ」と言はれた。

十月頃、自分一人止めて居る事が皆にすまぬ様に考へられて仕方なかつたから、其後約一圓を渡した。ニュース(全協支持團の)を一度(多分創刊號と思ひます)見せてもらつた。

然して讀書會が「ニュース」を發行すると某君から聞き、二度程一文を投書した事がある。

二學期以後かゝる状態であり、然も親もかゝる事なき様忠告あり、如

健康状態………良

性質・才幹………温厚にして才幹普通

動機

昭和四年頃より當時次第に勃興し來れる無産階級の擡頭、勞資對立の激化に心を惹かれ、之を打開すべき何等かの制度なきやを求むるに至り、社會科學の研究に入る。家庭上の不和、物質的不満より生じたる研究に非ずして、一の理想主義より發したる研究なれば、絶えず實踐に對しては積極的態度に出るを得ず、理論の研究に多くの興味を覺えたるに反し、實踐的活動は成るべく避け居りたり。

一、R・S部員としての活動

その頃社會科學研究會で資本論の相互研究を爲してゐたので傍聴に行き、○○○君○○○君○○○君等と顔見知りになる。そして資本論研究會とは別個に「無産政治教程」等の讀書會員となつた。當時校内に這入つてゐた無産者新聞もその頃より屢々見せられた。斯くの如き状態を昭和四年五月頃より翌六年三月迄續けてゐたが、二Hの總選挙の際○○○君○○○君等檢舉され、自分は累禍を免れ、爾後かくの如き運動に關係することを中止せんと決心せしこと屢々ありき。然し其後R・S部員として何等積極的な活動をせず、又學内のストライキ、自治獲得運動には傍觀的態度に出で、専ら自宅で理論のみの研究に耽つてゐたが、昔の關係の友人に頼まれたることは斷り切れず、遂に今回の如き不祥事を

何にしても學校を出なければならぬ身であることを考へたので、かゝる運動から身を引かねばならぬと思ひながら、友情に引かれ、氣の弱さのために關係を全斷するに至らなかつたものであります。

十一月二十七日再び××署より出頭を命ぜられ、學内の組織につき問はれたが、知らないから某から支持團のニュースをもらつた事について述べた。

直ちに某君はよばれたはずであるが、取調べの済む迄とて留置場に三十日(月)迄居た。その間一回の取調べもなし。

三十日の正午頃放還された次第でした。その時「大した事はないから學校も今の所知らせないからしつかり勉強しろ」と言はれた。

其後現在に至る迄沈黙して學業に専心致して居る次第であります。

一九

某私立大學經濟學部卒 K・T (當二十三年)

關係せる事件………共產黨へ資金供給

處分………訓戒

家庭状況………父は死亡し母と兄一妹一と同居無職

貧富の程度………中流生活

學費の出所、金額………母より必要に應じ切詰めたる金額を支給せらる

惹起せり。

二、共產黨、無産青年同盟に對する認識

直接自己が斯る組織内に這入つて活動したることなければ確たる認識は有せず。且又現在それが如何なる勢力を有するかは明確に知らず、たゞこれ等の黨及同盟は屢々新聞紙上に見受けらるゝ様、矢鱈にテロを扱ひ、或は脅迫的言辭を用ゆるが如き極左的傾向はあまりに感心せざるところにして、陰謀團の如き感を抱かしむ。若しも之等の組織が發展せん爲には、もつと廣汎に大家を引き入るゝが如き運動に轉化しなければならぬと思はせられる。殊に現在それが主として勞働階級よりも小市民及智識階級に基礎を置いてゐるのは、何だか吾々を踏み石としてるが如き觀念を抱かしめ、稍嫌惡の念を抱かしむるものあり。

P(第二無新) Y(無産青年)等の配布網に現在關係するところなし。

昭和四年頃定期的に配布を受けてゐたが、現在は不定期的に此度の事件に關係ありし○○○君に見せて貰つた程度に止る。學内にかゝる配布網が存在するか否か、又其新聞社の支局が黨内に如何に働きかけてゐるかは自己の全く知らざるところなり。

A(反帝同盟)には全然當初より關係なし。M(救援運動)は昭和四年より五年二月頃迄○○○君等より彼の友人で困れる人があるから襦袢、著物等を呉れと云はれ、一度提供したることあれども、それ以外には關係せず。雜誌、ニュースは發行したることも、配布網に關係したること

も全然なし。たゞプロレタリア科學等は個々書店にて購入し、讀みたることあり。

各カンパニヤ、フラクジョン活動等には参加し居らざる爲め、かくの如き運動に動員されたることなし。昨年二月〇〇君等が選挙の印刷を手傳ひたる際、自分も三、四日引張り出されたる事が之等の唯一の経験なり。友人關係にしても、昔の社會科學研究會のメンバーを知るのみにして、最近新聞紙上に見出されたるスポーツ團、共產青年同盟のフラクジョン・メンバーに就ては全然知らず。

エーゼントグループ 全然その内容及組織について知るところなし。無産青年同盟の細胞、レーニン青年としての運動、かゝる組織及細胞が現在學内で如何なる運動をなすものかは知るところなし。たゞ自己の今回惹起したる不祥事の過程に就て記さん。昭和四年十一月頃〇〇君〇〇君の兩人から、今回左翼雜誌「マルクス主義」が再刊されるから資金を乞ふと云ふので、五圓位づつ昭和五年二月迄提供したり、又兩人が屢々金に窮したる様子が見えたので、自己が金錢を貸し與へ、その儘になりたることあり。

かくて〇〇君〇〇君等の災禍により、同年五月迄は何等の話はなかつた。五月頃又資金を出して呉れとの催促を受けたが、折しも猩紅熱で二ヶ月入院し、九月迄其等の運動に關與するところなし。

九月になりてより〇〇君に會ひ、〇〇君が米國へ行きて自活してることあり。

到達したるならん。

四、學外に於ける運動

學生が實際運動に参加するには、どうしても家を捨て學校を捨てなくては駄目だと常に思ひしところなり。現在の吾には到底そんな決心が付かないから、實際運動に積極的に出ることはなかつた。恐らく今後に於ても、もう積極的のみか物質的援助の手段に出る様な行動も決してすることがないであらう、と思ふと同時に、自分も深くそれを心掛けねばならぬと思ひ居れり。

五、現在に於ける自己の態度

マルクス主義は理論と實踐の不可分の統一を期するものなれば、自分の如く家庭を思ひ、小市民的根性より脱し得ざるものは、到底それへの徹底的な追従をなし得ざるものなり。されば今後は一切のかゝる運動と手を切り、もつと総合的に批評的に斯かる思想の研討を行ひ、時世の推移を靜かに見守つて行かふと思ふなり。殊に此度の事件によつて最も痛切に感じたことは、現在の學生には主義思想の研究ばかり盛にして、毫も人間の本質に就ての研究の爲されて居ることである。人生と四つになり、血みどろに格闘して生れ出した思想こそ、眞に尊き而して萬人を動かす思想なりと自分は深く感じたり。

卒業期を控へ、又一刻も早く就職することを必要とする身の上なれば今後斯る運動とは一切手を切る事を誓約すると共に、先生方の穩便なる

と、〇〇君が入獄してゐることを聞き、彼等の救援の爲、又一般運動者の爲に資金を出して呉れとの相談を受ける。〇〇君〇〇君の行動主義はともかく、人間的に信頼置くと同厚かつたので、又自己の資金が全部彼等に渡るものでは無いとは幾分知つてゐたるも、今迄の關係を斷ち切ることが出来ず、爾後毎月平均十圓位を本年十一月末迄提供したり。斯の如きことは全く自己の氣弱き所より爲したるものにして、徹底的に運動を支持すると云ふよりは、寧ろづるん／＼に今日迄繼續して來たる状態なり。今考ふれば假令「臆病者裏切者」と呼ばれようとも、斷然二月以後運動を中止することが自己の身の爲なりしにと思ふなり。かくて今年六月頃より吾々の資金を徵收する責任者は〇〇君に代りて十二月の事件に到つた始末なり。尙自己が以前の友達よりも資金を徵收したることあるも、彼等は全然事情を知らず、〇〇君〇〇君又はモツブルの運動の爲なりと思つて居りたる模様なり。

三、自學運動、再進運動

〇〇部のストライキ又は學内自治の問題には自己は全然關係せざることを誓つて置くことが出来る。自分は寧ろ學生が左翼的な言辭を以て、學内で見得を切ることに徹力な謙遜の念を抱いて居りたり。勿論現在の學校制度がもつと自治化されることは希望して居たれども、その運動に自ら進んで突入する意志は毫も有したることなし。これは恐らく、自分が智識階級の性情性を多く知り抜いて居たる爲に、かゝる傍觀的態度に

御取計と適宜の監督を切に希望する次第なり。

110

某私立大學法學部一年 O・M (當二十二年)

關係せる事件……共青關係

學校の處分……無期停學(目下解除)

家庭狀況……父「農業、資産」中流

健康狀態……健康

性質……性應濟

この手記は主に執筆者の運動に入れる客觀的境遇を中心にして抄録せるものなり。

一、家庭生活が自分の性格、思想に及ぼしたる影響

(一) 家柄に就いて

私の家庭は内部的には平和な状態ではありますが、外部的にはかなり陰氣さを持つて居ます。それは私の家は島崎藤村の「破戒」に出てくる主人公「牛松」と云ふ男の様な家柄であるからであります。即ち平家の落人、平常呼ぶ「部落民」であるからであります。

元來普通の日本人は大部分混血人種でありまして、純粹の日本人と云ふものはほんの少数であります。純粹の日本人型の間は石川縣に多く生活してゐるので、學者はこれを石川型と呼んでゐますが、平家の落人

はその代表的なものでたさうです。それは平家の落人は源氏の壓迫のため、一部落をなして地方の山地、海岸等に退き、外部との交渉を断つたため、特に徳川時代の壓迫のために部落民以外の者と結婚する事が出来なかつたため、部落内で血族結婚を結んだ結果、長年月の間純粹の日本人型を大體止め得たとの事でありませぬ。現在も猶封建的な風習の強い農村に於いては、輕蔑を受け、部落民以外の者と結婚する場合は、部落民からもそれ以外からも非難を浴びせられる状態であります。私もそのため小學校時代から部落民以外の者からは友人にしてみらへず、何かにつけて輕蔑され、中學時代にもよく友人離れにされた等の事は多々ありました。

二、部落民の生活の經濟狀態

(イ) 部落民の住居

部落民は以上のやうに結婚の自由を得られないやうに、住居の自由(ブルジョア民主主義)も得られないのであります。

部落民は其の部落を出て普通の町内住居をするためには(部落民である場合種々の權利義務の得られないと云ふ場合が多くある)普通の町内に可なりの面積の宅地を買ひ求めて、其處に貸家を建て、其の中に自分の住居を造るといふ以外には現在方法はありません。貸家を建て、其中中に住居するとなれば、周圍は皆借家人であるため、たとへば部落民でも輕蔑されるやうな事はなく、又白眼視されて交渉を拒絶されるやうなこ

ともないのであります。此のやうに部落民が住居の自由を得るためには相當な資金を必要とするものであります。私の幼い頃、此のやうな方法で部落を出た家も二三軒ありましたが、此等の事はブルジョア民主主義(デモクラシー)が如何に金持ちのみの利益上の主義であるかを漠然と感じたのであります。

(ロ) 町内の階級對立

部落民が部落外に住居すると云ふ場合、如何なる風評が起るかと思はれます。

部落民も町民もその貧者は「あの家は金持ちであるから」とか「部落民である事を隠すため」だとか、其の他貧者の金持ちに對する反感的感情を呼び起すのであります。普通の町内の金持は部落民の金持が部落内に止つて住居してゐることを好まないものであります。其れは部落内には町内より貧乏人が多く、住居内に金持があると、部落内にもより有利な條件を與へなければならぬからであります。

(ハ) 水問題

その具體的な例としては、私の驕家に×山から出る清水の井戸があります。此の清水の井戸は約三百年以前から出るもので、約二十五年前×山が崩れたため、水が出なくなりました。部落民にとつては唯一の飲料水であるため、大いに困り、私の父と隣りの親類の人とが一ヶ月程清水の出口を尋ね求め、やつと再び得ることが出来たのであります。その一

ヶ月間父等は全く仕事を休んだそうですが、町内からは水に關しては全く何とも申して來なかつたそうです。時々、その水は寺、神社に運んでゐるのであります。町の社寺保も何等無關係の態度を裝つてゐたのであります。これは部落民に對する白眼視の一つとして、部落民は大いに不平を持つてゐたのであります。所が最近清水井戸を圍つて問題が起つたのであります。元來町は海に面してゐるものでありますから、普通の堀井戸は鹽辛いので、町の醫者は特に私の處の清水を用ひてゐる様な状態、又町の多くの者も此の清水を取りに來るのであります。

冬は水が多く、何等問題はありませんが、夏期は部落民のみでも、此の清水は缺乏するのであります。そこで部落民は夏は水を取りに來ないやうに抗議を申した所が、町民は今度は同じ清水を寺、神社から取るやうになり、同じくその清水は缺乏したので、部落民は寺、神社に必要な水を一定量のみ送るやうにしましたのであります。其處で町民は其の清水は寺のものである、何故なれば寺を約三百年前建築する時、壁土をぬる爲の水であつたからといつて、その清水を部落民に飲ませない様にしたのであります。

その當時私の父は町會議員であつたため、其の清水は勿論三百年前寺を建てる時、壁土を作るための水であるが(此の事を知つて居る者は私の家と他の二三軒の家の人であるそうです)然し、×山が崩れた時、同一の町内に住みながら部落民の困難を度外視した事、特に社寺保が問題

にしなかつたのであります。元來清水は部落民の住居してゐる場所にあるため、其の清水の出口を如何やうにもなすことが出来、又部落民は團結する場合は強く、各個人も身體が丈夫で、町内から出る徴兵検査合格者も大部分が部落民であるといふ有様ですから、結果は部落民の勝となつたのであります。勿論その後は、寺、神社にも一定の水は運んであります。この場合にしても、もし私の家と他の二三の有力者がゐない時は、水問題は早く終らなかつたと思はれるのであります。

(ニ) 町内有力者と妥協

以上のやうな場合は、私の家も部落民の利益を代表するのであります。が、町會などに於ては父は何等部落民の解放などは問題とせず、貧者一般の不利な豫算等に賛成するなどは、部落民間より非難の的となつてゐるものゝ一つであります。前記の如く××町の貧者には部落民が多くを占めてゐるのであります。此の點に於ても現代の人と人との關係は身分的とか民族的とかとして把握すべきではなく、經濟的に、金持ちと貧者と對立として把握すべきだと思はれるのであります。

(ホ) 部落民間の階級對立

部落民内にも階級構成は異つており、従つて階級對立が行はれてゐます。例を前の清水の一件に取りますと、何處に於ても貧者はけちくさいものであります。年一度清水井戸の掃除がある場合など、何處の家からも一人井戸掃除に出る時、水を多く用ゐる者(主として金持)と、少

く用ゐる者(主として貧者、中には獨身者)が同一に井戸掃除に出るの
は不合理であると、毎年こた／＼とするのであります。此れを調和する
ために、掃除後酒を飲む時、金持は多く提出すると云ふ方法を用ゐて
ますが、中には酒を飲まない者もあり、又誰が幾ら出したとか出さな
つたとか毎年こた／＼とするのであります。

(ハ) 部落民の「女」に就いて

部落民が部落民である事にひけ目を感じるの一般的傾向であります
が、特に女などはそれが強いやうであります。それに部落民は容貌は美
しい方があります。若い女などは美しいにもかゝらず、部落民として
不平の内に一生を終る事を不満に思ふ爲であります。又他の經濟的
な理由にもより都市に出る者が多いのであります。都市に出ると容貌が
美しいためか、結婚を申込みれるのであります。一年もたつと何かで、
時に部落民であることを知られ、離棄されて浮目をみ、勇敢に飛出た故
郷の人の手前歸省も出来ず、仕方なくカフェーとかその他の賤業に身を
沈め、結局身體に病氣をうけて郷里に歸るといふ場合が多々あります。
これらは皆私等の一族として深く考へさせられるのであります。

三、故郷の町の生産状態

私の郷里の××町は木綿織の一産地でありまして、日本の全産額の何
割か、こゝより生産されるさうです。織物工場は五六年以前は半家内
工業でありましたが、現在はどん／＼資本家工業となりつゝあります。

家庭関係……家人、父(代議士、辯護士)、母、兄、姉、姉

一、家庭の資産状態

私の幼年の頃は動産十萬圓位ありましたが、父が丁度私が中學三年在
學頃から政治運動に關係する様になりました。次第に家計が苦しくなり
始めました。現在は最も家庭が困憊状態に在り、やつと親類の好意で家
計を保つてゐる次第です。私の生活は寧ろ不自由勝で、學費としては、
授業料を除いて一ヶ月四十圓を父から貰つてゐます。私は兄の家に厄介
になつて居る關係で、下宿料は要りませんが、兄に世話をしてもらつて費
用を除いては、私の小遣は僅少で、尙且つ我儘育ちの性格が残つてゐて、
金使は荒い方なので、授業料をもよく使ひ込むこともありました。

家庭の平和状態

私の幼年頃には、祖母、従兄従姉、伯父が一緒にゐまして随分複雑な
家庭であり、父が頑固の爲め、しば／＼家庭の平和は破れ、母は封建的
な家庭の重壓に苦しんで來ました。

「笑つて肥れ」と父の書いた額が私達兄弟姉の部屋にかけてありました
が、今懐古して省れば深い父性愛があつたにも拘らず、暴君の様な父に
對する恐怖の觀念と、母への同情との中に生育して來た陰氣な家庭の空
氣が快朗な童心をそこなはした、數々の思ひ出があるばかりです。

家庭生活による私自身の性格、思想への影響

従業員は男女半々であります。部落民の若い男女も多く其等の工場に
務めてゐますが、過度の勞働のため、多くの者は肺を病むと云ふ有様で
あります。女などは工場につとめてから二ヶ月すると、如何に丈夫な
眼を持つてゐる者でも近眼になる程であります。町に一年間八千人の人
口中、男六十人以上、女七十人以上死亡いたしますが、その死亡者中大
多數は工場の従業員であり、その死亡原因は肺病であります。現在夏休
みに歸省しても、幼少の頃に遊んだ血族關係の幼友達も、今は大部分が
死亡して居り、そこばくの淋しさを感じ、深く考へさせられるのであり
ます。

四、最後に

以上に述べましたやうな家庭と町の状態でありましたから、私は幼い
頃又中學の頃「部落民解放」を考へたものであります。××大學豫科
に入學した頃、私の考へてゐた「部落民解放」又は部落民を解放したく
思ふ思想、感情は、結局中産階級若くはデモクラシー的解放、即ち共產
主義的解放なしには不可能である事を考へるようになったのでありま
す。この最後の考へに到達するには、勿論現在からの勉強のみでなく、
一面マルクス主義の理論的研究に負ふ所大であります。

二

某私立大學文學部二年 F・J (當二十一年)

父が頑迷嚴格のため、私は父に對して非常な恐怖感を抱く様になり、
それが私の社交性に決定的な缺點となりました。私が物心がつく様にな
つてからは、父の家庭に對する行爲に批判をする様になりましたが、主
觀的境遇の影響からは逃れる事は出来ませんでした。即ち家庭の陰鬱な
空氣から遠ざからうとすることから、次第に陰鬱になり、虛無的な性格
になりました。私が「人生とは何か」といふ厭世的な問題を考へ込む様
になつたのも、右の様な家庭事情の爲でした。以後私の思想の變遷は「思
想の推移過程」の項に述べることにして、此の項を終ることにします。

二、思想推移の過程

私が左傾化したのは多感な私自身の性格も原因してゐますが、専ら家
庭的事情の影響でした。私は中學校卒業頃から次第に濃厚な厭世感を抱
く様になりました。青年の捕はれ易い懷疑主義に陥りしば／＼死の幻影
に悩ましました。丁度其の頃から社會問題として私を注目させた事件があ
りました。私の社會問題に對する興味は「人生問題を解決せねば」と
いふ解き難い前提を持つて居ました。「人生とは何か」と私は考へまし
た。考へつきませんでした。次に「人生の目的」を考へました。それは
私が大學に入る頃まで絶へず私を悩ました。

私が××高等學校二年の時、ブハーリンの唯物史觀を讀んだので
す。その最初に、社會は自然界と同様に合法的に發展して來、發展し
て行くものだといふ事が書いてありました。そこで私は考へました。自

然界にも社會にも、そして人間にも先天的な目的などは存しないと。私は神など信じませんでしたので、人生に絶對的の目的などあり得る筈はないと思つた。即ち人間は創造的である。個々の人間の各環境が人間をして人間の一生の目的を定めしめるのだと考へました。私は人間の問題を客観視し過ぎて、個々の人の現實を忘れて、永遠の人間といふ最も抽象的な考へ方をしてみました。

これで人生の目的と云ふ疑問は、私は解決したつもりでした。其の後の疑問は「死」「自殺」についての疑問に移りました。それは私の逃避的な厭世的性格を示すのかも知れませんが、やはり家庭的な事情を黙過することは出来ません。私は「死」といふ大きな幻が存外強い現實感を以て、解決を迫るのにはしばしば悩みました。私はその度毎に、自殺者の心理に共通な死の觀念を抱くに至つた確固とした原因など全々忘れ去つて居ました。私が幾度となく死の恐怖を經て得たものは、結局自分は自殺は出来ない、生を否定するのは不可能且不自然である、生を肯定して強く生き度いといふ實感でした。私は、ショウペンハウエルの哲學を研究しました。彼は、幸福は意欲の満足である。意欲は無限である。無限の意欲は満足されず、即ち幸福は意欲を殺すことであると説いて、所謂厭世哲學を立てましたけれ共、彼は死を否定せず、自殺者を評して次の如く言ひました。

「無限の過去と、無限の未來の中間の一瞬に過ぎぬ現實に捕はれ意欲

追求の最も強い小人の卑劣な行爲である。云々と」

彼の説には東洋人風の又は印度哲學的な多くの要素を認めることが出来ます。そして強い意志力がなければ到底持ち得ぬ人生觀かも知れませんが、だが彼が生を肯定してゐると云ふ事は私に取つては何うしても、彼も生命に對する最も根本的な生物的な、人間的な、自然的な意欲として否定し得なかつたと思へてなりません。生を肯定した上で厭世觀を立てたショウペンハウエルに、私が死に切れなかつたといふ體驗から非常に共鳴はしましたが、私の生を肯定したことは、積極性を意味することから何時までも彼に止まつてゐることは出来ませんでした。私がニイチエに近づいた所以です。

即ち私はショウペンハウエルが意欲を否定して厭世觀を立てたのに反して、現實に意欲を充足すべく強い哲學を立てたのです。私の積極性はこれに一致しました。併し再びニイチエから遠ざからざるを得ませんでした。何故なら彼にあつては強力は是認され、薄弱は否定されました。即ち、強即善、弱即惡です。従つて弱者に味方することは惡徳になります。私は當時の幼稚な社會知識を考へました。資本家は善人で搾取に苦しんでゐる經濟的に無力な無産者は惡人になる。尙無産者解放運動は不善な行爲となる。私は其處でニイチエの哲學の個人主義には共鳴することは出来なくなりました。私は現實の社會相に直面して人道主義者にならざるを得ませんでした。私は無産階級の同情者として社會を見直しました

これより先、私が×××高等學校一年の時、秋にストライキがありまして、これに刺激されて學友數名と河上肇著の第二貧乏物語をテキストに研究會をもちました。この研究會により唯物論、辯證法及び社會的知識、經濟知識を得て次第に左翼的書籍に親しむ様になりました。

×高二年に、右研究會から得た知識を基礎に唯物史觀を再讀しました。マルクス主義の經濟學、プロレタリア文學理論をも讀みました。私の抱いて居た人道主義は不可避的なマルクス主義の勝利の前に次第にその八方美人的矛盾と、プロレタリア的に是正されてきました。

私が×高を卒る頃、經濟學の論文で「資本主義の發展過程」の題目でマルクス主義的に分析した一文を學校に出して、教授から、最初からマルクス主義經濟學を研究することは最も容易且つ幼稚なことだ、少し自重し給へと注意されたこともありましたが、併し其の頃は私は立派なマルクス主義の熱中者になつてゐました。大學に進んでからも、私の共產主義に對する信奉の程度は盲目ではありませんでしたが、依然最も科學的正確さをもつものとして、或は時々プロレタリア科學を讀み、又は染地小劇場等で意識の高揚につとめてゆきました。即ち私が共產主義に共鳴した要點は次の如くです。即ち共產主義は次の如く説明します。

社會發展の原動力は各時代の經濟力でありまして、社會變動は其の時代の生産力の増加により、人間の意圖から獨立、不可避的になされるものであります。且つ社會の變革は階級闘争の形態をとつてなされる。さ

て、「最少の苦で最大の樂を」とは人類社會の最初に生じた矛盾として強者の弱者を支配し、人による人の搾取が始まり、原始共產社會が破れて奴隸制度に入り、奴隸制度は次に封建制度に、そして資本主義社會になつたのでして、社會制度の變遷は何れも被支配階級によりなされた階級闘争の勝利の結果で、それは増大された生産者がその時代の社會制度と不均衡を來し、あたかも卵の殻を破つて出る雞の如くで、矛盾の顯現状態として社會の變遷となるもので、更に合理的な社會制度に必然的に移行し、斯くて高度の社會制度へと辯證法的に發展してゆくのである。それでは社會主義社會に於ては如何、そして未來社會（共產主義社會）への展望の可能性については何うかについて一言します。

辯證法的考察によりまして、正の段階は即ち資本主義の發展期としての自由競争時代です。反の段階は獨占時代が安當します。合の段階はそれは資本主義の没落及び未來社會（共產主義社會）への移行を意味します。尙自由競争時代から獨占時代に進むにつれて、中小資本家が落伍し、中間階級か又はプロレタリアートへ没落し、プロレタリアートは其自身被搾階級としての力を増大し、それが不況により次第に社會の不安を形成して行く。一方無政府主義的生産は過剰生産となり、海外市場の要求となり、植民地の再分割となり、戦争となります。

戦争は矛盾の顯現段階として考察され得る、即ち此の矛盾としての戦争を内亂に轉化して革命に導き、共產主義社會の建設をするのですが、

それに努力することは、資本主義社会から共産主義社会へ移行する事が必然的で、その必然性の上に立つた最も科学的な合理的社会運動をなすことでもあります。私は右の如き共産主義社会運動の成功を信じて共産主義を信奉するに至つたのです。

三、現在の心境、將來の方針（自己批判）

私が檢舉された當日の心境は、勿論檢舉といふことも原因しましたが尙私は九月上京してからは、左翼関係が殆んど無くなつたので、此れを機として、實際運動から遠ざからうとの氣持が芽生へて居たため、直ちに左翼運動と一切の関係を以後絶對にたつ決心をするに、何んの躊躇もしませんでした。それは、私自身の才能、性格、環境等々を考へても、私の責任の負へる程度にといふ態度を、私が左翼運動をするに際して、常に抱いてゐたのですが、併しそれは私にあつては、同伴者の態度以上に私を絶對に昂め得ず、寧ろ日和見主義的態度に傾き、結局に於ては、左翼運動に於て有害な存在になるものと考へ、到底私は階級闘争に参加するに値しない人物であるとの自己反省をしたからであります。併し私の抱いてゐた共産主義の再批判は爲さず、依然として、私の共産主義に對する信奉の程度は變りませんでした。その後次第に私の心が落ち著く様になつてから、靜かに共産主義及び私の爲したる過去を再批判致しました。先づ私は自分の地位として、日本國民の一員として、日本に就いての考察をしてみました。私の認識不足は、全く共産主義思想への信

武器たる唯物辯證法は、現代の世界狀勢に適合するものへの揚棄を迫つてゐるのでして、此のまゝでは共産主義は益々其の實現の可能性を失つて、其自身理想化し、化石化してゆくのみであります。私は右の見地に立つて從來の共産主義への信奉を捨て、今後絶對に共産主義運動に参加せず、過去を一切清算することを改めて此處に誓約するものであります。私は將來に於て先づ自身の生活力養成に努力し、専ら學問に精進する心算で居ります。

尙私が檢舉されたことにより、大きな心勞を買つた肉親を思ふ時、深い人間の愛に包まれて居る自身を發見しました。私のこの幸福感の前には細末的な人間惡の感情は消へ去つてしまひました。過去を一切清算して快朗な未來に更生した自分を思ひますと、矢の様な歸心がやゝもすると、私の胸をゆす振ります。併し今暫く感情を低くして靜かに自由になる日を待たねばなりません。だが、私は喜で一杯です。此れが今の私の心境であります。

四、釋放直後の感想

こうして机に向つてじつとして居ると、夜更けた街の空氣を震はして遠く圓タクの軋りが聞へて来る。此の響も一週間前まではつめたい留置場の床に寝そべつて、耳にしたものかと思ふと、今更留置場の風景、其の時に感得した全く眞實な人間愛に泣いた自分が彷彿として来る。あの時の自分は僕は生育していつて後まで、決して忘れることは出来まい。

奉を崩しました。即ち日本の歴史を無視して、日本に於て共産主義社会の建設に努力することを歴史的使命と考へる程の淺薄でありました。急迫して來た、日本國家の狀勢に、私が餘りにも皮相的に、公式化されたマルクス、レーニンズムを、實踐しようとして一つの街頭的サークルを作り、共産主義の實現に努力したといふ事を今になつて思つて見ますと、其は小さい私の自慰的興憤を自己満足したに過ぎなく、しかも毫末も無産階級の生活に實益をもたらさず、又もたらずものでは絶對になかつたと思ふに到りまして、全く汗顏の至りであります。即ち私は誤つてゐた事が解りました。併し私の本來の興味と且つ社會を明確に認識することは絶對に必要と思ひ、今後とも社會科學の研究は止めないつもりで居ります。それは、共産主義は信奉するが自分に實踐力がないから運動には参加せぬ意味でないことは自明です。即ち共産主義理論は過去の實踐から生れたもので、必然性の上に立つた理論だから、其の實現は可能且つ必然であるが、其の運動には自分に實踐能力がないから参加せぬと言ふ意味ではないのです。即ち共産主義理論は其の實踐とは統一されてゐるものではない。共産主義は現今の如き民族運動が權頭し、國家的色彩を濃厚ならしめてゐる世界狀勢にあつては、各國に於ける階級闘争を國際統一の下に無産階級の解放を尙も企圖するもので、其は已に現在の時代思潮は相入れぬものであります。尙其の事は所謂日本共産黨黒頭連の轉向の根本原因をなすものと私は思ふのであります。共産主義の最後の

僕は幾度父を想ひ、母を想ひ、兄を想つて泣いたことか。そしてもう近々に放免になることを薄々知つた時、矢の様な歸心が嵐の様に、僕が打ちしずめて居た感情をかき分けて、希望と、光明と、憧れに胸を如何にゆすぶつたことか。僕はあの氣持、此の動搖を決して忘れまい。私けあの時程眞の人間の姿に立ちかへつて、骨肉の愛を素直に受け、素直に私の骨肉に對する愛を感じたことはなかつたからだ。此の體驗を決して忘れまい。私は自分に人間性の深い理解者であることを誇るものである。

私は此の氣持で筆を進めます。意外で不意の自分に加へられた衝激が、突然其れまで無意識であつた自分の肉體の存在に付いて、私に新らしい感覺を與へました。其の衝激は私に生ける自分の思ひがけない姿と其の大きさとを感じさせました。斯様にして、其の衝突によつて直接、間接、私に及ぼした影響は、自己を眞に生かして行くといふ、それまで自分の中に存在してゐた潜在的な力をもつた自己愛の意識に、以前より更に深く、更に強く、ふれしめたことでありました。私は自分達の一定不變の環境が偶發の事件により、變性する際でなければそれを認知しようとはせぬことに氣が付きました。私は此處に初めて、私の存在と私の判斷に於て最も單純にして且つ、最も不變な環境に關する私の無意識が、何の點まで私の世界觀を粗雑なものとし、私の日常の生活態度を虛妄ならしめ、更に根本的には、私自身の個人性を抽象化し、且つ其を、その推算

に於て如何幼稚なるものたらしめたかといふことを、切實に示された機會を持つたのであります。人は常に慣例のもつ不充分さを考へねばならぬ理由がこゝにあるのであります。私は今靜かに、過去三旬餘の拘束生活から解放されて、無意識の内に滲み込んでゐる偏見を調べ、新たな認識を抱かうとするものであります。

私が最も強く感じたことは、即ち私自身の環境に對する認識不足でありまして、其のことは私の思想に於いて、身邊的な事情に對する私の態度が客觀的である可き、理論の分野に、如何に大きな影響を及ぼすものであるかを、切實に感ぜしめました。私は決してプロレタリアではありません。併し何故に私がプロレタリア階級への参加者の一名となつてプロレタリア・イデオロギーを持つに至つたのであるか、それに對する批判は今後の私の行動について決定的意義を與へるものであり、根本的な論點であります。

日本の現代の知識的な青年達が、マルクス陣營に流れ込んで行くことは注目に値へします。思想的青年の殆んど總てはマルクス主義の傾向を持つて居ます。それは思想を持ち、意見を持ち、これによつて世に立つてゐる人でマルクス主義でない者は稀れで、日本の文化と、ジャーナリズムが今迄其等の人々に依つて支配されてゐたことや、歴史的運動を理論的に理解する知識階級の最も鋭敏な分子達が、總てプロレタリア階級の参加者であつたことに深く原因するものであつたと思ひます。今の

政治家が學生のマルクス化について途方に暮れ、所謂思想指導を企て、も、青年の思想が一步を進めてゐることは争ひことの出来ぬものであります。蓋し資本家階級の壓迫の下に置かれてゐる國民大衆がプロレタリア的青年の思想に同情と利益と、興味を感ずることは、眞に自然であります。尙資本家がプロレタリア化の問題を前にして、正義觀に熱し易い青年の心理にプロレタリア・イデオロギーがより多く訴へる力を持つてゐることも何の神秘もありません。

斯うした傾向が一直線にマルクス主義への心酔となつて表れるものでありまして、其處には冷靜な學的法則は探究せられなくなるに至るのであります。マルクスの理論體系は尨大でありまして、マルクスの學的態度は非常に冷靜の如くですが、尙其の内心に於てプロレタリアの悲惨な生活と、救ふ可からざる境遇とに對する悲憤の正義觀と悲壯な厭世觀があつたことは否めない事實であります。マルクスの理論が、全歴史の問題でもなければ、價值論一般でもなければ階級論一般でも、若しくは資本主義の全果に就いての如何なる描寫でも、そして世界觀そのものでもはともより無い所以が、其處に深く根ざしてゐると思ふものであります。私は正しい認識の爲に、マルクス理論を根本的動機にまで關係づけて把握しなければならぬと思ひます。マルクスが到る所で迫害的困窮の生活を送つたこと、シヨウベンハウエルが遺傳其他母との關係からして、偏屈な人間となつたことの間には、確かに一つの共通點を見出すことが出

来るのであります。後者が凡てを厭世的に觀察した如く前者も亦社會の缺陷のみを擴大視し、資本主義の暗黒面をのみよく見、白晝面を見なかつたのであります。惡性的な見方をして、缺陷や弱點のみを見抜いて、人生を冷笑する傾向は、迫害され僻んだ人々に多いことは多辯を要しないものですが、併しそのことをマルクスに見出し、彼の學說の根底に流れる僻んだもの——猶太根性！——を見出し得ぬものは、自分自身が病的性格の持主たることを告白して居るものであります。私が今、現實に體驗した人間愛を思ふ時、總て理論を超越した人間性を否定し得ないことを切實に感ずるものであります。私が唯物論に對し深い根本的な矛盾と疑惑を抱き、又唯物史觀に對しより深い非現實的なものを抱くに至つた原因も、其の根本に於て、私の生活から來る影響を受けた私自身の性格とマルクスの其との相反する結果であらうと思はれるのであります。肉體的愛情から出發して、集團力、民族愛、やがて祖國愛と人間性に深く根ざした人間の感情を一片の理論によつて、簡単に片付けんとするところに、マルクス主義の矛盾が、失敗が出來て來るものと思はれます。

種々なる點に於てマルクス缺陷は見出し得ますが、私にあつて半端な自己反省から如何に自分といふものが愚かな者であつたかと氣が付き、今はマルクス主義に對しての充分なる批判眼が出來て來ました。私は知識階級のもつ自己喪失の雷同性を非常に持つてゐました。徒らに世紀末の感傷に捕はれ、社會主義の煽動に乗り、これを進歩的と考へ、私自身の

持つ可きもので無いイデオロギーに陶酔し、自己覆滅の運動と理論との前に皮肉にも進歩的の錯覺を誇つて居ました。私は最も聰明である可き地位の一人としても、私が最も愚かな行動をなし、自分を輕蔑視して居た事を恥ずるものです。私の父が、母が、兄が、皆日本人としての心で私を慰め私を指導してくれたこと、それ等は總て、今は私の中にあつて貴い教訓となつてゐます。私は最近何の憂鬱をも抱いてゐません。私の最も小さな身邊から祖國愛へと進む根本的な人間性を限りなく責ぶものがあります。何故に其等をマルクス主義者は否定せねばならぬかを考へた時、其處に暗い、悲惨な迫害を受けて生活してゐたマルクスの性格を暗示される様に思ひます。私は何んな行動に、何んな感情に迫られても、嘗て味つたあの留置場での生活を回顧して、根本的に人間の愛情を否定し難い人間の姿を描き、それを深く胸に止めて自重し且つ行動するものであります。

私が體驗した第一のものは即ち人間性であります。私が自分環境に對する態度も、國家に對する認識も、民族に於ける認識も、今は總てが人間性の上に立つた否定し得ぬもので、それ等は總て個性的であり國家的であり民族的であります。私の結論は此の一語に盡きます。以上

二二二

某大學學生

S・B (當二十四年)

關係せる事件と種類……同盟加入
處分の種類、程度……家事都合、退學

家庭の状況……父、母、兄二、姉二、妹一、弟一、嫂一、

甥二、姪一。農。生活程度、中位

學費の出所、金額……家庭より、月四十五圓位

性質……中、温純、勤勉

一、家庭の状況

私の家は、田島、山林併せて約十町足らずの土地を所有してゐる地主であります。私の幼少の頃迄は質屋などとしてゐて家も少しづつよくなつてゐましたが、土地の習慣などに刺戟されて、子女を皆中等學校か其以上の學校に出し支出が次第に多くなり、それに子供達の反對で質屋を止め、副業の菓子は時代離れのした販賣方法の爲に賣行きが悪くなつて來ました。その上長男夫婦が病氣勝で、次男も我儘で一本氣の爲め勤務先を變へる事數度遂に失業し、縁付いた長女の方も面白くない事が續いたりして、今迄金をかけた子供達が皆引續き親の厄介になる事が多く次第に家運は傾いて來ました。その爲父母は子供の行先を案じ男子には夫々少しづつ土地を分配する事を考へました。その結果私は約二町歩の地所を買つて昭和三年分家獨立致しました。

その間父は一人で下男下女(二名乃至三名)を使つて百姓を續け約二町四、五段の土地を耕作しましたが昨年からは老齢と近所の手前、自作を

斷念致しました。以前は少しあつた鐵道株は配當なく銀行預金はなくなり、あまつさへ借金が殖えて來ました。それに小作人が次第に自覺して來て昨年の如きは凶作を理由に小作米を入れないものも出て來ました。家では別にぜい澤もありませんでしたが、兄弟、家の兩隣がめきめきと裕福になつて行くのに私の家丈がぐんぐんと苦しくなつて行く有様は、私が幾度か「學校を止めて働かう」と考へた程慘めでした。それにつれて家の中でも病弱で仕事の出来ない兄と婚期の後れた姉(次女)——その頃姉は殆んど一人で家事を切り廻してゐる形でした——その間に「たん」が絶え間なく、次兄の生活費の問題は家庭經濟の病でした。かうして私はまざりと「没落して行く中産階級」を経験し社會運動に關心を深める様になりました。家では體格的貧弱な私を劇合に優遇して呉れ、母など殊に氣を遣つて呉れましたが、私は小さい時から持つてゐた「弱い者の憐れ」を益々強く感じ、強い者に反抗する氣持を強めました。

二、社會科學研究の經過と思想の發展過程

昭和四年秋頃—私が××高等學院二年の頃—から

職 業

文藝戯論

を時々買つて讀みましたが別に興味を覺えませんでした。

昭和五年二月頃(××高等學院二年第三學期)M.H(當時××高等學

院第二學年)に誘はれ、J.Y、K.Mと共に××高等學院部室で、

中野重次著藝術に關する走り書的覺え書

を輪讀しましたが、二回程で自然消滅しました。

昭和五年四月(××大學文學部國文科一年)K.M、M.Hと一緒に本

を讀まないかと誘はれ、J.Y、T.W、K.T、S.Eと共に、K.Tの

下宿又は喫茶店DONKEY等にて一週一回乃至二回

無産者政治教程第一輯(×××學生消費組合で買ふ)

をテキストとして輪講の形で讀書會をやりました。

昭和五年六月末か七月頃から

第二無産者新聞

無産青年

を輪讀し

反帝、モツブル、R.S、等のニュース

の配布を受けました。この頃から資本主義制度の外郭を少しづつ理解する様になりましたが、まだ自ら進んで本を讀む程熱心ではありませんでした。丁度この頃から讀書の方は

無産者政治教程第二輯(×××學生消費組合で買ふ)

に入りましたが、間もなく夏休みになつたので歸省前に、休暇中に

無産者政治教程第二輯

レーニン帝國主義(×××學生消費組合で買ふ)

プレハーノフ藝術論(右同所にて求む)

を讀んで來る事に決めて歸郷しました。私は休中に努力して三冊共大部分に目を通しましたが難解の所が可成りありました。

レーニン 帝國主義

に依つて

無産者政治教程第一輯

の科學的理論づけと細かな實例を示されました。

プレハーノフ 藝術論

でも亦

中野重治著 藝術に關する走り書的覺え書

の内容が補足され裏付けられた様に覺えてゐます。

昭和五年九月歸京してからは

レーニン 帝國主義

を改めて輪讀しました。殆んど全部の者がほんの一部分しか目を通してゐませんでした。處かこれをも少しで終ると云ふ所で學校に騒動が起つたのです。

昭和五年十月中旬、××職切符の分配方法の不公平に對する不満は全×大に波及して各クラスで、級會が持たれ、其れが直ぐ各部各學院の學生大會に迄發展しました。私の級でも誰云ふとなく、級會になり直ちにストライキに参加する事になりました。昔から騒ぐ事の好きだった私は

勿論喜んで賛成した一人でした。ストライキ中は私の級の地區別班代——連絡の都合上全クラス員を地區によつて數班に分ちました——に自ら進んでなり、その班代として活動し途中から私の級の補助委員に選出されました。補助委員はクラス委員の補助又は缺員の代理と云ふ事になつてゐましたが補助委員會に出席し、後になつて考へて見ると實質上の闘争委員である事が解りました。尤も私が補助委員會——各部、各學院別に——出席したのは終りの二、三回丈で當時はよく内容が解りませんでした。又この頃から各部委員會附屬の編纂部の級代表に推薦され、各級に出來た文化團體中の映畫班級責任者に選出されました。全×大のストライキは十月に入つてから委員會統制部内の内訌、其れに依る高師部、法學部等の軟化で次第に形勢が悪くなつて來ました。が文學部は其の中の硬派でストライキは十一月中旬迄續いた様に覺えてゐます。私は元來強い者になるのが嫌ひな性質なので最後迄頑張る等を主張しましたが、口の拙いのと理論を知らないのと兩方の理由であり問題にされず特に他級員には一笑に附せられた事もありました。

愈ミストライキの客觀的情勢が悪化して委員會及補助委員會が打切り決定した時も反對しましたが結構學生大會——私の出席したのは文學部學生大會でストライキ打切りが決定され實に残念でした。後で委員會が急速に軟化したのは委員の中に解黨派の者が居て活動したからだと思ふ噂を聞きました。ストライキ解黨式の日には演壇に立つた調停者中野正

剛氏の演説を妨害して司會者に注意されました。

この約一ヶ月のストライキは私の理論と實行力をためすに絶好の機會でした。私は自分の讀んだ本の中の言葉を使い、今迄殆んど出來なかつた理論を述べるし自分の意見を系統的に述べる事が出來て愉快でした。何よりも自分の才能や力に對して持つてゐた否定的に近い敗北的な自負を打破する事が出來た事は何とも云へない喜びでした。自分でも皆の間に伍して、皆を相手に辯べり、活動し得るのだとの自覺を得ました。と同時に理論を振擧す事許りうまくて實行力の伴はない者、全く遊戯的な掛引妥協に満足する者を輕蔑する様になりました。然し又一面、自分の正しいと思ふ事がうまく表現出來ず自分の主張してゐる事が間違つてゐないと解り乍らそれを理論的に實證出來ない残念さから斷定的な事の云へる理論家に對して尊敬の念を感じ、自信のある理論を把握する必要を感じて參りました。最後にこのストライキを通じて私が理論に、實踐に可成積極的な態度をとる様になつたのは事實です。どんな小さな仕事でも級全體に關する事とか全學生に關聯のある事、即ち個人的でない、何等かの意味に於て大衆的な仕事——例へば級文化團體映畫班責任者としての仕事の如き——をするのに非常に生き甲斐を感じました。

一方私達の讀書會は昭和五年十一月末頃
レーニン 帝國主義
を大體終つて

支那問題講和

に移りました。私としては支那の問題、大きく云へば極東の社會情勢を知る事に可成興味を感じましたが、論議は間もなく冬期休暇が來りして幾らもやらない内に終りました。

その頃だつたと思ひます。

築地小劇場

で初めてプロレタリア演劇

三好十郎作 炭 塵

を見て餘り好きでなかつた演劇に興味を覺え、プロレタリア演劇に注意する様になつたのは、昭和五年十二月二十一日、愈ミ冬期休暇の第一日、私達の讀書會の納め會とも云ふべき會合をK・Tの下宿に持ちました。その時、當時私達の讀書會の班代だつたT・Yが「誰か市電の車庫にビラ貼りに行く人はないか、がっちりした者を出して呉れと云つてゐるが」と持ち出した時、私は何も自分をがっちりしてゐると考へた譯ではありませんでしたが「幾ら本を讀んでも駄目だ、實踐が第一だ」と自分が理論で人について行けないのに對する自己辯護も手傳つてさう考へてゐた時分なので、自分から進んで志願しました。後で考へて見ると、T・Yはあまり僕を出したくなかつた様です。私は當時×大文學部學生事務所として借りてゐた×××××の家にいき、N、K他三、四名と集り、實行方法、分擔等を相談し、私はKと二人で新宿、澁谷兩車庫を受持ち、

午後三時頃新宿車庫に着きました。そしてビラ張りを終り出て來る所を私服の刑事に取り押へられました。Kは少し逃げましたが矢張り捕へられました。そして二人共四谷署に五年十二月二十一日から六年一月十九日迄、二十九日の拘留に處せられました。

私は早大文學部學生事務所に行つた時から「どうも自分には荷が勝ち過ぎる、行くと云はなければよかつた」と思ひましたが今更さうも云ひ出し兼ね、遂について行きましたが捕へられた時は「ツカマツタノダ」と云ふ以外にぼんやりして何も考へませんでした。然し愈ミ拘留と決定してからの苦しさは嘗て豫想だにしなかつた事です。家の事を考へました。友達のことを考へました。そして今後自分はどうなるのだろうと考へました。だが次から次に色々の事が頭に浮ぶ丈で少しも纏りません。この休みを家に歸ればよかつた」と考へて見ると「自分の家では僅か二週間位の休暇に往復三十圓に近い旅費をかけて歸省する事など許しては呉れない」と、その休みも歸省した友達を羨ましくも思ひました。初めの留置場の生活は自分には耐へられない程苦痛でした。身體は弱つて來ました。氣持は次第に落着いて來ましたが、一字の文字も讀まず書かずでゐる爲め頭は徒らにボンヤリしてゐる思考力も判断力も鈍つて仕舞ひました。つく／＼「アンナ事ヲスルンチャナカタ」と思ひました。

私は志村さんの取調べを受けて自分が左翼の事に付いて殆んど何も知らないと思つていゝ程無智であつた事、何等の理論的根據を持つてゐな

かつた事、自分自身を餘りにも粗末に扱つた事即ち自分のやり方が可成自暴自棄的であつた事、アナーキーな實行家に過ぎなかつた事を深く反省させられました。私は親の事、兄弟姉妹の事、親友の事を幾度も繰返し繰返し考へました。父は自分のした事を許して呉れるだらうか、恐らく絶対に認めて呉れないに違ひない。母は日頃から氣が小さい方だからこんな事になつた自分を見たら病氣にならないとは云ひ切れない、或は自殺を考へてゐるかも知れない。兄弟姉妹は日頃の自分を最もよく知つてゐる丈に私のした事を恨めしく思つてゐるだらう。それから友達は——中學時代迄引込思案だつた自分がその中からやつと得た親友は自分をどう考へてゐるのか迷つてゐるに違ひない。學校の友達に私の正體を知つて敬遠しやしないだらうか、これから田舎へ歸つて毎日を如何にして送つて行けばいゝだらうか。私は私自身に責められました。私は自分が完全に孤立した様に思はれて仕方がありません。私は自分のやつて来た事を悔ひました。本を讀んだ事は悪い事ではない、だが自分はそれを判断し批判し、完全に生かし得なかつた、色々やつてみた事も必ずしも悪い事ではない。だが總てが自身の爲になる事、皆の爲になる事をはつきり信じてやつて来たのではなかつた。行きあたりばつたり、氣まぐれに、無責任に、感情の儘に行動して来た。それが果して正しいと云へるか。自分はもつと眞面目に、冷靜に本を讀まなければいけない。もつと深く深く勉強しなければいけない。もつと冷靜に物事を處理して行くべ

きだつた。もつと／＼考へてみなければいけない」と考へました。拘留中一番嬉しかつたのは友人（級全員）からの差入れでした。それに依つて團結の力と云ふ様な事も考へさせられました。又「現在自分は獨りきりだ」と云ふ氣持をしみ／＼と感じさせられました。昭和六年一月二十日警察の方に「今後絶対に實際運動に關係しない」と云ふ事を誓つて釋放して貰ひました。この日學校の方が三人見えて「田舎に歸つて考へて見よは如何だ」と云ふ話があり、何等の思想的根據なくして徒らに實際運動に走る愚を説き聞かされました。四谷驛釋放の日、翌迄義兄が引取りに来て呉れ、義兄の家に同居する事になりました。その當時學校からの呼出しに應じて上京してゐた父は非常に立腹して頭からどなりつけました。私は當時非常に身體が衰弱し、思考力も衰へてゐました。何を言はれても興奮する許りでした。父や義兄は極力學校の諒解を求め、私に今後國文學の研究に専心する様に説き勧めました。私は當時餘り學校に對して期待を持つてゐなかつたのと「どうせ傷の附いた身體だ社會も友人も信用して呉れないだらう」と云ふ様な幾分自棄的な感情も交つて學校は止めて映畫監督にでもならうと考へ父と義兄にもさう云ひましたが勿論反對されました。

學校の方ではA（當時×××大學文學部教授、國文科主任先生の同情ある辯護と同級生達の誠意ある歎願に依り、私がざんげ録を學校に提出する丈で何等の處分もなく済みました。父は其後一緒に外出しても何

も云びませんでした。學校では友人が親しく話し掛けて呉れるのでした。私は自分丈が別物扱ひにされてゐる様でなりませんでした。

私は決心通り社會科學の書籍から遠ざかり丁度學期末で試験前でもあつたので國文學の研究に没頭しました。私の國文學研究に對する熱意は元々それ程強いものではありませんでしたが、それでも現在ある學制の中で最も好きな科目はやつぱり國文學でした。只自分からどし／＼研究を進めて行く丈の積極性はありませんでした。然しA先生を訪問する度に國文學の話を開き、家で義兄に國文學に関する質問を出されたりする中に少しづつ國文學研究の熱意も加つて来ました。その際度々失望させられた事は級の友人達の國文學の知識と自分の現在のそれとが餘りに距りがある事でした。換言すれば自分が今迄殆んどと云つてよい位國文學の書籍に接してない事でした。私は矢張り映畫に對する野心を捨てゝる事は出来ませんでした。好きな丈にしげ／＼と映畫館に出入する丈では満足出来ず、少しづつ翻譯書や雜誌等を讀み出しました。

ブドフキンの映畫監督と映畫撮影論
等繰返して讀みました。

多少時間が前後しますが

レオン・ムーシナツク ソヴェートロシアの映畫（書名不確實）

袋一平 ソヴェート映畫の旅

其他パンフレット、雜誌等で、ソヴェート・ロシアの映畫の理論や報告

には特に興味を持ちました。ソヴェートの映畫

アチアの嵐（原名デングスカンの末裔）

トウルクシブ

新しきものと古きもの（別名全録）

大地等

私の見たソヴェートの映畫が皆相當の缺點を有し乍らも、嘗て見た事のない新しさと明るさを有つて居り、何かしら積極的に働き掛けて来る所に感銘し、映畫を通じて、ソヴェートに對する憧れを強められました。そんな關係から、其の當時未だ形丈残つてゐた級の文化團體の映畫班の責任者を引継ぎやりましたが別に具體的な活動は出来ませんでした。

一方級の讀書會は前述の通り私が四谷署に檢舉され、T・W（當時×××大學文學部國文科一年）も亦昭和六年一月戸塚署に檢舉された爲壊滅して仕舞ひました。その爲私は

中央公論

の小説を讀み、稀に

左翼劇場

等の芝居を見に行つたりする位でした。

村山知義 東洋車輛工場

を市村座で見ると其の寫實的な演出とそれに對する觀客——特に勞働者が

多かつた様に記憶してゐます——の共感振りに動かされたのもこの頃だつたと思ひます。

この様に一方に於て社會科學の研究を拒絶しながら他方に於て不識不識プロレタリア藝術に親しみを感ずる様な矛盾に陥つてゐました。それと云ふのも私の意欲と學校の教育方法及び教育材料との間に可成の距りがあり、私が學校の授業に熱中出来なかつた所に原因の大部分を發してゐると思ひます。それで私は度々親しい友達等にも「映畫の方なら没頭して研究出来さうだが、國文學にはそれ程熱中出来ない、如何したらいいだらうか」と相談を持ち掛けた事もありました。友達は「思ひ切つて映畫の方へ進んだ方がいいだらう、日大の藝術科にでも轉校しては」と云つて呉れましたが現在の映畫製作會社及映畫製作者達のインテリキな内幕をよく知つてゐる丈に思ひ切つてその方へ轉換も出来ませんでした。もう一つの大きな原因はこれ迄の私の経路を見てもわかりませんが實際の社會運動に對してもプロレタリア藝術に對しても非常に感情的に近付いて行つた事です、理論的に科學的に批判する前に近付き信ずると云ふ様な傾向が確かに私にはありました。そんな事から昭和六年秋邊りから再び社會科學の書籍に注意を惹かれる様になりました。

中央公論

改造

等のプロレタリア小説や文藝時評等を愛讀し、

新築地劇團の「暴風」

村上知義作の「志村夏江」

和田勝一作の「大里村」

新築地劇團の「交連の兄弟」

等特に印象に残つて居ます。一上演毎に労働者の観客の加はる事、原作及演出技術の顯著な進歩に階級的快感を覺えプロレタリア藝術に課せられたる任務の重大さを痛感しました。

昭和七年三月の休暇にはT・Mは文學を研究し、私は唯物辯證法を研究して來る事に決定して夫々歸國致しました。私は、

唯物辯證法 (辯證法講座の一)

ブレハーノフ 史的一元論

を持ち歸り、前者は一回通讀し、後者は約四分の一程讀み、唯物辯證法の基礎的概念の輪廓を知り得ました。然しそれ丈の知識でも何だか自分が哲學的基礎——自信——を獲得した様な氣がして稍々得意でした。昭和七年四月歸京してからは二人の研究會は専ら時事問題の研究となり、唯物辯證法に關する論究、ファッシズム、滿洲事變、プロレタリア藝術の大眾化と文化サークル、政治運動と藝術活動の統一等に關して討論致しました。唯物辯證法に就いて最も問題になつたのは量的變化、飛躍の問題、偶然と必然の關係等でしたが二人共お互に納得出来る様な説明を與

ラビドス マルクス主義經濟學 第三期とは何ぞや (プロレタリア科學研究所發行)

等を購入、前者は最初の方をポツ／＼讀みました。

昭和六年十二月頃、W (當時××大學文學部獨文科二年) に「どうだもう一度やらないか」と勧められ、「一度檢閲された自分だから氣が進まない」と答へましたが「大丈夫だ、うまくさへやれば、一度のテロ位で参つては恥だ」と説かれ數日後

全××自治學生會

に加入し、直ちに國文二年代表 (班代) として文學部の班代會議に出席しました。

それから間もなく、

T・M (當時××大學文學部國文科二年) を誘つて二人でラビドスのマルクス主義經濟學及び時事問題の研究會を一週二回位づゝお互の下宿で持ちました。以前一緒に讀書會をやつてゐた級の友人にも勧めてみましたが皆應じませんでした。私もT・Mも共に藝術家志望だったので自然に其の方面の研究に向ひ、

文學新聞 (×××學生消費組合、書房ローザ等で買ふ)

プロレタリア文學 (右に同じ)

等は店頭に出る毎に購讀しました、又毎月の様に、築地小劇場に見に行きました。昭和七年一月の東京地方の各プロレタリア劇團の演

へる事は出来ませんでした。ファッシズム、滿洲事變に就いては概念的な理解しか持ち得ませんでした。文化サークルを組織する場合對象が學生である場合は何等かの水準を以つて組織すべきか否かの問題は私が何等かの水準を必要としたに反してT・Mは何等の水準も必要でない。労働者と同様でいゝと主張しました。政治的活動と藝術的活動との統一の問題はお互に切實な問題丈に仲々解決せず、ずつと後迄問題として残りました。

昭和七年四月末×××大學専門部の某に「×××の組織再建に就いて話し度い事があるから來て呉れ」と云はれ、その日の夕方七時頃高田馬場驛で待合せ沼袋の×××高師部の男の家に行きました。そこには二十名近くの學生が集り、

日本共青年同盟××大細胞總會

である事を聞かされ、「君達の現在やつてゐる事は事實上同盟員と同様な活動だ。何も同盟員になつたからと云つて難しい事はない、唯同盟員としてのプライドを以て行動して貰ひ度い」と云はれ同盟員に加入しました。その後は共青の××大細胞として大學部の細胞會議に出席しました。細胞會議は××大内の文學部教室、商學部教室等で開き(一週二回乃至三回)連絡と協議に時局を費しました。その毎に各自の不明な問題、各學部に起つてゐる問題等に就いて討論しましたが、會場の都合で落付かず、制限された時間内で——時間は一週一回は時間を相當にとつてアチ

トを持つてやる事になつてみました。アチトがなく時間も各自の都合が一致せず実行される事は極めて稀でした。他は只連絡をとる丈で十分乃至三分で別れました——討論に纏りがつかず、收穫は殆んどありませんでした。私もW(當時×××大學文學部國文科三年)も細胞會議に出席し、又昭和七年四月より活動を始めた。

×大文學部國文學會

の研究會に出席したりした爲め、二人だけの讀書會は餘り規則正しく持ちませんでした。その中で最もよく繰返された問題は前述の政治的活動と文化的活動の統一の問題でした。私は「政治的活動と文化的活動とは決して分裂するものではないし、又分裂させて考へる事は敗北的な考へ方だ。だから我々が文化的活動をなすつゝ政治的活動をなす事は兩方の活動が互に拍車となり、交互に相方の活動を推し進めるものだ」と概念的に信じてゐる儘を述べると、Mは「自分もさうだと思ふが實際の問題として、自分がかうして政治的活動(細胞としての活動の事)をしてゐると自分の希望してゐる文化的活動に手をつける暇がない。然も自分の場合は政治的活動はどうも不得手だ。文化的活動をしたいと思ふし、その方ならもつと積極的に活動出来るのだが」と云ふ意味の事を主張しました。政治的な活動と文化的活動の辯證法的統一に就いて概念的な理解しか持たなかつた私は何回繰返してもMを説得させる事が出来ず、持て餘した結果大學部の細胞會議にも持ち出しましたが後の二名が政経學

部の者であつた關係から余り文化運動に興味を持たず、理解も少くこゝから何等の解決も得ず遂に共青全×大細胞指導部會議に持ち出してその中の一名を細胞會議に出席して貰へました。出て来た同盟の人の説明に依ると「文化運動と政治運動とは夫々獨立した別の目的を持つてゐる。政治運動は一切の資本主義制度を打倒してプロレタリア獨裁を樹立し、共產主義社會を建設する事を目的としてゐるが、文化運動は總ゆる反動的な文化と闘争し、共產主義文化を建設する目的としてゐる。唯共產主義文化を完成するには共產主義制度を完成しなければ出来ないし、プロレタリア政治運動をよく強力にする爲には如何しても文化運動の助けを受けなければ出来ない、又プロレタリア文化運動と完全に提携した時に最も効果的な活動が出来るのだ」と簡単に説明されて、私もMも始めて判然致しました。私がこの問題に就いて自分の理解の不十分さを省みず、飽く迄自分の主張を固持したのは私にもMと同様な動搖があり、彼に細胞から脱落されては私がその後も一人で續けて行ける自信がなかつたのにも大きな基礎がある譯です。

私とMの二人の研究會はこの様な状態を夏休み迄続けました。一々問題にした事は記憶しませんが前述の如く時事の問題を中心に討論し、例へば六月二十六日大學擁護デーが近づいた場合は大學擁護デーに關する文獻を分擔をきめて調査し、その報告に基づいて當日の對策を討論する方法を取りました。又時々黨及び同盟から出るパンフレットに就いての

研究等もやりました。

昭和七年八月下旬共青青年同盟の城西地區學校細胞代表者會議に出席する様になると、こゝで一週一回(但し夏休み中丈)を研究會

レーニン選集 第一卷

に決定しました。但し仲々テキストが揃はず滿洲問題やローザンヌ會議を臨時議題として討論しました。この時の場所は私の家でした。

私は四月末同盟に加入して以來痛切に自分の理論的根據の貧弱なるを痛感してみつちり理論を研究し度い希望を持つてゐましたが連絡會議等に時間を取られ仲々その暇がなく、その爲同盟員として自信を以つて行動する事が出来ませんでした。この氣持は日と共に増大し、細胞會議でも指導部會議でも責任ある地位を退いて勉強したいと洩した事が幾度もありましたがその都度「決定的な日和見主義だ」と批判されました。昭和七年七月學校も夏休みとなり、Mも歸國し級友も殆んど歸省した時私も歸省したい氣持が非常に強かつたのですが、全×大細胞の指導部會議で「在京者にはよいチューターを呼んで理論を研究させる」等と在京を勧められたので夏休み中も在京する事に決定した位です。然しこの研究會は×大の細胞が次から次に檢舉されたりして成立せざるやむやになりました。

三、黨、同盟に對する認識

日本共產黨は國際共產黨(コミンテルン)の日本支部で、資本主義日

本を打倒し、サヴェイト日本を樹立する事を目的とする政治的組織(政黨)であります。即ち日本の資本主義體制を打倒してプロレタリア獨裁を確立し、更に共產主義世界の建設に向つて理論的、實踐的指導をなす政黨であります。黨は日本及び世界のプロレタリア、一般被壓迫大衆を進展に貢献し、より完全な社會たらしめる爲に運動し、運動を指導する政黨であります。だから黨は労働者、農民を隔々迄組織し、指導しなければなりません。黨は日本のプロレタリア(廣汎に言へば世界のプロレタリア)を眞に解放する唯一の政黨であります。黨は總ゆるプロレタリアの組織を利用し、指導しなければなりません。

日本共産青年同盟を始め、赤色教授會、反帝同盟、日本プロレタリア文化聯盟(日本プロレタリア作家同盟、映畫同盟、劇場同盟、音楽家同盟、美術家同盟等から無産者辯護士團(?))、無産者醫藥同盟(?)等に至る迄)等は勿論全國協議會は云ふ迄もなく社會大衆黨系の全國労働組合(名稱不確實)全國農民組合も含み、更に町村團、處女會から愛國婦人會、青年訓練所、學校、兵營等に至る迄の存在する總ゆる組織團體を利用して、指導し再組織しなければなりません。私は黨の詳しい綱領等は存じませんが、プロレタリアにとつては黨は現在想像し得る範圍内で最も完全な制度を目的とした、最も適切な方法による社會改革をなす政治的組織だと考へますが、我々小市民及び、プチ・ブルジョアにとつてもさう

だと断言し得る自信はありません。それはマルキシズムの示す通り、プチブルジョア、小市民の層が必然的にブルジョア、プロレタリア兩階級に分裂し、その大部分がプロレタリア階級に没落（移行）する事が事實を以つて證明され又は社會科學によつて最も正確な見透しである事を説明し得れば我々プチブルジョア、小市民にとつても最良の政黨であると云ひ得ませう。その點私は未だ社會科學研究の一端に手を染めたのみであり、現在プチブルジョア、小市民の没落が決定的な社會現象であるかどうかを断定する事は出来ません。

日本共産青年同盟は國際共産青年同盟（キーム）の日本支部であります。共産青年同盟は共産主義者を教育し訓練する獨立した組織であり、共産青年同盟はプロレタリア青年を組織し、教育し、訓練し、指導する唯一の組織であります。即ちプロレタリア青年にとつて同盟は最も正しい教育者であり指導者であり、最もよき相談相手、共同者であります。同盟は飽く迄獨立した組織ですがそれは又共産黨の組織のルールとしての役割を持つたものです。私が考へますに現在の日本共産青年同盟は極端な行動主義的傾向が強く、理論に對する過少評價があり、文化的活動に關する理解が少い様です。又組織者が指導者としての任務は相當に理解され實踐されてゐると思ひますが、教育者、相談相手としての任務が余り省られてゐない様です。私が同盟に加盟後最も大きな不満はこの點でありましたが、その様な口吻を洩らす度に「敗北的な日和主義の

合理化」だと言はれ、自分に關する限りそれも一面の事實だと思ひました。私にしても同盟にしても現在未だ／＼労働者農民に強力な基礎を持つてゐない事は事實だと思ひますが又黨、同盟が現在工場、農村兵營軍艦等に根をおろす事に最も精力を注いでゐる事も又事實です。所謂日本の客觀的情勢に、主觀的情勢が立ち遅れてゐるのはあらそはれません。黨同盟の色々な偏向や誤謬はそこに原因してゐます。特に同盟に就いてそれが云へる様に思ひます。尤もこれは赤旗、無青及其他黨、同盟末々の出版物等を通じて見た感想であります。

四、學生運動の意義、任務

學生運動の最大最終の目的はプチブルジョア、小市民層を決定的瞬間（革命の際）に革命的中立（好意的中立）に立たしめ、運動の過程に於てその中の革命的分子をプロレタリアの組織に吸収し運動に参加させる事であります。勿論ブルジョア教育制度と闘ひ、言論研究の自由を要求し、プロレタリア教育制度の建設に参加する目的もあります。然し眞の意味の學生の解放研究の自由はサヴェイト制度が確立して始めて得らるゝものである。マルキシズムの示す所が事實であり、現在サヴェイトよりの通信に偽がないとして、プロレタリア解放運動から離れた學生独自の運動と云ふものは殆んど無意義だと思ひます。こゝから自治學生會の解消論が起つて來てゐます。私も自學の解消論に賛成した一人です。が未だに絶対に間違ひないとは断定し得ません。然し學生運動の意義任務

も夫々の學校の性質によつて異つて來ます。小學校の場合は其の卒業生の大部分が卒業と同時に労働者、農民の列に加つて行くものである——彼等は大部分プロレタリアの子弟である——ので彼等を組織し、プロレタリアートとして教育し訓練して行く事は非常に意義を持ち未來の闘争を準備する重大な任務を背負されてゐる譯です。

中等學校、専門學校に於ては工業學校工手學校理工科等の學生は卒業後熟練工として直接生産部門に送り込まれる者ですから他の學生に比較してより重大な意義と任務を持つてゐる譯です。其他の中學校、専門學校の學生はその大部分が卒業後ブルジョアの搾取機構の中に加つて行くものであるから、その間に於ける學生運動は資本主義社會の諸矛盾の暴露、ブルジョア教育の暴露及び彼等自信の地位——現社會に於ける——に對する自覺を興へ資本主義社會を内部から崩壊させる意義と任務を持つてゐると思ひます。その爲に學生運動に於ては社會科學研究のプチブルが労働者、農民の場合以上に重要な役割を果す事になります。

五、自己批判

私が社會科學を研究した経路及實際運動にたゞさはつた経過は以上の如くであります。今落付いて振り返つて見ますと最初は自己の境遇に對する幼稚な不満から社會科學と云ふよりも社會運動に興味を持つ様になり、暫く社會科學及社會運動に對する一人のファンとしての立場から學内運動に手を出し性來の本氣（ポツチャン的な反抗心）や直接行動的

傾向から理論の理解を飛越へてドン／＼實踐運動に深入りして行きました。終始一貫して認められる最も顯著な傾向（寧ろ偏向と云ふべきか）は非常に感情的な直接行動主義です。即ち凡ゆる不平不満希望願望を何等かの形で行動（或は實踐）に現はさずには居られない性質です。インテリゲンチヤの場合、殆んど總ての者が社會科學の研究から出發して次第に其の理論を實踐に迄移す様になるのに、私は最初から實際運動に参加する事を希望し寧ろ理論を輕蔑してゐました。それが實際運動に参加して後（と云つても初めの中、學内運動に参加したに過ぎませんでした）次第に自分の行動の際、後に理論的根據のない事に不安を感じ（即ち自己の行動に對する自信を失ひ）理論獲得の必要を痛感する様になりました。然しそれでも未だ社會科學研究に對する熱意は實際運動に對する熱意よりも低い所にありました。

それで私は現在も殆んど何等の革命的理論を持ちません。マルキシズムもレーニズムも常識的な概念的な理解しかしてゐないと云つた方が正しいと思ひます。唯私は私の常識的な、概念的な理論の中に在るマルクス、レーニン主義を絶対に正しいものであるに違ひないと云ふ氣持で行動して來ました。そして私は私の狭いサヴェイト露西亞に對する理解を通じて現在存在し、又想像し得る制度の中でサヴェイトの制度こそ最も完全な社會制度だと思ひ込みサヴェイト制度に對する強い憧れを持ちました。然し時日経過するに従つて來た不安は矢張り自分の行動の

後に理論的根據、哲學的根據のない事でした。

そして現在最も大きな不安は家庭關係と自己の肉體に對する不安でした。家庭關係は最初の間簡單に、「自分の行動に都合が悪くなつた場合は家を飛び出すのだ」と考へてゐましたが、昭和五年十二月四谷署に第一回の檢舉にあつてから實際の場合決して簡單に家庭と絶縁出来るものではない事を痛感しました。更に最近の(?)黨の家庭問題に對する態度——例へば非常に封建的の制度である家庭、家族制度であり、自分の家庭(家族)がブルジョアジー或はその附屬地帯ブルジョアに屬してゐても我々は自分の家族を自己のシンパサイザーとして維持し更に出來得ればプロレタリア階級の支援者同盟者となる迄啓蒙する(家庭闘争する)事、而してその努力を費しても全然その見込がない場合に——即ち自己の活動の妨害となる場合には斷然家庭と絶縁すべきだ——を知つてから幾分私は家庭關係に對して樂觀的な氣持を持つ様になりましたがこれも實際に努力してみても殆んど絶望である事、自分にそれを(家庭闘争を)飽迄遂行する決意に缺けてゐる事を痛感しました。この感じを更に強めたのは今回の三ヶ月に亙る拘留でした。私に徹底的な家庭闘争を遂行する自信も決意もなく、或は又私に家庭から絶縁する決意が出來るとしても家族連は決して私を路傍の人間として見る事を承知しません。私自身に家庭關係を清算する自信が全然なくなりました。

覺えました。それは興味以上の何物でもなかつた事は確かです。

勿論その時は一般に言はれてゐる左翼内の各分派に就ては全然未知でした。その時即ち昭和五年十一月上旬、僕は豫科二ノ二英法在學中の「ストライキ」に於て僕の仕事は次の事位なものです。當時二ノ二英法の總務委員N某の用心棒や「レポーター」の様な役割をしたり「ピラ」を教室へ撒いたり「デモ」に加つたり學生大會に参加した位なものです。その後は別に左翼の運動には携はりませんでした。

昭和六年五月一日の「メーデー」には麻雀友達I某と一緒に××の附近の沿道迄見物に行き、解散地點たる××公園の廣場迄行つて、散會する迄見て別れました。昭和六年六月中旬に××學生消費組合に加入しました。其動機は學消が左翼らしいので、それに参加すると左翼の人間になれるだらうと云ふ單純な氣分からでした。

昭和六年六月中旬に同クラスのI某と一緒に××小劇場に行きました。その時偶然同クラスに居た處の×大F某と逢ひ、彼から左翼の方の本を二三人の友達と讀み合はないかと誘はれたので承知しました。その數日後、同クラスのI某(法大)K某(法大)と私とで三人でK某の家で共産主義ABC(×消より購入)K某をテキストにして研究會を持ちました。その後毎週一回乃至二回宛昭和六年七月末日迄

小野事K某或は津上事I某(當時××町××××四三、第一××舎居住)の家で研究會を持ちました。

二三

某私立大學法學部一年 E・M(當二十一年)

關係せる事件の種類……學内共青細胞

處分の種類……起訴留保

家庭の狀況……長男、父は××事務官、嚴格にして生計

豊かなり

學費の出所……父より

健康狀態……強健

性質……溫順

一、社會科學研究の動機過程及びそれによる思想の變遷

昭和五年十一月八日××大學内に突發せる處の學生運動に對して始めて右翼と左翼なるものゝ區別を知り、即ち之を動機に左動運翼に對して關心を持つ様になりました。それ迄の僕は、今から考へれば純眞なる學徒であり、又且つ忠君愛國の帝國主義者であつた様です。該ストライキに於ては今迄知らなかつた社會の一部の裏面を見せつけられ、即ち學校經營者の爲して居るところの色々の事が非常に悪いものと云ふことをクラスメートから聞いて「ソウダナー」と思ひました。なぜさうなつたかと云ふと、自分より上のものに對して反對すると云ふ小兒病的英雄主義が多分にあつたものらしいです。さうしてそれに對して非常に興味を

研究會を持ち始めてからPとYが讀める様になりました。左翼雜誌としては

戰旗(殆ど此頃より毎月××學消より購入)

ナツプ(戰旗に同じ)

昭和六年九月以後は、R・Sは一度か二度持たただけで、少し怠慢な氣分になつて居りました。同年九月以降二學期になつて讀んで居たものは

P・Y

プロレタリア科學(×消にて購入)

インターナショナル(同)

産業労働時報(同)

位なものでした。

それ等のものを買ふには買ひましたが、僕は家へ歸ると自宅の爲め公然と讀む自由が無いので、つい面倒くさくて餘り落付て讀んだことはありませんでした。ですから、僕は皆が理論的勉強をしなくてはならないと云はれると、僕は實踐から理論をつかむのだと云つて居ました。ですから僕は此の運動をやつて居ても、頭の中が空虚であることを認めてきました。

二學期の終りに近づいて、昭和六年十一月七日××學消の人達が總檢

東を食つた時、僕は組合員 H (×大夜學生) S (在×學生消費組合専務理事)と共に總檢束を食つた後の組合の營業經營を續けて行きました。十二月上旬、組合員の(×消) M某(豫科一ノ三)より××學消の店に於て反帝同盟×大班に入る事をすゝめられ承諾し、直ちに×大學部、部代となり、十一月七日M檢束後、×大班責任者となり、始めて學内の實踐運動に携はる様になりました。その頃から反帝新聞、反帝日報の讀者となり、反帝同盟×大班の仕事をしました。××學生消費組合數名の檢束後、父母に學生消費組合の仕事をして居ることを知られ非常に叱責されました。それは昭和六年九月頃一般新聞紙上に於て學生消費組合の「赤いものである事が分り、脱退せよ」と云はれ、僕は直に脱退すると云つて置きながら、未だに脱退せずに居た爲めでした。その時も父母は非常に悲しみました。

昭和七年二月第三學期以降は、僕達のグループの人間であつたK某、I某二人共、家庭の事情や何かで没落したので、僕も非常に策をくらさせて居りました。それは僕は二人の後任として學部のP・Y、學新の責任者等を爲して居た關係で、一月二十七日にT(政大一)から學校細胞即ち共產青年同盟員に推薦すると云つてきましたので引受けました。順序が狂ひましたが僕はレーニン青年の讀者となつたのは十一月中旬乃至下旬でした。その時はレーニン青年第十五號をK某から受取りました。然し昭和六年は一回もレーニン青年の讀者會は持ちませんでした。

點は非常に考へは樂でした。僕が現在の様な上部に地位に來ることは、理論的に頭があるからではなくして、與へられた仕事を機械的に割合正確に遂行した爲らしいです。ですからマルキシズム、レーニズムに對する理解の程度は、單に吾々の生活を良くしようと云ふ考のみでした。それに對する信念の程度は、自分としてはつきりして居りません。

二、自己批判

僕としては、前にも述べた様に、敢然として左翼運動の一切から手足を引く決心を致しました。

理論的には、共產主義と云ふものは、他の國ならいざ知らず、皇統連綿萬世一系の我神國日本帝國には絶対に相容れないものであると云ふ事を認めたからであります。科學的に見て、理論の正否邪惡は僕の無智なる頭では考へられませんし、上述の理由により問題はないものと思ひます。

ですから實現の可否は猶更問題ではありません。此の様な事は二十日間の留置場生活でひし／＼と身にしみわたり、特に留置場内で現今滿蒙支那の問題で、君國の爲とし／＼出兵される同胞兵士諸君を見送る一般大衆の萬歳の聲をきく時、過去の罪を思ひ肌粟粒の冷汗をさへ感じて來ました。

又家庭の條件も非常に悪く、父母の悲嘆を眞面に見ては居られず、父

昭和七年一月中旬レーニン青年の讀者會を×大内映畫研究會部室にて持ちました。出席者、T(政大一) t(法大一) 僕(法大一)の四人でした。會合時間は一時間位でした。議事は明瞭に覺えて居りませんが、レーニン青年の批判をしました。

本年一月二十七日に共產青年同盟員に推されてから、別に職務は與えて居られませんでした。

二月十四日(月曜日)午後十二時三十分××四丁目集まつて、直ちに僕の知らない所で×大細胞總會がある事をその二三日前 k(×大専門部)から聞きましたが、當時僕は家を出たり捕つたりしてこたごたして居たので、家の信用なく當日は親戚の家に居て時間に間に合ふ様に行かうと思つて居ましたが、晝飯が遅れたので間に合はず、總會には出席出来ませんでした。至十五日校内地下食堂にてTV(×大専門部商科一年、ベンネーム藤井)から僕が昨十四日の細胞組織の組織部員になつたことを知らされました。

當時家に於ては、僕は父母から懇々と諭され父、母が養父母である爲實父母に對する體面や親戚の手前非常に苦慮されて居ることを知り、又此左翼運動が非常に金がかかるので僕は斷然やめることに決心して居りました。だが直ちに脱け出ること出来ないので、選挙闘争を終へてから、學年試験にかこつけて止める積りでした。

理論的には、僕はもとからしつかりした頭を持つて居ないから、そのも帝國の軍人であるし、親戚にも軍籍に身を置く人澤山あるので、非常に恥じ入る様な譯です。

僕としても何處迄もこんな事をして遊んでゐられる身分ではなく、長男で一人つ子であるし、年老いた父母の事等も考へずには居られなくなりました。

先日父と面會した時も、今後此の運動をやめるなら、今迄の罪ほろぼしに極右翼になれと迄云はれて泣いて頼まれました。

以上の様な理由で、僕は大日本帝國の忠良なる臣民として生活し、今迄の罪ほろぼしのは如何なる事でもなし、今後絶対に國法に相容れない様な事は必ず致しませんと云ふ事を、男子として一身をかけて神明に誓ひます。

右の誓約を萬が一にも破る様な事がありましたら、如何なる制裁をも身に引き受ける事を付け加へて誓約致します。

二四

某私立大學商學部二年 M.S(當二十六年)

關係せる事件の種類……學内共青細胞

處分の種類……起訴留保

家庭の狀況……家計豊、父及繼母、姉は嫁し、妹は女學校

在校中、母の死後不知の間に繼母の入るに
及び漸次家庭不和となる

學資の出处……父、六十圓位

健康状態……健康體

性質……反抗心強し

過ぎこし道をかへりみて

若い私達の情熱を駆り立てるもの、それは權力者の横暴と不正とである。そして同時に私達を最も共鳴させるものは、破邪顯正の聖戦である。

邪とは何か？

正とは何か？

この限界は非常に六ヶ敷い。舊來の道德とか、宗教の規定とかは私達の生活から餘りにかけ離れてゐる。私達はよかれ悪かれ、資本主義社會最高潮に達した時代に生を享ける者である。時代は私達人間の心の所産であるかもしれない。併し少くとも私達の心も亦時代の影響の外にあり得ない。長上の爲には理否を正す前に服する。使用人は儲主に對し心服する。さうしたことは過去の道德として正しかつたことは私も認める。けれども今日かうした道德律を以て私達を縛さうとする者があれば私は斷然反對する。道德は一つの流れである。膠着した道德は一の空文にか過ぎない。それは私達の嘲笑の的である。私達を律するものは新しい

道德でなければならない。

新しい道德の基調は自由である。私達は自由を求める。自由の限界は社會機構によつて制限される。併し社會機構が私達の自由を束縛するならば、私達は自由を棄てる前に社會の更新を求める。何故ならば自由は人間の行動の最底にして、しかも最高の欲求であり、社會機構は人間生存のために人間の造り上げた一形態に過ぎないから。

マルクスの所謂量の質への移行は私は今でも正しいと信ずる。一人よがりの我儘は許されない。自由は何時迄行つても社會的制限をうける。と同時に社會機構は自由を妨げてはならない。正邪の判定の基本も亦此處に存する。

私は法律を是認する。盜人を取締る刑法文ではない。思想犯人を取締る治安維持法も亦是認する。何故ならば法律は現状維持のための一手段であるから。だが私達は法律を最高不動のコランとは考へない。社會は法律に先行して前進する。法律は社會發展の跡を追つて常に移動する。恐らく何時如何なる社會にあつても今後窃盜を是認することはなからう。併し私有財産制度を否定し、生産手段のみならず消費對象さへ社會又は國家の所有となす社會が實現され得ないとは斷言出来ない。

一九二九年秋ウォール街を吹き捲つた金融恐慌の嵐は遂に世界全土を捲席し、底知れぬ恐慌へと全面的發展を遂げた。ブルジョア達の必死の

時代風潮！

さうしたものが、渾然として私を共產主義の支持者にした。全く無批判であつた。國體、國民性、さうしたものが私の考慮の中に動く餘地さへ持たなかつた。

だから、動められるまゝに、Yも讀んだ、旗も讀んだ、紙代も拂つた。でも考へて見れば實に積極性のない私の行動であつた。私は私の手で一人のメンバーさへ獲得しやうとしなかつた。否むしろ私は私の周圍にさうした傾向の者を發見した時、私は彼の傾向を諫止した。

實際運動を自ら敢然と闘ふべく私には餘りに自信が無さ過ぎた。

マルクス主義理論も私には疑點があつたし、滿洲事變や、佐野、鍋山の轉向は益々私を日本人として醒めさせた。

檢舉は全く私には不必要な彈壓であつた。私の名前が部代として現はれたとは言へ、それは私の全く闕知せぬ間に、T某等によつて決定されたと言ふ丈である。私は其委員會の内容さへ知らなかつた。

勿論さうした結果を招來したことは私にも責任あるを認める。だが部代、組織部員等共青×大に於ける重要な地位は私の前に實現するかも知れない一の假定でしか無かつた。單なる未來の約束でしか無かつた。既に私の心の中には民族的血潮が流れてゐた。私の意識には親兄弟があり、自己があつた。檢舉は實際私の思想を轉向させることはなかつた。何故ならば、それ以前に私は自ら思想的清算が行はれてゐたから。只檢

努力も何の効果さへ見せさうにも無かつた。世界貨幣經濟會議は遂に水泡に歸した。諸帝國主義の對立は益々尖鋭化してきた。階級闘争は今や必死の勢と考へられた。私達の目前には革命の幻さへ現實の一步先にチラツキ始めた。

もう資本主義社會は是正の餘地は無い。次の新しい社會の爲に私達は準備せねばならない。次の新しい社會とは何か？ 時代の潮は私達に「社會主義社會」と言ふ結論を簡単に生ませた。

新しい時代に生きる者、青年、私達の舞臺は社會主義社會だ！

卒業してもインテリゲンペンをししか約束出来ない老朽のブルジョア社會を揚棄して新しい社會を生まんが爲のプロレタリアートの努力こそ、私の感覺に強く正しく反映する建設の爲の闘争である。

エクスプロイテーション！

それは私達に對する憎惡の合言葉である。

階級闘争！

それは私達にとつて戰場である。

社會主義社會！

それは私達の勝利を迎へるザーリヤである。

それにつけても、何と不正と不自由の現實の社會であらう。

一寸の不正さへ、假借出来ない正義觀！

弱い者に對する同情心！

實兄方に在りて修學中

學費の出所……實兄

健康状態……強健

性質……温順

清算の記

(一) はしがき

昭和五年四月前途に大きな希望を抱きつゝ大學豫科第二種一學年に入學致しましてから四箇年間、外社會に於ける思想界の混亂を如實に反映せる——それは當然の事で少しもあやしむに足りない——學内に於て、比較的眞面目に勉學を續けて來たつもりでした。

私は、意識せざる中に陥りつゝあつた大きな誤れる路から、今救ひ出される機會を得た譯であります。私は此の小記を誌す事に依つて過去に於ける思想、行動の一切を清算することに致し度いと思つて居ります。顧みるとき過去の凡てが私の心に魅つて參ります。それがつまらない取るに足りない行動であつたにしろ、恐るべき政治的な反逆への一步であつた事を考へる時、眞に慄然たる感を禁じ得ません。

その行動は確かに誤つて居りました。

その思想は確かに國家的な罪惡でありました。けれ共今これ等の誤れる凡てを清算した私は、新しい自分となつて過去を省る時、それが決して全然無駄でなかつた事を見出します。それは極めて大きな處世上の教

學は、いや／＼乍ら私を引きづつて行つた實踐から全く身を離へすに大きな役割をした。

今や私は全く合法的な人間である。私の目前からは革命の幻も消へた。前途は唯、正しい道への一生の努力がある丈だ。

法は、そして社會は、現實に存在する。國體は不動の姿を以て國民の意識に生きる。

不正は不正として、合法的に糾弾すれば好い。國を愛し萬人を崇ぶ。其處に日本人としての行動の基調がある。

實際私は意思の弱い人間だつた。私の行動は輕卒だつた。

學生として、學生らしく殘餘の生活を送り得、國家、國民のために、全力を盡し得る社會人になることこそ私の任務であり、希望である。

革命のザリーヤは消へて新しく光る國民的感情の火焰、日本は永久に天皇制の下にのみ榮へる。

二五

某私立大學商學部二年 K.M (當二十五年)

關係せる事件の種類……學内共育細胞

處分の種類……起訴留保

家庭の状況……十九歳にして叔父の養子となりしも翌年養

父死亡し精神病の養母及養叔父と別居し爾後

訓であつたし、容易には爲されない體驗でありました。

此の度の事件を通じて家庭關係は固より學校當局にも多大の御迷惑をおかけしましたけれど、此の事件を通じて得た體驗を活用する事によつて多くの困難の積たはる處世の途上を立派に切り抜け、自己の目的——家庭の人の期待に背かざるところの——を達する事を以て其の申譯の一つに代へようと思ひます。

以下に於て私はそのいつわるところなき過去に於ける思想生活を記述し、簡單ですけれども其の大略を誌し、以て清算の記と致したいと思ひます。

(一) 思想の推移過程

私は此の項に於ては、大體如何なる經路の下に左翼的思想を抱くに至つたかを記述致します。

昭和五年大學豫科に入學致します以前に於ける私の思想は、どちらかと言へば右翼的な傾向を多分に持つて居つた事を自覺致して居ります。中學に居りましたときは雄辯部に關係して居りましたが、その態度は無批判的であつたにしろ、常に日本古來の道徳、所謂忠君愛國を高調してゐたと記憶して居ります。その當時の原稿など見ましても、當時の風潮を墮落せるものとなし、日本魂を發揮しなくてはならぬと云ふ様な少年時代にあり勝ちな情熱的な字句で綴られてあります。

斯くの如き思想傾向を持つてゐた私が如何なる機會に左翼的傾向を帯びるに至つたのでありませうか？

人が長ずるに従つて次第に物事を見る眼が批判的になつて行く事は當然であると思はれます。それは決して否むべき事では無いと思ひます。寧ろ助長すべきであらうとも思はれます。私が左傾するに至つたのも其の第一のものを掲げるならば、私に惠まれた此の批判的な觀察がそれであると思ひます。當時の若い純眞な私の眼には社會の凡ては不合理そのものでした。働く者と然らざる者の生活、富める者と貧しき者との關係、それらの問題が次から次へと不合理の刻印付になつて私の前に突き出されて來るのであります。

此の問題の解決方法は、如何にせば社會から此の不合理は除かれるか、この二つの問題が常に私の考への全部を占めるやうになつたのが、私が本學豫科に入學してから間もなく、即ち昭和五年の二學期頃からでありました。

此の年の十一月から十二月にかけて、私共の學内に殆んど全學的な學生運動がありました。私は當時、所屬級の第二種豫科商科一年C組から選ばれて實行委員の一人となり、豫科統制本部員として参加致して居りました。此の時に私が強く感じた事は、學生運動に限らず、大衆的な運動には常に組織的な活動が必要であると云ふ事でした。而してその組織的な活動は所謂左翼理論の研究に依つて爲されるものである事を、統制

本部にゐた友人などと談合することによつて知りました。於爰私はその研究を始めるべく決心したのでした。

その翌年、即ち昭和六年の一月新學期が始まると同時に、私は學内に於ける左翼文學研究團體と見られてゐた「××文藝同志會」に入會致しまして、文學の分野を通じて左翼的理論を研究するやうになりました。

斯くの如くして左翼の出版物等を見てゐる中に、私はその社會觀の現實をしっかりと把握してゐる點に強く曳き入れられ、先に述べた如き、如何にせば社會より不合理は除かれるかの如き問題の解明も「マルクス主義」的なる運動に依つてのみなされるものである事を確信するやうになりました。これが昭和六年の二學期頃かと思ひます。その後學内の同志であつたN某、K某、T某、M某等と交際し「赤旗」、反帝國同盟機關紙、「無産青年」等の配布を受けて居る中は、私は全く左傾的思想を抱くやうになりました。

以上が私が左傾するに至つた過程であります。私は大體如何なる時に如何なる過程を経て左翼的思想を抱くに至つたかを述べましたが、更に次項に於てその活動に就いて略述して見る積りであります。

(二) 學内に於ける私の活動

昭和六年の十月頃、完全にマルクス主義を信する様になりました。私の思想の推移過程に就いては前項に於て略述致しました。此の頃に於ては、共產主義を信じるやうになつてから主義の爲に爲した活動——主と

して學内活動、幸か不幸か私には外部の仕事は與へられませんでした——に就いて述べて見ます。

昭和八年に至る迄の私の活動は極めて不活潑なものでありまして、僅かに黨の機關紙或は同盟の機關紙又は學新の配布を受けると言ふ如き消極的な活動に過ぎませんでした。實際に於て、當時に於ては、×大に於ける組織は働く人の多い事と、其の完備とで私等の出る事を必要としなかつたのだらうと思ひます。當時の私に與へられた一番大きな仕事は、會長を失つて其の存在の意義を失つてゐた文藝同志會の再建運動でありました。けれども私はそれにさへも極めて不活潑な態度しか探らなかつたと思ひます。それは私の家庭の事情からありますが、私に代つてやる人があると思ふ事が一番大きな原因であつた事と思ひます。

そのやうな消極的な態度から急に積極的態度に飛躍する機會が参りました。それは昭和八年の始めから、×大の左翼關係の學生が非常に多くなつてからのことです。多くの者は或は卒業し、或は歸郷し又は轉向する等の爲めに、組織の中心になるものが無い様になりました。私はこの時、即ち昭和八年四月下旬頃、雄辯部で顔見知りのK某から左翼の方の仕事をして呉れと頼まれて、これを機會に學内に於ける組織の仕事をするやうになりました。私に與へられた仕事は機關紙を配布することでありましたが、その後間もなくK某は學校へ出て來ない様になりましたので其の儘になりました。その後同年五月中旬頃になつてから學消で

れるに至つたのであります。

此の會合に於て決められた私の仕事は矢張り配布の方で、地區の人から機關紙を買つて各部の責任者に配布することでありましたけれど、一度も實行されるに到らなかつた譯であります。因んで各部の責任者だつた名前を掲げると次のやうであります。

學部 責任者 M某(Sから話す事)
專門部 // S某(出席)
豫科 // タ某(N某から話す事)
女子部 // T某(Eから女子部と聯絡)

その他外部即黨との直接の聯絡は凡てTの役目でした。

以上が活動の大略であります。私は更に現在の心境に就いて述べます。

(四) 現在の心境

私が共產主義の理論に一抹の疑問を抱くに至つたときは昭和七年の九月頃かと思ひます。それは自分の心を内省して見て考へた事でありまして、民族的精神の否定はどうしても不可能であるといふやうな事に考へ付いたのでありました。意思が環境を決定するのではなくして環境が意思を決定するのである——といふ事はマルクス主義的な哲學的観方でありまして、若しさうであるならば露西亞とその氣候風土を異にするところの日本には、當然露西亞とは異つた意思形態が生れなければならぬ——なると思ふ事も考へるやうになりました。此の事により國を異に

顔見知りのH某がKの代りをする事になり、私は女子部と聯絡をする事になり、その儘六月に至りました。その時、六月下旬頃Hは檢舉されてしまつたので、同年度第一學期の運動は打ち切る事になりました。

此の間に於ける運動の方針は、典令改正問題等のために相當高調してゐる當局への學生が持つ反感を利用して「メンバー」を出来るだけ増加しようと思ふやうなものであります。そして當時學界に獨動を與へた××帝大に於ける××問題等を利用して學生を煽動しようとしたのであります。

昭和八年九月第二學期が開始されるに至りましてから、私は第一學期の運動の時知り合つたT某から何とかしなくてはならぬと相談を受けましたが、此の頃漸く主義に少しく疑問を抱くやうになつたのと、家庭の事情等が許さない事を氣にするやうになりましたので、努めてこの相談から避けるやうにして居りました。

十月中旬頃、遂にT某の奔走によつて組織再建の準備會を××町の××ビルの五階で開くことになり、私もTの勧めに依つて出席致しました。其の時の出席人員は私を始めT某、N某、S某の四人でありました。其處で學新を名前を變へて——××の名で——發行しよう。出席しなかつたタ某、M某等も夫々組織部員になつてもらう様話する事にしようと思ふやうなことを話して別れました。その後この會合に於て決定した事が一つも實行されない中に、先づTが檢舉され、續いて私共が檢舉さ

するに依つて異なる民族文化、精神文化が生れなければならない事が理解され、日本國民の特殊な國民性が肯定される結果となるのであります。その他に如何に精算しようと務めても出来得ない家庭から離脱の問題などから、家族制度の本當の意味が見せられるやうな氣がして居りました。

その後、新聞紙上に發表された佐野、鍋山等の轉向と、そのコミンターンに對する批判は、私のグラクキ出してゐた心を衝くに充分なものであります。その聲明に見えた日本に於ける特殊狀勢の強調こそは、私の考へてゐた民族的特殊性の肯定に他ならなかつた譯であります。

此の頃から私の主義に對する考へは、信奉の念は次々と起つて來る疑問と共に薄らいで參りました。然しその理論に對しては幾多の正しき點を見せられてゐる爲め多くの未練を持つ、之を棄て去り得ないで居りました。それと共に實踐運動もハッキリと清算することが出來ずに、友人に進められる儘に引きづられて、その運動に従つて居りました。

私が此の様な心の儘みの中にも、尙實行運動にも關係してゐるらしい事を、周囲の人の氣附かない筈はありませんでした。家庭に於ては、又は先輩からなど、折に觸れてそれとなく注意を受けて居りました。その度に私は今度こそは打ち斷ると明言しつつも、尙且つ悪いとは識りつゝも、友人の、或は父兄との誓を破つて居りました。

凡てを清算するには強い衝動が無くてはならないのかも知れないと云りになると思ひます。

以上私の過去の誤れる行動の一切を略述致しまして、甦生せんとしてゐる古い私の清算の記と致し度いと思ひます。

二六

某私立大學史學科二年 S. B (當二十四年)

家庭の状況……父五十九歳、母五十四歳、農業、兄×三十

三歳、自動車部分品販賣、兄×二十九歳、

××大學専門部法學科卒業、巡查××署勤務、

姉×子二十六歳、藥劑師×××に嫁す、本

人B二十四歳、××大學史學科に在學中、弟

弘文二十一歳、父と共に農業に従事中

私の家は資産と云ふ程のものを持ちませんが、自作農としては餘裕のある方でした。父母共に眞宗の教養を篤く信じて居りましたので、日々の生活が宗教生活そのものでした。それで私は幼少の頃から御經を教へて頂き、朝夕佛壇に禮拜する事を缺した事はありませんでした。寺院との關係も深かつたので、寺院の住職は常に父母に私を僧侶にする様屬めて居りました、私自身も宗教家になる決心で居りました。

小學校を卒えて三里距つた××市の中學に入學すると同時に、壇那寺の住職のお世話により、××の××寺に弟子として入寺し、法務を勤め乍ら通學して居りましたので、日々の生活が非常につらく、特に試験等

ふやうな事も、ある時は考へました。力強い衝動の爲めに、生れ變つたやうになつた人間があると云ふ様な話を聞いて居るからかも知れませんが、

此の度の事件は私にとつて大きな衝動でありました。四十日間の留置場生活を通じて、私は家族制度の眞のありがたさをより以上強く考へさせられました。恐ろしい程の自分の過去の考へ、行動が惡夢のやうに今では思はれます。

自己の誤つた考へをはつきりと認識させられ、今後絶対に過去の過失を犯さない事を誓つて許されてきた私の今の心は澄み渡つた秋空に月を見るやうなサツパリした氣持であります。家を考へ、自己の將來を考へる時、決して許されるべくも無い事と知りながらも、尙ズル／＼と運動に従事してゐた苦しい當時の心境から考へると、見違へるやうな朗らかさであります。

此の朗らかさで以て、昭和五年四月入學當時の氣持に立歸り、父兄の期待に副ふべく××大學の名を汚す事なきやう、一意専心、勉學の道を進まうとするのが私の今の心境であります。斯くすることによつて御迷惑をかけた當局への唯一の申譯の責務を果すことを唯一つ心がけて居るものであります。

私は私の心にあるところを其の儘率直に誌しました。此の記が私の誠心であるかどうかは、私の今後の學内に於ける生活を御覽になればお判の時には一人寂しく泣く事も屢々でした。然し父母が私の宗教家として成人して行くのを楽しんで居られるのだと心を勵して、五ヶ年の月日を送りましたが、學費は寺から頂いて居りましたので、勿論餘裕は有りませんでした。此頃叔父叔母は日蓮宗の非常な信者となつて居りましたので、その信仰からくる拆伏主義により、眞宗の教養を極度に否認し、私の眞宗僧侶になる事を心よく思つてくれない状態でした。

運悪くも昭和五年の夏父が養蠶業に手を出して失敗し、一萬圓に近い借財を負つて家庭が極度に困窮して終ひ、私の在學不可能は勿論、家財道具迄人手に渡さねばならぬ事になりました。

この窮狀を××の叔父叔母に助けられて、私の一家はやつと生活を維持し得たのでした。私は×大を中途退學し、××大學に轉入學して叔父叔母の世話になる事に成りました。

この様な事件により、叔父叔母から物質的には助けられましたが、精神的に私の父母及び私に大壓迫を加へられました。即ち日蓮宗に改宗す

る事を叔父叔母から強要されて来たのです。

他人より以上に信仰が篤く、村でも有名な程の眞宗信者である父母が改宗等出来る筈はなく、毎日涙で暮すと云ふ悲惨な状態でした。又私も×大に在学中、××學生親覽會に入會して、眞宗教義の宣傳に努めて居た程ですから、叔父叔母のかゝる宗教的壓迫に對して憤懣せざるを得ず、同時に釋迦の説いた同一の教が宗派的に分裂して鬭争する有様を見せ付けられて、宗教に對して疑惑を持ち始め、宗教を否定して終ひ度い氣持になり、段々進んで反宗教運動に迄參加したいと思つて抱くに到りました。

學歴成績及修學の目的

- (1) 學歴(略)
- (2) 成績
 - 小學校在学中は優等にて卒業の時郡長より賞さる
 - 中學校在学中は中位の成績
 - 大學豫科在学中は上位の成績
- (3) 修學の目的
 - 中等學校に歴史の教師として教鞭を取り度いと思ひますが、就職も現在では覺束ない状態ですから、會社の事務員にでもなり、歴史學研究を趣味として生かし度いと思ひます。

一、社會科學研究の動機、過程それに依る思想の變遷

る狂信振りに就いての反感が益々つにつて來ました。

昭和六年五月頃は左翼團體の反宗教鬭争の激烈な時期でしたので、××大學でも講堂に於て長谷川如是閑氏の「既成宗團の否定」と題する講演會が開かれましたので聴講に行き、宗教信仰の對象である神佛が、今迄私の考へていた様に絶対的なものでなく、矢張り人間の知識で作り上げた偶像であると考へ始めた。

昭和六年六月下旬頃K某(當時××豫科三年)より、フオイエルバツハの宗教の本質」を教えられて購讀し、宗教が人間學である事を知りました。

昭和六年七月、「レーニンの宗教に就いて」を讀みましたが、當時の私の頭では理解出来ませんでした。左翼理論から云へば、宗教は民衆の階級意識を眠り込ませる民衆の阿片であると見ている事を認識しました。

この頃は過去十數年間も宗教生活を経て來て居りますから、反宗教的書籍を讀んで、その理論を知る事が出來ても直ちに絶対的に正しいものだと受け取れず、一體孰れが正しいのかと迷ひ始めて、懷疑主義に陥り、總てのものを否定して終ひ度い氣持になつて、遂に虚無主義的思想を抱き、毎日煩悶しました。

昭和六年八月頃

「戦旗」(Y某より受け取る)

家庭の状況の項に述べました様に、昭和五年七月頃父が事業に失敗して叔父叔母に助けられ、その後父母が叔父叔母から改宗を強要される様になつて、毎日呻吟して生活する様になりました。

その上父母の唯一の樂としていた私の眞宗僧侶としての將來も、日蓮宗々立の××大學に轉校する事に依り全く駄目になり、父母は生ける屍同様な生活を續けていました。

この状態と叔父叔母の餘りに盲目的な信仰心を見て、私は昭和六年の一月頃より宗教に疑惑を持ち始めました。そして宗教を否定する左翼的理論を教へる書籍を讀む様に成りました。

昭和六年一月頃より毎月「改造」「中央公論」を讀みましたが、餘り興味がありませんでした。

昭和六年二月頃、N某(當時××大學豫科一年一組)より「ラスキ1の共産主義論」の出版されて居るのを教へられて購入して讀みましたが、難解で少しも理解出来ませんでした。

昭和六年三月の下旬頃から左翼理論を得る初歩としてプロレタリア小説を讀もうと思ひ、小林多喜二の「蟹工船」、トルストイの「復活」徳永直の「太陽の無い街」

を讀み、現實社會の裏面に、貧困に呻吟する憐れな人間の生活があるのだと思ひ、同情したい氣持に成りました。

昭和六年四月××大學に轉入學してからは、叔母の日蓮聖人に對す

「拆伏」(Y某より受け取る)

昭和六年十月頃

無産者新聞 (M某より受け取る)

を讀みましたが、記事が餘りに主観的で偏して居る様に思はれると同時に、階級意識の低い當時の私に取つては、こうした文書は恐ろしい様に思はれて、よく理解出来る程度に讀みませんでしたので、之によつて刺戟を受け意識の高まる程の影響は受けませんでした。

昭和六年十月頃にB Sの會合(會合の日時處等はRSの頃に記述)に出席しましたが、他の學友達Y某、M某、K某、の方が私より意識知識が高く、私は常に取り残される形で、その上轉入學して間もない事ですから、友情の點に於ても何となく打ちとけずに過ぎて來ましたので、階級意識の向上に大して影響は與へられませんでした。然し私個人の幼稚さからかも知れませんが、こうした會合で自分より澤山書籍を讀んだ友人の刺戟により、新しい書籍を知つて行く事が嬉しく、近代の所謂進歩的學生に成つて行くのだと云ふ英雄主義的氣持を懷いて居りました。

昭和七年一月頃、マルクス主義の科學的基本をなす經濟學を研究すれば、必ず自分の懷いて居る煩悶は氷解するのではないかと思ひ、西雅雄の「經濟學」を讀み總ての社會現象は經濟に依つて支配されるのだと知り、マルクス主義者の第一歩に入りました。

昭和七年五月頃

上田茂樹著の「プロレタリア世界歴史」

を購讀してマルクスの唯物史観が歴史學研究に絶對的に必要であること、又正しいものだと思ふ様に成りました。従つて昭和七年の八月頃には虚無主義的氣持もなくなり、マルキシズムが最も科學的な理論であると思ふ様に成つて居りました。

故に社會はマルクスの云ふ様に唯物辯證法的に發展するものであるから、自分の専門的に研究して居る歴史も、過去の人間社會の辯證法的發展の姿を描いて居るのだと思つて來ました。

然し社會が辯證法的に發展するものであるから、將來の社會が如何なる社會であらねばならない、従つて次の社會を出現させる爲に、レーニンの政治理論から來る暴力革命の政治行動を取る事が學理通りに正しいか如何かと云ふ事には、ロシアの矛盾の多い社會を見て疑を持つて來ました。従つて自分より進んで政治運動に参加する程の熱意は懷いて居りませんでした。

R・S 研究会

(1) 加盟の経過

昭和六年一月頃より、家庭の状況、社會科學研究の動機に述べました様に、私は反宗教的な氣持を懷いて居りました。この時期に際し、偶々昭和六年七月五日頃R某(當時××豫科三年)が「宗教

となつております。

學外關係

全國大學自由擁護聯盟との關係に就て

昭和八年五月の中旬××帝國大學の××教授が左翼思想を抱いて居り、教育界の爲に憂ふべきことであるとの見界に依り、文部省が××教授を免職に處した事から端を發した××大問題が起つた時、××大學友會及び高校代表會より××大學新聞部に教授團の聲明書及び情報が來ました。新聞部の幹事の任にあつた私は、一個の學外問題であつて××大學々生に關係ないものと思ひ、情報を學生に公開する様な事はしませんでした。六月になつて他大學の新聞が一齊に××大問題を掲げて居りましたので、私はそれに倣つて××大學新聞六月號に××大問題の経過と××大教授團の聲明書とを掲載して、學團の自治學問研究の自由が奪はれて行く事に就いて學生の注意を喚起する事に努めました。

然し學生に大した反響は見られませんでした。

六月二十五日頃學校の廊下にてS某(當時××社會學科三年)より「××大の代表が上京して全國大學自由擁護聯盟結成の計畫があり、××もそれに加盟する様に慫慂して來たので昨日出席して來たから以後

は君が學内の情報機關である新聞部の幹事として出席して呉れ」と云はれましたので、私は出席する事を承諾しました。

六月三十日午後一時M某(當時××哲學科二年)と共に××帝大前

一三八

に就ての研究会があるから行かないか」と云つて來ましたので、R某と共にY某(當時××豫科三年)の下宿×××三四一番地の喫茶店「フローラ」に行き、R・Sに加盟しました。

(2) 研究会の状況(略)

職團的無神論者同盟に對する認識

現代日本社會の民衆は非常に宗教を信じて居り、然も宗教はマルキシズム理論から云へば、民衆の階級意識を眠り込ませるものである。故に現代の社會に革命を斷行しようとする場合に、宗教が甚だ不利益な存在となるから、民衆から宗教に對する信仰を奪ひ去らねばならない、かゝる見地に立つて宗教心を民衆から奪ひ去つて階級意識を高め、社會革命を斷行する前提として結ばれたものが職團的無神論者同盟であります。従つて日本共産黨の政治運動を援助する目的を持つて居つたものと思ひます。同盟結成當初は合法的な團體でありましたが、段々非合法的活動をする様になつて來ました。

日本プロレタリア科學同盟に對する認識

日本プロレタリア科學同盟は「プロレタリア科學」を發行し、民衆にブルジョア科學よりプロレタリア科學の學理上優れた事を教へ、プロレタリア・イデオロギーを抱かして民衆を階級闘争に参加せしめ、日本共産黨の政治運動を援助する目的を持つて居るものです。同盟結成當初は合法的なものでしたが、現代では半非合法的なもの

の「×××旅館」に於ける準備會に出席しました。

出席メンバーは

××大代表四名、××○大代表二名、××大代表二名××大學代表二名
××大學代表二名、××大××學院生一名、××大學代表二名、××大代表二名、××帝大代表一名、

でした。M某は「××は學期試験直前で全學的の参加は不可能であるが、有志團としての程度だつたら参加出来る」旨を報告しました。

七月二日午後一時に、同じく×××旅館に私一人で出席し、前記M M同様「結成大會に有志團として四、五名出席出来る」旨を報告しました。

この時の出席メンバーは前記に同じでした。

七月三日正午より××帝大佛教青年會館に於ける全國大學自由擁護聯盟結成大會に、正式代表としてS某(當時立正社會學科三年)私、オプザーバーとしてF某、W某、の四人出席して、××大學有志團は大學の自治學問研究の自由を護る爲に自由擁護聯盟を支持する旨を報告しました。

大會終了後夏中休暇中の聯絡員として私があげられましたので、私の住所を××大代表に教へて歸りました。

後七月十五日發行の大學新聞七月號に聯盟結成大會の開かれた事及び聯盟の宣言綱領を掲載して學生の注意を喚起する事に努めました

一三九

が、學生は試験に忙がしく、何等の効果を得ませんでした。

八月になつて私は歸郷する事に成りましたので、聯絡を、某に葉書を以て依頼し、歸郷して終ひ、以後大學自由擁護聯盟とは何等の關係もなく、正式に聯盟員として加盟するに至りませんでした。

日本共産青年同盟に對する認識

日本共産青年同盟は日本共産黨と同じく現代の資本主義日本社會に革命を行ひ、共産主義社會にする爲に共産黨の外野政治團體として活動し、國際共産青年同盟の日本支部として政治活動をなす非合法的政治團體であると思ひます。

(1) Yに對する認識

Yは日本共産青年同盟の機關紙であつて日本共産青年同盟の政策を同盟員に知らしめ、併せて共産主義に興味を持つ青年に政治思想を普及せしめ、引いては共青同盟員にする爲に發行するものであると思ひます。

(2) 共青のスローガン

知りませんが、共産黨のスローガンに同じだと思ひます。

(3) 加盟關係

加盟を薦められる様な事もなく、又加盟して國法を犯して迄政治運動をする様な強い階級意識を持つて居りませんから加盟するに至りませんでした。

唯共青の機關紙無産青年を受け取り讀んだ丈であります。

日本共産青年同盟關係

昭和六年十月下旬Y某より「共青」と云ふ雜誌一部を學校にて受け取り、紙代二十錢を拂ひました。

昭和六年十一月中旬M某より無産青年一部を學校の廊下にて新聞紙に包んで受け取りました。紙代は拂ひませんでした。

學内細胞としての會合、部門の分據の機關紙の編輯配布等は全くなく、唯新聞を受け取つた丈であります。

日本共産黨に對する認識

日本共産黨は現代の天皇中心の日本社會を共産主義の社會に變革する目的を持つ非合法的政黨であります。現代の日本の社會は三井、三菱等の財閥が各生産機構にその資本を投資し、労働者を搾取する事に依つて資本金を増大させ、その力を以て總ての生産機關を獨占して自己の利益を得る事のみに努めて居り、又現代の合法的政黨即ち民政黨政友會等の政黨は三井、三菱等の金力に支配されて、プロレタリアートの生活等考慮に入れて居ない様な階級的の不平な社會であると思ひ、この社會に革命を斷行してプロレタリア獨裁の共産主義日本社會を出現させようとする目的を持つ政治運動をなすのが日本共産黨であると思ひます。そして革命を斷行する目的の爲めには手段を選ばず、暴力革命をも認めるものであります。

を得る爲、及び民衆をアジル爲に發行するものであると思ひます。

共産黨關係

昭和八年六月中旬X區X町通りXの喫茶店X、Xに於て年齢二十五、六歳身長五尺四寸餘りの文士格好のH某と云ふ男と紹介者はありませんが度々喫茶店で遊ぶ内に、喫茶店友達として知り合ひ、それから度々X、Xで出逢ひ聯絡を取りました。

昭和八年七月二十日頃の午後八時頃同喫茶店「X、X」にてH某と出逢つたときにH某に「君の學校には左翼學生は居ないか」と訊かれましたので、私は「大學に學ぶ以上マルキシズムは多少研究せねばならぬから、マルキシズムに就いての認識は持つて居る者は少しは居るでしょうが、私の學校は宗門大學であるから、現在實際運動にたずさはつて居るものは無い様です」と答へました時に、H某は「五月からX大が學園の自治研究の自由を標榜して文部省と争つて居るが、君は如何に思ふか」と訊いて來ましたので、勿論學園の自治、研究の自由を守らなければならぬ」と答へ、全國大學自由擁護聯盟結成大會に私が代表として出席した事を語りました處が、Hは「赤旗を讀んだ事があるか」と訊きましたので「未だ讀んだ事がない」と答へました時に、Hは懐より新聞紙に包んだ赤旗一部（恐ろしい様な氣持で見ましたので、號數、内容はよく覚えませんが、佐野學、三田村四郎等の轉向反對の記事があつた様に思ひます）を渡して呉れましたので、

日本の天皇は大地主であつて日本の支配階級の最高位にあるものであるから、日本社會を共産主義の社會に變革する爲には天皇を廢止せねばならぬものとして、天皇制の廢止を叫び、天皇廢止の後に共産主義社會への過渡期の支配形態として労働者農民の獨裁を認めるものであります。従つて労働者農民の獨裁により資本家のもつ生産機關及び地主の所有地を沒收して、民衆の共有物となして私有財産を否定するのであります。故に共産と利潤を目的とせず消費を目的とする様になり、商品經濟は無くなるから、社會には現代の如き資本家と労働者との階級對立は消滅して無階級の平等な社會を出現するに至るのであります。

この社會を建設する目的を持つものが共産黨だと思ひます。

日本共産黨は國際共産黨の日本支部として、國際共産黨の指令に基き政治活動をなすものであります。

私が日本共産黨を知るに至りましたのは、昭和四年の四月頃の共産黨檢舉事件の時に、日刊新聞の號外を見てからであります。後戰旗や室伏高信の共産主義に就てや、無産者新聞等を見てほんやりと知るに至りました。

(1) 赤旗に對する認識

赤旗は日本共産黨の中央部の機關紙であつて、日本共産黨の政策を黨員に示し、併せて共産主義に興味を持つ者に手交して經濟的援助

受け取りました。

そして「又赤旗が出たら渡し度いが、その日時は女給に訊けばわかる様にしておくから時々、××に来る様に」とHが云ひましたので、その様に約束しました。別れる時に紙代として二十銭をHに渡ししました。

八月二日頃同じく茶聖店「×、××」に行きました時に文子と云ふ女給が、「八月の十五日午後七時頃にHさんが會ひ度いから来る様に云つて居た」と傳へて呉れましたので、八月十五日午後七時頃茶聖店「×、××」に行きHに逢ひ連絡を取りました。この時Hから赤旗一部、號数は記憶しません、内容は上海の反戦大會の記事があつた様に思ひます。を受け取り紙代として二十銭をHに渡ししました。

八月十八日に私は歸郷し、九月の十日頃に上京九月の十六日午後二時頃に×××町通りレストラン「×、××」でHと偶然出逢ひ、この時九月の二十三日午後六時頃茶店「×、××」で逢ふ事を約束しました。

九月二十三日午後六時半頃前記茶店「×、××」でHと逢ひました。此時Hから「左翼思想を持つ學友を紹介して呉れないか」と云はれましたので、機會があつたらM某S某を紹介しようかと思ひ承諾しました。同日Hから「コーヒを飲む様な金があるのだから、又赤旗が手に入つたら君に渡すから、今金を出す意志はないか」と云はれまし

たので、金三十銭をHに渡しました。

其後こうして左翼運動に引き込まれて行くのだと恐ろしくなり、喫茶店「×、××」に行く事を中止しました。

其後昭和九年一月の七日頃×××驛前踏切の處でHに逢ひました。此時Hは「×、××に来ない様になつたのは如何なる理由か、時々来れば僕も居るから逢ほうではないか」と云つておりました。それで私は夏休に歸郷して家庭の苦窮を見て來たので、左翼運動等に私が關係する事は兩親を殺す事になり、叔父からも左翼思想を持つ友人等と交際しない様にとの注意を受けた事を話し、以後左翼文書等を手にしたくない意志を表明して別れました。その後Hとは逢ひませんでした。

二、自己批判

私は××の叔父叔母の宗教的壓迫に反抗したい氣持から日蓮宗の教義に反感を抱き、進んで反宗教的思想を持ち、宗教を充分に研究せずして神、佛を否定し、左翼的思想を持つ學友に引きずられて左翼の非合法的文書等を讀むに到り、國法に觸れ様とする迄になつた意志薄弱な愚かな自分を悲しく思ひます。

マルクスの唯物論は學理として正しい一面を持つて居るかも知れませんが、それを直ちに實踐化する事は甚だ危険である事を知りました。従つて唯物論を政治運動に迄發展させたレーニズム即共產主義は學理

上正しい様に見えても、直ちに現代社會に實踐化する事は最も誤まつた事と云はねばなりません。

共產主義の社會と稱する現代のソビエト・ロシアでさえ多くの矛盾を持つて居る事。

即ち共產黨のスローガンとして私有財産制の否定を叫び乍ら、現代では私有財産を認めてゐる事、又平等な社會と稱し乍ら、事實に於ては支配階級と被支配階級とが嚴存して闘争して居る實情である事を今回教へて頂きました。

之は私達と直接關係のない外國の事でもあります。

況んや天皇を中心として血族的に一家同様に形造られた優秀なる日本帝國の社會に、又親子の情愛を以て結ばれる處の家族主義を以て成立してゐる日本帝國の社會に共產主義は適用されないものであります。

従つて日本民族は世界に比類の無い優れた民族であつて、共產主義論等に云ふ奴隷階級は存在しなかつたのです。

故に日本歴史はマルクスの所謂「階級闘争の縮圖」でなく、民族共長進歩發展の縮圖に外ならなかつたのであります。

幸に歴史學研究を志す私は、今後前述の日本主義の觀點に立つて歴史を研究して行き、左翼的行動から絕對的に去る決心です。

家庭に於ても父母は貧困な生活に呻き乍ら、私の學業をおへて成功

する事を唯一の樂としておられます上に、國家の治安を守る爲に身を捧げて居る警察官を兄に持つ私は、今後は心を入れかへて國家の爲に家庭の爲に赤誠を盡し度いと思ひます。

誓約

今回は學生の身分を以て學生にあるまじき行動を取ってしまったにも拘らず、御寛大なる御處置にあづかり放免される事になりました。感泣しても尙餘りある事です。今後は絕對に左翼思想を持つ友人と交はりません。又非合法的の左翼文書等絕對に讀む事は致しません。

謹慎を重ねます。

若しこの誓約を破る様な事がありました時には、如何なる御處分を受け様ともかまいません。

二七

某大學中途休學 K・V (當二十一年)

關係せる事件の種類……黨加入

家庭の状況……父、母、繼兄、弟、理髮業、貧困

學資の出所、金額……縣の育英資金(月二十圓)、翻譯、家庭教師

一、家庭關係

私の家庭は右述せし通り、兄は繼兄で小さい時より私共を苦しめ殊に

母を苦しめて居ました。資産状態は全く惨めなもので今日では一日五十銭も収入がない事があります、其の關係で私を中學、高等學校と學ばさせるのは非常な困難を伴ふ事は必然でした。唯、母は嫁に来て以來常に姑に苦しめられ（私は敢て姑と云ひます）姑が中風で一年間病床に臥した時の一切の世話を見、雪降りに河の水を割つて汚れ物を洗濯してゐました。何故かと言へば兄が祖母の氣に入りでしたからです。斯くて無理した結果は母を腹膜炎で大病に臥せしめ其の結果現在でも健康は勝れません。かう云ふ理由から斷へず母は私一人を頼りとし早く出世して世の人を見返して呉れと夜を日についで願つてゐました。學校へ貧しい中から上れたのも母の爲です。中學時代は親の「スネ」を嚙つて學んで居りましたが高等學校入學後は親からは殆んど金を貰はず、××縣の學資金を戴いて其の他は翻譯、家庭教師で得た金で修學しました。併し家庭の不幸はこれのみに留らず、右述した通り兄は失業して家に歸つて居りましたが弟二人が學校へ上つてゐるのを羨み他人に母の悪口を振りまき遂に父の意見も通らず家を飛び出し實母の家に居住して今でも母や私共の悪口を振り撒いてゐるさうです。かくて私の今度の檢學は更に母を狂人にまでさせ兼ねないでせう。

二、思想推移の過程

私は最初右述せし通り母の感化を受け將來は立派な人物になり母を慰めてやらうと斷へず願ひ一心勉強して居りましたが中學時代までは勤王

の志厚くとも言ひませうか常に日本國家の爲に死なうとさへ思つて居りました。其の結果××高入學當時は××會に入會しましたが、明治天皇並びに聖徳太子の御聖徳を研究すればする程益々世界に眼を向けて世の動向を洞察しなければならなくなつて來ました。××會は御聖徳を研究のみならず、毎朝一回五時起床後、明治天皇の御聖徳集を朗讀する事を常として居りましたが、その馬鹿らしさは私をして××會に反抗せしめました。何となればそれによつて決して信仰を得られなかつたからです。かくて高校一年の三學期の始め頃

ブハーリン著 史的唯物論

一冊を店頭に求め、それに依り始めて頭の雲が晴れた様に思ひました。だが當時は未だ××會時代の名残りも充分あり過去十數ヶ年の自己の思想は一冊の本により滅却されるには余りに頑強なものでした。かくて文科端幹部に居た自分も漸く社會科學に興味を帯びて小説もゴリキイ作になるもの等を就讀する様になりました。次に

エンゲルス著 反デューリング論

を店頭に求めたが難解にして其のまゝ二年になり、其の頃より「プロレタリア科學」なる雑誌を毎月とつて讀むやうになりました。そして今は學校を迫られた

M、S、H、H、S、K

等と知り合ひR・Sに勸誘されたが自分の臆病さと母の愛とがそれを引

きとどめたが、彼等との談話は私を「赤化」せしめるに充分でした。そして辯論會にも出席し大いに知識の吸収に努めました。その他「フォイエルバツハ論」「ドイツ・イデオロギー」等を読み、高校三年の始め

レーニン 國家と革命

を一店頭に求めてより家庭教師の合間に読んでみましたがこの書籍私を刺戟したものではありませんでした。國家とは社會が相容れざる二階級に分裂したときに始り、支配階級の被支配階級壓迫機關として存在し階級の滅亡と共に亡びるものである。なる思想は益々此の思想に對する信念を高め、續いて

ラ・ビ・ド・ス共著 マルクス主義經濟學

オストロヴィティヤノフを買ひ求めて哲學より經濟に研究を進め、二年の終りに買ひ求めて讀まなかつた「資本論」を讀み出しました。二年の終り頃より一部づつ途切れ〜に賣つてゐた

第二無産者新聞

により労働者の實際の生活農民の實際の苦しい生活を知り次第に離げながら社會科學が分つた様な氣がして來ました。其の他二十冊近くも讀みましたが、併し書籍名は殆んど思ひ出せませんがそれ等により更に啓發され「マルクスエンゲルス傳」により革命家の個人生活も個人としてはやはり人間的であるとの信念を強め、

『Mokauer Buntshian』

なる獨逸語新聞を數回に亙つて讀み、高校卒業後は個人的に家庭教師の口等を世話して賣つた結果級友であつた

I・H

の手を通して

「赤旗」

を讀む機會を得、ブルジョアジーの狂奔的駆引壓迫の黨の活動を次第に明らかに知るに至つたが、未だ自ら進んで運動の渦中に飛び込む勇氣は出なかつた。將來は血の波濤を乗り切りつゝあるプロレタリア農民ののだとは分つてゐながら、やゝもすれば躊躇してゐた自分。社會及び動物世界更に無機世界に於ける飛躍ある辯證法的發展に興味を持ちそれを信じてゐた自分。日本だけでも三百萬の失業者が餓え、就業労働者は賃下げ首切りに脅されてゐる現實を直視してゐる自分にして「ハムレット」の如く逡巡してゐたのは何の爲であつたか。それは自分の體の脆弱と母の苦しい立場とであつた。本を讀み現實を見て勇躍せんとして田舎に歸ると母が泣いて戒め、父が無言で嘆願してくるのでどうしようもなかつた。又支那全土の三分の一に亙るサヴェイト化と、サヴェイト・ロシアの五ヶ年計畫の成果を熟々知るに至つて信念は固くなつて行つたが斷へず後へ引き戻すのは母の存在である。現在では従つて現實の此の不景氣悲慘が一掃されない限り私は社會科學の教へる所は眞理であると信じてゐます。併し實踐に飛び込む事は私をして躊躇せしめてゐます。

三、日本共産黨の將來に對する見識し又は感想

私の如き若輩には將來の見識し等は臆けしか許されないが、正直に言つて見れば現在世界各國は不況のドン底にあり生産制限其の他の手段により世界的不況より活路を見出さんとあせつてゐるが不況の嵐は益々激化する許りで失業者数は年々増大し、就業労働者の賃金は次第に下り、農民は益々貧困化し警察の報復的手段による罪人の取扱ひによる罪人の悔悟の見込の減少等の爲、或ひは學校教育の機械化、無内容化等による學生の左翼化、等々の爲益々大衆が左翼化して行くのに更に今度は戦争の慘禍は益々大衆を左翼化するであらう。何故か？ 食ふか食はぬかの生活境地は人をして奮然として立たしめるから。然るに一方ソヴェエト同盟の第一次五ヶ年計畫の勝利的躍進による労働者農民の生活状態の向上、科學の發展、平和政策等は大衆をして恰も沙漠にあつて「オアシス」を見出したかの如くに手をさしよばさるるであらう。さうして不景氣からの活路は戦争ではなくして革命だと云ふ様に信ずるに至るであらう。さうすれば無産大衆の前衛政黨は必然的に成長して行くであらう。何故かなら共産黨は大衆あつての共産黨であるから。其の上に現在支那に於けるソヴェエト化は日本の經濟的基礎を直接に揺り動かすものであるから、恐らく日本共産黨は大衆と共に成長して行くであらう。と私は思つてゐます。

四、現在の思想並びに將來の決心

わたと言ひ乍ら常に心は不安の雲に被はれてゐました。夏休みや冬休みに故郷に歸る度に泣いて戒める母の面影は常に自分を逡巡せしめてゐました。併し眞理に對する欲求と貧しい人の爲に闘はうとする自分の性格は絶へず書物に眞理を求めしめ小説に「どん底」生活を探訪せしめた。怒うして次第に世の中が分つて來た自分だが矢張り昔の逡巡を克服する事はできなかつた。「インテリ」の通性です。敗北者です。

併し現實を直視した場合私は其處に何を見たか。各國の生産指數は年々低下し失業者數も亦益々増大する一方で世界的恐慌は文字通り各國をドン底に落入れた感です。然し景氣が良くなる見込みがあるならまだしも不景氣は益々進んでゐるとの事であり底は當分見えまいと言はれてゐます。そして一方ソヴェエト同盟の状態は本の教へる所では五ヶ年計畫は四ヶ年で完成されるとの事であり各經濟部門の發展は物凄いテンポで進んでゐるとの事です。失業者は去年から一人も居らなくなり、國民の生活水準はそれに比例して増大し、従つて生活の安定はこゝに科學の發展を約束し、各科學部門に於ける發明發見も次々と現出してゐるとの事です。私はこの現實を見た場合私の持つ主義が正しくないとはどうしてと思へません。私は今でも恐らく現實のこの悲惨な状態が平和的に消えない限りは將來も亦主義の正當性を疑はないでせう。併し留置場に於ける二十日足らずの沈思的生活は次第に私を母の方へ引きつゝて行きました。無性に母が可愛想になつて來ました。兄は家出し私は留置場に捕は

過去私が當運動に共鳴するに至つた経路はインテリの通性として、書物より實際世相へ、であつた。即ち書物で社會及び自然の辯證法的發展を知り書物上の眞理果して現實に適用せらるゝやに疑問の眼を眞直ぐ現實に向けしめた時私は臆け乍らも現實の動きが書物上の眞理と符號して行くのが分りました。併し未だ青二才の自分に何が分るものかと自ら卑下し自己批判を下し舊思想と新思想との清算競走は全く一時夜も寝れない位憤ましいものでした。それは誰しも思想轉向を書物上に得た人なら確かにうなづける事と思ふ。かくする中に一九二九年から世界的不況は益々深まり、忽ちにして世界を絶望と困窮とに絶叫せしめるに至るや、私は始めて「マルクス」「エンゲルス」「レーニン」其の他の革命家の一言一句が非常な輝きを増して來た様に思へた。そして人間として生れて來た以上人間社會の爲に盡す事が善なのだ、と信ずるに至り直ぐさま飛び込もうとした。だがましてしばし、お前には不幸な母がお前の成功を願つてゐるではないか、弟はお前を頼つてはゐないか、成程世の中が貧困のドン底にあり益々深まりつゝあるのは事實だ「ゴリーキー」の「どん底」は確かに現代の現實なのだ、だがお前一人死を決して戦つてもどうなる？ 大海に落ちた一滴の雨水にも及ぶまい、併しその一滴から大海に成るのだ、センチに流れるな、眞理に生きよ、だが、母が常に自分を苦しめてゐたのはこの母に對する愛と眞理に對する愛とであつた。此故に高校時代より常に實際運動には手を引込めてゐました。翻譯をやつて

れてゐる現在これを知つた時の母の心境は本當に悲惨其のものでせう。この上獄屋に繋かれる身となつたら何と母は考へるだらう。いや母は狂ひ兼ねないだらう。それに自分の體の柔弱も留置場生活が證明して呉れました。此の上續けは自分は肺病になるだらう。肺病になる位はどうでも良いが母はどうなるだらう。もう止めます。運動から手を引きます。

不景氣で職を求める事は唯かし想像以上の困難を伴ふでせうが速かに職を探し求めて母を安心させる様にし様と思つて居ます。個人的に恩を蒙つた友までも賣つた様な自分は又運動する資格もないでせう。いやそんな事はどうでも良いです。唯私は現在自分が餘りに大風呂敷なのを恐れてゐます。今度田舎へ歸つたら母はどんなに驚くか、それを考へると田舎にも歸りたくないのですが借金の仕末もあり自分の將來の事を母や父に知らせたいと思ふので歸ります。

留置場に於ける二十日足らずの沈思的生活は全く私を變へた様です。勿論最初より逡巡性に富んだ自分ではあつたが今度は逡巡なくキツパリと手を引きます。

私の儂らさる告白です。

二八

某大學英文科中途退學 K・Y (當二十四年)

關係せる事件の種類……なし

處分の種類、程度……不明

家庭の状況……母、異母兄、異父兄、姉一、弟一、(父は本

人五歳の時死亡)、無職、生活程度、中以下

學資の出所、金額……不明

一、家庭の關係

五歳の折父に死別し、S兄は母に僅少なる財産を預ちて別居を強ひ、母は幼少なる姉二人、弟及私の四人を連れて分家す。中學時代迄は家庭に對する不平不満は全くなく、幸福であつた。中學卒業の頃より、漸く家庭の經濟状態を知る様になり、母が女手獨りにて十幾年も僅かな財産を守りつゝ、私達を成育してくれた事に對して深く感謝するやうになつた。姉二人が他家に嫁ぎし後、大正十五年頃、母の實子にして私達の異父兄に當る×××より、生活を保證するから上京せよとの音信に接し親戚一同に相談し、私も中學校を卒業する頃なれば大學へ行く關係上賛意を表した。而して其の後現在に至るまで×××方に寄附したのであるが、その事の善悪は未だ若かりし爲判別がつかかなかつた。異父兄は婚にて昭和三年に妻帯する迄は實に親切にしてくれ、私の學費も支出してくれた。而して結婚後段々兄弟の間柄が悪くなつて行つた。即ち當時×××百貨店へ勤務してゐた弟(×××)が肋膜炎に罹り、後に脊椎カリエスの長患ひをし、その爲出費が嵩み且家の中が暗くなりて、×××夫婦と私達との軋轢が絶えなかつた。又その當時下らない詩雑誌「航海表」に私が關

而して入學當時詩人で

K・N

といふ者と友人になり、その影響で類廢的な詩作に耽ける様になつた。そして詩の同人雜誌「航海表」を發行して放埒な生活を一年許り續けた。その頃當時×××に居住してゐた前記

K・N

の家に雑誌の用事にて足繁く出入するうちに、同家に下宿してゐた従弟

E・N

と知り合ひになつた。當時彼も文學青年であつた。

而して昭和四年の末頃より從來の自墮落な生活を反省する所あつて、その後は眞面目に勉強を始めた。そして、右は唯美主義的美學から左はマルクス主義的美學に至る藝術理論を研究して行つた。而して特に「文學は社會生活の産物である。」の如き、文學と社會との關係——「上層建築と土臺」に關する思想に魅惑された。併してその當時(昭和五年始)はマルクス主義に對して頑固なる先入觀を抱いてゐて、社會學的な態度以上には進み得なかつた。

ブレハーノフ 藝術と社會生活

マルクス主義の根本問題

係して生活がだらしくなり、それが一層異父兄の氣持を悪い方に刺激して行つた。而して×××夫婦の間に子供も生れ、經濟上の關係から私達に對する壓迫が加はつて、不快な苦痛な日が打續いた。折しも昭和五年五月末私が脚氣衝心症に罹り、弟は弟で一旦治癒したる脊椎カリエスから股關節炎を患ひ、母はその氣苦勞にて半病人となり、親子三人共に病床に臥したれば、異父兄の機嫌は益々悪くなつた。時には自分の病の枕元に來りて暴言をはき、又病氣が治れば直ちに家を出て行く様に言ひ放つたりした。それ等と病氣の打撃に依りて私は精神的にひどく歪められて來た。これが、私が好んで過激なる左翼的書物を讀む様になつた動機の一であつた。又病後強度の神經衰弱にかゝり、その爲に早く從來の如き家庭生活を清算して獨立せんことを企てしも、意の如くならず實に悶々たる日を送つた。而して當時私にとつては、マルクス主義こそがそれらの歪められた、ひがんだ氣持をいやす良き清涼劑である様に思へたのであつた。

今私は、家庭——生活の本據——が人の思想に對して及ぼす影響の大なるを痛感した。それ故に從來の如き寄生生活を清算することが、今後私が眞面目なる道を進む上に最も重要であると思考してゐる。最良の道は、母と弟と共に歸國し老後を見守る事であると思ふ。

二、思想推移の過程

私は元々文學理論の方面に於て生きんとして×××大學英文科を志した

マーツァ 現代歐洲の文學

が記憶に残つてゐる。又傍らアメリカ文學並にその歴史の研究に勉めて、こゝに於ても一家をなさんと望んだ。當時アメリカの左翼社會民主主義者

カルヴァーントン

が唯物史觀の見地から書いたと稱する文學に於ける性的表現の一部及び同じくアメリカのワシントン大學教授で自由主義者たる

バアーリントン

が經濟的決定論(Economic Determinism)の立場から書いた名著

アメリカ思想の思潮

の一部分を翻譯し、前者は「××文學」に、後者は「英米文學」に所載し、恩師である×××教授に認められた。アメリカ文學並に社會史に關する讀書の内でも感銘が深くして、後に唯物史觀的方法をアメリカ文學史に適用して以てその文學史を根本から書き換へんとする野心を起さしめたのは

Simons, A. M. "Social Forces in American History"

であつた。この時から史的唯物論を研究したき氣持が湧き起つて來た。併し決定的に進み入ることは出来なかつた。

丁度この分岐點にあつた時(昭和五年五月末)私は脚氣衝心症に罹り、

同年九月末迄臥床した。今から思ふに、この病氣に依つて私は從來の理性的な先入観を失つてマルクス主義へと盲進したのであつた。若しその時病魔に倒れさへしなければ、私は安全地帯に止まつてゐたであらう。「家庭關係」の項で述べた如く、この病氣に依つて精神的にひどく萎められたのである。且學校は中退を余儀なくされ、病身にて何時異父兄Kの家を追はれるかも知れない不安——それから私の思想をより過激に走らしめたのである。又一方、早く獨立の生活を送るには、矢張從來勉強して來た文學論及アメリカ文學の方面に於て、生活費を得る工面をしなければならぬ、それには新しい市場價值のある理論をものにならなければならぬ……といふ打算的な氣持からも意識的に左翼的書物を讀むやうになつた。

昭和五年の暮までは強度の強迫觀念に襲はれて、一步も外出できなかつたけれども、又時には一日一頁も讀書する事ができなかつた、けれども、強行的にマルクス主義的書籍を漁り讀んだやうに記憶してゐる。同時期より昭和六年四月頃迄は最も多くの書物を讀んだ時期であつた。

- マルクス 賃労働と資本
- 〃 價值・價格・利潤
- 〃 哲學の貧困
- エンゲルス 反デューリング論

るが、今度連れて来て見ようと紹介された。しかし、その初めて面會した折、天皇制をどう思ふ、といきなり問はれて吃驚した。その後は病中でもあるし、あまり過激なので、K.N.にその旨を話し断つた。その後は見えなかつた。

昭和六年七月中旬頃E.N.の紹介だとしてH(ロイド眼鏡、始終ニコノ、して魅力ある男、中脊、ガッチリしてゐる)が來り、友人から手紙を貰ふのだが、君の名を貸してくれと云はれたが、考へて置くかと答へて、同月下旬稻毛へ轉地に行く事になつたのを幸ひ、その儘にして置いた。その後一度も訪れなかつた。

同月下旬頃E.N.が一度訪ねて來て、多分八・一のキャンパに参加するやうに勧められたやうに思ふ。その折彼がプロットの仕事をしてゐる事を知つた。(第二無産者新聞)を見せられたのはこの時であつたと思ふ、しかし私は恐ろしくて直ちに焼却した。

しかし同月下旬、私は突然母と共に稻毛に轉地療養することになつて、それには参加しなかつた。而して此時が病後始めての外出であつた。

昭和六年九月下旬小康を得て歸京したが、心悸亢進症に悩まされても、二町も歩めなかつた。長らく讀書を断念したれば理論の體系をそろく忘却し始めて、時の滿洲事變の性質をもハッキリ認識する事が出来ず再び勉強を策したが、健康が許さず非常にあせつた。

當時は、健康になつた鴨に研究しようと思ふ書籍を、例へば

- ラ ビ ビ
- オストロヴィチヤノフ マルクス主義經濟學
- シルヴァント 史的唯物論教程
- フインゲルト

といふ順に讀んで行つた様に思ふ。池袋×××書店よりマルクス・エンゲルス全集を古本にて買入れ、それをあちらこちら拾ひ讀みして病苦を忘れてゐた。この頃が最も理論的に成熟した時期だつた。その後は病の養生に追はれて理論を忘れて行く一方であつた。

カー・ポポフ 民主主義革命轉化の史的條件
に依つて、レーニン主義の科學性に打たれ、レーニン主義にも興味を覺えて行つた。昭和六年三月頃であつた。そして

- スターリン レーニン主義の基礎
- 〃 レーニン主義序説

等を研究した。
雑誌 「インターナショナル」
「プロレタリア科學」
T書店より届けて貰つてゐた。未だ外出できなかつたからしてを讀むよになつたのも此頃であつた。

昭和六年四月下旬、友人K.N.が私の病氣見舞に來し折に、私がマルクス主義を研究してゐる旨を話したる所、S(ロイド眼鏡、好男子であるが非常に神經質な男)といふ人が、従弟のE.N.を訪ねて家へ度々來

「レーニン全集」(白揚社一九二六年版)

等を買ひ揃へて僅に満足してゐた位であつた。

昭和六年十一月下旬、一面識もなきK(脊低く顔小さく色青し)が訪れて、これから時々會つてくれと云はれたが、私は強迫觀念症の爲遠くへ外出できずと断つた。しかし、Kは二三度訪れて

第二無新

を封筒に入れたのを渡して行つたが自分は焼却した。その内同年末より翌七年四月迄は歸國したので、彼に會はなかつた。

四月に上京する頃は健康稍々恢復したので、K.N.の家に到りE.N.に會はせて貰ふ様頼んだが、その當時はE.N.が非合法に潜つてゐるとか従兄の家には二月頃から居ない由であつた。

しかし六月初Kが再び訪れて來て、「第二無新」が「赤旗」になつたとかで、今度一度見せてやると云つてゐたが、六月二十五日に檢査された。同年十二月末、兄との益々悪しく、且勉強するには健康が第一なりと、思ひ切つて歸國することになり、専心靜養につとむ。

昭和七年二月迄香川縣××市××町C.H(姉)の家に、同年四月迄は岡山縣××市××町十一.Y.K(姉の嫁ぎ先)の家に滞在したり。同年四月に病氣(強迫觀念症)が未だ根本的に治癒せざりしも、田舎にては何分文献も手に入らず、東京に於ける左翼の運動の状況も分らず、たまになくなりて上京す。五月より六月までは、兄が生活を保證せぬように

なつたので、學校時代の友人のT・Oの紹介により改造社の「コーナン・ドイル全集」の一部の翻譯につとめた。その餘暇に

「インターナショナル」

を讀み、日本資本主義の特質の勉強を計畫す。

要之、共產主義思想を抱く様になつたのは昭和六年初より四月の間であつた。その後は病のため研究が再三再四中断され、理論の統一をはかるに困難を覺えた。しかし唯共產主義に對する確信のみが残つてゐて、(信仰と云つてもよい。何となれば理論的基礎がなかつたから)その確信が左翼の組織の手が伸びるのを待つてゐたのであつた。

三、自己批判、將來の態度

私は日本共產黨の綱領を知り、それに共鳴した上で運動に入つて行つた譯ではなく、外國文獻の翻譯物による「共產主義」の一般的理解によつて運動に入つて行つたと寧ろ云ひたいのである。何故なら、私が理解した共產主義及共產黨と、私が日本共產黨に接觸して得たそれとは全然異つたものであつたからである。この點が私が清算する理由の一つでもある。例へば、それは労働者階級の利益の爲に闘ふ黨であり、その成員は農民及労働者であるといふ風に本で讀んだのであるが、日本共產黨の現實は決してさうでない。私は、共產黨は正義の黨であると思つてゐたが、事實は例へばギャング事件の如き醜惡なる行爲をやつてゐる。私はそこには鐵の如き規律があるものと思つたのであるが、事實は豫想以上

に腐敗してゐる。その成員は何等職場で働いて居らず、黨より多額の金錢を買つてゐる。私は、I、Hについて見たのであるが、常に百圓紙幣を持ち一ヶ月に百圓以上も消費してゐたのである。それも自分で得たものでないのである。

私は共產主義に共鳴した。しかし日本に於ける共產主義運動の現實は全然別個のものであつた。私は嘗ては、天皇制打倒、大土地所有の撤廢等を附和雷同的に機械的に叫んだが、今ゆくりなく考へて見るに、私が餘りにも無思慮であつた事がわかる。一時の英雄主義から鎌倉に家を構へて黨員に提供したのであるが、その間二ヶ月の経験は、日本共產黨の眞の姿を知る上によりき経験であつた。私は實に專制的に利用され不平不満に充ちてゐたのであるが、無産者の爲であると思ひ我慢を續けたのである。私は逮捕後も不平不満を押さへて他に迷惑のかゝらぬ様にしたのであるが、その内黨の姿が漸次わかり(ギャング事件の如きは黨の所爲であるとは知らなかつたのである。警察にて初めて知つたのである。)又母と面會することに依て或精神的なものを感じて清算する氣になつた。

嘗ては共產主義に對する信念に於ては人に劣らなかつた積りであるがその信念、確信がタッタ一度母親に面會したことに依り脆くも崩れたのである。而して唯物主義に對する信念が親子の情愛に依つて崩れたとすれば、そこには何か或傳統的な、何か唯心的なものがあるに違ひないことをつくづく感じた。それが如何なるものであるか、今は明確に把握し

得ないが今後それを把握するにつとめるであらう。共產主義運動を清算するに際してこゝに感想を述べる。

私の弟は三四年來病床にあり、母は六十歳を越えんとしてゐる。この責任ある身が輕卒にも、その眞實の姿を知らず文學の上で正しいと信じたるが故に、運動に従事したことは實に間違ひであつた。今後は母及弟の身を見守るであらう。

二、高等學校生徒の手記

二九

文科三年乙類

S. T. (當二十二年)

健康状態……強健既往症及家系に精神病系統の疾病者なし
趣味……讀書運動嗜好菓子

資産及生活状態……家の資金としては家屋地所ある他別に
なく、近來は保證辨償による借財もかな
りある様ですが家族の生活に窮すると云
ふ程ではありません。

家庭の状況……家族、兄(戸主)三十九歳)洋服裁縫業、
母(五十八歳)右同、兄(三十六歳)洋服裁縫
業、大正十年頃××家に入籍、兄R(三十二
歳)和服業、××交通安全會事務所勤務、昭
和六年R家に入籍、兄(三十歳)和服業、兄
(二十七歳)同右、××交通安全會事務所勤
務、姉(二十五歳)大正十五年頃××家に入
籍、本人(二十二歳)第×高等學校在學中、
妹(十八歳)修業中、

一、家庭の状況

私の家は兄弟姉妹頗る多く目下は夫々離れて生活中なるも、私及妹を除いては何れも獨立して生活を営み居り、格別の資産はなくとも、細くはあるが、生活に安定を得て居り、而も多數の兄弟は一人の老ひたる母を中心に平和な家庭愛に包まれて居ます。

父は私が中學校に入つた年の二月に死亡しましたが、多くの兄弟の中私だけは學の通を進ませたいと口癖の様に申して居りました。私も父の心をあり難く思ひ、又父の遺志を守つて私の希望を遂げさせてくれた兄達に感謝しつつ希望に満ちて中學の科程を了へました。中學を了へて×高に入學するや、兄達の經濟上の不如意から僕自心も苦學する事を決心し、長兄舊友關係を頼つて××氏方に寄食し其處から通學し、やがて家庭教師の口を見つけるまで學資として授業料の他に月々十圓づゝの食費其他の費用を兄達から貰つて居りました。

私は兄達の支出を少しでも減じようとして自分の働き口を探して居ました。二年になると同時に郷里の育英會からの貸費も許可され、多少の收入の途も開けて喜んで兄達の出資を辭しました。

此の頃から私は本當に働いて生きて行く事の嬉しさを實感し、一方働きたくとも働くべき職を與へられざる群のある事を知り、從來漠然

と考へて居た社會と云ふものに急に關心を持つに至りました。

學 歴

成績は中學に於ては優等生として賞状を授與されて居ました。×高に於ては中位から少し下の方です。別に不得意とする學科(科目の好き嫌ひ)なく、語學數學等には興味を持つて居ました。將來は法律方面の勉強をしたいと思ひます。(以下中略—編者)

讀書關係

中學三、四年頃まで文學的なもの例は徳富蘆花集、偉人傳ブリュターク英雄傳

中學五年頃になつて中央公論、改造

昭和六年森戸辰男「青年學徒に訴ふ」等に「貧乏物語」「資本論入門」昭和七、八年ケルゼンツ、レーニン主義、辯證法的唯物論、スターリン、レーニン主義の基礎

二、思想の推移過程

私は封建的な氣分のチットも抜けぬ小さな下町に生れ平和な家庭に育つて來ました。大した餘裕があるわけではないが生活の安定には事かゝず、然も多い兄弟の中にも争ひ一つなく家族同志の和合は近隣でも評判になつて居る程でした。多くの兄弟達は何れも小學校時代の成績は優秀であつたに不拘、昔氣質な父の「商人の子は商人に」の意見で何れも奉公に出されました。然し男の子としては末つ子の私だけは中學校に入れて貰ふ事になりましたが、夫れ丈は父からあまやかさ

れて居たか、それとも父も氣が弱くなつて私を奉公に出したくなかつたのか、何れにせよ父は私に「お前丈はどこまでも學校に入れてやる」と云つて居ました。「一生懸命に勉強して世の中の爲になる仕事をしろ」と云ふのが口癖でした。中學校に入りたくてたまらぬ私が此の父の言葉にどんなに喜んだかは云ふまでもなく、「世の中につくせる人間にならう」と云ふ覺悟を固く持つて居ました。そして希望通り中學校に入りましたが、その時には父は既に墓碑下の人となつて居り、私は母を中心とする家庭から通學する事になりました。

中學三、四年生頃までは譯もなく明るい希望に満ちて英雄傳を讀み耽つたり好きな文學書に目を暮したりして居ましたが、その頃になつて世界不況の波は次第に私の故郷の様な片田舎にも浸潤し、兄の苦しさは私にも薄々感ぜられる程でした。その中、さゝやかな製絲工場を經營して居た私の叔父がバツタリ破産してからは、そのあほりが意外に大きく負債の分擔は私の兄に如何ともする能はざる痛手を與へた様でした。兄はその具體的な話は何もしませんでした、私にお前がどこまでも學問したいなら將來苦學をする覺悟で居なければならぬぞと屢々きかせ、私もそれは充分決心して居ました。

其の頃は獨り私の叔父ばかりでなく、不景氣の犠牲者が出るのを目にし耳にして私は次第に「破産」とか「不景氣」とかの言葉を實感を以て知るに至り、偶々見た改造のプロレタリア小説に強くひかれ、た事を覺へて居ます。これから私の文學好きな傾向はすつかり私をアテ朗かに過した。經濟上の關係にて寮には入らず、長兄の舊友關係を辿つて當時××に居住せる××氏方に寄食し、そこから通學して居りましたがまもなく再び改造等を読み始め、淋れ行く故郷の姿を想ひ浮べ乍ら幾月かを過す中に、何時しか知らず／＼社會問題に心を引かれて居ました。

その年の夏、久し振りで歸省した私の眼に映つた故郷の姿は餘りにも陰鬱でした。ちつとも變つて居ないその外觀にも拘らず、一寸裏通りをのぞくと何處も彼處も暗い氣分で漲つて居る様でした。昔から餘り「金持ち」と云ふものゝ居ない私の町は一樣に淋れて居ました。近郷の農家は加ふるに不作の影響を取つて實にみじめな生活に甘んじて居るのでした。而も泰平な御大名時代の影響を受けて樂天的と云ひたい程宿命觀に慣らされて居るこの郷の人達は、そのどうにもならぬ苦しさ、酒、女、安眠薬等の安價なる慰安にまぎらして居るのを眼前にまざ／＼と見せ付けられて何共云ひ得ぬ氣持に襲はれました。かうした地方から選れる人間として、學問に身を獻げる幸を有する我々は一體如何にすべきか、如何にしたらかゝる社會に大いなる貢獻をなし得るかと云ふ問題につき當りました。體氣ながら分つて來た、資本家地主階級と云ふものが矢張り今日の社會の癌となつて居るのだらうか? 私はこの問題をもつと勉強せねばならぬと思ひました。九月××に歸つて再び學校に通ふ様になつてから、私は古本屋の店頭に立つては手當

ロ文學に没頭せしめ、改造、中央公論等は無二の愛讀書となりました。その結果色々の論文も讀みましたが理解されるに至らず、共產主義と云ふものに對する認識の眼もはつきりと開かれるに至りませんでした。けれどもその頃私に大きな感銘を與へたプロ小説は社會の階級性を私に知らしめ、階級闘争に身を獻じて働く闘士の話などには英雄主義的な憧憬的な眼をさへ輝かせて讀み入りました。そして當時の僕の抱負としては大いに法律を研究して勝れた辯護士になり、金なきが故にいゝ加減な裁判で益々困窮に追ひやられる様な人々の爲につくしたいと云ふ様な考へを以て居ました。そして其の爲には父の希望でもあり、母及兄も願望して居る所の帝大を卒業せねばならぬと考へ、高等學校は苦學の都合上もあり、又かねての憧憬の的でもあつた所の×高を選びました。中學を卒へた年は合格出來ず、その年は唯×高に入りたいたと云ふ念願から好きな小説も一切やめて只管受験勉強を續け、翌年春(昭和六年)合格出來ました。母親始め兄弟達の喜は無論非常なものでありました。後で私の入學試験前後に三七日を母親が魚類絶ち斷絶ちで私の合格を祈願して呉れたと云ふ話を聞いて私はシミ／＼親の有難さを感じ、受験勉強中の一年間をかい所に手の届く様な面倒を見て呉れた兄達の親切さと思ひ合せて私はこの母の爲にこそ、この兄弟達の爲にこそ恥なき人間とならうと固く／＼心に誓ひました。合格した春は流石に嬉しくて、學校の組選の野球の試合に出たりし

り次第に本を読みました。森戸辰男著「青年學徒に訴ふ」はその頃の私の氣持からその題目に引つけられて讀みましたが、これからはマルクスの感銘的な引例句を讀みましたが餘り得る所はありませんでした。私はもつと經濟的な社會機構に就いて知り度いと思ひました。此の頃入學當初の×校長の訓示と「マルクス研究團體」としては勿論個人的にもその研究は嚴禁する」と云ふ痛い様な嚴厲な御言葉を想ひ出さぬ譯ではありませんでしたが、私の熾烈な知識慾は此の嚴なる校則の存在をも抑へてしまひました。河上肇著「第二貧乏物語」は割合理解し易き經濟問題紹介書として此の頃私を引つけ、更に同人著「資本論入門」を讀破しようと云ふ氣持を起させました、そして私は此の書を手に入れましたが、併し私は他家に寄食する身であり且つ××氏は市内遠く離れた郊外に移轉された關係上、通學の往復にも多大の時間をとられて勉強の時間なく、従つて此の書をよく理解する事の出来る程熟讀する事は出来ませんでした。だが此の頃から勞資二階級の對立は資本主義に於ける必然的矛盾である、現在の社會に於ける農民層プロレタリア層のプロレタリア化はその第三期的な一現象に過ぎないものであると云ふ事に對して一つの信念を抱くに至りました。

かゝる私の思想的な推移と平行して、私の「××」に對する觀察も運つて參りました。中學時代を通じて更に受驗勉強の一箇年を経て私の憧れて來た「××」は天下の秀才の集まる所として世俗に超然たる會の暗い方面にのみ向けられ、増大し行く失業者の群、それ等のある者は巷に食を求めて塵箱をも漁ると云ふ殆んど犬にも等しき生活をやつて居る現状を見せられて、之が社會惡でなくしてなんであらうかと考へ、更に學校は卒業しても就くべき職業のなき人の數多くあるのを見ては他人事でないと思へ、かうした社會の缺陷が一日も早く改善される爲に我々青年に課せられたる任務は重大であると考へて居ました。

昭和七年夏休歸省した私の眼に映じたより以上の故郷の疲弊せる姿は、悉々私に社會問題を研究すべく拍車しました。此の夏も兄は近來學生として共產主義運動に入り處罰せらるゝものゝ數多あるを心配して、呉々もそうした運動に加はるゝと云ふ事を懇々と説諭されました。私の大きな負債に苦しみ只私の成功をのみ待つて居る兄の事を想ひ、更に老ひたる母親が唯一つの樂みとして私の圓滿なる成長を祈つて居らるゝ事を想へば、夢にもさうした氣になれば斷じて兄を裏切る様な事はないと云ひました。

九月再び學校に出る様になつて、私は同級のUと相識る様に成りました。私は寮に入らぬ關係もあつて友達は少なく割合に孤獨な學校生活を送つて居ましたが、Uを識つてからは俄にその淋しさから救はれ、而もそのUが私と同じく社會問題に關心を有して眞面目に勉強して居る事を知り、學校の問題については特に心を向けて居る事を知つ

存在であり、榮華の巷を低く見て若人の青春を謳歌すべき最も樂しき所であると考へて居りました。其處では世俗的な問題は何等問題とされず、只自由に朗かに眞理の道を突き進むべき所であると思つて居ました。所が、私の心が一度社會問題にふれ社會的な觀察眼が開けるや「××」も決して社會とは切り離れて考へ得られぬ存在である、其處では社會の空氣が呼吸され社會の推移に平行した變遷が行はれて居るのだ、××に於ても或るものは過去のものとて葬り去られ或るものは新に意義を生じて迎へられると云ふ淘汰は行はれなければならぬと考へる様になりました。そしてかゝる考への對照として、我々の前に對×高戦問題が提出されました。新聞「××時報」上に校友會雜誌上に、そして又雄辯會に於ける演壇上に於て幾多の論者に依つて論戰は展開されました。私は賛否兩論の何れにも眞摯な態度で耳を傾けましたが、時代性に基づき社會問題との聯關の下に對×高戦問題を取り上げて居る反對論の方に同感を有しました。其年の冬突如學内に於ける處分が發表され、私は之れによつて私のひそかに敬意を捧げて居た所の勝れたる理論家達が何れも冷い處分に曝されて居る事を知り、かすかな義憤をさへも感じました。そしてそれが「赤」であり自治學生會なる秘密組織のメムバーであつた事を後に知りましたが、その行動が正しき要求に基づくものである以上決して嚴烈なる處分を蒙るべき性質のものではないのではなからうかと考へて居りました。私の眼は愈々社

てすつかり共鳴し、胸襟を開いて語る様になりました。而して學校に於ける種々なる改革問題は之から我々自身も問題として研究して行かう、對×高戦に於ける應援團費強制徵集などは今日の如き窮迫せる社會狀勢の下に於ては斷じて廢止すべきものである、我々はかくの如き桎梏を除去すべき正義の立場から廢止の聲を擧げねばならない等と抱負を語り會ひました。此の頃Uが學校の外で一人の學生に私を引合せましたが、此の學生がI某である事は後に氣が付きました。十月末又××高内に檢舉があつて、Uも檢舉された中の一人であつた事を知つた時私の驚きはどなただつたでせう。只一人の最も親しき友を奮つた學校警察、之等は何れも眞に正しき要求を呼ぶものゝみ彈壓の手を下すのではないだらうかと等と疑惑を持つに至りました。十二月になつてかうしてつきつめた疑惑の中にある時、誘はれるまゝにうか／＼と自學組織の會合に加はり、そこで更に煽動的な言辭に自分の激した氣持を驅り立てられ、その場に於て自分は正義の爲に闘ふ自學に積極的に参加する旨を宣言しました。此の後の私の行動は實に突きつめた激情のまゝに育信的に動いたものであり、今こそ恰も軌道を脱して事が山に突當つて停止する如き氣持で約三箇月の後を振り返つて居ます。此の三月の間にも故郷の兄及母が上京し、その時にも色々注意されたのでありますが、折柄自分の責任の過重さと仕事の負擔の過大さとに比して、自分のやつて居る事が組織に加はる前に夢見て居た

如き華々しい學内大衆活動とは餘りにも驅けはなれたものである不満とを抱いて居た時とて内心大いなる動搖を如何ともする事が出来なかつたけれどもその反面に同志を裏切る事のつらさと、來年度になつたら自分の希望を實現して見せるぞと云ふ自負心が備いて、遂に母兄を欺く良心の苛責を抑へて仕舞たのであります。此處に捕はれて三日目、その間御懇得なる刑事殿の御訓示に眼覺めた私は更に報に驚いて驅付けられた兄の顔を見ては心の底から清算して將來の方針を樹直さん事を心に誓ひ、一週間を経て訪れられた、母親のあまりにもやつれた顔と俄に増された、かの白髪の数を見て、居たゞまれぬ自責の念に驅られ再び堅く、過去の一切を清算せん事を神かけて誓つた次第であります。

マルクス・レーニン主義は辯證法的唯物史観に基いて資本主義社會を解析し、資本主義の有する凡ゆる矛盾はかゝる社會形態の完全なる崩壊とそれに代る共産主義によつてのみ除去せられ得るものであるとなす事を知つて居りますが、そのマルクス・レーニン主義が取り上げて居る特殊性に就て之を現代日本にあてはめて考へるに、果して完全に妥當するか否かまだ／＼はつきりした信念などを持つに至つて居らぬ自分である事を悟りました。寧ろ日本にとつて共産主義は不可能なのではないかと云ふ疑念が濃厚になつて行くのを覺へます。

私は然し今日窮迫せる社會一面を否定する事は出来ません。如何に

したら此の弊を除き得るかの問題は依然として我々青年の問題であるとの信念を有して居ます。今後は偏狭なる一面的な考へ方の態度を改めて温健なる學徒の道を辿り、以て將來に資したいと思ひます。(以下略——編者)

共産同盟動機

私はプロ文學に依つて養はれた社會問題に關する關心を有つたまま、×高に入學致しました。現在の×高は中學時代の憧憬の幻影とは餘りにもかけ離れた社會的存在でした。×高は現在解決されるべくしてされざる問題の多くを孕み、之等の問題は何時も×高内に於ける進取的學生と保守的學生との間に醸される論争の種材となつてゐるのでした。私はどちらかと云へば進取的な改良主義派に同情を有してゐました。

その頃同級のUと知り合ひました。Uは明晰な理論を有する進取派の一人でした。私達の親密さは急に深さを増し、色々の問題を中心に議論しました。間もなくUは左翼學生として檢舉され、私も一時は呆然としました。此處で私は靜かに反省すれば良かったのであります。が、むしろ常に學生大衆の要求を提げて立つ進取的な學生を一時に於て檢舉したのみならず、親友Uをも奪つた當局に對する義憤(?)が勝つてゐたのであります。

さうした氣持である頃の或る日、私は呼び出されてAに會ひ、そこ

で自學再建の話聞き、當時のさうした氣持から英雄主義的な興奮を感じて承諾しました。かく私が加入を承諾したのは自學でありましたが、同時にそれは共産同盟の承諾をも意味するものであつた事は、後で氣がついたのであります。その時共産へ加入を直接に奨められたのであつたなら如何にさうした興奮にかられた頃とは云へて巡したかも知れません。

三、事後の情況

私がかゝる共産運動に加はるに至つた動機はもと／＼理論研究の結果止むに止まれぬ理性の力に動されたものとは異なり、性來の弱きを助けて強きに抗したい氣持から發した感情の奔流に身を委ねた結果であり、マルクス・レーニン主義はプロレタリア階級解放の唯一の正しい指針なりとの前提の下に、充分なる検討をも行ふことなく唯育信的に活動を續けて來たのであります。

今その四ヶ月間の過去の一切を清算し終へて、私は何がなしに重苦しい桎梏から解放されて後のすが／＼しさを感じます。

そして再び清算の跡を顧る時、其處に私は、全く感情の傀儡となつた狂信者の姿以外には何物をも見出し得ません。

學校内に於ける不平不満を取上げて、其等の改革の爲全學生大衆の先頭に立ちて斗ふ自學に喜んで参加し、如何なる犠牲的地位にも甘じて闘はうと決心した私は、同じ様な英雄主義的な喜びを以て全プロレ

タリアート解放の運動に身を捧げんことを決心したのであります。けれど共今になつて考へて見るに、過去四ヶ月間に私の行つた事總ては、單に自己陶醉に過ぎませんでした。學内に於ては左翼學生に對する彈壓を恐れて何等の仕事をもなし得ず、全學生に呼びかけるべき機關紙「自由の×」は只自分達少數グループの自己満足を感じしめる以外には何等の力をも爲すものではありませんでした。是れを以て大衆運動の一翼としての任務と名づけるべく餘りにも遊戯的でありました。

現代資本主義社會に矛盾が存在することも、その矛盾に對して限りなき憎惡を抱いてゐる民衆の力の偉大なることも、私は否定することは出来ません。けれど、共産主義が果してこの現日本の社會の諸弊を匡救すべき唯一の妥當なる方法たり得ようか？之に對して私は冷靜なる反省の幾日かを經た今こそ決定的な答を得ました。即「否」であります。大衆の力、大衆の支持なくして大衆運動は行ひ得ない、之は絶対であります。然るに日本に於ける共産主義には此の肝要不可缺なる民衆の支持から全く浮び上つてゐるのだ。如何に疲弊せる農村に於ても共産主義者といへば悪鬼に對する様な感情を以て目され、如何にみじめな海濱の茅屋にも祭日には競ふて國旗を掲げる日本國民としての喜びを誇く歌が歌はれる現代の日本に於ては、天皇制の打倒をスローガンの一に數へてゐる共産主義は徒らに民衆の背離を意味するものゝみであつて、既に方法論的にも誤謬を犯してゐるものであることを

今こそはつきりと知りました。

三千年の榮ある歴史を有する我國體と腐敗しきつたツアアの支配下にあるロシアとを比較考察した事は餘りも大きな誤謬でありました。確固たる理論的な信念もなくして共產運動に入つた私は、決定的な誤謬に眼覺めた今、將來共產主義の研究行動一切を廢棄せんことを誓ふものであります。

今迄一方的な感情にのみ走つて、私人的な感情の一切を抑へつけて來た私は、その抑へられて來た感情が今一時に堰を切つて流れ出るの覺えます。

今迄に顔をそむけて内心の苦しさを押し隠して來た家庭に對する懐慕と愛情が、今、千倍も萬倍もの大きさを私の胸に甦つて來ました。

大衆と共に生きる爲めには凡ゆる家庭的問題は清算されねばならぬと教へられ、清算し得るとは信じて來た私ではありますけれども、結局最後に最も大きな力を有するのは、その家庭的な問題であり、自分は矢張りそれに打克てぬ弱き一個の人間に過ぎなかつたことを知りました。家庭愛に還る、之が現在の私にとつて最も正しいことであります。

捕へられて三日目兄の顔を見た時、更に二、三日を経て兄弟連に伴はれ來た老母の顔を見た時、私の胸に溢れて來た感情は何で筆舌で表し得ませう。

×高受験の折には、私の爲に三七日精進齋を斷ちての新顔をこめら

母の顔、姉の顔が眼前に浮ぶ毎に、私は居たゝまらない様な自責の念を感じる。だが轉向の此の一瞬から、私は私の全生涯を母の爲め一家の喜びの爲に捧げる。

×高を出されると云ふことが目下の母の最も大きな心配の一つである様です。私は×高に入つたことにあれ迄喜んで下された母上としては當然でせう。×高は大丈夫かい」と聞かれる母上に、私は駄目です」と云ひ切る勇氣はなく、「大概大丈夫」と答へて仕舞つたが、もとより出来る事なら纏りついても残つて大學迄無事に進み度い。併しそれも到底不可能でせう。今となつては清い氣持にならざるを得ないが、それが正當な裁きであり、私はそれに甘するより他はありません。

このまゝ社會に出て働く能力のない私は、もつと學校で勉強せねばなりません。今迄よりも苦學をして來た私は、今後更に「赤被處分者」として今迄よりも苦しい道を辿らねばならないでせう。けれ共覺悟の上です。人一倍強く恵れてゐる感情を、私は今迄正しい方向に生かして温健なる學徒として修養の道程を終へ一日も早く社會人となつて、兄上達を助けて、母上の喜びの爲に身を盡し度いと思ひます。

三〇

理科二年甲類

S.O(當二十二年)

れたと聞く母、そして合格の報に狂喜一日斷食して神に御禮参りをされたといふ母、その母が今この思ひもかけぬ不幸の子の行ひに、一粒の米さへ喉を通らぬ程の心配されてゐると聞いては、私の胸は張りさけん許りでした。

全プロレタリアートと解放の大衆運動に身を捧げることは、同時に貧しき我一家の幸福の爲に死することでもあるのだ。たとへ今後の前に弊れるとも、何時かは一家の幸福となつて魂も甦るであらう。さすれば小さな考を棄て、大きな考を行ふことゝなるんだ、と考へてゐたことも畢竟自己陶醉だつたのです。老ひたる母はそんな夢の様な孝行よりも、現在の小さな孝行の方をより強く強く望んでゐたのでした。

むしろそんな夢は母にとつては大きな不幸だつたのです。かねがねの訓戒を破つて「赤い運動に」入つたこの不幸の子は、母の姿を見た瞬間に、その眼にどんなにか深い憎悪の光を豫期したことでせう。

然るにその様な悪しみの影などは少しも見られず、私の健康を氣遣ふ外には何時も少しも變らぬ慈愛深い光で充ちてゐるのを見た時、私は眞實に親愛の偉大さを感じました。

私はこの母の爲に甦生する。兄弟連の爲に甦生する苦しい中から私を學校へ通はせつゝ只々私の成功のみを期待してゐる兄上達、老後の唯一の楽しみとして私の成功を待つてゐられる母上、一家の總てを説切つた私の罪は正に萬死に償するものでありませう。

關係せる事件の種類……錦華紡績工場家宅侵入及治安維持
法違反

處分の種類、程度……放校

家庭の状況……養父四十七歳、會社員、養母四十二歳、養妹二十一歳養父は會社員にして貧富の度許ならざるも中等の生計を営むものと思考せらる

學資の出所、金額……養父より出費し居るも額不明

健康の状態……甲

性質……温和

才幹……才幹普通

昭和四年四月私は父母の大なる期待を負ふて高等學校に入學したのでした。凡ての青年がさうである様に私も亦大なる理想を抱き其の理想に向つて専心努力せん事を堅く決心して居たのでした。かくして平和なる樂しき學校生活が続けられつゝあつたのでした。

然るに世界大戦の後、俄かに我國に迫りし不景氣の波は近時其の勢を増大して世界的大不景氣の一波となりて我產業界を覆ひ、政府當局は節約を宣傳し、國産品の愛用を叫び或は産業の合理化を高唱する等、其のあらゆる努力にもかかわらず不景氣の波はいよゝ高く深酷に我國民の生活をおびやかし根底より之をくつがへさんとするに至つたのでした。

日々の新聞は工場の閉鎖を報じ商店の破産農村の疲弊其の極に達せるを

傳へ、失業、就職難、ストライキ等の語は新聞紙及び世人の談話中に於ける最もポピュラーなる語となつてしまつたのでした。

私の平和なりし學校生活も之によつて動搖せしめられざるを得なくなつたのでした。弱者を哀れむの情特に厚き私は、もはや單なる學校の教科書とノートの中に過ぐす事が出来なくなつて來たのでした。私の生活は以前に比して室内に限られる事が多くなつて來ました。然し目は教科書、ノートの上に在つても心の中は常に全く異つた考で満たされて居る様になつたのでした。

此の點に於て最も根本的なる第一の誤りが存在して居た事を私は當時全く知る事が出来なかつたのです。私の前には幾多の疑問が提出せられました。不景氣とは何ぞ、不景氣は如何なる理由によつて起るか、何が故に失業者が増大するのか、何故に貧富の懸隔が甚だしくなるのか等々、而して之等の重大なる問題に對して私の幼稚なる知識は何等の解答をも與へ得なかつたのです。而して其の疑問の解答を求めんとして語り合ひし一友人は私を社會科學の研究に導くに至つたのでした。

之れが第二の誤りでした。私は學禁を犯して社會科學の研究を始めると至りました。比較的難解なる此の種の研究を然かも一方相當熱心なる學業の勉強と平行せしめつゝあつたのですから、最初の間は其の進歩は全く遅々たるものでした。然しながら少しづつ研究が進むにつれて、特に昭和五年八月頃からは其の研究が私に取つては一種の興味深きものと

理想的な平和なる世界が出現するであらうと思ふに至つたのでした。

而して此の理想的社會を出現せしめ得る爲には、現在の社會、經濟、國家組織の根本たる資本主義を改めて共產主義を採用するに非ざれば不可能なりと考へたのでした。

「其の實現の方法については社會科學は次の様に教へました。現在の社會に於ける資本家達はかゝる社會の實現に對しては勞働者と全く其の利害を異にするが故に兩者は最後まで相争はなければならない、かゝる必然性によつて國民の大多數がプロレタリアの解放は決して勞資協同や社會民主主義的方法に依つては實現し得ないものである」と然し私はかゝる強き一團結の力によつてのみ可能なるものである、と然し私はかゝる方法に對してはとうてい養成する事が出来ませんでした。私には私の將來を只一つの光明として大なる期待を持つて居て下さる兩親、而かも私は幼にして實父母に死別し生みの親よりも尙深く愛し慕ひ下さるる養父母がある、又少年時代親の如く愛育して下された兄夫婦がある。私に對して最もやさしき愛情を注いで下さる諸姉がある。又私に對して獻身的な愛を捧げて下さる義妹があるのです。

私も亦赤き血の流れる人の子であります。其の私に之等親しき人々の不幸の鏡を握つて居ると言つても過言ではない。否或人に取つては生命の全部であるかも知れない私にどうして右の如き行動を爲し得るでせうか。私は又日本國民であります。生れながらにして忠孝の二字を根本

なつてしまつたのでした。社會科學は實に我々青年學徒に取つては聖書の如きものであります。私は不識／＼の中に其の魔業に浸されつゝあつたのでした。

九月第二學期の開始と同時に私等の共同研究も規則的に可成り繁く行はれる様になり、私の研究上に於てもある程度の進歩が認められ、其の思想上に於ても可成り明確なるものを得るに至つたのでした。此の研究によつて私は社會現象に對する解答を見出し得たと思ひました。私が研究によつて得た所の解答は要するに之等諸種の現象は凡て資本主義なる社會的經濟的組織の必然的產物なりと言ふにありました。

而して人類は本來團體生活を営む者であるから、人類全般の幸福を望む爲には各個人は自己一身の利害、私的感情を犠牲としなければならぬ、而して今日の如く人類の激増を見たる時に於ては、其の生存する爲に最も必要なものは勞働である、進歩せる機械文明を利用して勞働するに非ざれば全人類は其の生命を全ふする事が出来得ないものであり、生存すると言ふ此の事こそ人間に取つて最も大なる本能的欲望であるが故に、此の欲望を満足せしむべき勞働こそ最も尊き最も價値あるものであり人間として最も愛すべきものである。故に凡ての人が勞働を心から愛し其の當然正當に受くべき代價を得、他面人類は共同生活を営む者である以上他人を愛さねばならない。老者、幼者、病者等勞働し能はざる者は人類凡ての責務として之を保護し行く時に、其處には確かに理

精神とせる教育を受け久しきにわたつて靜かに培われて來た忠孝の思想は決して一朝にして抜くことの出来ないものであります。然しながら私の弱者を愛するの心は私をして社會科學の研究を中止せしめませんでした。

私は理想的平和なる社會の出現を希望して止みませんでした、而して私の良心を満足せしめつゝ之が出現の可能なるべき方法を求めて研究を續けて居たのでした。

かゝる思想的状态にありし時突然として錦華紡績侵入事件が起つたのでした。其の條件についてあらかじめ何等かの相談を受けたならば私は確かにかゝる行爲はなし得なかつたでせう。

然し私は友人の宅へ何等の知識をも有せずしておもむいたのでした。到著後ビラを見ました。そして其のあまりにも苛酷なる會社の行爲に對して衷心より憤激したのでした。弱きが故にかくの如く苛酷なる待遇を受けて居る彼の女達に對して同情の念を禁ずる事が出来ませんでした。私の特長たると同時に短所たるあまりにも強き正義感、義勇の念は私をして學生たるの身分を忘れ親しき人々に對して起るであらう所の結果に對して考慮し得ざるまでに盲目ならしめたのでした。かくて私は重大なる刑事上の罪を犯すに至つたのでした。歸宅後の私は如何に其の發覺を恐れたか、それは何人も想像し得る事であらうと思ひます。

數日ならずして校内同志の檢舉の報が傳へられました。私に對しても

亦不在中に檢擧の手の及べるを聞ききました。最初私の心に浮んだ事は父母に申し譯がないと言ふ事でした。妹の信頼を裏切つたと言ふ感情でした。兄弟達が如何に驚き悲しむだらうかと言ふ事でした。そして私は週かにも決心しました。警察に對しては私は何等の物的證據を擧げられれば居ない、而かも私に對する檢擧は未だ疑に過ぎまいかも知れない。父母や妹に對しても絶対に秘密に附して其の心配の勞をなくし様、そして警察に於て凡てを否認し様と。然し父母の面前で又妹に對して心ならずも事實を否認せなければならなかつた時の私の胸中は全く言葉には言ひ表す事が出来ません。凡てを告げて其の許しを乞ふ事が如何に容易であつた事です。私は涙を忍んで事實を否定し去りました。あゝ思へば實に不孝窮まりなき行爲でした。然しかくの如き涙を呑んでの苦肉の策も何等其の效がなかつたのです。警察官の調査は全く豫想外の進展を見て居ました。又さうあるのが當然過ぎる程當然の事だつたのです。罪を犯しながら其の發覺を逸れんと欲して居た私は此の上もない馬鹿者だつたのです。

私は凡ては終つたと思ひました。もう再びなつかしき父母や妹に會ふ事が出来ないだらう。後悔の涙が止め度もなく流れました。凡ての事實を自白し様、さうして公平なる法の裁きを待つより外に致し方がない、凡ての理想、光明が失はれました。私は恐むべき政治犯人である。冷たき留置場に淋しき幾夜かゝ明けました。其の間私は何を考

へたか。それは父母の事、妹の事、兄弟達の事である。心中に浮ぶのは只すまなかつたと言ふ感じのみである。そこには理論も何にも入り込む餘地がないのです。只現れるものは赤探々なる人間としての感情のみであります。

数日の後面會室に於て父と兄とに面會を許されました。私は只頭を下ぐるのみでした。父の慈愛に満ちた言葉を聞きました。然し感情の極端に激せる私は其の言葉をよく了解する事すら出来ませんでした。數ふべき言葉が數知れずある筈なのに、私は只今後再びかゝる事無きを誓ひ得たのみでした。

心なしか数日の間に心配の爲に父がめつきりと疲勞せられた様に見受けられました。私は只呆然として其の後ろ姿を見送つて居ました。かくていよく檢事の取調も終り、遂に刑務所に收容せられるに至りました。

其の後の約五ヶ月に及ぶ長き未決生活、それは實に淋しき生活でありました。苦しき生活でありました。然しながら一面に於ては最もよき人生の道場でもありました。其處に於て私は何を考へ得たか、何を知り得たか。それは實に強き、父母の愛情でありました。父兄兄弟に對する私の強き、愛情の自覺でありました。

過去に於ける自己の行爲の批判と將來の覺悟とが深く深く考察せらるべき問題でした。

共產主義思想に對しても徹底的なる批判がなされねばなりませんでした。

凡て思想問題等を研究するに當つては冷靜なる客觀的態度を失はず、常に之に批判を下しつゝ爲すに非ざれば其正當なる理解は爲し得ないものであります。然るに私は只マルクスの説へたる思想に對して何等の批判をもなし得ずして之を盲目的に信奉して居たに過ぎませんでした。かく冷靜に考察し得るに及んで初めて眞に之を自己のものとなし得た様と思ひました。現在の社會には種々なる缺陷のある事は確かに事實であります。然しながら共產主義を採用する事によつて果してよく理想的平和なる社會が出現し得るものでせうか。先づ第一にかゝる社會を出現せしめんと欲する爲にはそこに實に恐るべき犠牲の存在しなければならぬ事を思わねばなりません。若し何等の犠牲を要せずして實現し得るとするとも、果してよく其の理想的狀態に於て之を永久に維持し得るものでありませうか。人間は生れながらにして種々なる欲望を有する。成るべく小量の勞力によつて最大の代價を欲するのが其の本能の一つであります。而して人間は元來最も自己を愛する動物であります。故に如何に勞働の愛すべく神聖なるべきを説き愛他的精神の美なるを説くとも、萬人をして皆かゝる美しき神の如き精神たらしめる事は確かに不可能な事でありませう。而して若し權力によつて之を抑壓しつゝ社會の平和を維持せんと欲するならば、或程度迄は或は成功するでありませう。然しそれは

人間として最も大なる本能を無視しての行爲であるが故に、かゝる社會には絶大なる矛盾が存在しなければならぬ、かゝる大なる矛盾の内在于る社會はとうてい平和なる永續性を認める事が出来ません。現在社會の缺陷を取除く爲には多數無智なる勞働者をしてかゝる神の如き精神の所有者たらしめるべく努力するよりは、少數の資本家に對して其の良心の命ずる儘に正しく行動する事を教へる事が如何に容易にして又效果大なるものであらうか。資本家と勞働者とは二者ともに國家を形成し行く上に於て缺くべからざる要素であります。

互に自己の利益をのみ主張して鬭争する時は國家は滅亡の外がありません。かゝる意味に於てマルクスの説く所は單なる理想に過ぎないものであると思わざるを得なくなりました。特に我國の如き 皇室が全國民の宗家たるべき國家にありては、かゝる我國體と相入れざる思想の實現は絶対に不可能なりと考へるに至りました。又若しかゝる理想的社會が出現し得るものにして又永續性あるものなりとするとも、私にどうして家庭を捨て、父母を捨て愛する妹を捨て、其の實現の爲めに活動する事が出来ませうか。それが如何に高遠なる理想であるとも、一方に於てかゝる不徳を敢て爲すことを強要するが如き理想に對しては私は絶対に共鳴し得ないのです。

五ヶ月の未決生活に於て私は如何に父母の私に對する愛情の大なるかを感じたか。愛情の深きを感じれば感ずる程益々私は自己の犯せる罪の

大なりしを知り、過去の行爲の不孝窮まりなきを見て如何に後悔の念に實められたか、それは實に何人も想像し得ない程のものであります。私は必ず過去の凡てを清算しなければならぬ。父母の前に凡ての罪を告白して其の許しを乞ひ、今後は必ず我が犯せる不忠不孝の罪を購ふ爲に全力を擧げて努力し続けねばならぬと堅く決心するに至つたのでした。

其後は只々身を謹しみて保釋の日の一日も早からん事をのみ待ち望んで居りました。遂に保釋の日は來ました。

あゝ其の時の私の胸中はどうい筆紙に盡す事が出来ません。私は飛び立つ思ひで懐しい人々の姿を求めました。然しながらそこには期待して居た人々の姿を見出す事が出来ませんでした。

只兄一人が心配の爲めに甚だしくやつれた兄の淋しげなる姿があつたばかりでした。そうしてしばらくの後に最も悲しき報知を受けねばならなかつたのです。私は懐かしき父母の下に歸る事を許されなかつたのでした。然しながらそれはあまりにも當然なる事でした。當然なる故にこそ私はより以上の悲しみを感ぜずには居られなかつたのでした。兄と二人で淋しくも悲しき罪の心を抱いて實家へ歸らねばならなかつた私の胸中は、兄と手を取り合つて泣きながらたどつたあの一里ばかりの夜の道程の思ひ出こそは。我が生涯忘れ得ないものであります。かくて約三ヶ月に及ぶ最も苦しい生涯が始まりました。最も親しき人

々と生きながらにして相別れねばならないと言ふ事實人間に取つて苦しき事はありません。私は檢舉せられたる後の父母の大なる悲しみ、私の罪の少しにても輕からん事を祈つて畫策して下された苦心の數々を知りました。そうして其の御慈愛の深きに今更ながら感謝の涙に暮れるのでした。私はかくも慈愛深き父母に對しては、父母が將來最も幸福なる様に行動すべきであると感しました。そして私は私の如き罪を犯せる者は果してよく父母の將來を幸福ならしめ得るであらうかを疑ひました。若し此の結果社會的に罪り去られるが如き事があつたならば、如何に私が努力しても父母を幸福には爲し得ないだらう。而らば私は父母をして全く私より自由ならしめて其の幸福を祈るべきではなからうかと考へました。然し五ヶ年間の長きにわたつて結ばれたる親子の情、妹に對する愛情は私をしてどういかる決心をなす事を許さないのでした。私は只々改心を誓つて自己の罪の許されん事をのみ乞ひ願ふより外術がありませんでした。

斯の如き私に對して父母は其の改心の情をお認め下され、尊き慈愛によつて私の罪をお許し下されたのでした。そして一同ひたすら法による刑の輕少ならん事を祈つて居たのでした。其結果裁判長は父母の心中と私の苦衷とを御推察下されて最大なる情ある判決を下されたのでした。私はかゝる裁判長の御行爲に對して衷心より感激の念に堪へないのであります。現在に於ける私の過去に於て犯せる凡ての罪を知つて居ます。

これが私の最後の決心です。此の決心の永久に變らざる事を堅く、祖先の靈前に誓ふ。

三一

理科三年乙類

S.F. (當二十二年)

關係せる事件の種類……秘密研究會を開き居たる事及秘密

ニース發行し居たる件

處罰の種類、程度……處罰せず 訓戒に止めたり

家庭の狀況……祖母六十五歳、數年來の神經痛にて全く身體自由ならず

母四十八歳(オシ)、盲啞學校卒業生、兄二十

五歳、學生、第十八歳、中學生

無職にして貧富の程度詳ならざるも中等以上の生計を営むものと考へらる

學資の出所及金額……母より毎月三十五圓内外

健康狀態……一年生の一学期中頃より肋膜炎に罹りし事あるも恢復し目下體格は中の部なり

性質……温和

私儀今回想問題に關係しまして××警察署の取調べを受けるに至りましたことは誠に校の名譽を損し諸先生方にも色々御心配を御掛け致し

學生なるの本分を忘れて社會科學の研究を志したのが第一の誤りでした。其結果は、思想淺薄にして重大なる罪を犯し不孝窮まりなき行爲を取つて爲した事は最も許すべからざる事でありました。

私は今後の努力によつて必ず、此の大なる罪を償はねばなりません。私の現在最も希望して止まないのは母校への復校であります。生徒たるの本分を忘れて放校處分となりたる私としては、かゝる事はとうていお願ひし得可からざる事かも知れません。然し私は父母の御心配將來の幸福を思ふとき衷心より之をお願ひ致さざるを得ないのです。然しながら考へて見れば私は父母に對して甚だしき御迷惑をおかけ致しました。尙此の上年老いたる父母に對して再び長年月を要する勉強をお願いする事は私の良心の忍び難い所なのです。故に私は例へ其の道は如何に困難であらうとも、少しにても期間を短縮し或は獨力を持つて達成し得べき道があるならば必ず之を走破するの決心を持つて其の道に邁進致したいと考へて居るのです。然し両親は私に對して再び高校入學を許すと言つて下さるのです。そして又それを最も希望して居て下さるのです。私は此の父母の大なる御高恩に對して衷心より感激せずには居られませぬ。此の御恩に報ゆる事が出来得ないならば、私は實に犬にも劣つた人間とならねばなりません。

全力を盡しても尙到達し得ないものは有り得ない。私は死すとも尙止まざる決心を持つて甦生の道に邁進し様。

今更後悔の念に堪えません。此事件に與りました一切を申上げて二度と斯る過を將來犯さないことを固く御誓ひ申します。

私は大正十二年小學校を卒業しますと同年初めて家庭を離れて縣立××中學校に入學しました。入學と同時に野球を始め五年間選手生活をしました。その間唯勉強と運動以外に心を向けませんでした。勿論學生らしい心の淋しさを覚えたこともありましたが、何時も部の人や部の先生方と親しむことに依つて自分の生活に何不干渉なく楽しく中學生生活を楽しく送りました。部の合宿生活等から色々の先輩とも親しくなり、それ等の人の話す高校生活に憧れて唯高校から大學への一寸の道を考へて眞面目に學校に親しみました。同校を卒業した年××高の入試に失敗し、浪々の身となりましても高校生活にのみ憧れを感じ何處へも行く気がしませんでしたので、翌年再度高校をうけましたが不幸又失敗して止むなく××××高等學院理工科に入學しました。併し多学期待してゐた學校生活に反して、私大生活は全くのノット切實の教授なので、遂に三学期の初め退學して××高に入學しました。私の野球部の先輩なるF君なども居りまして早速塾に入るように奨められました。是非寮生活をしたと思つて入寮しました。最初の寮生活は非常に楽しいものでしたが、一學期中頃風邪の後肋膜炎を再發し此時から健康は次第にすぐれなくなりました。病院へも通はねばならなくなり、此年の二學期頃からよく床に付くようになりました。そして凡てに對して懷疑的になり、何物をも信じ得ない氣

持ちになりました。青年の誰でもがおち入る哲學的な煩悶だつたと思ひます。一切を虚無的に思考する思想的危機の時代だつたと思ひます。併し何かに頼りたいといふ強い氣持も一面には強く働いてゐたので、色々の雜誌類を読み淋しみを慰やさうと努めました。自分の心中を打ち明け人もなく唯一人夜晩く迄考へたり思索しながら散歩したりして、遂に學校の講義に對し色々疑を持ち始めました。××高生の關係した××事件は、一度此當時起つたので、事件の内容に付ては詳しくは知りませんが新聞紙を通じて痛く感動したことを覚えてゐます。

私の郷里には工場が多いので女工さん達の生活も可成りよく知つてゐます。休暇で歸る度に色々の話を聞くのですが、最近は大次第に不景氣のために倒れて行く工場が多くなり生活が段々苦しくなつて行くようでした。それで此事件の××高生の行動も恐らく女工さん達の悲惨な境遇に付て深く同情してゐる爲であらうと、それ等の人々の思想の世界を何か非常に新鮮な興味あるものだと思へるやうになりました。又此頃喧しい農村問題ですが、私の家でも昔小作人との關係がありまして、年貢米の件でよく哀れな小作人の生活を他所から聞いてゐましたので、小作人が長患の病人を抱へて苦しんでる面影を浮べながら、私は一生之等貧しい人々のために盡さねばならぬと考へました。殊に當時眞面目に煩へた最大のものは、私の家がずつと長い間誰一人働かず安易な生活をしてきてゐるのに、親類中では一家全部が一生懸命働いてゐながら苦しい生活をし

てゐるといふことでした。それで私は醫者になつても此等の人々のため盡さねばならぬと思ひ、更に人間の疾病の原因の多くが過度の勞働や不衛生な工場や住居の爲に起るのだと考へました。それで此等の根本的原因の無くならない限り人間の社會から疾病はなくなると考へ、その他の多くの人間の不幸をも現在制度の所産なりとする説に共鳴を感じるに至りました。私が社會科學の研究に至つた當時の思想的狀態は右の如きものでした。それで此種の文獻をあさりました。一年三學期頃寮で知合になつた當時、文科二年のA君を訪ね話の折、私のその時讀んでゐた無産者政治教程一部の私に不可思議な點を質したことがあります。或時級友のH某を連れてAの所へ遊びに行きましたが、Aが自分は學校の研究會に全然關係してゐないから三人で私の讀んでゐる政治教程一部を研究してみないかとのことでしたので、やつてみようとして三學期中二三度三人で勉強しましたが、二年になつてからも一學期中七八回帝國主義の經濟的分析に關するレーニンの著作を研究しました。

私もHもAも學校の研究會に關係するのは恐いので、お互に關係しないで個人的な勉強といふ固い約束をしてゐました。二年の春になつても私の健康は相變らずすぐれず、暇さへあれば一人床に就て考へることが多いため、又外出なども餘りしては悪いので可成り讀書が出来ました。此當時讀んだものとしては無産者政治教程二部、エンゲルス著反デューリング論、空想より科學へ、國家私有財産家族の

起原、女工哀史、農村問題(レーニン著)、マルクス主義講義等だつたと記憶してゐますが、尙ブハーリンの史的唯物論や河上博士の貧乏物語やマルクス主義經濟學の基礎論(改造社全集)等を此以前に讀んだことがあります。雜誌では最初中央公論、改造位でしたが、次第に左翼の文藝雜誌である「ナツプ」や、プロレタリア科學等を本屋から買ひ求めるに至りました。

斯くして遂に現在の種々の社會苦は制度の齊すもので、現に私の病氣等でも工場等から病氣の原因を流し出している間は決して根絶することは出来ないと思へ、物質的に恵まれてゐない人が病氣の爲に苦しむ慘狀を思つて、人類の文化を凡ての人が均しく享け得る社會を作るべきだと考へました。

昭和×年九月終Aと散歩した折、初めて×××練兵場でAからE、Iを紹介され、その時四人で研究會を持たないかとすゝめられ、現在の學校が自由な研究を許さないなら生徒だけで自由な研究するより仕方がないと話しました。確か之はEが申したのかと思つてゐます。私も一寸不安な氣持もしましたが、規則的に勉強出来れば結構だと思つてやつてもいと返事しておきました。その時は唯下宿をE、Iに教へ、遊びに来て呉れといつて分れました。その後遊びに来るようになつたが、態度の眞面目な頭もいゝ人なので喜んで交際しました。四人で研究會を持つには至らない前月中旬頃三人が私の所へ遊びに来た時、E君が××高にも學

校の新開位あつてもいゝなと云つて僕等で作つて見ようかと話したので私もそれはいい事だと賛成したが、當局に申しでて合法的に發行するか私等だけであるかの問題になりましたが、現在のソヴェエトの學校では自由に學生自身が二つも三つも新聞を發行してゐる、我々が新聞を發行しても構はないだらう」といふ論が勝つて、題を「 $\times \times$ 」と定め、出来るだけ讀者を増して行く積りで最初十五部位作りました。之は三號から $\times \times$ と改題してA、Iが作るようになる迄、E君が持つて來た騰寫版で私が印刷しました。其後も私は一人で居りましたので道具をあげられ、印刷の手傳ひもしましたが、直接には私は責任外にありましたので編輯などに付ても關係ありませんでした。

$\times \times$ に關係せず暇が出来た頃の或夜、E君からKを一年の理科の人だと紹介され、二學年の私と三年のEと一年のKとで何か規則正しく勉強しようではないかとのことなので、農業經濟か何かの書物をやりたいと私は申しおきました。二學期中には「労働組合」「戦略戦術」に關する本でしたか、兎に角Tの持つて來た職工發行の書物を勉強して之は翌年二月頃送附しました。十月の下旬の或時、矢張り三人が集つた際に、一年にはK、二年には私、三年にはTが居るので、此三人で學校の研究會を作つて行きたいとAが云ひ、私に二年の人で何かを勉強する研究會を作つてはと申しました。その時私は友達の中にはそんな會を好かない人ばかりだから駄目だらうと思ふが出来たらやつて見ると云つ

ておきました。その際研究會は社會科學に限らず文藝でも自然科學でも何でも構はないのだと説明して呉れました。二月終りKが病氣でゐた私の所へ來て、學校が駄目になつたと云つてきましたので、非常に驚きました。K自身の話では餘り突然で非常に残念がつてゐましたので、當局に歎願すれば何とか許されるだらうと思ひ、私等四人A、I、A、私とで協議の結果、一年の人達で歎願して呉れるようにとの意味の機を作り、私がえらばれて一年の各教室へまいてきました。五六十枚の半紙四ツ切りで有志一同の名のEの原稿でAが切つたのだと記憶してゐます。今から考へますと稚戯に過ぎないことも、眞面目にKのためにするのだと稍もすれば體する氣持を勵まし、朝早く學校へ行つたことを思ふと當時の輕卒を後悔します。今年三月A、I、Eが卒業して行くに當りまして、三君から四月より $\times \times$ 發行を責任持つてなすこと、及出来るだけ學校の研究會を作るようにと云はれました。私が非常に多くの責任を與へられたので、可成り内心不安でしたけれども、斷る譯にもゆかないので承知しました。

四月新學期が初まると上京途上のEが來て、是非 $\times \times$ の存在を知らしめる必要があるから、一年生に十七號を配布しようとし原稿を呉れました。私は百四十部位を一年生の各教室内に入れて來ました。之は四月十一日の朝早くだつたと記憶してゐます。

その後 $\times \times$ 十八號は私一人で作りましたが、學校の勉強を棄て、此仕

事をする程心も進んでみせず、非常に多忙なため遂に十九號を發行するに付て、嘗てからの親友Y君の所へ行き、今迄の私の仕事を打ち明け、先輩の手前是非 $\times \times$ を作らねばならぬのだからと云つて掲載記事に付て相談に行きました。二十號に付ても學内に問題になつてゐることはないかと相談しましたが、其後は恐怖を抱いたためか拒絶しました。又十九號を私が家で切つて居る際訪れてきたH君にも一應 $\times \times$ に付て説明して、週刊のため私一人では切るのが時間がないから手傳つて呉れるように依頼し、同君もその際一緒に手傳つて切つて呉れましたので、次週二十號を印刷する折にも一人で骨なのでHの所へ手傳つて呉れと頼みに行き原紙を切ることを手傳つて貰ひました。併し二十一號からは恐れたためか拒絶され、私一人で編輯印刷してをなさねばなりませんでしたが、私もその發行の無意義を感じ始めて居りましたので、斷然二十二號以後止めたことありませんが、唯Yの所へ掲載記事を相談に行つた時、五月一日が近いからメーデーに關することがいゝとか、フアツシズムが問題になつてゐてフアシストが勢力を擴大しつゝあるから之を書いてはどうかと云つて相談にのつて呉れた譯ですが、それに付ての原稿は凡て私がプロレタリア科學等を參考として書いたもので、尙足りない時には嘗て四月上旬Eから貰つた部制度の批判なる草稿を載せたこともありすし、「赤門戰士」の記事をとつたこともありす。

尙Yは一年の時 $\times \times$ 寮(寄宿舎)の私の部屋へ遊びに來るので知合ひになつた人ですが、私と同じ病氣で休學し入院してゐたので、同病相憐んで度々訪ねる中親しくなつた友であります。 $\times \times$ の配付に付ては最初 $\times \times$ と名付けて一號二號を私の手で切つた折には、二三枚を買つて残りの十二三部をEの下宿へ持つて行つたのでありますが、EはIやA、Kに渡したのだと思つてゐます。三號以後 $\times \times$ と稱してA、Iが責任を持つて作るやうになつてからは、AやIが私の所で刷つて四五部を残し、私に學校へ撒布するか誰かに讀ませようといつて何時も歸つて行きました。校庭に一度か二度おいてきたのを覚えてゐますが、直接渡して讀ましたことはありませんでした。そしてAやI等からT、Kに渡されてゐたこと、想ひます。四月以後私の責任になつてからは、十七號を除きて他は二十部内外の中四五枚を校庭や圖書館便所等へ一人で撒布して來ましたが、殘部は東京のJ、K、E、京都のA等に送つたわけで、その他には配布しませんでした。

一學期間の私の焦燥は相談相手もなく今迄の人々との約束を裏切るまゝの努力と、一方には餘計な仕事を止めて一日も早く級友等の如く大學の入試の準備を始めよと責める心の争ひで、此二つの矛盾した氣持は七月十四日檢査される迄續いてゐたのであります。

今回の事件で意外にも取調の長延いたことは次の二事實のためだつたと考へます。

一つは今年二月頃一年當時の級友I某と話合った折、私と同一思想傾向を持つてゐることを知つて交際を始めましたが、三月退學して上京し、東京から便りを呉れてゐる中の或手紙で、左翼労働組合や共産黨の新聞が手に入るから珍しいものだから送つてやらうと云つて來ましたので、好奇心を抱いて送つて呉れと頼みました所、六月及七月上旬二回に渡つて小包で理科二年乙類のK某宛に送つて來たこと及今年一月末IからIの友達だと云つて紹介されて二三度私の下宿へ遊びに來たYといふ人から左翼の出版物、メーデーのピラ等を送つて呉れたことの爲であります。尙二月終頃Yが來て郵便物の送先を頼まれて呉れないかとの事でしたので、私の下宿の所とYの所を教へて置きました所、四月頃一つの小包がY宛でYの下宿へ來たのをYから聞き、私が誰かの取りに來る迄預つてゐた事實もあります。Yが左翼の仕事をしてゐることを想像したのは此四月に送つて來た小包からであります、私の所へ來た二月頃には全然實際運動をしてゐるのだとは考へてゐませんでしたので、現在の社會狀況や昔のX高の思想事件の話しませんでした。

然し愈々七月十四日Xで檢舉されて、生れて初めて留置場を経験するに及んで、一學期間備み通して來た曖昧な態度から開放されて凡てを忘れ、唯々斯くなつた以上は自分は死すとも一語をもはくまいと決心し、斯くすることのみが今迄の自分の日和見の態度に對する唯一の申譯であり、従つて又貧困階級に對して少しでも盡すことになるのだと自分の

ないことなので、出来るだけ外のことのみ一心に考へてみました。食事の時には併し一人の母と病身の祖母を思ひ、卑しい惡事をした人等と同じに思つて難悪み悲んでゐられるだらうと思ふと残念でした。いつそ凡てを申し立てようかと氣弱くなる時もありましたが、取調ががんぐとやられると遂反抗的になり、今度は述べようと思つてゐたことも云へなくなりました。

八月になつてから暫し刑事が先生と親類の人が會ひたいとのことだが會ふ氣があるかどうかとの事でしたので、誰かに會つて見たいと思ひひますと申しておきました。併しそれらしい様子がないので例の嘘だと思つてゐました。今更私等を學校では問題にして居られないだらうと思つてゐた私の當時の氣持から考へれば、先生が私に會ひに來られる等とは夢にも思つてゐませんでしたので、無理もないと思ひます。此頃から次第に取調べを樂にされるようになったためか、色々と自己を反省するようになりました。段々はりつめた心が緊張からゆるむに従ひ、自己の信念に對して不安を感じだしました。物事を餘りにも簡単に考へてゐたこと、人間の複雑な世を簡単な機械論で改革し得ると考へることに確信を持つてなくなりました。又理想的社會と考へた共産主義社會が單なる空想のやうに思はれて來、又取調べに際して今迄訊かれた理論上の間の事を思ひ出して、自分の知識の足りないのを覺りました。殊に日本歴史、國體に付ては殆んど盲目的にレーニン主義的な見解を有してゐたことに

心に云ひ開かせて、常に敵に一語もはくなどいふ決意で不自由な生活や苦痛を忍んでゐました。非常に興奮してゐました。此當時の事を思ふと、併し今では夢のやうな氣がします。

XX署では十五日夜晩から最初の取調を受けましたが、前日XX署で眠つてゐなかつたので大層體が疲れてゐて苦しく、又何から檢舉されたか分からないために興奮してゐた私には、このやうな時何も云ふべきでないと思はれたので凡てを否認しました。併し取調の様子からIが東京から送つて呉れた小包のために取調べられるに至つた事及Iからの郵便物の送先である理科二年乙類のK君が取調べを受けたらしい事を知りました。其後四五日は専ら左翼の出版物の出所を追及され、私がYからの郵便物の受取所としてKの所を用ひたやらうと訊問されましたが、此際私さへ否認したならばYに迷惑を掛けなくて済むのだからと考へ、極力一切を否認し続けました。併し私が頼んだばかりに迷惑をうけてゐるKを思ふと氣の毒でならず、とうとう承認しましたが、刑事の話では私の失態のため多くの人々が捕へられたなど聞かされ、自分は夫等の人々のためにも自分が裏切り者でないことを示さねばすまいと思つて、出來るだけ自白すまいと考へました。最初二三週間は人に迷惑をかけたことを考へて夜も充分眠れず、すつかり體は消耗しました。九十何度といふ眞夏の折、閉ざされて孤り自己の過去や前途を色々と英雄的に考へた當時を思ふと全く夢です。此のやうな時家のことを思ふことは堪えられ

氣付きました。經濟組織の變革に超然たる三千年の

天皇制に漸く私の機械論では説明し得ないことを覺りました。民族の將來等に付ても明確にマルクス主義的な見解を持ち得なくなりました。併し人の爲に自分が理論的に敗北したと考へることに嫌ひな私は、一旦他人から攻撃を受けると頑固に抵抗する習慣がありますので、後程檢事から尋ねられた際にも凡て絶對的な存在はないものだ主張しましたが私の確信から出たものではありません。自分の今迄の理論に付て不安を感じ初めてから、署長からも色々訊ねられたが、矢張り「やり込められた」と考へるのはどうしても残念で、刑事等に對して以前頭張つてきた辯がでて、自己の今迄の説を固執しました。此日親類の伯父や保證人が先生と共に面會に來られたのでした。

私は母や祖母の心痛の程度を始めて聞くことが出來て無理もないと思ひ、不自由な身でどんなに苦勞してゐられるかと思ふと弱さを示すことゝ決心してゐた私も、恥も知らずに泣かないでは居れませんでした。あの時誰が何と云はれたか憶えはありませんが、私の態度一つで凡てを許して下さるだらうとのことを知りました時には、今迄學校は絶望と思つて今後醫專へ行かねばならぬか等と考へてた程でしたので、絶望的な考へ方がかすかな希望に變じてゆきました。此頃から警察、學校は民衆の抑壓機關だといふ從來の私の考へ方が徐々にくつがへり初めました。私が今迄凡ての人々に接してきた態度は、世間の人を分けて之は敵だ之は

味方だとし、敵に對しては悪意で味方に對しては善意でといふ態度でした。併し全く偏狹的態度だつたと思ひます。事實味方だつたと思ふ人は冷たく、敵だと考へて故意に悪意で對さうとする人が私のために涙を流して呉れ、祖母や母のことをさへ心配してくれるではないかと思ふと、深く過去の自分否現在の自分が嫌になりました。中學時代色々厄介になつた當時の野球部の先生が遙々奉天から長い手紙を下さつて、嘗ての昔寢起を共にし敗けては泣き勝つては共に喜んだ當時の純眞な君に歸つてくれとの心からの誠意に人の情を感じて涙しました。多くの苦しめる人々のために自分は盡してゐるのだと考へてゐたことが、果してその結果を生じたか、私のために幸福になつた人は未だ一人もないのに私のために多くの人々が迷惑をし心配し死にもまさる苦しみを受けてゐる事實を思つた時、自分の考へ違ひを覺りました。九月五日母に面會した時のことは書くに忍びません。私は母の前で凡て之迄の不孝を心の中で詫ひ、二度とこのやうな心配を掛けまいと固く決心しました。

九月十日檢事の手をへて先生の手へ渡され始めて自由の身となりましたが、私のやうな者に對しても飽くまで見捨てられず長い間盡力して下さつた先生が、尙も親切に注意して下さつて私の今迄の考へを改めさせようとなつて下さるその御誠意に感じ、自分の思ひを久し振りで爽かな氣持で申述べられるのを覺えました。

私は今之迄の行動を顧みて決定的に誤謬だと思ひますことは、自分の

文科三年甲類

H・T (當二十一年)

三三

一、左翼運動に共鳴する迄の思想の推移過程

A、解放運動に同情

中學四年生の頃から小説耽讀と獨居癖の結果、はげしい神經衰弱に陥り學校の課業も手につかず、成績も思はずになつて、學校でも家庭でも相手になれず、遂に厭世的な氣持に冒される様になり感情も終始尖つてつまらないことを苦にしたり、一寸した事にはげしく憤慨する様になりました。

小説の中で最も強く影響されたのは佛蘭西のルイ、フキリツブと云ふ作家のものやドストエフスキー、ツルゲネエフ等の作品であります。

フキリツブのものやドストエフスキーの作品は善良な魂と立派な素質を持ちながら、強く自己を主張する氣概に缺けて居るために、次第に社會の片隅におし落され、悲惨な破滅の生涯を送る人々の痛ましい生活記録を主題として力強い筆致で描いてありました。その結果貧しい人々はすべて斯る善良な人達ばかりだと信ずる様になり貧しい人達に同情を持つ様になりました。

ツルゲネエフの作品では所謂『無用人型性格破産者』を主人公として描いた『處女地』とか『春の波』とかに強い感銘を受けました。鋭い感受性と立派な素質にも拘はらず、實踐的熱意、能力の缺乏と退嬰的な無氣力のために自己を性格破産者に引き下げ更に無能力者に墮し果ては生きる權利を放棄せねばなくなると云ふ風に迫眞力を持つた筆致で描

處分の種類程度……論旨退學

家庭狀況及……父は××高等學校生徒主事

學費の出所、金額……父より月約三十圓

健康狀態……頑健

性質及才幹……性寡黙にして一事に熱中する傾あり殊に讀書慾旺盛、才幹としては認むべきものなき方

なり

概評……當人は才を負ひて自から擧置する所甚だ高く、其の思想行動を以て大に他に優れたるものなりと考へ居れり、此の手記は父母同胞の恩愛に感激し涙の裡に綴りしものなりと云ふも、自己の行動を辯護し、自己の理解力を誇るためには事實と違ふ所あるも意とせざる傾あり、左翼運動に共鳴するに至りし原因として成績不良のため學校及家庭に於て顧られざりし不快を擧げ居るも其は事實にあらず、カント哲學に對する理解を誇れるも實は僅に其の一端を窺ひしに過ぎず、警察署より釋放せられて登校せし日之を當人に詰りたるに、彼も亦其の然る事を認めたり、此の手記は事實の叙述として考ふるよりも、左傾青年の精神狀態を知るための一例として見るべきものなり。

いてありました。そして自分をそんな性格破産者ではないかと恐れる様になりました。

それと云ふのも神経衰弱の結果、學課の成績が悪くなり家人からも學友からも低能扱を受けて居る様にひがみ、自己を生きる権利のない無能力者性格破産者と断定してしまひました。その結果はげしい厭世觀に襲はれたのです。併しこれと同時に厭世的なひがみと貧民に對する同情は社會制度に對する憤怒、憎悪にも導きました。そしてこれ等の無氣力ではあるが善良な人達も住みよくなる社會でなければ駄目だと思ひました。當時は我が國に於ける無産運動が漸く進展して華々しい活動を初めた頃でしたから、以上の様な氣持が此等解放運動に對して強い關心を喚び起したのです。そして其等の人々の動きを次第に注意し始めました。

B、プロレタリア文學に賛同

文學に對する興味は早くから持つて居ました。丁度私が以上の様な厭世觀にとりつかれた頃は我國に於けるプロレタリア文學運動の勃興期でジャーナリズムで持つて囃されて居た頃です。そしてこのプロレタリア文學に對抗して新興藝術派たる一派があらはれましたが、その愚劣な逃避的な人世觀や、輕薄な安易な生活態度、云はゞ一種のナンセンス文學に過ぎなかつたため此に對して強い反感を持ちその反動としてプロレタリア文學の眞剣さ、熱意、尖鋭さ、ヒロイズム等に深く氣を率かれ又その權力に對する反抗的な意氣かその頃の私が持つて居た厭世的なひがみを

救つてくれる様に思はれました。此れが中學五年生の終り頃から×高入學當初の氣持です。そしてプロレタリア文學を片づ端から讀みあさりましたが、先にフキリツ等の作品より受けた影響等を合し解放運動に對する關心が益々深められたのです。最初は無産運動一致に對して同情をよせてゐましたがプロレタリア文學の中ナツツの作品が最も優れてゐたしその活動も華々しかつたので、全協、共産黨等に對する同情とマルクス主義に對する興味を深めて來ました。

C、マルクス主義に共鳴

理論的なものとして最初に接觸したのはブーリンの「史的唯物論」です。卑近な例を引いて巧にその理論を展開し同時に種々の哲學說、史觀を粉砕して行くのが面白く最も興味を感じたのがその飛躍說、それに伴ふ革命說並に資本主義の崩壊と社會主義の勝利の必然性論であります。續いてマルクスの「賃労働と資本」を讀んでその剩餘價值說を知り、それを正しいと信ずるに至りました。續いて史的唯物論に關するものを四五冊讀み益々此れが研究に熱中して來ました。

その中にマルクス主義の哲學たる辯證法的唯物論に最も興味を持ち以後は主として哲學方面のものを接觸しましたので、經濟學、帝國主義論、ボルシェヴィズムに關するものはわづかに目を通したに過ぎません。併し哲學たる辯證法的唯物論が正しい以上その根底に立脚する剩餘價值說、階級闘争說、國家學說等は當然正しいと信じて疑はず、現實社會の

分析、解剖等には大して注意を拂ひませんでした。

D、一切の既成權威、權力の否定

斯くマルクス主義を正しいと信ずるやうになると共に、一切の既成權威、制度、權力を否定し、輕蔑し、無視する様になりました。マルクス主義の優位性を信ずる結果として當然ですが、又一方ジャーナリズムに於けるマルクス主義者及びその亞流の徒の華々しい勝利、辨當事件當時左翼學生が活潑な討論と水際立つた統制を示し反動學生を徹底的に粉砕したこと及び私が直接學内の組織に關係する様になつてから接した人達が皆私より優れてゐたこと等のため更に此等反動學生が他日ブルジョアジーの代辯者として夫々の組織制度にたづさはるならば其等の組織權力も問題にならないとの自信を深めたこと等の結果でした。

併し自分の將來に關しては漠然たる考へしか抱いてゐませんでしたしその上就職難、失業苦等の聲におびやかされて大學を出てからも何もしようと思ふ氣もなく單純にサラリーマンに成らうと思つて居たに過ぎません。そしてシンパとして關係して行かうと思つてゐました。

以上マルクス主義の信奉と全協、共産黨に對する同情及びそれに伴ふ既成權威權力の否定は厭世的に基き正義觀、ブルジョアジーに對する反感憎悪と云ふより先に生きて行くことに對する自己の切實な氣持と貧しい人達に對する同情及び闘争してゐる人達に對する尊敬等云はゞ隣人愛同志愛等に根ざし其等の人の行ふ所に従ふのが社會のためにも自分のた

めにもよいと考へたからであります。

二、入黨以來の思想の推移過程

A、動 搖

最初の中は昂奮してゐましたが、いろ／＼な資料物件を押収されたため多くの人に迷惑をかけたはしなかと云ふ心配で一杯でしたからその他のことは何も考へる邊がなかつたのと多勢のものと一緒におくたつたりわい／＼騒いだり「頭張れ」とか「出てから没落しない様に」とか始終傍から云はれるし、私も云つてゐましたので別に氣持に動搖は起しませんでした。

併し次々に入つて來る情報を耳にするにつけ、今度の檢舉が徹底的で全協以下縣下の左翼は根こそぎにやられた事が分り敵の威力に畏怖を抱くやうになりました。取調べの様子も小説等で考へて居たのとは大分違つてゐました。刑事などに何が分るかと思つて居ましたが取調べ振りとか追求の態後とかに接し馬鹿にならないと思ふ様になり更に又私が尊敬する左翼の上部の人達とも到底對等に應答は出來まいと思つてゐたのに反しむしろ對等以上に出て調べてゐるのを見て驚きました。そしていくら頭張つても白狀してしまはねばなるまいと観念させられました。併し安價なヒロイズムと虚榮心から最後に残るまで頭張らうと決心しました。それと云ふのも日頃から資料の始末が悪い、ルーズだ、もつと注意しろと云は

れながら矢張り後始末が悪く果は「裏切りだ」とさへ云はれて居ましたからです。それでも自分から先に云へば「二重の裏切りだ」と云はれることを恐れ又一緒に捕まつた人達は皆私よりよく頭張り通すだらうと信じたからです。

又私達が辨當事件後再建に着手してからは自治學生會のメンバーが餘りにも弾壓に對して弱く何もかも一切白状してしまつた事などを常に私達は非難し戒め合つてゐましたし又學校内でも一般に弾壓に弱かつた事を嘲笑してゐましたので、私から先に口を切つては又自分がそんな風に嘲笑され非難され出てからも顔向けが出来ないと云ふ様な虚榮心からでもあります。従つて最初の三十日程は氣が張りつめて居ましたので留置場の生活が餘り苦しいとは思ひませんでした。

留置場にはいつてからはいろいろ／＼な社會層の人々に接し始めて社會の實情に眼を開きました。先づ遊び人、ルンペン等から彼等の生活を聞くにつけその生活に對する安心し切つた氣持、朗らかな態度に驚きました。誰れも彼れも食へないと悲觀して居るものはありませんでした。從來唯單純に概念的に民衆とは苛酷な搾取壓迫に虐げられ權力の前に畏縮して生活に對して何等の定見、希望もなく、その日／＼を喘ぎながら細々と送つてゐるものだと思ふ風に考へてゐたものですが、それも大分動搖して來ましたし、就職難等の聲に脅かされて自分の前途を暗いものに考へてゐたのが、餘りに單純で馬鹿らしくさへなりました。明日のおまんま

が食へないから」と云ふのが左翼の口癖ですがそれも幾分誇張だと考へる様になりました。更に田地三反位を小作しても十分食つて行けるとか、土方、日傭かせぎだけでも十分暮せるとかの樂觀的な事實を聞き食つて行けないなど云ふのは意氣地なしの世迷言だと云つてゐるのを聞いたりして大分考へ直しました。無定見で希望も生活意識も持つてゐないと思つて居たのに反し矢張り夫々社會人として一個の定見を持ちその生活意識のもとに安心してその生活を送つてゐるものだと思ふことも教へられました。

B、家庭の事情

檢舉される以前から既に父は私の思想について心配し常に訓戒してゐましたが、正しいと信じ切つて居た私は寧ろ反抗し反駁するやうな態度さへとつてゐました。併し父は私が實踐に走るだけの勇氣はないものと思つてゐましたし又私も父にさういつて居りましたから、此の點については父は餘り心配してゐませんでした。三學期になつて私が頻々と學校を缺席したのが父に知れ又住所すら隠してゐましたので父は遂に私がアチトを持つて潜つたのではないかと心配してゐるとの事を學校の先生からきかされたので春休みに歸ればひどく叱責され或は父から學校へ退學願を出されはしないかと心配して歸りました。所がそれまでは私の思想態度等について事々に厳しく叱責してゐた父がこの時は常になく穏かに迎へ何も知らない振をして私を膝許へ呼んでは靜かに私の思想を聽

へさせようとし又わづかの間に父母が心配でげつそり喪へて居り、弟まで深く悲しんで居るのを見て、それまで家庭の絆をたち切ることを悲壯な英雄的なこととしてゐたことがあさはかな誤りであり、又いかに困難であるかを感じました。更に又私が檢舉されるやうな事があれば父の地位を危くし果ては家庭を破壊するだらうと云ふ事を考へるに及んで今まで思ひつめてゐた強い氣持も大分動じました。併し用心深くやりさへすれば捕る様なこともなく又當分檢舉はないだらうと考へてゐましたのでその時は別にやめようとは思ひませんでした。それでもつきつめた氣持に大分動搖を來し以後は餘り過激な行動には關係すまいと考へ直して新學年にはわざと少し遅くなつて來ました。

そして檢舉されてから辨當事件で××君や××君のお父さんが職も辭しその事を苦にして到々なくなつた事を聞きひどく心配になつてゐても立つても居られない様な氣がしました。たま／＼私が檢舉されてゐるのも知らずに下宿へ寄越した父の手紙を讀ましてもらひましたが、それには私に學校の正課に集注し私の思想を改めるやう懇々と訓し、私が轉向するやうにと父は毎日神に祈つてゐるとありました。此れを見て私は今更ながら前後の考へもなく輕卒に行動した自分を責め私が檢舉された事が父に知れた時どんなに父は驚き悲しむだらうとこんな心配を父へかける事を濟まなく思ふ氣持で一杯になりました。間もなく父から警察署へ手紙が來ました。その始めに母は私が檢舉せられた知らせを受けて手

足が冷くなりその後は半病人の様になつて居ると書いてありました。此れを讀んだ時は思はず涙がこみ上げて來て泣けて後がしばらくは讀めませんでした。そして私が茲で前非を悔ひて眞面目になれば父は何時でも快く迎へてやる、父は唯そのみを祈つてゐるとありました。

間もなく母は心配して遙々××からやつて來ました。警察署で最初に面會した時の母は泣きはらした目でじつと私をみつめたま／＼しばらくは口もきけない様な様子でした。その時は早く自白して一日も早く出て呉れと繰返すのみで頭が混亂してゐたのか外に何も云ひませんでした。私は斯ふ云ふ所で母と面會せねばならなくなつた自分を責め胸が一杯になつてしまひました。その次に會はして貰つた時は母もいろ／＼話をしましたが、母がどれほど私を信頼し、身體の健全な私の將來にどんなに期待してゐてくれたかを聞き、その期待を裏切つたばかりかこんな心配までもかけたのだと思ふといよ／＼濟まなく思ひました。又父は始めの中ははげしく怒りましたが、間もなく留置場へはいつてゐる私の身の上ばかり案じ、今度の事件で學校が駄目なら今後の私の身の振方をよく考へてやらねばならない。私を責めるよりもその方がづつと大切だと云つてゐるとの話に、今まで迂濶に過ぎて來ましたがはじめて父母の慈愛、有難さを感じ考へさせられ今更ながら父母の恩を思ひ返しました。そして「許す」と云つて呉れた父の言葉を幾度も／＼くり返して胸に刻みつけ今後は父母の期待に背かぬやうにしなければならぬと決心しました。

それからしばらくして縣廳から人が見へて取調べを受けました時母はそれを氣遣つて調べが済んでも警察署の門前から去らず夜中過ぎまで佇んでゐたことを聞きよ／＼母にすまなく思ひました。

又××の高等學校に通學中の弟は春休みに父母が私の事で心配してゐるのを聞いて若し私が警察へ引張られる様なことがあれば、弟の前途も駄目になると悲觀し學校を止めるとさへ云つて居た事を聞かれ弟にまで心配させたことを責めました。祖父にはまだ知らしてないとの事ですが頭固一徹な氣質な祖父は怒りと驚きのために失神するだらうと思ふと私一個のため家庭が破壊される様な破目を招いたことを深く責めました。

父は生徒主事をして居りますので職責上進退伺を出し又若し私が起訴されれば辭める決心だと云ふことを母に聞かれ、そのため學校で父がどんなに片身の狭い思ひをして居るだらうと思ふといよ／＼心を入れかへて父母を安心させ今度の罪をつぐなはねばならぬと決心しました。

母は私が留置場へ入つて居る間に人が變つた様に我へ憔悴してしまひました。まだ父とは會つてゐませんが恐らく母以上に憔悴してゐるでせう。此を思ふと身の置き所もない様に自分が責められます。

偶然瀬戸署の留置場で隣り合せた全協の××君が家族の者に手紙を出しても返事が来ず警察署から通知が行つても家族の人がそんなものは知らんと云つて相手にしてくれないやうになつたとひどく悲觀してゐたの

を耳にして、尖銳的な闘士ですら家庭から見放されて悲觀するのなら私達が家庭の絆にうちまけるのは當然と思ふと共に、未だ斯うして家族の者から心配して貰へる中はいよ／＼が若し××君の様に見放されてしまつたらどんなに辛らく悲しいことだらうと恐ろしくさへなり私の身の上を案じて遙々××から訪ねて来て下さつた母の有難さをしみ／＼感じ、どうしても止めねばならないと決心しました。

C、實踐に對する自信、信頼の動搖崩壞

學内の組織に加入し運動に参加してからは主として「自由××」のカット及び印刷に従事してゐて忙しかつたのと、それに熱中し正しいと信じ切つて居り又更に一種のヒロイズムに醉されて活動してゐましたので反省する暇などなく只自分を英雄視して有頂天になつてゐました。その爲め同志の者や級の者から種々忠告を受けても全然耳に入りませんでした。だが檢擧の時家宅捜査されて山程の證據品を押收されただらうなさを恥じ、又級内に働きかける際常に失敗を重ねてゐた事や學新機關紙の印刷中絶えず技術的失敗を繰返してゐたこと、資料道具等の不始末を皆から常に注意され自分もその心掛けながら失敗してしまつた事などを省みますと私の實踐能力に對して失望して來ました。

檢擧されて見ると始めて今更ながら張り廻された網が嚴重でいかに逃れ難いかを知り甚しく動搖しましたが運動そのものに對しては十分強い熱意と信頼を持ち運動を支持する氣持は持つてゐましたが、以上の失敗がばらした事や證據品も夫々たくさん押收されたことを聞いていよ／＼失望しました。

以上の様に最初は自分の實踐能力に對する疑ひから實踐に走る資格がないものとしてシンパ位でやつて行かうといふ位の氣持だつたのが次第に實踐そのものに對する動搖となり遂に全く失望するやうになつてしまひました。

D、既成制度、權威、權力の肯定

前に申しました様に一切の既成權威、制度、權力は全く價値なきものであり愚劣であると輕蔑し切つてゐましたのでその組織の中で働くことは勿論、その組織の中で働らいてゐる人達も愚劣であると輕蔑し切つてゐましたが取調に際して刑事からいかに私か無力であるかを觀念させられ又その訊問の様子追究の態度などを見て今まで輕蔑して居たのが誤りだつたと思ひ始めました。又取調の人達も左翼の上部の人達には對等に應答出来ないものと思つてゐましたが對等以上に應答してゐるのを見て大分以外に感じました。

それから後百五十日の間留置場の中で警察事務をとつてゐるのを見た

の批判と檢擧された恐れから續けて實踐をやるとか落らうなどと云ふ元氣は有りませんでした。

始めの十日程は多勢の者と一緒にわい／＼騒いでゐましたので少しも留置場に入つてゐることが苦にならず、むしろヒロイックな悲壯な氣持で得意になつてゐた程でした。又頭張つてやらうと氣を張つてゐましたので三十日位は餘り苦しくはありませんでしたが、日を経るに従ひせま苦しい暗い房にとちこめられてゐるのが苦になり始めました。そして辨當事件の時には學校の友達が多勢差入れに來たり、面會に來たりしたのに今度は誰れも來て呉れないで、我々の活潑な闘争によつて大衆は必ず吾々の正しかつた事を知り、ついて來ると思つたのに誰れも來て呉れないのを淋しく思ひました。

そして頭張り抜くだらうと思つてゐた全協、全會の人達が私達より先に自由してしまひ個人的な事までも完全にばれてゐる事を知つて次第に運動に對する信頼が薄らいで來ました。そして全體的に檢擧がついて居ると聞き、それが「十月三十日」の中央部檢擧からばれたのだといふ事が分つてはげしく動搖し始めました。更に「生命をかけて頭張れ」とか「あらゆる證據が出て證據すべきではない」と云ふ事はナンセンスな頭張りだ。そんなナンセンスの頭張りは止めよう」といふ事を聞くに及んでは全くがっかりしてしまひました。

又××では街頭で連絡中を寫眞に撮られたり、或はアチトがあがつて

り開いたりする中に今更その組織制度の完備してゐるのに驚嘆し容易なつまらない仕事と見懸つてゐたのが誤りであり、夫々簡單に見へる事務も仲々才能を要し又さういふ人達が働いてゐることを悟るに至りました。下部の組織である警察署でさへ此れ程仕事に困難であり夫々才能を要するのなら、ずつと上部になるとどれ程になるだらうかといふことも考へ合され今まで單純に平面的に思つてゐた社會の制度、組織の力強さ大きさをつくづく感じさせられ以前に有してゐた輕蔑の念は次第に薄らいで來ました。

此れまでは社會の制度とか組織を輕蔑してゐたのでどんな風になつてゐるかも知らず、又知らうともしませんでした。留置場へはいつてから其等について言ひ聞かされたり考へ合せたりしてゐる中に自分の無知と愚さを知り、此等の組織や制度がいかに強大であるかを悟るに至りました。そして此等の制度、機構を簡單に破壊し得ると信じてゐた自分の愚さにも氣がつかしました。

更に此等の機構にたづさはつてゐる人達が夫々強い信念と意識を持つて働いて居り其等が強く結合されて現在の社會の組織形態をなしてゐるのに考へが及んで來ると次第に現在の權力、制度を肯定する氣持になつて來ました。そして此等の組織の中に働くことが意義あることだと考へられ始めました。

E、マルクス主義檢討

5、思维、意識は物質の高度に組織されたものゝ屬性である、即ち實在は思维に先行し思维は存在によつて規定され、思维と存在は同一ではなくて統一である。

6、斯るものとしての人間の思维は此の客觀的實在を認識し得る、即ち實在は人間の感官を觸發し思维に投影されて表象を生じ概念に整合し斯くして我々は實在を認識する。即ちその認識論は反映論である。

7、實在の運動形態は辯證法的であり我々の認識過程及實在の反映として認識も辯證法的である。

以上が唯物辯證法の根本命題であり、辯證法的唯物論の哲學は此の認識論を基礎に自然、社會、思维の存在法則を定立し統一的世界形象を確立するものである。

此れが辯證法的唯物論の概要であります。1、2、3は既に觀念論によつて指摘された如く一の形而上學的問題であり我々が論理的に立證出來ない假設です。又其の認識論たる反映論も既に實在の存在が立證せられない以上存立し得ないものです。只巧みに6の辯證法を其等の間に挿入し、又自然科学の成果を引用し更に實踐の優位性を説いて粉飾したものであるため知らず／＼に正しいと思ひこませてしまふのです。而も6の辯證法はヘーゲルによつて創唱せられたものであり且つ運動的發展形式はすべて辯證法的といふのも獨斷で有機的な發展もあれば力運的の

斯様に自信、信賴が動搖して來るに従ひ、此れまで無上の眞理と信じ切つてゐたマルクス主義も、今一度落ちついて批判する必要はないかと考へられる様になりました。私は早くからマルクス主義の書物を精讀し、それ以外のものは少しも手にふれませんでしたので、自分が正しいと信じ切つてゐたものも、獨斷的な所が多く今茲で他の學說と比較検討する必要はないかと考へられて來ました。前に申しました達には哲學に興味を持つてゐましたので此れから先に手をつけようとしてカントの「純粹理性批判」とリッケルトの「認識の對象」を差入れて貰ひ、此れをボツ／＼讀むに及びこれまで唯一無二の眞理と信じてゐた唯物辯證法がその反對するにも拘らず一種の獨斷的な形而上學だつた事に氣がつかしました。そしてマルクス主義の哲學書を通じて知つてゐたカント哲學が、いかに曲解されたものであつたかも知りました。

唯物辯證法を要約すれば

- 1、客觀的實在は我々が認識するのと否とに關はず自立的形式のものと自存する
- 2、此の實在は時空的形式に於て永却運動の状態にある
- 3、従つて時間空間も客觀的に實在し、存在の基礎形態である
- 4、此の客觀的實在を哲學範疇として物質と名付ける、即ち物質とは哲學的には此の客觀的實在を表現するに過ぎずその屬性としてそれが存在するといふことだけである

運動形式もあります。

又哲學とは一つの統一的世界形象をうちたてるものだといふ考へは拒否せられねばならない、何となれば此の場合哲學は原理上新らしい如何なるものを、個々科學によつて見出されたものゝ上に附加し得るかは少しも分らないからです。

斯く考へ來るに従ひカントの『時間空間は我々の感性的直觀の形式であり實在とは存在判斷の形式である』といふことばも次第に理解され此れが哲學として正しいと信するやうになりました。

そして哲學は統一的世界形象をうち立つるものではなく事物の基礎確立を探ぐるもので知識、道徳、藝術の凡ゆる必然的にして普遍的妥當的價值を基礎づけ批判するものでありとする批判哲學の立場を正しいと信じます。

以上の唯物辯證法がマルクス主義全體系の方法論として根柢をなすものですがマルクス主義程その方法論とその體系との結びつきを主張し又事實さうであるものはありません。従つて唯物辯證法が動搖すれば同時にその體系も根本から動搖して來るわけです。

即ち史的唯物論に於て社會的存在が社會意識を決定し階級意識は必然的なものとする理論はそれ自身としても獨裁であるのみならず又方法論的にも破壊され従つて階級闘争説も動搖して來ます。

又マルクス主義が私達を惹きつけた原因を客觀的に考察して見ますと

現在の危機的な性質が危機の意識を生み、そして動揺し易い感傷性に富む私達は此の危機を意識すると共に、其に對して不安、焦燥に驅られ或は此の危機を解決せんとする熱、ヒロイズムに醉され解決を只管憧れる様になります。マルクス主義は此の危機を説明するに適切な強い簡単な原理を持ち、更に此の危機の内容が最も唯物論に適切に形態は最も辯證法に適切なる現象形態をとつてゐること及びマルクス主義はその説を展開するに當つて常に刺激性に富んだ實踐的な文學を掲げるがため、現象形態に迷はされ易い私達はその強い單純な原理を眞理だと考へ一切の不安焦燥感熱を引つかまれ實踐にとびこめば周囲の人が皆一律に信じてゐるため遂に盲目的に猪突する様になるのだと思ひます。

又階級闘争説の中で我々が民族の一員であるより前に階級の一員であり、階級意識の方が民族意識より強いと云ふインターナショナルイズムは理論的にも感情的にも絶対に誤りです。民族と階級とを發生的に考察するとき忽ち此の理論は崩壊します。そして民族とは長い間家族的紐帯によつて生じた強い結合であり階級はその民族中に後に発生したものです。即ち逆に階級の一員である前に民族の一員であり階級意識は民族意識の前に解消します。各國に於けるナショナルイズムの勝利を思ふとき國民意識、民族意識がいかに長い間に培はれた根強いものであるかが分りました。

三、現在の心境

今靜かに考へるとき私が解放運動に走つた動機である、自己の前途に對する悲觀と貧民に對する同情も神經衰弱的な根據のないものであり早急な斷定でした。
 ・又左翼に走つたのは結局安價なヒロイズムに醉された爲でした。社會に對しては此れまでの私の見方が餘りに一面的で機械的であり、單純に他人の意見に左右され、實情そのものを知らうとせず、社會の改革を企てたことが身の程知らずの考へであつた事も分りました。社會と云ふ大きな問題よりも先づ自己を社會人として完成するの必要を痛切に感じます。
 左翼を尊敬した結果從來の制度、權威を全然價值なきものとしてしまひそれになつたつてゐる人達を輕蔑し更に自分が其等にたづさはるこゝとまで拒否し新しい社會を憧れたのも輕卒でした。
 又更に今度の事件で始めて父母の恩、慈愛、有難さをしみじみ感じました。そしてその父母に甚だしい心配をかけ、又家庭を破壊するやうな破目に陥れた自分を深く責めると共に此の罪をつぐない父母を安心させねばならぬと思ひます。
 幸ひ私は身體が頑健ですからたとへ今度の事件で學校から退學されても生きる途はあり又其に對する自信も出來ました。留置場で生活した様な氣持で居れば何處へ行つても、何しても立派にやつて行けると思ひます。

三三三

文科三年乙類

T・K (當十九年)

家庭狀況及學資の出所金額……父は豫備役陸軍中佐にして

姉、弟各二人あり姉は共に左

傾運動に關係し、次姉は今回

の四・一二事件に於ても起訴

された一人なり、學資は父

より出で金額は自宅通學なり

し故金額不明

健康狀態……神經衰弱症にして強健ならず

性質及才幹……性陰鬱にして明朗を缺き左傾書類を耽讀す

才幹はなき方なり

一、健康狀態

父母兩系統共に血統上に異常はありません。私は生れつき健康狀態は普通ですが、十五歳の頃より神經衰弱に罹り、現在稍、良好ですが依然として神經衰弱の症狀はあります。頭痛不眠の如きものです。其の外に

は十歳頃肺炎に罹つた事のある外病氣した事はありません。

二、趣味嗜好

讀書、種々のスポーツ、即ち野球、庭球、水泳等々の如きもの。劍道は中學の一年頃より劍道部に入つて高等學校の一年の始め頃までやりました。魚釣りと草花を作る事に趣味を以てゐた時代もあります。最近では撞球に興味を持つた事もあります。映畫も一週間に一度位見てゐました。食物も脂濃いもの、肉類魚類です。

三、資産及生活狀態

父は退役陸軍中佐で、資産としては別に何もありませんが生活は中流程度のもので、月収は恩給其の他で二百圓位。裕福と云ふ事はありませんが別に不自由を感じる程の事はありません。

四、家庭狀況

父母共に健在、父方の祖父が生存してゐますが我々とは別居してゐます。兄弟五人、姉が二人で、弟は二人、私は三番目で長男です。父は非常にお人好しで好人物です。我々兄弟に對しても小言を云ふ様な事は滅つたにない位です。だらしないところがありますが、正義感の強い所もあります。社會問題に對しても興味を持つて居ます。立場は私とは正反對の傾向があります。母は非常に神經質ですが、父より性格的に強いです。母も我々兄弟に對して小言を言ふ様な事は殆んどありません。父母に對して我々兄弟は尊敬と云ふか、遠慮と云ふか、兎に